

俺は彼女を壊したようだ。

枝切り包丁

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二十歳の誕生日。建設中のビル付近で空見上げると鉄骨が落ちてくるところだった。

それが俺の最後に見た光景。

気が付けばやけに若々しい母さんに抱かれていた。

そして出会ったのが高町なのは。彼女だ。

以前にジファンに投稿し色々あり削除してしまったものを書き直して投稿させていただきます。

書き直した作品のため変更点が多々あります。とりあえずは以前投稿していた分を書き直し次第投稿していきたいと思います。

以前はこちらが唐突に削除してしまい図々しい事かもしれませんが感想等をいただけると嬉しいですよ。

目次

| | | |
|------|-----------------|-----|
| 0. | 壊始 | 1 |
| 1. | 親友・英雄 | 26 |
| 2. | 決意 | 48 |
| 3. | You | 63 |
| 4. | 問答 | 71 |
| 5. | Turn | 90 |
| 6. | 幸福 | 99 |
| 7. | Smile | 109 |
| 8. | 閃紅 | 114 |
| 9. | The End | 131 |
| 10. | 約束 | 139 |
| 11. | 道標 | 147 |
| 12. | 再会 | 158 |
| 13. | わたしのりゆう。わたしのこたえ | 173 |
| 14. | 鼓動 | 182 |
| 15. | こい | 188 |
| 番外1. | 私の私 | 196 |
| 番外2. | 彼の彼 | 204 |
| IF1. | 好きの星空は恋 | 212 |
| 16. | ready | 228 |
| 17. | Go | 246 |
| IF2. | 君は私の大切な | 256 |
| 18. | しんじてよ | 277 |
| 19. | Again | 285 |

| | | |
|-----|-------------------------|-----|
| 07. | want | 410 |
| 29. | 理由 | 396 |
| 28. | Mine | 388 |
| 06. | dream | 378 |
| 27. | まけたくない | 372 |
| 05. | world | 367 |
| 04. | My treasure | 359 |
| 26. | Call me a mother. | 355 |
| 25. | 子供 | 350 |
| 24. | 少女 | 342 |
| 23. | I fall in love from now | 334 |
| 22. | I think you. | 322 |
| 21. | わたしも、あなたも | 306 |
| 20. | Jealousy | 301 |
| 3. | Me | 295 |

0. 壊始

「悪い、今からお前の人生台無しにする」

それだけを口にして高町の顔は見なかった。

見てしまえば迷ってしまうだろうから。

0. 壊始

俺、七峰紅助は前世の記憶を持っている。

いや、前世と呼ぶには少し違いがある。

俺は七峰紅助として死に七峰紅助として生まれ直した存在である。
というのが正しい。

その過程で記憶が持ち越されたと言うべきだろう。

これから話すことは俺の主観ではあるが時間が巻き戻されたとして
か考えられなかった話だ。

二十歳の誕生日。建設中のビル付近で空見上げると鉄骨が落ちて
くるところだった。

それが俺の最後に見た光景。

気が付けばやけに若々しい母さんに抱かれていた。

勿論混乱した。

しかし体は上手く動かないし思考だつて上手く纏まらない。
なのに記憶だけはしっかりと残っていた。

誕生日にもらったプレゼントだって言えた。

母からはアクセサリー、友人からは変な玩具、近所の子供からは綺麗な石、だとか。

勿論、俺が死ぬ間際であっただろうことも。しつかりとだ。

ぐちゃぐちゃとした意識の中、物心がつく以前に他界した父や祖母の顔を見るのが少し不思議な気分だったのを覚えている。

それから、この現象が夢や幻等ではなく確かな現実のものであると認められたのは一年もかからなかった。

知ったのは俺は時間の巻き戻しに巻き込まれたのではなく根本としてこの世界は俺が過ごしていた世界とは全く別の世界であるということ。

気が付いた理由は、母が魔法使いだったから。

……………ああ。

……………魔法使い、だったからだ。

頭がおかしくなったわけではない。いや、死んだと思ったら、という時点で頭がおかしいと思われるべき話ではあるのだが。

この世界での母は結婚する以前に魔導師と呼ばれる職に就いていたらしい。

この世界は次元世界と呼称される数多の世界を内包していて、とかいう話を幼い俺は聞かされたのだが。

なんというか……………聞き覚えがあった。

魔法の補助器具として使用される【デバイス】だとか。

魔法技術の古代遺産【ロストロギア】だとか。

あの魔法少女の世界、だったようだ。

前の世界では専業主婦をしていた母が魔導師というだけで衝撃的だったがこの世界がアニメの世界だった事は本気で頭がおかしくなってしまうのかと疑った。

が、それも一人の少女との出会いでこの世界が「魔法少女リリカルなのは」の世界であると俺に認めざるをえなくした。

《高町なのは》

この世界の、主人公。

見つけてしまった。出会ってしまった。

普通の、どこにでもいるような子供たちと何ら変わりのない女の子だった。

寂しがりで、強がりで、小さな優しさ、そして勇気をもった、そんな女の子。

少なくとも空想上の人物と接しているなんて気分にはなれなかった。

彼女とは小さな出会いから始まって、やがて友達と呼べる関係になった。

たぶんこの子が俺にとって、この世界の 七峰紅助にとっての初めての友達という存在だった。

誰よりも彼女は積極的で、誰よりも彼女は近くにおいて、誰よりも彼女は笑いかけてくれ泣いてくれた。

そんな彼女だったからこそ周りとは違う自分に負目のようなものを感じていた俺でも友達なんて思えたんだと思う。

別に周りや母が遠かったわけではない。

母さんは父さんが早くに亡くなったためか俺の事を人一倍気にかけてくれていたし期待だつてしてくれた。

自分を継ぐ魔導師として。

だからか、前の世界の母と比べてしまった。

前の世界での母はどちらかといえば放任主義だったのだろう。

あれがしたいといえば「がんばってね」成功すれば「おめでとう」失敗すれば「おしかったね」と背中だけを押ししてくれた。

だから母が決めたルールを進むというのは不思議な感覚で、母との距離を掴みかねていたのだろう。

だから俺は高町に溺れていたのかもしれない。

向けられる喜びとか好意とか悲しみとかに安心を覚えていた。

こいつなら俺は俺として過ごしていいんだ、なんて心の何処かで思っていた。

そんなのは俺の勝手な考えのくせに。

そんな事にも気づけなかった俺は少しずつ高町を自分の一部にしていった。

そうして時間だけが過ぎていき、

物語が、始まった。

後にPT事件と呼ばれることになった高町に、そして俺にとっての始まりの事件。

正直のところ俺にはやる気が無かった。全く、これっぽっちも。

俺が介入せずとも高町だけで解決可能なことは物語の知識として知っていたから俺は必要無いだろう。そういう考えがあった。

とはいえ、力を持つ者は行動を起こさねばいけないようで、母の言葉、そして高町の存在もあり俺はこの事件に介入する事になった。

しかし物語の根本を崩すつもりは無かった。高町はこの物語の主人公。そしてテストタロツサの友達になるのも高町の役目。

そこに変わりなどなく。変わってはいけない。

そう思っていたのは恐怖からかも知れない。せつかく決まった未来が存在するのだそれを崩すのは先の見えない闇の中に放り込まれるようなものだから。

その時のことに後悔はしていない。それでよかったとすら思っている。

しかし実際に介入してみると見えてくるものが沢山あった。

テストタロツサが思っていた以上に無愛想だったり、ユーノが普通にいいやつだったり。

ただ俺はこの事件の最後には立ち会えなかったからテストタロツサの母親と出会う事はなかった。

どうせ会ったところで何が変わるといっわけでも無いだろうが子を失った母と言うのはどういったものなのか少しだけ気になっていたから残念だった。

もし俺が死んだ世界が続いていれば母は何を思っているのだろう。そんな風に少しだけ考えた。

PT事件はそうやって終わりを告げた。

物語の変化も無く、俺という人間の変化もない。

ただ高町が頑張つて一つの物語を終わらせた。
それだけの話だ。

その年の冬。もう一つの事件が起こった。

闇の書事件。それだ。

俺がその物語の始まりを知ったのは高町と共にヴィータに襲われた時だ。

俺はヴィータから高町を護ろうとして失敗した。実力不足だったのだろう。魔力を吸い取られ意識を失った。

魔導師見習いと歴戦の騎士を比べるのは馬鹿馬鹿しい話ではあるが悔しかったのは変わりない。ある意味俺が変われる可能性があった時だったのだから。

意識が戻る頃には事件は終息に向かっていた。自分の容態としては酷いものだったらしい。死ななかつただけ幸運だと医師からは励まされた。

夜天の書の管制人格、名前をリインフォースと叫ぶだろうか。彼女とは一度だけ顔を合わせた。

その時はまだ入院中で見舞い客とすと現れた八神たちの中に彼女はいたのだが泣いて謝る八神に気を取られて話すことはできなかった。

だから退院した後には彼女の姿が消えている事に気が付き少しだけ悲しくなった。せめて一言でも話せれば良かったのだが。

こうして二度目の物語は終わりを告げた。

八神のような出会いや別れもなく、テスタロッサのように過去を乗り越えたわけでもない。

ただ物語の終わりがそこにあった。

それから数年、俺は高町の背中にすがるように生きてきた。

魔法関係で最も親しかったのが母を抜くと彼女だったからだ。

おそらくそれがテストタロツサや八神だったのならそつちのほうに俺はついて行っていただろう。

やりたいことなんてなかったしやるべきことなんてわからなかった。

ただ高町の傍にいて生ぬるい安心を感じてさえいられればそれによかった。

そんな中、それが起こった。

普通の演習を行っていたはずだった。途中までは。

気が付けば高町が孤立していた。念話は通じない。魔力を感じることも出来ない。そういう状況下を想定した演習だった。

心臓の音がうるさい。何か嫌な予感がした。

幸いヴィータは近くにいたので二人で別れて高町を探す事になった。

わけも聞かず手を貸してくれたヴィータに感謝をして高町を探した。

見つけたのは俺だった。

高町がおかしな形をした何かに襲われようとしている処を。

この時点ですでに俺は気が付いていた。

もっと早く気がつくべきことだった。

ヒントは確かにあったのだから。

丁度八年後に第三の物語が開始する。

高町から疲れたような様子が見られた。

雪の降る世界。
演習中の出来事。

《高町なのははこの日この場所で墜ちる》

高町がエースオブエースへと至るための階段の一段。

一瞬、自分が何をすべきなのか考えた。

ここで俺が割って入らなくても高町はまた立ち上がれるだろう。
わかってる。

俺が守りに入ったところで何ができる。

わかってる。

俺が入ってしまうと高町の未来が変わってしまう。

わかってる。

わかってる。全て、わかっている。

今ここにいる俺も、考えていることも、意味なんてない。
元々俺は存在しない位置にいる人間だ。何もしなくたって高町は
最後に笑って終わる事が出来る。

だから中途半端に生きてきた。何もしなくたって未来は決まっ
ているのだから。

そうやって、

甘えてきた。

そうだ。俺は高町にそうやって甘えてきた。

だって俺が俺を肯定したら高町を否定する事になる。

この世界は作り物で存在するはずの無い世界なんだから。

でも、俺を肯定してくれるのは高町しかない。

誰よりも近くにいて。誰よりもわかってくれたから。

情けなくて、何も出来なくて、何もすべきではなくて、

俺はいらぬ存在だ。

そんな事、わかっていた。

はず、なのにッ。

身体中を巡る魔力が唸りを上げた。

何を、

無理な高速移動に体が軋む。

している？！

相手の刃が振り上げられる。防げるか？無理だ。左腕を持って行

かれた。

痛い。

右の拳を振るう。俺の左腕を切り取った刃が砕け散る。

止めておけばよかった。

もう一方の刃が右腕を切り取った。

ああ、ほら。

高町の声が聞こえた。だけど何を言ったのかわからなかった。

死にたくは、無い。

もう一度振るわれた刃を避け相手の懐に飛び込んだ。

また、負ける。

体で相手を押しやり高町から距離を取る。背中に刃が突き刺さされた。

高町はどんな顔をしているだろう。

雪の積もる地面に相手を押し付けた。切り取られた両腕とデバイスは近くに転がっていた。

「悪い、今からお前の人生台無しにする」

高町に聞こえていたかは分からない。だけど口にして満足はした。体内にため込んでいた魔力を活性化させる。

俺の背中に刺した刃を振るおうとして地面でもがく相手を見て口元が緩む。

逃がすつもりはない。押さえ付けるための魔力を強めて俺は笑った。

「俺と一緒に逝けよ」

《Final Explosion》

全ての魔力を解き放った瞬間、世界が朱く染まった。

※

目を覚ましたのは病院の一室で。

最初に思ったことは《生きていたのか》。そんなこと。

身体の節々は痛むし頭はクラクラする。それにリンカーコアは魔力の枯渇でズキズキと痛んだ。

だけど、それだけで済んだ。

ただ生きている事が嬉しい。

本当だったらあの時点で全魔力を放出して相手ごと死んでやるつもりだった。

運が良かった、とはまた違うのだろう。おそらく最後の最後で魔力の放出を止めたのだろう。

無意識下とはいえ自分のヘタレさにはため息が出る。

その次に頭に浮かんだのは高町の安否だ。

俺が相手を倒し切れていなかったら高町にも何かがあった場合がある。

近くにあつたナースコールを見て手をのばそうとした。

そして、気が付いた。

いや、既に気が付いていたのだろう。

気が付かない振りを止めた。

再確認するように思う。

【両腕が無いんだった】と。

おそらくあつたはずの両腕は俺の魔法に巻き込まれてデバイスごと塵屑にでもなつたのだろう。

デバイスが体から離れていたため非殺傷にする事まで気が回らなかったのが原因だ。

勿論切り落とされた時点で覚悟はしていたが落ち着いてみるとおかしな感覚だ。

そこにあつたはずのものがそこにはない。

動かす感覚だつて頭に残っているのに動かすべきそれが無い。

夢を見ている感覚に近い。

目の前の状況が信じられない。

ぼんやりとした感覚の中で確かにそんな思いはあつたが不思議と後悔だけは無かつた。

あの時になにかが切れてしまったのだろう少しだけ清々しくすら

感じた。

今思えば高町に何かをしてあげたのは初めてな気がする。今までは何もせずただ受け止めるだけで生きてきた。それでいい。それが一番なんて考えて高町に甘えてきた。それじゃ駄目だということはわかっていただろうに。それを無視し続けてきた結果がこれだったのだろう。気が付いてしまった。

俺が本当にしたかったこと。

物語通りに進めたかったわけじゃない。

高町に笑っていてほしかったわけでもない。

俺が俺であっていいと認めてほしかった。

そして認めたかった。

この世界の中心である《高町なのは》に、

そしてこの世界のどこにもいない《七峰紅助》が、

この世界にいていいんだと、生まれてきてよかったのだと、

だからだろう、何もしないくせに高町に近づいた。

だけど何もしないなら認められるはずもない。

そんな当たり前のことに気が付くのにこんなにも時間がかかった。

だけど気が付けて良かった。

気づかぬ内に笑みを浮かべていると病室の扉が開かれた。
何かを落としたのか床を叩く軽い音が響く。
その音につられて扉を見て思った。

助けられたのか。よかった、と。

高町なのはがそこにいた。

※

その後、俺は次々とやってくる見舞い客の対応をしていた。

高町も俺の隣でそれにつきあっている。

あの時、俺を見た高町は涙を流した。

彼女の涙を見るのは久し振りで思わず苦笑を浮かべた俺に対し高町はゆっくりと口を開いた。

「お話がしたい」

そう言った高町を俺は止めた。

待つてほしい、と。

目を覚ましたばかりだから状況が知りたい。落ち着かせてほしい。

そう言って、逃げた。

高町と話す勇気がまだなかった。

それは彼女が喋る事は正しいだろうから。
それなりに長い付き合いだからわかる。

高町は俺に謝るだろう。
自分のせいだと言つて。
そうだ俺が腕を無くしたのは高町のせいだ。
高町じゃなかったらこんなことにはならなかっただろうししよう
とも思わなかっただろう。

高町だったから、守りたいと思った。

だからこそ謝られたくはない。

自分の行動を否定されたく無かった。

やはり高町はあまり良い顔はしなかったが納得だけはしたのか小
さく頷いてそれ以上は何も言わなかった。

それから医師の話聞いて高町の連絡によつて次々と現れた見
舞い客の対応となった。

一番最初に訪れたのはヴィータだった。

「よう」

病室の扉から顔を出したヴィータに軽く声をかける。

八神やシグナムの姿は無い。珍しく一人のようだ。

部屋に入ってきたヴィータは気まずそうに視線をさまよわせる。
何を言えば良いかわからないというのが顔を見ればすぐにわかる。

ある程度視線をさまよわせた後、一点で止まった。

俺の腕だ。

「そ、その……腕、は」

「ん、ああ、襲われた時にやられた」

出来る限り軽く言つてはみたがヴィータは顔をしかめて俯いてし
まった。

「治らない、のか？」

絞り出したような声に苦笑を漏らしながら俺は首を縦に振った。

医師の話によれば確かに数年前からクローニングの技術は高まっ

てきてはいるがそれも完璧なものではない、と。

多くの費用が必要だしそれが成功する可能性も低い。必ずしもクローニングしたものが患者の身体に合うものとは限らないという話
しだ。

少なくとも俺のようにまだ若い子供が受けられるものでは無いと
聞いた。

俺の一言一言にヴィータの様子は沈んでいった。

余所から見ればどちらが患者なのかわからないのではないだろうか。

沈黙を数秒、重々しい空気が溜まっていくのがわかる。
すると突然ヴィータが頭を下げた。

「ごめんッ」

いきなりの行動に目を丸くする俺にヴィータは続けた。

「もう少し、早く気が付けばッ」

自分が、ということなんだろう。

もう、ため息が漏れそうさ。

このお人好しは自分がそちら側だったらと言いたいのだろう。

馬鹿にしゃがって。

頭の中に溜まりだした怒りを押さえつけて顔に笑みを貼り付けた。

「謝ってもらわなくていい」

「え？」

「俺が弱かったからこうなっただけだろ？それに母さんから魔導師が
どれだけ危険なものなのかは何度も聞いていたから、覚悟はしてた
よ」

「でも」

「でもとか、聞きたくない。お前はお前なりに出来ることをしてくれ
たんだから俺はそれで満足。謝られる事なんか無い」

「……………」

「それでもまだ恩を売りたいならまた今度頼むよ。生憎とこんな身体

になってしまったんで恩は相当安いからさ」

俺の言葉にまたヴィータは沈黙し少しの間を置いて小さく頷いた。お世辞にも納得したとは言えない表情ではあるが少し前よりはましになった。

「またくる」

それからヴィータはそれだけを言っただけで病室から出て行った。

次に来るときは明るい顔が見たい。そんな事を少しだけ思った。

ヴィータの次に現れたのはテストロッサ。フェイト・テストロッサだった。

余程急いできたのだろう息を乱している彼女に少しだけ驚いた。

心配されているんだ。そんなことを。

テストロッサとは友人ではあるがただそれだけだった思っていた。

彼女に対する高町や八神のように大きな何かがあったわけでもなく高町のおまけのように友人になった俺達だから周りも気にせずこんなにも心配してくれるなんて思わなかった。

「だ、大丈夫か？」

荒く息をつくテストロッサに声をかけると彼女はゆっくりと顔をあげた。

テストロッサの瞳が俺を見た。

一瞬、腕を見たところで目が細められた。

やっぱり、なんて黒い気持ち湧いてくる。

そんな俺に対してテストロッサは一度目を閉じる。

そして笑った。

「思ったより元気そうだね」

「え？」

「重傷って聞いたから心配したんだよ？」

「わ、悪い」

「謝る位なら心配させないでほしい、かな」

「え、あ……うん」

思っていたより軽い。テストロッサのその様子に思わず面食らった。

少し考えてみれば気を使われている事に気が付いた。

確かに辛い顔や泣き顔より笑顔を見ていた方が良いにきまっっている。

テストロッサを見る。

相変わらず彼女は笑っていて思わず俺の頬も緩んだ。

「えつとき、テストロッサ」

「うん？」

「なんかき。えつと、その……ありがとう」

「……………うん！」

小憎たらしく笑うテストロッサから目線をはずし顔を隠した。

頬の緩みが止まらない。おそらく今の俺は酷く間抜けな顔をしているのだろう。

そんな表情を見せるわけにもいかず不思議そうにこちらを見てくる高町とテストロッサから顔を背ける。

テストロッサにしろ高町にしろなんでこうも他人を気遣えるのだろうか。

俺は誰かのために笑ったり泣いたりなんてしてやれないだろう。

だから俺はこの二人やその周りにいる人達のが理解出来ない。ずっとわかってみたいと思っていた。思っではいた。

それから高町とテストロッサ、そして俺の三人で他愛の無い話を話して時間を潰した。

腕が無い事なんて忘れていたし胸の奥も少しだけ軽くなった気がする。

「フェイトちゃんは強いね」

テストロッサが帰った後、高町がぼつりと呟いた。

「私は今のコウ君を見て涙しか出なかったのに、フェイトちゃんは笑

えるんだもん」

自嘲するように笑って高町は俯く。

「少しだけ、悔しいな」

俺は何も言えなかった。

それから、八神やユーノ達に来てそれぞれ見舞いをしていったが高町の表情は優れる事はなかった。

そして次に見舞いに来たのは俺と高町の両親だった。

最初に頭の中を埋めたのは恐怖だ。

母さんは今の俺を見たら何を思うのだろう。そんな事を母と目があつた瞬間、考えた。

母さんは俺を見ると目を見開いた。

瞳には涙が溜まっているのが見える。

母の涙を見るのは多分初めてだ。

父が亡くなった時も涙を流さなかった母さんが今泣いている。

驚きに体が動かなくなってしまうた俺を母が抱きしめる。

「馬鹿ッ」

母さんのかすれた声に言葉が詰まった。

「こんな身体になつてっ。腕がっ……無いん、だよ?」

抱きしめる力は強く俺がどれだけ心配をかけていたのかが少しだけわかった。

「でもっ、ね」

嗚咽の混じり始めた声に体の奥の何かが震えた。
腕があつたら抱きかえせるのに。

そんなことまで考えて、

「無事で、本当に無事で………良かった」

涙が出た。

※

高町の両親、土郎さんと桃子さんの二人からは頭を下げて謝罪され
た。

俺は別にそんなのを見たくて高町を助けた訳では無いのに。

ただ、最後に二人は「ありがとう」と言ってくれた。

それだけは嬉しくて、少しだけ救われたような気がした。

土郎さんと桃子さんが病室から去った後、俺と高町しかいなくなっ
た病室に静寂が流れた。

ゆっくりと高町が立ち上がる。

そろそろだとは思っていたけど俺の目の前にたつた高町を見て、少
しだけ決心が揺らいだ。

いつから泣いていたのだろうか。涙で顔をぬらした高町が俺を見
つめている。

「お話がっ、したい。コウ君と、お話がしたいっ」

ぽたぽたと涙をこぼしながら高町が言葉を口にした。
搾り出すような声に胸が震える。

俺はこいつにこんな声を出させているのか、なんて。

あの高町なのはにこんな声を出させているのか。

弱く今にも潰れそうなその声に胸が震えた。

こんなになっても高町は高町で、俺なんかと分かり合おうとして
いる。

「……わかった」

負けを認めるように俺は頷いた。

俺がいくら変わろうと高町は変わらないのだろう。

俺より綺麗で、強く、大きい。彼女はそういう存在だ。

「それで、何を話す」

息を吐いて心を落ち着かせた。

せめて冷静でいないと今のこいつとは話せないだろうから。

「なんで、あんなことしたの……？」

そこからか、と俺は天井を見上げる。考えるふりだ、実際はそんな
にたいしたことを考えてはいない。

「別に、理由なんてなかった。と思う」

「え？」

切れの悪い答えに高町は声をあげた。

「本当に理由なんてなかったと思うよ。気がついたら飛び出してた」

「そ、そんな理由でっ私、納得出来ないっ！」

だろうと思うよ。

思わず苦笑が漏れた。

腕があつたら俺は今すぐ腕を組んで首を傾げていただろう。自分
でだってよくわかっていない事だ。

確かに俺は高町に認めてほしかった。

でも、両腕を失つてでもか？

たぶんそんなことは無い。死ぬのは恐いし、痛いのは嫌いだ。

だけど飛び出したのはそれ以上の何かがある胸の中で芽生えたせ
いなのだろう。

しかしそんな形の無い答えを言ったとしても高町は納得できない
だろう。

だから仕方なしと俺は口を開いた。

「じゃあ一つ目、お前が心配だったから」

「心配……………」

「最近お前の体調が優れてなかった。疲れも溜まってきていた」

「そんなっ」

「ことあるよな？」

俺の言葉に高町は口を閉じて俯く。

「言っても聞かないと思ったから言わなかったけどさ、無理してただろ、お前？」

びくりと震えた高町の肩を見てため息が零れる。

こいつは隠し事が下手だ。

「魔法はお前にとって大きなものだと思うよ。だけど好きな事ばかりやってても上手くは回らないだろ？今の俺みたいにさ」

「……………私は、そんな」

「それじゃ、二つ目」

「ま、待って！」

待たない。そう高町を無視して話を進めた。

「たぶん後ろめたい気持ちからだよ」

「え？」

首を傾げた高町に笑みを向ける。

たぶんこれは今俺にも分かる確かな本心だ。

「ずっとお前に頼って、何もしてこなかったから」

「私、に？」

何を言っているんだろう。高町はそんな表情を俺に向けた。

「出合った時からそうだったと思う。その時から周りにいるやつらに嘘ついてたからさ」

「嘘……………？私、にも？」

「お前は、俺のことなんて何も聞いてこなかっただろ？」

だから楽だった。

「お前が魔法を知ってからもそう。高町は何でもしようとするから俺はついていくだけで楽だったよ。ジュエルシードだってフェイトとの和解だって同じで全部お前に任せた。俺が面倒臭がりだって高町

なら良く知ってるだろ？だから《高町に付いていけば損はしない》なんて考えてたんだよ。多分闇の書の時もそう俺がもし倒れ無かったとしてもお前の言葉にただ頷いていただけだと思う」

へらへらと笑う俺に対して高町は何かに耐えるように小さく体を震わせていた。

高町が何を考えているかは分からない。

だから、こんなことになってしまったのだろう。

「俺は、お前がいないと何も出来ない人間だ」

「違うッ!!!」

爆ぜるような声で高町が叫んだ。

「違うよ！違うもん!!コウ君はそんな人間じゃないっ!!」

「そのコウ君が言った言葉なんだけどな」

涙を振りまきながら首を振るう高町はこれでもかかってくらい大きく口を開いて叫んだ。

「頼っていたのは私だッ!!!」

次に驚くのは俺の番だった。

頼っていたのは高町のほう？意味がわからない。

「小さい頃、隣にいてくれたのはコウ君だったよ！フェイトちゃんと友達になった時、背中を押してくれたのはコウ君だったよ！ヴィーたちちゃんと出会った時、護ってくれたのはコウ君だったよ！魔法のことを皆に話す時、手伝ってくれたのはコウ君だったよ！」

何を言っているのか分からない。
俺が隣にいたから、何が変わった？
俺はいただけだろ、何になった？

「勇気を、折れない心を、進むべき道を、コウ君はいつだっけてくれたよ！！」

なんだろう、それは。

勇気はいつだっけて俺に無いもので折れない心はいつだっけて欲したものだ。

進むべき道なんて見えたことが無い。

「ずっとコウ君に何かしてあげたいって思ってた！私みたいに寂しい時に！悩んだ時に！苦しい時に！不安な時に！コウ君みたいに隣にいて、助けてあげて、一言で背中を押してあげたかった！」

両腕を広げ高町は叫んだ。

「だっけてそうでしょうッ？私はコウ君にそれだけの物を貰ったんだから！！私はコウ君に恩返しをしなきゃいけない！じゃないと隣に立ってないんだもん！私がコウ君の対等になれないんだもん！！」

追いかけていたのは俺のはずだ。

背中を見ていたのは俺のはずだ。

何が、何を、言っている？

「なのに、なのにこんなのってないよ！どうすればいいの！私の腕がコウ君のものになるなら今すぐ切り落としてもいい！コウ君が自分の両腕をそんな風にした犯人が許せないって言うなら探し出して同じように両腕を切り落としてやりたい！だけど、コウ君が言いたいのはそのようなじゃないってわかってる！コウ君なら笑って許してく

れるてわかってる！」

だけどねツ!!

「今コウ君に笑って許されたら、私が私じゃなくなっちゃうの！私は私を許せなくなるしコウ君から離れられなくなるの！私はコウ君の隣にいられる私でいたい！コウ君の隣に立てるのは高町なのはだつて誇りたい!!」

「でも私はどうすればいいの？どうすればよかったの？もう何をすればいいのか、何を伝えればいいのかわからないの、ねえコウ君っ」

高町の体が崩れ落ちる。

「わからないよっ。私、もう何もわからないよお……コウ、君」

虚しく床を掻く高町の指を見てふと友人の言葉を思い出した。

《世界いつだってこんなはずじゃないことばかりだ》

俺はそんな現実には立ち向かえないかもしれない。

俺だって何もわかつちやいないのだから。

俺は彼女を壊したようだ。

1. 親友・英雄

目を覚ますと体がやけにすつきりしていることに気がついた。

今いる場所が実家だからか、確かに自分のベッドは相変わらずどんな寝床より眠りやすい。

あれから少しだけ月日が流れ、俺は無事に退院し実家へと戻ることになった。

腕以外は魔力枯渇や中又は軽傷だったためか入院期間は思った以上には短いものだった。

さすがに背中への傷は傷跡が残り両腕のクローニング治療も受けられなかったが退院してみると体としては良好になっていたので実感する。

ベットから立ち上がり身体の調子を確認し近くに置いてあった二本の長方形の筒に腕を刺し込んだ。

腕から魔力を流し込むと筒の中のソレは吸い付くように腕にくっ付いた。

しっかりと張り付いているのを確認して両腕を引き抜く。

するとそこには無くなった筈の両腕がすらりと伸びていた。

入院期間中、一番苦労されたのがこれだ。

確認するように両手の指を動かしていく。

義手型簡易デバイス。これの名称だ。

俺のように幼くして、又は金銭的關係でクローニングが行えなかったりクローニング技術がまだ高くなかった頃から使われていたデバイスだ。

失った部分から魔力を流すことにより魔力が神経の代わりとなつて指などを操作することが出来る。

待機状態ではただの動く腕の形をした機械ではあるがセットアップすることによってその人物にあわせた肌の色のバリアジャケットをデバイス自体に展開し見た目としては人間の腕そっくりに出来る。

欠点といえば体温までは再現が出来ないということと操作が難しいといったところか。

今の俺でも退院するまでの間できるだけ操作に慣れようとしたのだが完全に操作が出来るといふ訳ではない。

まあ、私生活には問題が無いので後は馴れといったところらしい。部屋を後にしてリビングに出ると母さんが朝食の準備をしていた。ふと見渡すともう独りの影が無い。思わずため息を吐くとソレを見ている母さんに声をかけられる。

「コウちゃん、起こしてきて?」

「……わかった。あと、コウちゃんってもうやめてほしい」

「うん。じゃあ、お願いね。コウちゃん」

「……はいはい」

母さんの言葉に不承不承といった様子で頷いて俺は踵を返す。

階段を上り自室を横切ると丁度その隣の部屋の前で立ち止まった。

母さんが用意したやけにファンシーな表札に苦笑を浮かべながらドアをノックする。

返事は、無い。

仕方なく「入るぞ」と念のために口にしてドアを開いた。

案の定そいつ、高町なのはは静かな寝息を立てながら眠っていた。

少しだけ頭が痛くなるのを感じたような気がする。

※

「え、管理局を辞める?」

まだ俺が入院していた頃のことだ。

呆然、俺の言葉を聞いた時の高町をあらわす言葉がそれだった。

「うん。これを機会に、て訳ではないけどさ。別に好きで管理局にいたわけじゃなかったから」

「じゃ、じゃあ何でコウ君は管理局で働いてたの?」

不思議そうに首を傾げる高町に思わず苦笑が漏れる。

「お前がいたから」

「え、えっ!?!」

高町の頬が朱に染まる。

「変な意味じゃない。お前についていくのをやめようって思っただけ。本当にそれだけ」

「うう……あっ」

続く言葉に高町の瞳が揺れた。

「じゃ、じゃあ……私、もっ」

「……うん。好きにするといい」

「え?」

「止めると思った?」

「うん……思っ、た」

目を丸くした高町に笑みを向ける。

予想はしてた。前に話しをしたときから。

あの二人で話してなにかが解決したわけじゃない。

俺と高町が互いをどう思っているのかそれだけがわかっただけで、今でもお互いに何かを引きずっている。

俺は高町にとつての自分の大きさが少しだけわかったけどただそれだけだ。

何でそうなったのかもわからないし、それだけの自分でいられる自信も無い。

だからこうやって俺は俺の言葉で、やり方で思いを形にしようとしてみた。

「今度は俺が決めて俺が先に進む。だから高町を気にする余裕なんて無い」

「だから、好きにしているの?」

「ああ。でも付いてくるならそう簡単に追いつけると思うなよ。しばらくは俺の背中だけ見せてやる」

ニツと笑って見せるとつられたように高町も笑った。

「コウ君は、やっぱりコウ君だね」

「うん？」

「なんでもない。私は、どうしようかな。正直コウ君について行きたい。でもね、私は魔法から離れるのは怖いよ」

私にとつての魔法って結構大きいんだよ？　なんて言う高町。

「知ってるよ。高町が魔法を知って変わっていくのを見てたからさ」

「うん。一番近くで見ててくれたよね。私は魔法のおかげで色々なことを知れたし色々な人も出会ったよ」

「俺は管理局を辞めたら地球に戻る。魔法と関わることなんてたぶん少ないどころかたぶん無いと思う」

「うん。わかってる」

「怖い？」

「すごく。どうすればいいのかな？」

小さく笑って俯いた高町の額にこちらの額をぶつけて目を見つめた。

「迷ったら誰かに相談しろ。俺以外にだってお前の周りには沢山いるんだからさ。お前の力になりたいって言う友達が」

「友達？」

高町の瞳はまだ揺れていた。

それでも俺はこいつを信頼している。ちゃんと立ち上がるだけの力を持っているんだから。

「テストロツサだったら喜んで聞いてくれるだろうし八神だってそう。ユーノやクロノも、そういうやヴァータも意外と人一倍友達思いだったかな？」

「ヴァータちゃんはどこからどう見ても友達思いのいい子だよ」

「そうか？」

クスリと笑う高町を見て少し安心する。

「俺はまだここにいろよ。ゆっくり決めていい、待っててやるからさ」

「あは、コウ君のくせに偉そう」

二人で笑いあってこれならどうにかなるだろう、なんて思っていた。

思っていたけど、どうなるかなんて考えていなかった。

※

次に高町とその話をしたのはそれなりに時間がたった頃。

俺の退院の目処もたち落ち着いてきた頃だ。

テスタロツサをつれて現れた高町は何故か意気揚々とした雰囲気
で俺を見ていた。

「私、コウ君のお世話をしたい！」

「へえ……………うん？」

えつと、えつと……………？

どうだ、とばかり決め顔で俺を睨んだ高町とその後ろでニコニコ微笑むテスタロツサ。

「コウ君のお家に泊めて貰って毎日お世話をしたい！」

「ま、待って待って待った待ってくれよ！ 何がどうなってそうなったんだよ！ おい!!」

テスタロツサの入知恵だけ、じゃないな。

恐らく母さんも嘸んでる。他にもまだいるだろう。

「みんなに相談したんだ。お父さんやお母さん、それに紫さんにも」

……………やっぱりだ。

七峰紫、俺の母の名前だ。

今回の事件のときのよう落ち込むときは大きく落ち込むが昇るときは大きく昇る、そんなところは前回と変わりの無い人物である。

だから、こんなことを考えるなら裏で母が糸を引いているのを簡単に予想できた。

「それで私がやるべきって思ったことをやればいいって。だから、私に出来て一番やるべきって思ったのがそれなの」

「だ、だからってな」

「お父さんとお母さんにはちゃんと了承を得たよ。紫さんもいいっ

て」

「俺のっ、俺の了承は！」

「あっ」

忘れていたと言うように高町は目を見開いた。

何故それを忘れていたのかをまず問いたいところだがそれを飲み込んで高町を見た。

「俺は別にいいって。別に恩を売ったつもりでもないし、そんな事する必要なんてないだろ!？」

「え、でも……もう私の荷物とかコウ君の家に運んじやってるし……あのね、コウ君の部屋の隣が私の部屋なんだよ？」

「なっ!?! なんでもうそんな事になってる!?!」

「紫さんが……その、思い立ったが吉日って」

「母、さんッ」

思わず奥歯を噛み締める。

まさか周りが既に固められているなんて。

どうしたものか、と天井を睨みつけた俺の耳にクスクスと笑い声が聞こえてきた。

見るとテストタロツサがこちらを見て笑い声をもらしていた。

「人事だと思ってる」

「ふふ、コウスケはそろそろ負けを認めるべきだと思うけど」

笑うテストタロツサに思わず顔が歪むのを感じた。

「コウ、君?」

不安そうな高町の声が響く。

「もしかして……迷惑、かな?」

「う、むっ……」

弱弱しい声に胸を掴まれた様な感覚を覚える。

「コウスケ、ね?」

優しいなテストタロツサの声に苛立つ。

何を間違ったのか。それをあげるならばまずこんな事態になることをこれっぽっちも疑わなかった事と相談しろなんて簡単に俺と高町の問題を他人に任せてしまったことか。

高町を見ると不安そうにこちらの様子を伺っていた。
これは仕方なくだ。そう心の中で理由付ける。
ゆっくりと高町を見つめる。

「コウ君」

何を緊張しているのかドクドクと心臓がうるさい。

「わ、わかった。高町の……その、世話になる」

その時に見た高町の笑顔だけはきつと忘れられないだろう。

※

こうなった原因の出来事を思い出して思わず頭を掻く。別に高町が全部悪いってわけでもないだろうが……

結果として高町は管理局を辞めて地球へ帰ることになった。

しかしリンデイさんなどは高町の才能、そして高町自身の魔法への思いを言っているからか囑託魔導師としての試験はいつでも受けられるようにしてはもらっているのだが。

高町が横になっていいるベッドを軽く蹴る。

「……んう」

軽く呻くと高町は体をくねらせた。

それがどこか赤子のようで俺はゆっくりと高町の頭を撫でた。

「コウ、君？」

薄く目を開いた高町は微笑むようにそれを細めた。

「暖かい」

両手で俺の手を押さえつけるようにして言う高町。

「嘘付くなよ」

軽く高町の頭をこずく。

この手が、腕が暖かいはずがない。

「私には暖かいんだよ？」

少しむくれて見せた高町にため息を吐く。

「それは幻覚だ。誰かが幻覚魔法を使ってる可能性があるから後から調べるといい、お前の頭とかな」

「酷い」と高町が文句を言う。

「酷いさ」なんて軽く返して高町の手をとる。

「もう朝食だつて、俺の世話係りが俺より後に起きるなよな」

ま、無理だろうが。と心の中で呟く。

どうやら高町はその呟きを詠んだらしく頬を膨らませた。

気にせず手を引こうとした俺を高町が止める。

「まだ重いものは持てないでしょ？」

「お前は軽いだろ？」

「ありがとう。でも、いい」

俺の手を離れた高町はベッドの上を跳ねるようにして立ち上がった。

若干よろけたのを支えてやって二人で笑みを浮かべた。

「さ、早く行こう？」

「それは俺の台詞だ」

笑い合つて、一緒に部屋を出た。

※

「なのはちゃん、今日の予定は？」

朝食の途中母が高町に訪ねた。

「あ、今日は病院です。早く治さないと仕事もできませんし」

高町の返事に母は少しだけ微笑んだ。

「急ぐのもいいけどあまり焦らないようにね？」

母の言葉に高町はしっかりと頷いた。

高町は今病気を患っている。

それは話によれば精神的なものらしくそのせいで今の高町は一切の魔法が使えない状況にあった。

原因は言わずもがなで先の事件、それに俺の両腕の事だ。

入院中に毎日面会にくるものだからおかしいと思っはいたが高

町も高町で病院に通っているとは思わなかった。

勿論そんな状態の高町が囑託魔導師を務められるはずもなく囑託魔導師として働くのは病気が完治してからと言うことになった。

今では週に数回ミッドへ渡り治療を行っている。

魔法を使えない、と言うのは高町にとつてとても辛いことなんだろう。

最近の高町は誰かと一緒にいないと不安になることがあると聞いた。

実際高町が初めてこの家に来た時、その時はまだ高町が病院に通っている事を知らなかった俺や俺の両親は用事があつて出掛けると言った高町を見送りそれぞれの用事で家を出た。

帰ってみると驚いた。

顔を真っ青にした高町が泣き叫んでいたのだから。

それから高町が病院へ向かうさいは送り迎えをする事になった。

勿論、俺が。

俺が入院中の時は桃子さんや土郎さんと一緒に病院に通っていたらしい。

「さ、送って行ってやるよ」

朝食が終わり準備を終えた俺が高町を見る。

まあ、準備と言つても制服に着替えるくらいだが。これでも小学生をしていたりする。

「いつも、ごめんね」

高町が少し萎んだように言う。

軽く額をこずく。

「少しくらい俺にも世話を焼かせろ」

「で、でも」

「早く行くぞ」

高町の後ろに回り込み背中を押す。
申し訳無さそうに俯く高町の顔が見えた。

※

送り迎えと言っても俺が行くのは病院ではなくハラオウン家までだ。

そこで高町を誰かに引き渡して俺は学校に行くことになった。
今回は何故か八神だった。

顔色が悪い癖にニコニコと笑っているそいつに警戒していると八神の服のポケットから飛び出した何かに驚かされた。

よく見ると空飛ぶ人形だった。

「リインフォースⅡです！」

なんて叫んで変なポーズをとる人形。

なんと生きている人形だった。

「やつと昨日完成したんや！」

八神は笑顔でVサイン。

ああ、あのリインフォースの二号機か、と思いつつそいつを見る。

「はじめまして、こーすけさん！」

「……はじめまして」

ヤケに明るくハキハキと喋るもんだから少しだけこいつがあのリインフォースの妹か疑いたくなった。

「あと……テストタロツサとかにも言ってるんだが俺はこーすけじゃなくてこーすけだ。人の名前を間違えるのは失礼だぞ」

「はわわ。すみません、こーすけさん！」

慌てて頭を下げるそいつに「よろしい」と頭を撫でる。

途端に笑顔になるんだから安上がりなやつだ。

リインフォースⅡは若干頭が緩い子と覚えて高町を八神に頼む。

「じゃあ、気をつけてな」

「うん」

「終わったら連絡しろよ？」

「わかったよ」

「ハンカチとティッシュは持ってるな？」

「持ってるよ」

「こつんと高町と俺の額を合わせる。」

「じゃあ、いってらっしゃい」

「いってきます。コウ君もいってらっしゃい」

「いってきます」

ゆつくりと額を離して俺は学校に向かった。

※

放課後まだ高町からの連絡が無いことに今日は長いななんて思いつつ帰ろうとしたとき呼び止められた。

「そこの紅いの、待ちなさい」

「……赤くはないが待ってやるよ」

振り返ると思った通り俺を呼び止めたのはバニングス、アリサ・バニングスだった。

「バニングスか。朝に言った通り高町は通院中でテストタロツサと八神は仕事だ」

「わかってるわよ。私はあんたに話があるのよ」

「ん、俺に？」

「何よ、私とは話したくないの？」

相変わらずの高圧的な態度に笑みを浮かべる。まあ、それが優しさの裏返しだということにはわかつている。

何だかんだいってこいつだけが見舞いに来ても何時もと態度が変わらなかつた。

久しぶりに持つべきものは友なんて思わされることになったのはまだ記憶に新しい。

そのまま俺はバニングスの家まで引っ張られるように連れて行かれた。

移動に使用したのはバニングス家の車、行きはバスの癖に気分を変

えるなよな。

バニングス家に迎えられるとケーキと紅茶が出され向かい合う形でバニングスと話す。

「で、バニングスは俺になんのようながあるんだ？」

「んー、まず一つ目」

バニングスは指を一本立てるとにこりと笑った。

「そろそろバニングスって呼ぶの止めない？」

「ん？何だよそれ？」

「言つたまんまだけど、短い付き合いでもないし変じゃない？」

「変じゃないし今更じゃないか」

俺の答えにバニングスは腕を組んだ。

何を考えてるんだよ。

「じゃあ、バニングスってのが可愛くないから、やめて」

「じゃあって何だよ？」

「バニングスってなんか厭つような感じがするのよね。私も女なんだからもう少し可愛い呼ばれ方がいい」

話を聞けよ。

それからもバニングスはアレコレと理由を考えては俺に投げかけた。

「じゃあ名前で呼んで欲しいから」

「えらく直球だな。92点」

「惜しいっ！」

バニングスが悔しそうに拳をふった。

「まて、流れがおかしいぞ？」

「んんっ、点数制は止めて原点に戻ろう。なんでそんなに名前で呼んで欲しいんだよ？」

「特に意味は、」

「正直に言う」

「もう！」

割り込んだ俺にバニングスが睨みをきかせる。

「べ、別にっ！私だけ名前で呼んでるのが気に食わなかっただけよ！」
「意地っ張り」

「うるさい！」

頬を朱に染めて顔を逸らすアリサに思わず頬が緩んだ。

「今回だけだからな」

「え？」

「で話の二つ目はなんだよ、アリサ？」

「な、あ、う……」

「顔が赤いぞ」

「あ、あんたこそ！」

……うるさい。自覚はしている。

自分が度を超えて初心なことくらいは。

「で、二つ目は？」

「ちよ、ちよっとだけ待って。新鮮とかなんというか……少しだけ慣れさせて！」

「……ああ、アリサ。わかったよ、アリサ。少し待つ、アリサ。アリサ
アリサアリサ」

「あ、あんたってやつは!!」

殴られた。

「さ、話しを続けようか」

「いきなりテンションが下がるのね」

「お前はまだ赤いのな」

「少しは黙れ！」

「な、殴るなよ！」

二度振るわれた拳をよける。

何でも力で解決するのはよくないだろ。

「二つ目を言うからあんたは少し黙る！」

「了解」

アリサの言葉に頷くと彼女は一度深呼吸をして場の空気を入れ替

えた。

「最近、なのはの様子が変わる」

思わず笑みを崩しかけた。

「変って言うのは？」

「雰囲気というか、勘？」

「勘って……俺が考えていたのより適当だな」

「否定はしない、ね」

ゆっくりと笑みを作るアリサ。

「嘘をつかない。私が紅助の好きなどころ」

「それはどうも」

笑顔で返すとアリサは机に投げ出していた俺の腕を撫でる。

「原因はコレ？」

「まあ、そうかな？」

「曖昧なんだ？」

「腕も、というか俺自身かな」

笑う、もうそれしか選べる表情がなかった。

「俺が高町離れをするって話だったんだけど」

「ああ。上手くいってない？」

「……まあ」

「なんとなくわかるもの」

「勘ってやつか」

「まあね。それになのはって紅助にべったりだったもの。見ていて恥ずかしかったくらい」

「わかってたなら言ってくれよ。元々俺が頼ってるつもりだったんだよ高町の事を考えてなかった」

「それでもなのはに懐かれるんだからあんたは凄いな」

「懐くってペットじゃあるまいし」

「なのははそれくらいいいのよ。そのほうがなのはのためになる」

「まあ、俺のようにはならなかつただろうな」

そりやそうだ、と二人して笑う。

何かが剥がれ落ちる感覚がした。

「今気付いて良かったって思うのが一番。共依存なんてそこら辺にくらでもって転がっているんだもん、時間が解決してくれる」

「やつぱりお前はかっこいいよな」

「そりやあ、私だからね」

やつぱり俺の親友はかっこいい。

ふと携帯が音楽を流した。

見ると高町の名前が表示されている。

「なのは？」

「うん、少し悪い」

いいって、とアリサが笑うのを見て電話に出た。

『コウ君？』

「ああ、終わったのか？」

『うん、待たせてごめんね』

「いいって、今からそっちに行くよ」

『わかった。本当にごめんね？』

「謝るなって。それじゃあ、そっちで」

『うん、またね』

ああ、と答えて電話を切った。

アリサを見ると彼女はにっこりと笑う。

「ワンちゃんのお迎えの時間かしら？」

「あいつは犬じゃなくてネコだな。甘えん坊だけど表に出さない」

そうね、と笑ったアリサにつられて笑う。

「それじゃあ俺は行くよ。悪いなあんまりいい話が出来なかった」

「じゃあ次に楽しい話をすればいいじゃない」

「そうだな」

「バイバイ、紅助」

「じゃあな、バニングス」

手を振る俺にバニングスは顔を歪めた。

「最後にあと一回」

「我が儘だな」

「お嬢様だもん」

「じゃあな、アリサ」

手を振る俺にアリサは笑顔で手を振り返した。

※

高町のもとに向かうとそこにはもう一人の影があった。

八神かと思ったがそれにしては小さい。

「なんだヴィータか」

「あたしじゃ悪いかよ？」

小さいのでなかなかわからなかったが影の正体は八神家のヴィータだった。

通称小さいの。

「今日は遅かったみたいだけどなにかあったのか？」

「あ、違うの。今日はヴィータちゃんがお休みだったから少しミッドを回ってきたの」

高町が笑顔でヴィータを見る。

病院に行ったんじゃないのかよ、とか学校に行けよ、とかは思っていない。思っていない。

「あー、そうなんだ？ありがとなヴィータ、高町の面倒みてもらって」

礼を言う俺にヴィータは頬を赤く染めてそっぽをむいた。

「別に、あたしもなのはといるのは嫌いじゃねえし」

「好きなんだろう？」

「嫌いじゃねえし！」

顔を真っ赤にして怒鳴るヴィータに高町と共に笑う。

「な、なのはまで笑うな！」

「ふふ。ごめんね、ヴィータちゃん。でも私はヴィータちゃんというの好きだよ。」

「う、うるせえ！」

焦るヴィータとカラカラと笑う高町を見て少し安心した。

俺がいなくても高町はこんなに笑えるんだって、

思ってた。

それから俺たち三人は高町の両親の店《翠屋》へ行くことになった。

挨拶をした俺に土郎さんと桃子さんは笑顔を返してくれた。

少し、疲れているような土郎さんが気になった。

その後、俺とヴィータは空気を読んで高町家族から少し離れることにした。

「あのさ、少しだけ、少しだけでいいからあたしの話を聞いてくれないか?」

「ん?」

ヴィータは離れた場所で話し合っている高町達を見て小さく呟いた。

「話っていうか愚痴、かな?聞きたくはないと思うけど」

手元にあったシュークリーム眺めてヴィータは頷く。

「聞いて欲しいんだ、あたしが」

「……愚痴くらい聞かし聞かせろよ、友達だろ?」

「友達?」

そう聞き返してきたヴィータに頷いてやると彼女は少しだけ頬を緩めた。

「じゃあ、友達だから愚痴を言う。文句は聞かないからな」

そしてヴィータは鋭い瞳を細め小さな口を開いた。

「最近、なのはがあんまり笑わなくなった」

思わず首を傾げた。

「笑わなくなった？」

「ああ、全然ってわけじゃねえけど確かに笑わなくなった」
それはおかしい。

あまり長い時間一緒にいなかった今日でさえ高町はずっと笑っていたはずだ。

「上の空、て言うのかな？時々何を見ているのかわからなくなる時もあった」

朝、目を覚ましたあいつは笑っていたはずだ。

「話してた時になのはがいきなり黙り出すことも何回があった」

朝食中も、送り出す時も笑顔だった。

「泣きそうな目をしてる時もあるんだ」

高町がいる方向にめを向ける。

するとその視線に気が付いた高町が笑顔で手を振ってる。

ほら、今だって。

「退院したばっかだって悪いと思うけど、言うよ」

ヴィータはその瞳を揺らす。

始めて見た彼女のそんな表情に息を飲んだ。

「なのははあたしの一番の親友だ。始めてできた友達だったしはやてと同じくらいあたしはなのはが好きなんだ。だから、お前がやられた時、お前の心配より先になのはに何もなかったことを安心した。安心したんだ」

自分の罪を懺悔するようなヴィータは目を涙で潤ませる。

しかしけしてその目線は俺から離れることはなかった。

「今になって思うとあの時あたしがお前の代わりになっていればよかった。したら何かが変わっていたかも」

「そんなことは」

「ああ、後の祭だってことはわかっている。わかっているけど……お前は特別なんだよ。なのはにとってもあたしにとっても」

それは俺を酷く揺さぶる言葉だった。

こんなに自分が誰かに影響を与え誰かの特別になっていたなんて考えてもいなかった。

「あたしにとつてのお前はなのはの騎士っていうかヒーローみたいなもんだと思つてた。いつもなのはの側にいてなのはを守つて、お前がなのはの隣に入るだけでなのはの笑顔はなくなるなんて思つてた」

だから

「お前が墜ちて救援に向かった時、あたしはなのはを見てゾツとしたんだ」

なのはがあんな表情を浮かべるなんて。

ヴィータは言う。

「怒りでもつてないし悲しみでもなかった。なのははお前を見るのに見てないんだ。まるで目の前の事が夢かなんかつて言いたいような目だった」

目を堅く閉じてそれを思い出すように語つたヴィータは呻くように口を開く。

「お前たちの関係がそんなに脆いものだなんて思つてなかった。あたしとはやて以上に距離が近くて家族とはまた違った関係なんだつて思つてた」

でも違つた、とヴィータは吐いた。

「なのはは言つたよ。お前にとつての自分は何なのだろうつて。あたしは、今のなのはを見るのが怖い」

彼女がそんなことを口にするなんて思つてもいなかった。

ヴィータはなのはの良き理解者なんてかつてに考えていた。

「今のなのはを助けられるのはあたしじゃねえ、はやてでもフェイトでもねえんだ」

泣きそうなでもしつかりとした光が見える瞳が俺を映す。

その瞳が俺は少し怖かった。

「お前なんだ」

そんなことは無いと叫びたい。

「なのは守れるのはお前だし、助けられるのはお前だけなんだ。悔しいけど……そうなんだ」

どうかなのはを助けてくれ。

ヴィータはそう言っって頭を下げた。

しばらくして高町がこちらへやってきた。

「待たせてごめんね？」

「いや大丈夫」

うまく笑えている自信がない。

今すぐにも全部投げ出したいと思う自分と高町を助けたい自分、友人の言葉に答えたい自分、いろんな考えが頭をよぎる。

「どうかしたの？」

気が付くと高町が俺の顔を覗き込んでいた。

俺は少しだけ頬を緩めて高町の額に俺の額を合わせる。

こうしている時だけ高町が何を考えているのかわかるような気がしたからだ。

「何でもない」

そう答えて額を離す。

少しだけ心配している高町をあしらって俺は立ち上がった。

「じゃあ行くか。と、ヴィータはどうする？なんなら俺の家で」

「あたしはいいよ。はやてと新しい家族も気になるしな」

ヴィータはいつも通りの彼女に戻っている。

切り替えが出来る彼女が羨ましく不器用な自分が情けなかった。

※

すっかり夕日に染まってしまった街を高町と歩く。

やっぱり高町は笑顔だった。

「なあ、高町？」

「ん、なあに？」

「お前にとつての俺ってなんだ？」

きよとん、と高町が目を丸くする。

「なのはにとつてのコウ君？」

頷く俺を見て高町は腕を組んだ。

少しだけ鼓動が早くなるのがわかる。

「うーん、えつとね？」

思わず高町の一挙一動を真剣に見てしまう俺がいて少しだけ馬鹿らしくなった。

「私にとつての」

息を飲む。

「コウ君は」

拳を強く握りしめて、

「内緒っ！」

ゆっくりと開いた。

「なんだよ、それ？」

「だつて恥ずかしいもん」

にやはは、とおかしな笑い方をする高町の頭をこすく。少し安心した。何故かはわからないけど本当に少しだけ安心した。

それが仮初でも俺たちはまだ変わっていない。

先のことを考えるなんて待っているのは恐怖だけだ。

今が美しく、今が愛しく、今が恋しい。

だけど、前に進まなければいけないことも俺はわかっていた。

「じゃあ、コウ君がコウ君にとってのなののはが何なのか言ってくれたら私も言うよ?」

「内緒」

笑って答える俺に高町は頬を膨らませた。

「私のパクリだ!」

「パクってません」

二人で夕日に照らされた街を歩いた。

俺にとっての高町、そんなこと言葉にできない。

それくらい俺はあいつが、

俺は彼女のヒーローになりたいようだ。

2. 決意

放課後の教室。窓の外に広がる景色をただぼんやりと眺めていた。最近、何かを眺めるということが増えている気がする。

別に何か悩み事があるわけでもないし考え事をしているわけでもない。

強いて言うならば考えることが無くなった、と言ったところだろう。

管理局を辞めて平穏な日常を送ってみるとその日常が何も無いものだと気がつく。

そのことに落胆したわけではない。確かに管理局にいた頃は何か安心があった。

未来が見えていたと言えはいいだろうか。高町の後ろについて回って確かに色々なことがあった。

危険なこと、笑えること、怒れること、ソレは簡単に手に入ったり手に入らないようにすることもできた。

しかしそれから離れてみるとわかる。

平凡な人生は平凡でしかない。ソレは何も生み出さないし何も感じさせない。

だからこそ俺は何かを成したい。のだけれど……

「どう生きていくか、どう死ぬか、それが問題だ。ってね」

もしも自分が年相応の精神だったのなら悩まずに済むことなのだろう。

しかし……まあ、俺の頭の中はこうなわけで一人の人生を変えてしまったことを悩んだりそのせいで自分の進退を決めかねている。

高町にはカッコいいこと言っておいて情けないがこれでも頑張っているほうだ。

元々情けなくてカッコ悪い人間なんだから這って動くくらいが関の山である。

とはいってもこんなところでぼんやりしていても何かが変わるわ

けではあるまいし。

ため息を一つ、座っていた席を立つ。

それと同時に背中に衝撃を感じた。

後ろから伸びて来た腕に誰かが抱きついてきたと気付く。

「高町？」

ふと浮かんだ人物の名前を口にすると返ってきたのは笑い声だった。

「ふっふっふ」

聞き覚えのある声が耳をくすぐる。

「残念、はやてちゃんでした！」

「……………」

「えっと、紅助君？」

「……ああ、八神さんでしたか」

「あれ!? 何でそない他人行儀なん!？」

ちよつとでも心臓が跳ねた自分が恥ずかしい。

なんとさえばいいだろうか。残念。そう、凄く残念な気分だ。

こちらを体に絡んだ腕を解きながら俺は八神を見た。

「お前……仮にも女なんだから慎重というものを持ったらどうだ？」

「うーん、私と紅助君の仲やん。これくらい大丈夫！」

何が大丈夫なのか。そんな疑問を飲み込んで八神から体を離れた。

八神はやて、相変わらずこいつの事だけは苦手だ。

何を考えているのかわからないと言うかなんと言うか。

弱みを隠すのが上手いのかそういうのはあまり見たことが無い。

そのくせ他人の機微には人一倍敏感なんだからたちが悪い。

今までだって八神がいて助けられたことが何度かある。小さな借

りではあるが借りは借り、残しておいて気持ちのいいものではない。

しかしこいつは隠し事や嘘が得意だから借りを返そうにもそのタ

イミングが見つけられないなんてことになってしまっわけだ。

今だってそう。にへらと間の抜けた笑顔を顔に貼り付けてこちら

を見つめている。

こいつが嘘を付くのが得意と言うことは出合った頃からなんとなくわかっていた。

ずっと一人だけで過ごしていた事は知識として知っていた。

そういうストーリーのはずだから八神は他人に弱みを見せることは付け入られる隙を晒す事と同意のものだったのだろう。

だからこそ闇の書が覚醒するまで、ヴォルケンリッターの四人ともう一人が現れるまでたった一人での生活を続けていたのだろう。

勿論それもストーリー上の設定と言ってしまえばそれまでだし裏で誰かが手をまわしていたのかもしれない。

だけど俺の知っている八神は自らの殻に籠って体を丸めている小さい子供、そんなところなんだ。

もう一度言うが俺は八神が苦手だ。

いつもいつも一人で抱え込もうとする八神。

嘘について偽物の笑顔を顔に貼り付けている八神。

なのに人の事を誰よりも気にしてしまう八神。

八神のやり方は好きになれないしたぶん八神も優柔不断な俺を好いてはいないだろう。

しかし俺と八神はそんな関係で満足している。

ああ、今だつてそうだ。

「それで、何の用だ？」

「え？ ああ、まあ……うん」

「ん？」

切れの悪い返答に思わず首をかしげた。

八神も笑みを若干ゆがめて頬を掻いている。

「いや、別に……あの、その」

「なんだよ？」

「あ、えつとえと……紅助君が泣いてるように見えたー、なんて」「はい？」

「や、やっぱ今の無し！ 忘れて、お願いやから忘れて！」

思わず呆ける。赤く染まった顔を手で覆い隠そうとしている八神

を呆然と見つめる。

「えっと、泣いてるって?」

「わ、忘れてって!! 言わんとけばよかった、ああもう恥ずかしいッ」
「忘れろって、言われても……」

「ううっ、しょうがないやん……そう、見えたんやから」

萎む様に体を丸めてうずくまった八神。

俺といえば目の前の状況に困惑していた。

八神の言っていることは意味がわからないしこいつがそんな事を考えるとは思っていなかった。

ようは何故か俺が泣いているように見えて慰めようとした、ってところだろうか。

思わずため息が漏れた。

相変わらず顔を赤くしてうずくまっている八神の頭を小突く。

「な、なんや!」

「まったく……誰が泣いてるって?」

「なっ、まだ言うんか!」

「そうぽろぽろと泣けるような緩い涙腺はもってないっての。お前らじゃあるまいし」

「こ、こっちは心配して上げたのになんやそれっ」

「はいはい。でも、まあ……」

「う、うん?」

「気持ちだけは、気持ちだけは貰っとく」

「え?」

「その、ありがと……」

ぼそりと呟いて八神に背を向けた。

やばい、頬が熱い。八神にしてはこちらとの接し方がやけに強引でぎこちないと思っではいたがそれが此方にもうつってしまったようだ。

少しだけ漏れ出た弱み。それを八神に付け入られる前に逃げるか。

そう考え逃げるように教室の出口へ向かった。

が、それは数秒遅かったのだろう。教室の扉に手をかけた瞬間、先

ほど感じたような衝撃を背中に感じた。

後ろから伸びてきた手にまた抱きつかれたと気がつく。

「ふっふっふ」

聞き覚えのある笑い声。

「えへ、えへへ。待ってって、紅助君」

「や、八神。なんだよ……まったく」

赤みの引かない顔を俯いて隠す。八神の回復がこんなに早いとは誤算だった。

「なんや、もう……紅助君はツンデレなんやから」

「誰がツンデレだっ」

「飴と鞭っていうんかな？ 汚いわあ、紅助君汚い！」

話を聞け。

「いいかげん放せっ」

体を揺すってしがみ付いていた八神を振り落とす。

さすがにこれ以上くっ付かれていると暑苦しい。主に顔とか、顔とか。

振り下ろされた八神は俺から離れると顔を隠すように背を向けた。どうやらお互い一杯一杯になっておたようだ。

「あんな、紅助君」

「ん、なんだよ？」

「なんや……ありがとうな」

「うん？」

「最近色んなことあって紅助君とはギクシヤクしとったから……今日は少しでも話せてよかったわ」

「あー……えと、そんなにギクシヤクしてたっけ？」

「私がかつてに感じとったもんやから気にせんでええよ。それに勘違いやっつたみたいだし」

「はあ……」

やっぱり理解は出来ない。

もう俺と八神は分かり合えない関係にあると割り切ってしまったほうがいいのでは、という考えが頭に過ぎる位には。

要するに「私は貴方と最近上手に付き合えてないような気がする。でもソレは気のせいでした」という言葉を伝えられたわけだ。

だからなんだって言うんだよ。

その言葉を俺に伝える意味がわからない。

八神が言うように彼女の自己満足なのだから気にしなければいいのだろうか？

ならば何故口にした？何か理由があったのではないだろうか？俺に伝えたい何かがあったのではないだろうか？

そんな疑問が胸の中でしこりとなつて暴れまわる。

気持ちの悪い感覚だ。しかしそれを吐き出すのは惜しいと頭のどこかで考えている。

「ねえ、紅助君？」

「次はなんだよ」

「もし、もしもやけど……紅助君と私がもうちよい早く出合ってたなら、もっと仲良くできたかな？」

「……………」

「なんや、自分でも意味わからんな。なに聞きたかったんかな？ごめんな」

「……はあ」

「うう、呆れとる？」

やっぱり意味がわからない事だらけだ。

だけど、世界なんてそんなもの。

「そういうのも悪くは、無いね」

「ん、なんか言うた？」

「んにゃ、なんも」

「そう？」

不思議そうに八神が首を傾げる。

まだこちらに背を向けたままだけどお互いの表情はなんとなく変わった。

笑っているのだろう。

俺だって、こんなに頬が緩むのだから。

※

八神と別れ教室を出た後、また俺に声をかけてくる人物がいた。

「なんか嬉しそうだね、少年」

「……お前もな、少女」

金糸の髪を揺らしながら笑顔を此方に向けてくる少女、テストロッツサが俺の目の前に立っていた。

「何かあったのかな？」

「何も、ただ気分がよかつただけ」

「……本当に？」

「ああ。俺にだってそういう時があるんだよ」

「そっか」

何がおかしいのかテストロッツサはクスクスと笑った。

「最近のコースケ、少し変わってきたね」

「変わった、って俺が？」

「うん。落ち着きをもったって言うのかな？最近のコースケは柔らかくなつたよ」

「つまり以前の俺は落ち着きが無かつた、と？」

「ふふ、うん。そうだね。前のコースケは何事にも面倒臭そうでどんなことでも早く終わらせようって感じだった。けど今は小さなことでも良く考えてる、そんな感じに見えるな」

「別に何か考えてるわけじゃない。それに今だって何事も面倒だ」

「でも、頑張ってるよ。最近のコースケ」

「凄いことだよ、ソレは」そう言うテストロッツサを見て頬が熱くなるのを自覚した。

どうやら今日は厄日のようだ。体温の調整が上手くいかない。

大体、何でこいつらはこうも恥ずかしい言葉を惜しげもなく吐けるのだろうか。

いつだってこいつらは、テストロッツサはこうだ。

そういえば……

テスタロツサとよく話すようになったのはいつ頃だっただろうか。彼女は出会った頃は思いを胸に秘めてあまり口に出さないタイプの人間だったと思う。

そしてその頃の俺もあまり他人との関わりを作ろうとは考えていなかった。

高町さえいけば十分だったしそれで満足していたという事もあった。

だから接点と言うものはあまり無かった。だけど親近感だけは持っていた。

テスタロツサは俺と同じような人間だと思っていたから。

俺が生まれ直したように特殊な生まれを持ち、高町なのはという少女に助けられた。

だからこそだろうか、俺は彼女が苦手だった。同属嫌悪、そう言えばいいのだろうか。

鏡を見ているようで駄目な自分と前を見ているテスタロツサの違いがよくわかった。

そんな関係が変わったのは確か闇の書の事件が解決した後当たりだったか。

何があつたのかは正直覚えていない。しかしその時期は高町だけでなくテスタロツサともよく傍にいたことを覚えている。

彼女が焼いてくれたクッキーが好きでよく口にしていたのを覚えている。

あの頃から俺はテスタロツサに惹かれていたんだと思う。

高町と違う、とても近くにいた彼女に。だけどその関係も時がたつと同時に変わっていった。

時間が経つというのはそういうことだとわかっていたし自分の心の変化にも感じることは少なかつた。

だけどテスタロツサはまだ近くにいてくれたのだと思う。

気がつけば俺は彼女に弱みを漏らし、彼女は俺に勇気をくれた。

今の俺が一番の友達を選ぶとしたらそれはテスタロツサを選ぶだろう。

テストタロツサになら俺は弱みを晒しても安心していられる。それだけ信頼している。

彼女はいつだって俺に答えをくれたのだから。昔も、そして今も。だから、俺は今、彼女に褒められたということを……その、だな。

嬉しい、そんな風に考えてしまっているわけだ。

頑張っている。そんな一言で頬が緩む。

もう一度、聞きたいなんて恥ずかしくて口が裂けても言えない事まで考えてしまっているくらいだ。

「どうしたの、コースケ?」

「い、いや……なんでも、無い」

どうしてもにやけてしまう顔を手で覆って隠す。

さすがにこんな顔をテストタロツサに見せることだけはしたくない。

「変なコースケ」

変にしたのはお前だ、なんて文句をいってやりたい。

本当に、本当に今日は駄目な日だ。思わず緩んだ顔のままため息を吐こうとしたその時。

「そう言えば、なのはとはどうなのかな……最近?」

手で覆い隠した顔が引きつるように固まった。

それがテストタロツサにも伝わったのだろう。彼女は優しげに微笑む。

「その様子じゃ、少し悩んでるみたいだね?」

「……否定は、しないけどさ」

頬の熱が一気に冷めていくのを感じた。

気分が上がっていただけあって眼を逸らしていたことに気が付くとシヨックが酷く大きい。

「今のコースケは何を悩んでいるのかな?」

優しい、何時ものテストロッサの声だ。

少しだけ安心して俺に口を動かすだけの余裕をくれる。

「高町に、何かをしてやりたい……」

呟いた言葉はいまいち纏まりのない漠然としたものだ。

それでもテストロッサはしっかりと俺を見て返事をした。

「なのはに？」

「ああ、ずっとアイツを頼りにしてたから。次は俺が何かをしてやりたい、なんて」

「でも何をしてあげるべきか悩んでる、かな？」

「そんなところ。今の俺は高町になにかできるのかな？」

こぼした愚痴に我ながら情けないなと思っていると聞こえてきたのはテストロッサのため息だった。

「まったく、コースケって変なところで馬鹿だよ」

「馬鹿って、おいっ」

「本当の事でしょ？ 何をしてあげるべき、コースケはそう言ったよね」

「言った、けど」

「じゃあ、もし私があればすべきだって言ってコースケは納得できるのかな？」

「ソレは応え次第で変わってくる、そうだろ？」

「私は、納得できないと思う！」

強く言われた言葉に思わず一步後ずさった。

「コースケは今誰のことを考えているの？なのは？それとも自分自身？」

「そんなの高町につ——」

決って、いるのか？

俺は本当に高町のことを思っって今の悩みに到ったか？

ヴィータの話聞いてなにを思っった。

何で俺が？本当に俺じゃないといけないのか？

高町と話をして何を思っった。

俺がなりたい。ヒーローに。そしたらアイツは俺に。

「全部、俺のためじゃん……」

泣けるほどに馬鹿馬鹿しい。

全部、全部全部全部。全てが自分自身のためだ。

なんて自分勝手だ、今も昔も変わってないじゃないか。

俺は今まで高町を盾として生きてきてこれからは高町を理由に生きていこうと言いたいらしい。

本当に馬鹿げてる。

けど、

「いいんだよ。自分のためだ」

テスタロッサは微笑んだ。

「コースケはコースケのために頑張っっていいんだよ」

「自分のためになのはを助けてあげたい、どこかおかしいかな？」

「私にはそれがとても綺麗な理由に見えるよ。単純で愚直で、面倒臭がりのコースケらしい」

「自分の胸に誰かを残すのは理由だよ。コースケの胸にはなのはがいるかな？」

「コースケは胸を張れないかもしれない。だったら私が曲がった背中を叩いてあげる」

「コースケの理由、私は好きだよって言ってあげる」

「大丈夫」

「そこから先はね」

「コースケが決めた道だよ」

※

家に帰ると次は葉が生え揃い始めた木をぼんやりと眺めていた。俺の家の庭に生えたその木は父が子供の頃に祖父母と共に植えたものらしい。

それを知ったのは今から20年も前。

つまり、俺が生まれ直す前。

時々こうやってこの木を眺めることがある。

昔が懐かしい、とか多分そんな感じなんだと思う。

突然、首もとから伸びてきた腕に抱きすくめられる。少し驚いてその細い腕を見た。

「高町?」

「うん、驚いた?」

クスリと笑う声と共にキュツと抱きしめられる力が増した。

「驚いた。母さんと買い物に行ったんじゃないのか?」

「今帰ってきたところ。戻ってきたらまだぼんやりしてるコウ君がいてびっくりしたよ」

言われて時計を見る。

木を眺め始めてから既に長針が二回転近く進んでいた。

「この木、好きなの?」

「多分、いや……好きだよ。この木」

もう一度木を見る。

何の変哲もない木だ。

それ程大きいわけでもないし、華やかさがあるわけでもない。

ただ俺より長く生きている、その程度。

その程度の癖に何でか俺はこの木に惹かれた。

まあ、そんなにかっこよく言うほどの理由ではないけどな。

高町を背負いあげるようにして立ち上がる。

「きゃっ!」

「一つ、聞いていいか?」

「ま、まず降ろして!聞くから、降ろして!」

あわてて足をばたつかせる高町を床に下ろす。

頬を膨らませた高町を見る。

「もし俺が魔法を使うのを止めてくれっていったら高町は魔法を止められるか?」

俺の言葉に表情を固めた高町を見て思わず苦笑した。

「え?」

「やっぱり今のなし。聞かなかったことにしといてくれ」
高町から背を向けて、

腕をつかまれた。

「わ、私」

振り向いて気が付いた。

泣きそうな顔をした高町がいた。

「私、コウ君が言うならっ、でもっ」

「止めたくない、って言うんだろ？」

高町が耐えるように目を閉じた。

「止めなくてもいいよ。嘘、冗談、戯れ言、魔が差した、なんとも思っ
てくれていい」

「どれも、違うのにつ？」

泣くのをこらえながら言い返す高町。

やっぱりコイツは《高町なのは》だった。

俺程度の嘘じゃ通用しない。

だから決心は付いた。

「じゃあ、高町の好きなお話をしよう」

「お話……っ？」

「ああ、お互い伝えたい事を伝えよう。ルールはただ一つ、嘘はつく
な。それだけ」

一度、頬を緩めて言った。

「じゃあ、まず俺から」

額をぶつけ合っついても通りの、俺達の距離に戻る。

「俺はさ、正直お前に魔法を止めてほしい。魔法と関わるとお前が傷

付くから。それは小さいのもあるし俺みたいなのもある」

高町が少しだけ跳ねたのが額越しにわかった。

「俺はお前にそんな怪我をしてほしくない。小さい怪我でも、苦しむ顔なんて見たくないんだ。お前が俺を信じてくれるなら俺がお前を護る」

その言葉は汚くて卑怯だ。

でも俺は嘘だけはつきたくない。

ルールなんて関係なく汚いからとか卑怯だからとかそんな小さな事で嘘をつくやつが高町の隣に立って良いはずがない。

「いつまでも笑顔でいさせる自信があるわけじゃない、魔法以上にお前を満たせる自信なんてない」

高町なのはという存在にとつてどれほど魔法が大切なものか、少しだけでも俺はわかってる。

だけど、それでも俺は退きたくない。俺は高町にとつての魔法以上の存在に成りたい。

「俺は俺の為じゃないと動けない人間だよ。今までがそうだったし多分これからもそうだ。他人のことはわからないし、もうわかりたいと思うことも止めた」

だから、俺は俺の決めた道を進もう。

「今まで通り俺のやり方で、自分勝手な考えで、お前の気持ちも考えないで」

俺はお前を幸せにしたい。

俺はそれだけを伝えたかったようだ。

3. You

私、高町なのは彼の何を知っているのだろう。

目の前に広がる彼の顔は涙で歪んでいるけどいつも通り微笑んでいる事は簡単にわかった。

「次は高町の番」

彼の声はやけに落ち着いていてそれが私には悲しかった。

置いていかれたようで少しだけ出合った頃の私を思い出したから。

私から見ただ七峰紅助という人物はどこにでもいる男の子とは違って特別な人だった。

なんでそう思ったのかはずっと昔で覚えていない。

だけど彼と見た色々なものが綺羅々と輝いていたのは一つ残らず覚えている。

魔法もその一つ。

ユーノ君に連れられて、コウ君に教えられた世界は私にとって世界が裏返しになったくらい私の衝撃と感動を与えてくれた。

私にも何かができるんだって教えてくれたものでそしてその方法でもあった魔法が私はとても好きだった。

これで、私は彼に恩返しをできる。

今までコウ君に貰ってきたものの分だけ私もコウ君にあげることが出来る。

そう考えていた。

だって、ずっと不安だったんだから。

なんでコウ君は私の傍にいてくれるのか。ずっとわからない疑問だった。

私は自分に自信がなかったからそんな疑問がずっと晴れないまま

胸の中を駆け回っている。

私はたぶん疑っていたんだ。

何も無い私でなく、

コウ君を。

だから、

こんなことに、なってしまったのだろう。

彼が両腕を失ったのは私のせいなのだろう。そう思うのは理由がある。

勿論、私を庇ったからという理由もあるが最も大きいのは私がコウ君の近くにいたからだなんて私は思っている。

私がコウ君の、高町なのはが七峰紅助の足かせとなっていたのだろう。

何も無い私だ、コウ君が有り余るだけの何かを持っていたとしてもその私を背負っているならばいつかはそれが尽き始める。

それが今回だった。

私は彼を壊していったのだ。

少しずつ少しずつ、長い時間をかけて。

そしてコウ君は両腕を失った。

機械仕掛けの両腕を見て私は言葉を失った。

あれが私の残した結果なのか。今までコウ君と共にいて多くのものを貰った結果があれなのか。

胸の苦しみに殺されるのではないか、そう思った。

でも殺されるならこの苦しみからは逃げられるのか、そう思ってしまった。

どうしようもない。

なんでコウ君は私を護ったのだろう。

もう、あの掌で私を撫でてくれることもない。

もう、あの腕で私を抱きしめてくれることもない。

こんなことなら護られなくなかった。

でも、それが私の彼へ残したものだ。

全て私が、

なのに、なのに、なのに、

それでも私は優しい彼に甘えてしまった。

私は最初から壊れていたのかもしれない。

もう、泣けばいいのか笑えばいいのかわからなかった。

どうして私はこうなんだろう？

それでもなんでコウ君は優しいの？

※

「わ、たしはっ」

口から出た声は情け無いほど震えていて、それでもコウ君は優しく

笑って聞いてくれた。

やめて、笑いかけないで。

「コウ、君につ、なにかつ、なにかをしてあげたくて……」

涙を流して情けなく言葉を吐き出す。酷くみつともない。

「コウ君は十分私を幸せにしてくれてるよ、次は私のはずって思ってた。私にはアリサちゃんみたいに頭はよくないし、すずかちゃんみたいに体を動かすのが得意じゃない。だから私ができるのは魔法だけでっ、でもっ」

みつともない私にコウ君は頭を撫でてくれる。

嬉しい。

落ち着く。

幸せ。

でも冷たい。

涙を拭ってコウ君を見た。

少し困ったような瞳。

私の気持ちなんて考えないって言ったのに。

コウ君は声が体と逆だ。

そういうところはアリサちゃんと似ている。

優しいところはすずかちゃん。

かっこいいところはフェイトちゃん。

おもしろいところははやてちゃん。

どこにでもいるようで私だけの彼。

奥歯を噛み締める。

私だけが彼に出来ることなんて、一つもない。

むしろコウ君には迷惑をかけてばかりで、私は駄目な、駄目で……

「……………コウ君は何で私の傍にいてくれるの」

私の口から言葉が零れた。

小さい、とても小さい、私を作り上げた問い。

コウ君は少しだけ驚いて瞳を揺らした。

ほらまたコウ君が困ってるよ。

でも、しようがない。だって私は高町なのはなんだから。

高町なのは七峰紅助を駄目にする。そういうものだ。

だけどコウ君は笑った。

「俺は、お前といると駄目になる」

「あっ」

告げられた言葉は心と繋がって私を引き裂いた。

「いつもこうだ……自分が自分でわからなくなつて、恐かった」

私も恐かった。コウ君がわからなくて。

「だから逃げてたよ。楽な方へ楽な方へって。そしたらまたわからなくなつてさ」

告げられる言葉は痛くて、辛くて。

何でコウ君が笑っているのかわからなかった。

「高町と出会った頃のこととは今でも覚えているけれどなんで声をかけたかを、ずっと忘れてた」

目を見開く。

どうしても知りたかった事だ。

私と彼の始まった時の始めての疑問。

「一緒にいたかったから、お前に認めてほしかった、俺がこの体で、こ

の記憶を、この世界に、いていいんだって、そう言ってほしかった」
言っている意味はわからない。だけどコウ君の目は真っ直ぐわたしを見つめてくれていてから不安は無かった。

「でも、今は違うよ……」

私はあんなにコウ君を傷つけたのに、それでも笑顔を見れば胸がはじけるように踊りだして瞳からは溢れるように涙が零れる。

理由はわかっていて。

だっぴつと付き合ってきた疑問なんだから。

私にとつてのコウ君。

コウ君にとつての私がそうだといいなって何度も夢を見た。

桃色の光が辺りを照らす。

出来るような気がした。

だっぴつ私は貴方を、

求めて、欲して、手を伸ばした。

泣いて、叫んで、声を飛ばした。

知りたかつたんだ、貴方だけの私を、私だけの貴方を。

そのためなら何でもできた、戦うことも、護ることも、空を飛ぶことだっぴつ。

それは当たり前で、そうするために私がいるような気さえした。

その先のことなんて考えていなかった。

あの両腕は私の罪の証だ。

前を見ずに後ろばかりに気をとられていた馬鹿な私の消えない罪だ。

忘れることは難しい、目を逸らすことなんて出来ない。

でも大丈夫。私は知ってしまったから。

忘れられないなら覚えてあげる。

目を逸らせないなら見つめてあげる。

もう前は見えてしまったから。

※

知っていますか？

私は貴方に多くの物を貰いました。

知っていますか？

私は貴方に多くの事をしてもらいました。

知っていますか？

私は貴方に多くの言葉をかけてもらいました。

知っていますか？

私は貴方に、貴方に、貴方に、

ありがとう。

うれしかったよ。

たのしかったよ。

貴方はどうでしたか？

私の手は届きましたか？

私の声は届きましたか？

私の心は届きましたか？

大丈夫だよ。

だって私は――

※

「俺は、お前が――」

私は、貴方が――

「好きだ」

好きだから。

唇で感じる彼の体温は熱く、
焼けるようだった。

私は彼の私でいたいようだ。

4. 問答

他人の体温を忘れられないと言う少し不思議な感覚を俺は今始めて体験していた。

焼けるように熱いこの体温がいつになったら冷めてしまうのだろう。そんな事を考え思わず口に手を当てた。

その様子を不審に思ったのか目の前の席に座っていた少女、テストタロツサが首を傾げた。

「どうしたの、コースケ？」

声と共に顔が熱くなった。

辺りを見渡して思い出す。俺がテストタロツサに相談事があると行って近場の喫茶店に呼び出したことを。

不思議そうに此方を見るテストタロツサから顔を逸らしてこみ上げる言葉にならない羞恥の声を強引に飲み込んだ。

不覚だ。恐らくテストタロツサは気付いていないのだろうがこんな人前で我を忘れふしだらな考えにふけていたとは。

「なんでもない」そう自分でもわかるくらい震える声でテストタロツサに返事をして赤くなる頬を頬杖を突く要領で隠した。

なんとという見つとも無い姿だとは思う。

「……それで、相談ってなに？」

やはり納得とは行かなかったのだろう。変わらず不思議そうな表情を浮かべているテストタロツサが口を開く。

「ん、ああ。そうだった、こっちが呼び出したんだったな」

「もう……私だって暇じゃないんだよ？　ただでさえ執務官試験に落ちちゃったのに」

ぷくりとテストタロツサは頬を膨らませて不満感を表す。

妙に子供っぽい仕草が彼女らしくなく余程執務官試験の不合格が痛かったのだろうと感ぜられた。

とは言ったものの、

「あれ……執務官試験、落ちたんだ？」

その話、俺は初耳だった。だからそんな言葉が零れた。零れてしまった。

その言葉が余程気に触ったのだろうテストタロツサは目を見開いて驚いた後、眉をひくつかせながら俺を指差した。

「お、落ちたよっ……コースケのせいだね!!」

「は？」

その言葉に俺は呆然となった。この時だけは唇の熱さを忘れていたと言ってもいい。

思わず辺りをキョロキョロと見渡してもう一度テストタロツサの顔を見る。

相変わらず頬を膨らませた駄々っ子のような可愛らしい表情であり怒っているようには思えなかった。

「え？は、えっと、俺の、せい？」

「そうでしょ!!」

そうじゃ、ないよな？

テストタロツサが叫び声を上げたためか周囲にいる客の視線が此方へ集まる。

大勢の視線の中押しつぶされるように肩を縮めた俺は恐る恐るテストタロツサに問うた。

「ち、ちなみになんで俺のせい、なのかな……？」

「元はと言えばコースケが私の大事な時期にあんな大怪我をするのが悪いんだよ!!」

「け、怪我と試験は関係ないだろ！」

「心配させられたって言ってるの！ 鈍感コースケ！」

「ど、鈍感!? お、お前、見舞いに来た時はそんな素振り見せ無かっただろ！」

「それはっ！もうっ、そう言うところが鈍感なんですよ！」

「おまつ、そりゃ俺は人の機微とかに疎いけどさ。仕方ないだろ、わかんないんだから！」

「わからないから仕方ないってのは逃げじゃないかな？ 結果的に私

は試験に落ちたんだから！」

「それは……そう、だけど。つて、おい。おい！ お前が落ちたのはお前のせいだろ！」

「だ、だからそれはコースケが私に心配をさせて——」

「それとこれとは関係ないだろ！」

「か、関係あるよお!!」

情けない声をあげるテストタロッサの頭を一度叩いて黙らせる。

納得がいかない様子テストタロッサはまだ俺を睨んでいたが此方が睨み返すと逃げるように視線を逸らした。

「……これだからコースケは」

「何か言ったか？」

「言つてません」

ぶい、と顔を逸らすテストタロッサに苦笑が漏れる。

「と、そう言えば」

「うん？」

思い出したかのようにテストタロッサが指を一本立てる。

「今更、ただけどき。コースケつて私と二人つきりで出かけたたりしていいの?」

「……駄目なの?」

首を傾げる。そんな様子俺にテストタロッサは小さく「やっぱり鈍感」と呟いて微笑んだ。

「なのはが気にしないかな、つてこと。コースケとなのはつてそういう関係でしょ?」

頬を掻くテストタロッサを見て顔が熱くなるのがわかった。

確かに俺は高町のことをそういう風に思っではいるししっかりと言葉にして伝えたのだが。

その、返事を貰ってなかったりするわけであつて……高町の口から、聞いて無い。

だから、その……

「し、心配ないんじゃないかな?」

「……なんで目が泳いでるの?」

「泳いでねえ！」

叫んで無理やり流れを断ち切った。

この話は駄目だ。この話はい嫌だ。

赤くなっているであろう顔をまた覆い隠して机に突っ伏す。

「そんなことより俺の相談を聞けよ！ 聞いてくださいよ！」

「もう……しかたないなあ、ふふ」

クスリと笑うテストタロツサの顔に羞恥心が掻き立てられる。

なんと言うか……よくお分かりで、と言うところか。

「そ、それで相談なんだけどき……」

「うん、何かな？」

「えっと——あつ」

相談事を口にしうとして固まった。

その様子をテストタロツサが目を丸くして見ている。

「どうしたの？」

「あ、その」

言いよどむ。

先ほどの話を断ち切っておいてなんだ。

相談事は、高町の事だった。

「言い難い事？」

「あー、そんな」

「当てよっか？」

「は？」

またテストタロツサはクスリと笑う。その笑顔、苦手だ。

「なのはの事、だよね？」

はは、よくお分かりで。

「……まあ、そうだよ」

「コースケからの相談なんて大体なのはの事だからね」

「そんなこと、あるかもしれない？」

「あるよ？」

ある、けどさ。

不貞腐れた気分だ。

確かに俺はテストタロツサに良く相談事を聞いてもらったりしているがその話の大半は高町のことだ。

例えばアイツが何かを悩んでいる時とか。

例えばアイツが何か言いたそうにしている時とか。

例えばアイツが何を考えているかわからなくなった時とか。

例えばアイツのために何かをしてやればいいかわからない時とか。

今回はアイツとこの先、どう過ごしていけばいいのか。そんなことだ。

「高町がさ、ほら、魔法が使えるように戻ったじゃん」

「ああ、なのはから聞いたよ。最近は元気だし調子良いみたいだね」

「うん。ソレはいいんだけどさ、あいつすぐにでも魔導師に復帰しないなんて言い出して」

溜息と共に吐き出した言葉にテストタロツサは首を傾げる。

「なのはらしいって言えばそうじゃないの？」

「そう、だろうけどさ。別にすぐそうしなきゃいけないわけでもないだろ？」

「……うん、そうだね。でも、コースケはそれで何を悩んでるの？」

さら、っとテストタロツサは口にした。

俺の聞かれたくない事を。

勿論、それを口にしなければこの相談自体に意味は無いということ
はわかっていた。

わかっていたからこそ口に出せなかった。いや、出したくなかった
たつて言うただの自分勝手だ。

所謂、口に出すのも恥ずかしい。
それだけ。

それを知ってか知らずかテストロッサはゆつくりと微笑んだ。

「ずばり言っつていい、かな?」

そういつて指を突きつけられた。

正直、言わないでくれると嬉しい。なんて言うのは意味のないことだから口にはしない。

だから返事のように俺は顔に苦笑を貼り付けた。

「なのはが心配すぎる、だよね?」

そうですとも。

「確かにコースケとしては身をもつて味わったわけだから、昔のコースケや今の私が立っている場所の危険性はよくわかってるよね」

「ああ、できれば味わいたくなかった。なんて糞が垂れそうな言葉が吐けるくらいには」

「私もそうだよ。知ってる、よく知ってる」

テストロッサが目を細める。

「私は生まれたときから味わっているもん」

表情からは何を考えているのかは読み取れない。

それが後悔か憤慨か、それともどちらでも無い何かなのか。わかることの出来ない俺に少しだけ胸が痛んだ。

「だけど、私はその場所に立っている。どうしてかわかる?」

「……………それは」

「わからない、そうでしょ?それで当たり前だよ」

わからない事は当たり前、そう当たり前の事だ。

俺とこいつの関係が親友だろうと恋人だろうと兄妹だろうとなんだろうと、七峰紅助とフェイト・T・ハラオウンは他人だ。

他人の目的は理解出来ない、他人の過程は知らない、他人の結果はわからない。そういう風に出て来ている。

「ソレはなのはとコースケにも当て嵌まるものでしょ?」

人間って結局のところ感じられる繋がりがりなんて無いのだから。

テスタロツサはそう言って笑う。

「私は私の目的のために《管理局の魔導師》っていう手段を使ってるよ。私の知る一番の手段がそれだからね」

——さて、なのははなんで《管理局の魔導師》に復帰した
いって言ってるのかな?

「目的、ってことか。なんなんだよ、アイツの目的って」

「それは——」

「【わかりません】だろ?クソ、結局のところ俺はアイツの事って何も知らないんだよな」

やりたい事だとかやってほしい事だとか、何も知らない。

聞けたはずだ。ただ言葉にして高町に聞けたはずなのに。

好意を伝えておいてなんだ、一から十と言わず百くらいまでは情けない。

「コースケは情に厚いからね、そりゃあ情けなくもなるよ」

「……言葉遊びは好きじゃない。それに俺ほど情に薄い人間はいません」

「またまた」

吐き捨てるように言った言葉に返ってきたのは笑い声。

「まあ、情に薄くて情けないコースケにはわからないかもしれないけど、なのはの目的を知るのには簡単だよ」

「わかるわけがない、なんて言っておいてか?」

「私はわからない、とは言ったよ。【わからない】は【わかる】ためにあるんだから」

わからないわけなんてない、でしょ？

「……で、その簡単な手段って？」

「そりゃ、聞いてみればいいんだよ」

「……………は？」

「ただし嘘は吐かないこと」

追加される言葉にも俺は呆けたままだった。

聞いてみる。そんな簡単な、それでわかれば――

わかれば？

ふと思い出す。

俺は高町の話を知ったことがあるか？

あの話し合いも結局のところ俺の言いたいことを言って終わった。

どこに、アイツの答えがあった。

俺は高町の事を何も知らない、そりゃあそうだ。

何も聞いてこなかったのだから。

「コースケは情に深いけどそれは一方通行だからね。ときどき振り返るのも大切なんだよ」

諭すように言われた言葉には頭が痛む。

どれもこれも最初から間違っていた、なんて教えられた気分だ。

「確かにさ、誰だって嘘を吐いたりして誤魔化すことが出来るよ。だからわからないしわからない、でもわからないままじゃ今のコースケはいられないよね?」

「ああ」

「だったらコースケは本当のことを言葉にしなきゃ。回り道なんてコースケらしくないよ、いつだって真っ直ぐ、でしょ?」

「回り道、か。どのくらい回り道なんてしてなんだろう」

「ほんの少しだけ。なのは強い子だから、自分のすべきことはしっかりと自分で気が付いてる。あとはコースケが追いつくだけだよ」
「うん」

頷いて胸が少しだけ軽くなったのを感じた。

気が付くとテストロッサはずっと俺に微笑みかけていたような気がする。

それに合わせるようにして俺は苦笑を浮かべた。

「高町は喜んでくれるかな?」

「コースケとならどんな未来でも」

「高町は耐えてくれるかな」

「コースケとならどんな道のりでも」

テストロッサは微笑んで俺は苦笑する。

高町と俺の距離が最初からああだったように俺とテストロッサが話すにはこの表情が丁度いい。

「まずは高町とはなさなきやな」

「次はちゃんと聞いてあげてね?」

「大丈夫、かな?」

「コースケが気をつけていればね」

「手伝ってくれたり、とかは?」

「してあげない」

「なんで？」

「それはそれ、これはこれ」

「テストタロツサは案外ケチだよな」

「知らなかった？」

「……知ってた」

「友達だからね」

「ああ、友達だから」

「一人で出来る？」

「頑張る。やってみせる」

「ふふっ。じゃあ、頑張れ。なのはのヒーロー」

※

最近、高町の起床が早い。

この頃のアイツは俺が起きるより早く起床しているようで俺が起こされることが多い。

どうも彼女なりに努力をしているようで時々眠たそうにしているのを見るがどうやら無理はしていないようだ。

先日俺はテストタロツサとな話もありもう一度高町と話をした。

結果的に言ってしまうと俺は高町の目的を聞くことが出来なかったのだが少しだけ安心した。

高町の言葉は真つ直ぐに俺に届いて、芯のあるその声に自分の悩んでいることが馬鹿らしくなつたくらいだ。

それに高町も努力を続けているようだ。なんていえばいいかわからないけど、負けられない。そんな風に思った。

ほら、今日も目を覚ますと高町が――

あれ？

視界一杯に高町の顔が広がっていた。

近い、なんてもんじやない。それこそぶつかりそうなほど……あ。気がつくど唇が焼けるように熱くなる。

知ってる。この感覚。

ゆつくりと高町の顔が離れていき熱が顔に広がっていく。

「はあ」

離れた高町が目を閉じたまま熱っぽい息を吐いた。

そして、

もう一度、

こちらに、

近づいて、

目が、合った。

「おはよう、コウ君」

囁かれたその声に体中の熱が爆発するような感覚に襲われた。思わず返事をする事なんて忘れて高町から顔を逸らした。

「も、もしかしてっ、まい、毎朝こんなことをしていたのか!?!」

口が上手く回らない。そんな様子の俺に高町は優しく微笑んだ。

「そんなことないよ？我慢できなかつた時だけ」

「お願いだから、我慢、してくれよっ……」

声を搾り出して布団の中へ潜り込んだ。

「コウ君、起きなきゃ」

そんな声をかけられるたびに体が熱くなる。

「……あと五分」

熱が冷めるのを持とう、なんて言い訳だったがそれも高町には意味が無かつたのだろう。

クスリと小さい笑い声が聞こえた。

「じゃあ、後五分ここで待つね？」

「——ッ、わかつた！起きる、起きるから少し外で待っててくれ！」

布団から飛び出して叫ぶ。茹で上がったように熱い身体で高町を追い出した。

「——ッ」

声にならない呻き声を上げ暴れた。もう、一日の始まりから台無し感が酷い。

高町に遊ばれているような感覚に体中がむずがゆくなる。

嫌な気分では無い、嫌な気分では無いけれどッ。男として惨めだ、凄く惨めだ。

落ち着け、落ち着けとぶつぶつ呟いて身支度をした。

体から熱が抜けてくのを感じて部屋を出る。

高町が微笑んで出迎えるのを見て早速少しだけ残った熱が疼いた。

「高町」

「何、コウ君？」

出来るだけ真面目な顔を作った。そうしないとまた高町に遊ばれる気がして。

「何であんなことをする」

首が傾げられる。

「あんな事って、キス？」

真っ直ぐ投げられた言葉に熱が蘇った。それを高町が微笑んで見てくる。

「なんで、って言うところ……私がしたかったから？」

「お前っ！そんなことで！」

「そんなことじゃないよ？唇をあわせると凄く気持ちいいんだよ。胸がキゅンとしてお腹のあたりからポカポカって暖かくなるの」

「バツ」

可笑しな声が漏れた。

どう見ても動揺している俺に対して高町は余裕というように笑って俺に問う。

「コウ君は、気持ちよくない？」

「そんな問題じゃない！もうそんなことを勝手にするな！わかったな！」

怒鳴りながら階段を降りていく、そんな俺の背中に投げかけられる言葉があった。

「勝手じゃなかったらいいんだ？」

※

「なのはちゃんの今日の予定は？」

朝食、いつもと一緒に母さんがみんなの予定を聞く。

「午前中は特にありません。午後からはミッドの病院に行ってくるつもりです」

「病院？」

隣に座る高町を見て首を傾げる。

「通院中に仲良くなった先生がいてその人から頼まれたものを持って行くの」

「ふうん？」

別段気にしていないような素振りをしてみるが正直かなり気になる。

頼まれたものがなんなのか、先生って誰、とかかなり心配。

それが高町にも伝わったようでゆっくりと口が開かれた。

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ。少し変わった先生だけど面白い先生だよ」

「名前は？」

「名前？セルジオ先生、セルジオ・ピニンファリーナだけど」

一度だけ目を細めて高町から視線を外す。

聞き覚えは無い。そんなに重要な人物でもないのか？

「病院に行くのはいいいけど気を付けてね？」

「はい！」

「じゃあ、次はコウちゃん」

なにか、嫌な感じがする。

※

今日は特に用事がない、ということでテストタロッサの訓練に付き合う事になった。

遙か前方の空をテストタロッサが駆けているのをぼんやりと見る。

訓練に付き合う、と言ってもデバイスのないどころか両腕の無い俺にはそんな激しい事も出来るはずがなくテストタロッサの様子を見てアドバイスを送るとい形になった。

しかしテスタロッサが魔法を使っているのはあまりしつかりと見たことが無いので少し新鮮な気分だ。

今まで仕事は違ったし士官学校では差ほど気にとめていなかった。それ以前は同上。

闇の書事件は地球に来ていたことすら気が付かなかった。

多分一番しつかりとみたのはジュエルシードを奪い合った、あの事件の時。

俺と彼女が初めて出会った時だ。

※

俺がテスタロッサと初めて出会った時に感じたのは驚愕だった。

ジュエルシードを回収していた俺に突然襲いかかった少女はデバイスをこちらに向けて睨みをきかせた。

これがフェイト・テスタロッサか、なんて感慨深いものすら感じるくらい実物を目にするのと知っているだけの違いを知った。

「それをこちらに渡して」

静かにそう告げた彼女は俺の手の中にあつたジュエルシードに視線を送る。

この時点で原作知識の薄れかかっていた俺はテスタロッサの登場の仕方に若干違和感を覚えつつ高町を見た。

高町は突然現れた少女に驚きつつもジュエルシードを渡してはいけないと首を横に振った。

「どうやらこちらのご主人は渡したくないようだ」

俺の言葉にテスタロッサは目を細めデバイスを構えた。

「だったらっ！」

《Blitz Action》

俺が高町にジュエルシードを投げ渡すのと同時、テスタロッサの叫びがこだまする。

高速移動でジュエルシードを追おうとする彼女の前に邪魔をするように躍り出る。

振りかぶられた巨大な鎌を手甲型のデバイスで受け止めて押し合いの形になった。

瞬間彼女から迸った金色の魔力に驚愕した。

押し合いという形式こそ古式な戦闘方はそれにより一瞬で常人が立ち入ることが許されないものへと駆け上がった。

力任せに俺の拳を弾き返したテスタロッサは鎌を振るう。

まるで三閃が一振りの内に放たれるような速さ。

振り下ろし、胴、逆胴。

ほぼ同時に襲いかかるそれを両腕と足で凌いで一度距離をとった。

睨み合う俺とテスタロッサ。

後方の高町はどうやら奇襲にあつたらしく何者かと戦闘中、おそらくアルフだ。

拳を握りしめてデバイスの感覚を確かめる。

短く息を吐いてそれが合図になった。

同時に飛び上がり魔法を行使する。

「バレットスファイア！」

「フォトンスファイア！」

奇しくもそれは同種の魔法で俺達は同数の砲台を魔法で形成し互いの弾丸をぶつけ合った。

《Blitz Action》

《Fast Move》

超高速間での激突。

弾け飛ぶ魔力が辺りの木々をなぎ倒す。テスタロッサが鎌を振るえば俺が拳を合わせ俺が拳を振るえばテスタロッサが鎌を合わせた。潰し合い削り合う、超高速間で行われるそれはとても原始的な戦闘だった。

傍目から見れば嵐のようなその紡ぎ合いは百回にも登るぶつかり合いの中、鋼と鋼が打ち合う音だけを残し唐突に終わりを告げた。

デバイスへと叩きつけた拳でテスタロッサが数歩後ずさる。

俺とテスタロッサ、両者共に少なからず息を乱しており次の一撃で最後とおそらくどちらもが考えたのだろう。

テスタロッサが飛び上がり更に距離をとる。

来るならば砲撃魔法。

全身に流れる魔力を両腕に集中させる

辺りに鳥が鳴く音が響く。勿論結界内に俺達以外の生物はいない。

それはテスタロッサの体から漏れ出している音だ。

金色の光に包まれたテスタロッサはその莫大な魔力を次の一撃へと込める。

そしてそこから漏れ出した魔力が電撃としてテスタロッサの周りで音を奏でる。

思わず膝が笑いそうになった。

それをグツとこらえて更に魔力をつぎ込む。

朱色の魔力が中を舞って俺の両腕へと吸い込まれる。

準備が出来たのは、

同時だった。

両者はそれぞれのデバイスを己の敵へ突き立てる。

そして、

「サンダースマツシャーツ!!」

「アキシオンバスターツ!!」

雷を纏った砲撃と赤熱の砲撃が激突した。

※

「どうだった?」

思い出に耽っていた俺を呼び戻したのはテストロッサの声だった。

ゆつくりと俺の前に降り立った彼女は呆けていた俺を見て首を傾げた。

「どうしたの? なにかあった?」

「いや、何でもない」

心配そうにするテストロッサに俺は笑みを見せる。

少なくともあの時はこんな風にこいつと仲良く出来るとは思っていなかった。

テストロッサも八神も別に仲良くなりたいたいなんて思ったわけではない。

テストロッサには彼女の作られた運命に共感する所があったから。

意味もなく繰り返された人生を生きる俺と母に別人として望まれ作り出された彼女。

何もかもが違うけれど少しだけ似た俺達。
運命を切り開いた彼女、俺はそれに憧れたのかもしれない。

未だ世界への、そして自分自身への失望が消えない、納得も出来な
い。

目の前のテストロッサを見る。

まだ心配そうにする彼女はなぜ運命を切り開けたのだろうか？
どうやって運命を切り開いたのだろうか？

俺はその答えが知りたいようだ。

5. Turn

もし私が魔法を知ってしまうことがなかったら、なんて事を最近考えたことがある。

まあ、もしもの話だ。

もしも私が魔法を知ってしまったら、コウ君の腕は無事だったのではないだろうか？ とか、そんなの。

馬鹿馬鹿しい、だろうか。そうなんだろうと思う。

過去は過ぎ去ったことで今から来るのは未来なのだ。どう悔やんだとしても時計は逆さまには進まない。

だからこそ、こんな気持ちが背中へ押し掛かる。

もしかしてこんなことにはならなかったのでは？

コウ君がフエイトちゃんやはやてちゃん助けて、それで幸せになっていたのではないだろうか？

ずっと元気で、私のことなんかで悩まずにすんだのではないだろうか？

そうだとしたら、

もし、私が振り返ることができたなら……そうしたら。

私がコウ君と初めて手をつないだのは家の近くで花火大会が開催された時。

幼いころから私は大勢で騒いだりするのが苦手でお祭りだとかそういうものがあまり好きではなかった。

けれどそんな私をコウ君は連れ出してきて。

「花火、見に行かないの？」って素っ気無い振りをして私を呼んでくれた。

彼と二人で見た花火はやっぱり綺麗だった。一度だけ両親と見たそれを思い出して頬が緩む。周りにはいる大勢の人も気にならないくらいに私は目の前の光景を、二人で見た花火を目に焼き付けた。

花火が終わって皆が帰りだしたころ、大勢の人が動くのが波のよう
に見えて困惑していたそのときだ。

コウ君が私に手を差し伸べたのは。

逸れると危ないからって、伸ばされた手に私は更に困惑した。

繋いでいいの？　なんて風に。

誰かに触れるのが少し怖かった。邪魔にならないかな？　迷惑じや
ないかな？　そんな疑問が頭の中をいっぱいにして、誰かに触れてそれ
が形になってしまるのが怖かった。

だから伸ばされた手は彼からしたら普通のことだったのかも知れ
ないのだけれど私にとってはとても特別で、胸が跳ねるようにうるさ
くて、とてもうれしかった。

おっかなびっくりと言うようにコウ君の手の上に指を這わせた。
そんな私に対してコウ君は強く手を握り返してきた。

暖かい。

それが最初の感想で、当時の私が一番好きだった感覚。

その夜は中々眠ることができなかった。私の手が覚えている彼の
体温に胸が震えて。

また手を繋いで見たい、でもどうやったら、やっぱり恥ずかしい、そ
んなことを考えている内に意識が薄れて、

※

合わせた唇をゆっくりと離す。

相変わらず唇で感じる彼の体温は焼けるように熱く、溶けるように
暖かい。

「あつ、はあ……」

熱を逃がすように息を吐いて少しだけ手を繋いだときの暖かさを
思い出した。

あの始めての夜もこんな彼の熱が忘れられなくて、次の日からよく

手に目を向けていた。

彼が腕を失ったと同時に私はあの熱を忘れてしまった。

手の先が凍ったように冷たくてどれだけあの時のことを思い出してもあの熱だけは思い出せなかった。

先日、コウ君とまたお話をした。

私は何をしたいのかって、そう聞いてきたコウ君に私は恥ずかしくて本当の事を話せなかった。

私はコウ君の腕を元に戻したい。

また手を繋ぎたい。

あの熱を、思い出したい。

だから魔導師として私はその方法を探す。

コウ君はそれを反対するだろうと思う、どこまでいっても魔導師というのは危険なことっていうのはわかっている。

それでももう一度だけでいい、手を繋ぎたい。

それにあんなことがあっても私は魔法が嫌いになれなかった。

矢張り私は魔法が好きで。

私の好きになった魔法で彼のために何かをしてあげたい。

そしてその方法を私はすでに知っている。

もう少しでまた彼の手を……

……

……ま、まあ、でもこうやってキスで体温を感じるのも中々、うん。

つい緩んでしまう頬を引き締めようとして失敗する。

最近、こんなことをするために目覚めるのが早くなってしまった。

少し前までは朝食ギリギリに起床していた私であるが今では努力と根性、それと愛とか恋とかその他諸々の力によって朝早くにでも目覚めることができるようになった。

もちろんキスが本命ではない。ただコウ君を起こしてあげようと思っただけで……

ただ、まあ……コウ君より早く起きてみるとコウ君の寝顔が見れて

……こう、無防備な唇が、その……ね？

とりあえずもう一度だけ……

そう、もう一度顔を近づけると、

顔を真っ赤にしたコウ君と目が合った。

「おはよう、コウ君」

笑った私にコウ君は恥ずかしそうに視線を逸らす。

「も、もしかしてっ、まい、毎朝こんなことをしていたのか!？」

さらに真っ赤になりながら聞いてきたコウ君に私は微笑む。

「そんなことないよ？我慢できなかつた時だけ」

「お願いだから、我慢、してくれよ……」

コウ君はそう言うのと短い腕をばたつかせて布団の中に潜り込んだ。

「コウ君、起きなきゃ」

「……あと五分」

「じゃああと五分ここで待つね？」

布団の中のコウ君がブルブルと震えた。

「——ッ、わかった！起きる、起きるから少し外で待っていてくれ！」

布団から飛び出してきたコウ君は顔どころか体まで真っ赤に染めてまるで茹で蛸のようだった。

私はコウ君の頼みに従って部屋を出て扉に耳を押し付けた。

聞こえてくるのは押しつぶしたような呻き声で次にバタバタとベッドを叩いているだろう音が聞こえてきた。

「コウ君、なにしてるのー？」

言うのと、音が止まる。

そんなことに頬が緩む。

やっぱりコウ君と二人でいる時間は幸せだ。

それこそ何をしていても、二人でいるだけで、今のようにからかっていても、私がからかわれるのも、お喋りをしたり、ただ黙って寄り添っているだけでも私は十分に幸せだ。

二人いるのは、幸せだ。

だって、

一人じゃないでしょ？

と、部屋の扉が開かれてコウ君が顔を出した。

またぼんやりとしていた頭を振ってコウ君の姿を見る。

まだ少しだけ赤みが残っている顔でコウ君は私を睨む。

「高町」

「何、コウ君？」

「何であんな事をする」

思わず首を傾げた。

「あんな事って、キス？」

コウ君が真っ赤になる。少し面白い。

真っ赤な顔で頷いたコウ君は私を見つめた。

「なんで、って言うのと……私がしたかったから？」

「お前っ！そんなことで！」

「そんなことじゃないよ？唇をあわせると凄く気持ちいいんだよ。胸がキゅンとしてお腹のあたりからポカポカって暖かくなるの」

「バツ——」

噴出すようにコウ君がおかしな声を上げるのを見て私はクスリと笑った。

矢張りコウ君はおかしな人だ。

強いんだか弱いんだか、私のために犠牲になるくらい勇気があるの

にいつもはこんなに臆病で、すごく歪。

だから見ていて飽きない、声を聞き惹かれる、触れ合って恋をした。

「コウ君は、気持ちよくない?」

私はとても気持ちいい。唇を合わせ、触れ合い、その一瞬に恋をする、気持ちよすぎてどうにかなりそう。

「そういうっ……問題じゃないっ!!」

震える声に胸を打たれる。

「もう、勝手なことはするな!!」

怒られてるのにそれで満たされてしまう、なんておかしいのに。

「わかったな!」

おかしくなるほど、って事なのかな?

怒鳴りながら階段を降りていくコウ君に私は笑顔をむける。

「勝手じゃなかったらいいんだ?」

ペロリと舐めた唇はコウ君の味がした。

※

「なのはちゃんの今日の予定は?」

朝食、いつもと一緒にコウ君のお母さんがみんなの予定を聞く。

「午前中は特にありません。午後からはミッドの病院に行つてくるつもりです」

「病院?」

隣に座るコウ君が首を傾げる。

「通院中に仲良くなった先生がいてその人から頼まれたものを持って

行くの」

「ふうん？」

別段気にしていないような素振りをしてるのにこちらを何度も見ているコウ君。

心配されていることがわかって私は頬を緩める。

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ。少し変わった先生だけど面白い先生だよ」

「名前は？」

「名前？セルジオ先生、セルジオ・ピニンファリーナだけど」

それを聞いたコウ君は一度だけ目を細めて私から視線を外した。

「どうやらコウ君の許しは出たようだ。」

「病院に行くのはいいけど気を付けてね？」

「はい！」

「じゃあ、次はコウちゃん」

今日もいい日になるといいな。

※

歩く足の速さが次第に速くなっていくことを自覚する。

でもこれ以上早くなってしまおうとまたナースの人に怒られてしまうのだろう。

でも、足が止まらなくて、速く速くと私を駆り立てる。

その日の午後、私は予定通り病院にいた。

目的も朝に言ったとおり先生に会いに行くため。

セルジオ先生、セルジオ・ピニンファリーナ先生。

先生とは私が病院に通っている間に偶々知り合った医師だ。

通院中にクロージングの文字を見つけ足を運んでみると彼がいた。

先生はとても変わった人で普通の人とは少し違った雰囲気を持った男性だ。

どこか不思議で捉えようがなくて、出会ったところのコウ君と少し似

ているような気がする。

特徴を言うといつも不気味に笑っているだとか、少し大丈夫かな？
って思うところはあるのだけれど、基本的には良い先生ではある。
そんな先生が口にした。

「私ならば治せる」

そう、口にした。

コウ君の様態を口にした私にやりと先生は不気味に笑った。

「私ならばその少年を治せるだろう。例えまだ幼い体に通常の技術では危険だろうと、だ。私の技術ならば、出来る。そう、確信を持って
言おう」

圧倒的な自信、とでも言えばいいのだろうか。

先生からはそれがあふれ出ているように見えた。

しかし、そう先生は言葉を続ける。

「私は患者を選ぶ、私が技術を振るうのだ。それに値する人物ではないと愉しくはないだろう？」

嬉しい、愉しくないというのはよくわからないけれど、なんとなく
言いたい事はわかる。

ようはコウ君を先生に認めさせればいいのか、って事だろう。

……でも、認めさせるってどうすれば？

そう、悩んで、悩みぬいた結果、私達は魔術師だったってことだった。

部屋に入ってきた私を見て先生はいつも通りニヤリと笑った。

「ふむ、よく来た。私が満足するだけの物を用意してきたかな？」

「はい！でも、今から見せる物は見たことを誰にも言わないでください
いね！」

私の言葉に先生が首を傾げる。

それに対し私は首にかけていたレイジングハートを取り出した。

「本当は許可が必要ですけど、すぐにでも認めてほしいから。お願い、
レイジングハート」

私の言葉にレイジングハートが映像を流し始める。

「……………ほう？」

先生が目を細めた。

その映像は私とコウ君がフェイトちゃんと初めて出会ったあの日。

いまでもしつかりと覚えている、忘れられない憧れたあの瞬間の、

フェイトちゃんとコウ君の戦闘記録だ。

6. 幸福

なぜ俺はこんなことになっているのだろう。
そんな言葉が頭に永遠と流れ続ける。

今、俺は初対面の男性と二人、誰もいない部屋で向かい合っていた。

何故!?

※

事の発端は高町にミッドの病院についてきて欲しいと頼まれたことからだ。

そして病院に着くと高町は耐えられないとばかりに走り出した。

看護師に走るな、と怒られてはすいませんと謝る高町と俺だったが高町は反省することはなくまた少しすると歩く速度を速め始める。

「おいー俺はどこに連れて行かれるんだ!？」

高町に「ついてきて！」なんて言われたからホイホイついてきてしまったのだが気が付けば病院の中、いったい高町は俺に何をさせるつもりなのだろう？

「そろそろ言ってくれたっていいだろー！」

半分叫ぶように言った俺に高町は足を止めた。

やけにニヤニヤとした笑顔で高町はこちらを見る。

最近の高町はニヤリと変な笑顔を浮かべるのは誰に影響を受けたのだろうか？

「教えてあげようか？」

思わず頭を叩いた。

「い、痛い!?!何で叩くの?！」

「教えてあげようか？ じゃない！ 教えろ！」

「叩かなくてもいいのに」と頭を抑える高町は涙目でこちらを見る。

「せ、先生に会わせようって……」

「先生って前に言ってた人か？ えっと、セルジュニアだかなんだか、とかいう？」

「セルジオ・ピニンファリーナ先生だよ」

「でその先生がどうしたんだ？」

「えへへ、内緒！」

「この！」

高町は俺が振るつた二度目の拳を軽いステップでよけてにこりと笑った。

「ついでからのお楽しみだよ！」

※

で、

その笑顔に騙された結果がこれだ。

連れて来られた先にいた男性となぜか二人つきりにされて個室の中に閉じ込められてしまった。

すいません何ですかこれ、何ですかこれ？

困惑中の俺に向かって目の前の男性がニヤリと不気味に笑った。

「始めまして、でいいかな。七峰紅助君？」

「は、はあ。はじめ、まして……えっと、そちらは？」

「セルジオ・ピニンファリーナと名乗っている。なかなか気に入っている名前なのだか呼ぶ者が少なくてな」

セルジオ、ということはこの人物が高町の言っていた先生という人物なのだろう。

「それで、その先生が俺にどういう用件があるんですか？ まさか何

もないのに呼び出されただけってのはないでしょうし」

「ふむ、用件か。強いて言うならば『実際に君と会って見たかった』となるだろうね」

「会って、みたかった？」

「ああ、君の話は高町君からよく聞いている。それで直接顔をあわせるのも良いかと思ってね」

「高町から……？」

「いったい何の話をよく聞かせているのか。

軽く考えてみる。」

「ここが病院という事は彼も医師の一人なのだろう。それがどのような分科なのかは知らないが。」

「高町が俺の話をしている、そして今俺にこの人物を紹介された、ということとは俺にも関係あること、か。」

「とすれば十中八九あれだ。」

「この腕、の事ですか？」

「うん？ そうだと言えばそうだが……まさか、聞いていないのかね？」

「聞いていないって、高町からですか？」

「ああ、私のことを」

「いや、名前と出会った経緯くらいしか聞いてませんが」

「ふむ、だから君は混乱していた、と」

「はあ、まあ……」

「ならば都合がいい、今回君がここに呼ばれた理由は簡単だ」

「簡単、て言うと？」

「私が君に会って見たかったから、だね」

「本当に、簡単な理由ですね、といったところが俺の感想だろうか。」

「正直、高町がまだ俺の腕のことを気にしていたのかと今知って少しだけ胸に痛みが走った。」

「そりゃあ、もう腕のことなんて忘れていたなんて言われるよりは数倍マシなんだろうけどさ。」

「思うもの、ってのはある所にはあるもんだ。」

それにこの腕もそれほど不便な物でもない。

付けているうちは魔力を使い続けるっていうのはあるがもともと魔導師をしていた俺からしてみると一度の戦闘訓練の方が辛いくらいだ。

最近になると義手ということ事態をあまり気にならなくなったところもある。

それこそ一度もこの腕のことを話さない日が続くくらいには。

だから高町がまだそんなことを、俺の腕を治そうなんて思っていたことを、俺は気づけずにいた。

何を見てたんだか。

そんな一人で落ち込む俺に先生は明るく声をかけた。

「では、質問といこうか？」

「え？」

「質問だよ。君という存在がどういうものなのか私は知りたい。ああ、知りたいんだ」

「は、はあ……」

先生の剣幕に押されつつ背中に冷や汗が流れるのを感じた。

もしややばい人に捕まったのではないだろうか？

「ではまず一つ目の質問だ」

一本の指が持ち上がる。

身構える俺は息のを呑んで、

「私のことを、どう思う？」

「……はあ？」

思わず、吐き出した。

「なに、言葉通りの質問だよ。私に持った印象、それを話してくれるだけがいい」

愉しそうにニヤニヤと、頬を緩ませる先生に俺はため息を吐いた。

「正直、おかしな人だと思いましたよ」

失礼ですけど、なんてクツションはおかない。

この人物は俺をからかって楽しんでいるのだろう。

それか、根っからの変人だ。

「普通、俺をこの場に呼ぶならば高町にではなく俺に一言かけるべきですし普通の医者ならばこんな質問も無いでしょうね。だから、先生には自信があるんだなんて思っています。俺の腕をどうこうでできるだけの自信が」

「ああ」

先生の口からそんな声がこぼれた。それが肯定だったのかは俺にはわからない、しかしその言葉には何か力のようなものを感じることが出来た。

それこそ自信か、少なくとも否定ではないのだろう。

「あまり好きな性格じゃないです。高町に俺を呼ばせたのだって彼女の言葉なら俺は絶対にここに来る、なんて考えたから何じゃないですか?」

勝手なことを言っているな、という自覚はあった。

初対面の人物になって事をつて思ってはいるが初対面の人物だからこそつて言うのもある。

高町には悪いが別にこの腕が治らなくても俺はそれでいい。

そう思っているから目の前の人物も唯の他人としか感じられない。腕を治してくれるかも?機械に頼らずともいい生活が送れるかもしれない?

それがどうした。

確かに直つてくれるのはうれしい、不自由の無い生活は楽かもしれない。

しかし、この腕は俺がそういう道を選んだ結果だから。

後悔は無い。

だから、この会話の結果で俺が目の前の人物に認められなくとも、それはそれでいい。

「先生は俺と顔を合わせてからまだ笑みしか見せてない、そんな余裕、自信、俺に無いものがあるから……すごく、羨ましい」

でも、それだけではない。

この人物にどこか親近感があった。

こう、押してくるような、覆うように潰してくる何か。

「貪欲、か？」

ポツリとつぶやいて欠けたピースが合わさった。

そして目の前の人物が笑顔を崩すのも同時だった。

「うまくは言えませんが先生って欲望に忠実、ですよ。多分。顔を合わせて数分のやつが何言ってるんだか、って思うかもしれないけどそういうところが一番嫌だ」

ああ、そうかそうか。

このどこから湧いてくるのかもわからない嫌悪感。

そしてそれと長く付き合ってきたかのような親密感。

「俺と、よく似てるから」

逃げるように多くのものを求めてきた俺。

ずっと高町の影に隠れて彼女の優しさだけに縋ってきた俺。

全てが自分のため、

弱く、欲望に満ちて、溺れた。

しかし、目の前の人物は違う。

この人は自分の欲望を肯定するだけの力を持っているのだろう。

欲望の中で泳いでいくだけの力が。だからこそその自信、余裕。

俺に近くて、どこまでも遠い。

「ああ、似てるからこそ、憎い」

「ほお」

俺の言葉に先生は小さく息を吐いた。

その口はまた三日月のように弧を描き、不気味に俺を見つめていた。

「面白」

その口からこぼれる言葉はどこか悪寒を感じさせる。

「似ている、そうか。私と君が似ているか」

その顔はどこか狂気さえ思わせた。

「気に入ったよ」

※

「意味が、わからないんだけどさ」

病院からの帰り道、俺は吐き出すように言葉を口にした。

「えっと、何が？」

数歩ほど前を歩いてきた高町が首をかしげる。

しかしその顔には笑みが張り付いていて隠し切れない喜びが漏れ出してきたことが容易くわかった。

「何であの先生は了承したんだ？」

それだ。

あの先生こと、セルジオ・ピニンファリーナ先生はあの後、もう話すことは無いとばかりに俺の腕を治すと明言した。

なぜそうなったのだろう。彼に好かれるようなことを口にした覚えはないし、むしろ嫌われて普通のことを口にした。

なのになぜ？

そんな疑問を頭の中で浮かべる俺に高町は優しく笑いかける。

「それは、コウ君だからだよ」

「……まるで意味がわからないんだが」

「私はコウ君と先生がどんな話をしたのかは知らないけど、コウ君ならきつと先生もわかってくれるって思っていたよ」

「何をわかるんだよ」

「私が何でコウ君を好きなのか、とかかな？」

少し恥ずかしそうにはにかむ高町にこちらの顔まで熱くなるのを感じた。

「お前のそれがわかって、どうにかなる問題じゃなかったはずだ」

「でも、私には自信があるよ」

「何が？」

「もしも私の好きが世界中の人にわかってもらえたら、世界中のみんながコウ君を好きになってくれる。そういう自信」

「なっ……」

思わず言葉を失う。

馬鹿らしくて、意味は理解できないけど嬉しい、それだけはわかった。

「あのさ」

「なにかな？」

「俺の手、治るんだよな？」

「うん」

笑顔がなぜか眩しく感じる。

それが沁みただのだろう目が、潤んで。

「だ、大丈夫!? どうしたの!?!」

心配する高町を手で制して彼女の顔をしっかりと見た。

「ありがとう、嬉しいんだ。元々両腕のことは諦めていたから、高町が助けられたなら両腕なんて安いもんだ、なんて理由をつけてさ」

でも、

俺は久しぶりに涙を流した。

「でも、嬉しいんだ。両腕が無いことに馴れてきて、機械の腕に馴れてきて、今更両腕が治るって言われてすごく嬉しい」

この手で触る高町はどんなものなんだろうか。

もう一度抱きしめて、手をつないで、いろいろなことをしたい。

今更になって気づいた。

自分がどれだけ強がっていたかを。

自分がどれだけ彼女に愛されているのかを。

でも、

「自分が情けない。お前に頼る事から卒業するって、お前の為に生きるって言って何も出来てない。お前に貰ってばかりで、俺は」

涙を流す俺に高町は額を合わせて微笑んだ。

「前にも言ったよね？」

高町はそう言っただけで思い出すように目を閉じた。

「コウ君はそんなのじゃないよ。コウ君は私にいっぱい素敵なおもてなしてくれてるよ。」

「そんなもの、俺は」

「くれてる。コウ君にはわかりにくいものかもしれないけど私の胸の中にはちゃんとあるんだよ。」

自分の胸を愛おしげに撫で下ろし高町は俺を見た。

「コウ君は私を幸せにしたいって言うてくれたよね？私は今、凄く幸せ」

微笑んだ高町はとても綺麗でその瞳に俺が映っているのが見えた。

「例えばコウ君とご飯を食べてる時、美味しそうに食べるコウ君を見て私もご飯が美味しくなる。コウ君とお話してる時、どんな些細な事でもコウ君の声が耳に響くと嬉しくなる。コウ君に朝起こして貰ったり起こしてあげたりする時、その日最初に見た人がコウ君だと一日が輝いて見える」

いつの間にか俺の目から流れる涙が止まっていた。

「コウ君はそんな幸せを毎日私にくれてるんだよ？いっぱい、本当にいっぱい幸せをもらって、今の私がいるんだ」

何かが胸からあふれ出しそうになる。

「だから私はコウ君といられることがとても幸せ。お話をしても抱きしめてもキスをして、全部幸せ。だから今回は幸せのお裾分け」

「素敵でしょ？」と微笑んだ高町に俺は涙を拭う。

「ありがとう」

「こちらこそ、幸せにしてくれてありがとう」

笑いあつて俺は彼女に唇を合わせた。

赤くなる彼女の顔。

「コウ、君？」

「ありがとう、俺はお前を……お前と幸せになりたい。これからも、ずっと」

だから、

二度目の口付け、

初めてしつかりと感じた唇は熱くて少しだけ涙の味がした。

俺は彼女と幸せになりたいようだ。

7. Smile

唇に指を這わせてみる。

「……………熱い」

自然と笑みが漏れた。

「……………ふふ」

口元が緩んで笑い声まで漏れる。
仕方の無いことだと思う。

トーストを齧った時とか、花畑を舞う蝶を眺める時とか、街中で笑顔を見つけた時とか、

何気なく幸せだなんて感じることは何百と存在するけど今のこの幸せだけは一生に一度だけ。

私の、特別な幸せ。

※

「どうしたの?」

隣を歩くフェイトちゃんが不思議そうにこちらを見る。

「え?」

「何か笑ってるみたいだから、いいことでもあったのかなって?」

「あっ」

思わず口元を押さえる。どうやらまた緩んでいたらしい。

でも、本当に仕方が無い。それだけ幸せなことがあったばかりで体がうまく制御できない。

触れ合った唇が熱かったり、声を聞いた耳は蕩ける様。それほど彼

は私にとって特別で、大切に。

「……ふふ」

ほら、また。

「いいこと、あったみたいだね」

フェイトちゃんが微笑む。

「コースケのことでしょう？」

ズバリ当ててくるフェイトちゃんにドキリとした。

「な、なんでわかるの？」

「ふふ、なのはのことならわかるよ。コースケ程じゃないけど」

顔が赤くなるのを自覚する。

何度思い出してもこうだ。

自分からすると相手からされるのでは凄い差。

幸せな気分も気持ちよさも、思わず足の力が抜けて転びそうになっ

たくらいだ。

唇を撫でる。

まだあの時の熱が残っているようだ。

「コースケもちゃんと頑張ってるみたいだね」

ポツリとフェイトちゃんが呟いた。

それに私が首を傾げるとフェイトちゃんは微笑みながら「なんでも

ないよ」と手を振った。

「そういえばコースケの腕が治るんだっけ？」

「あつ、うん！コウ君から聞いたの？」

「うん。すごく嬉しそうだった。なのはのおかげだった」

「よかったね」と祝福してくれる言葉に少しだけ照れる。

別に私が何をしたってわけじゃない。お礼なら先生に言うべきだ

と思う。

私は偶々先生と出会っただけで、本当にそれだけで。

それをフェイトちゃんに伝えると微笑むだけだった彼女は突然力

ラカラと笑い出した。

「ど、どうしたの？」

「ううん、なんでもない。ただ……なのはって結局コースケと似てる

んだね」

私と、コウ君が……？

「そ、そんなこと無いよ！コウ君は私なんかよりしっかりしてるし格好良いし優しいしクールだけど凄く情熱的で律儀で他人の機微には疎いけど何かあるとすぐに気を使ったりするし怒りっぽいんだけどその怒り方が可愛かったりしてこの前なんて真っ赤になって怒り出したコウ君が両腕をバタつかせたりして怒り出したのが駄々をこねる子供みたいでキュンキュンしちゃったりそういえばコウ君ってすごく甘党でウチのケーキを食べてすごく美味しいって喜んでくれたんだけど実はそのケーキを作って作ったのは私だったんだけど一口食べるごとに頬を緩ませるコウ君を見ると私がコウ君を食べたくなくなっちゃたりして他にもコウ君って膝枕とかで体温を感じるとすぐに眠たくなるらしくてこの前してあげただけでなんと十秒で眠たそうにしはじめてね私の膝の上うつらうつらしてるコウ君を見るとなんだかこう体が熱くなってきたり抱きつきたいけど起こしたくないで一緒にお昼寝した時なんて目の前数センチでコウ君が寝息を立てててこっそり髪の毛の匂いを嗅いで見たりしたらすごくいい匂いで同じシャンプーを使ってるのに何であんなにいい匂いがあるのかなそれにコウ君って寝てると足に何かを絡めたがる癖があってその時も私の足がコウ君の足に絡められて少しくすぐったいんだけど何だか言葉にしにくい気持ちでモヤモヤしちゃったり小さい頃とか割とスキンシップとかいっぱいしてただけど最近はまだしなくなってますあでも今はまたよくしたりするけどコウ君って頭を撫でるとすごく可愛いんだよいつもは私が撫でられる側なんだけど不意打ちみたいにくっちから撫でてあげると顔を真っ赤にしてそっぽ向いちゃうんだもうなんて言うのかな母性本能って言うのかな止まんなくなつちやうんだコウ君を見ると昨日のコウ君なんてチラチラ私のこと見てるんだけど話しかけてこなくてね私も意地悪しちゃって紫さんとぼっかり話しているとコウ君ったらシユンととしちゃって肩を落として自分の部屋に帰っていくのもう萌えるとかそれど頃じゃないんだよねとかくキュンキュンしちゃってそれで最近いつもは

格好いいお兄さんなコウ君なんだけどその中の子供っぽいコウ君を探すことが癖になっちゃってだから気がついたらコウ君を目で追っちやったりしてその視線に気付いたコウ君が笑ってくれとすごく幸せな気分になって私ってコウ君がいればその日のご飯とかいらないんじゃないのかなとか思っっちゃったりそんなわけないのにねでも私的に

………って、ハツ!?

私今何を!?

いつの間にかトリップしていた私にフェイトちゃんは苦笑を浮かべている。

「コースケのこと凄く好きなんだね?」

「そ、そんなこと…:うう」

恥ずかしくて縮こまる私にフェイトちゃんは言う。

「そう言うところもコースケと似てるよ? 恥ずかしくて素直になれないとか、相手のために頑張ると自分の事を見えなくなるとか」

私も周りから見たらコウ君みたいなのかな?

少し信じられない。

だって私にとってのコウ君は、

すごく遠くて、ずっと手が届かないと思っていた存在だから。

彼は与える存在で私は与えられる存在。

小さい頃からそれは当たり前前の事で、ああ、世界ってこうやって出来てるんだ。なんて考えていた。

私は今誰かに何かを与える事が出来ているのだろうか?

「なのはとコースケは誰かを笑顔にできる人。それは私だったりはやてだったりアリサだったりすずかだったり、いろんな人を笑顔に出来るんだよ?」

「ほらね」とフェイトちゃんはニコリと笑ってみせる。

「なのはは一番コースケの近くにいるからわからないかもしれないけ

ど」

でもね、

「私はなのはにいっぱいのもをもらったよ」

だから、ありがとう。

フェイトちゃんはそういつて笑う。

その笑顔がとても綺麗でつられるように私も笑った。

うれしかった。ただ認められたような気がして、コウ君に少しでも近づけたような気がして。

昔の私がコウ君に助けってもらったように、今の私も誰かを助けていたのだろうか。

まだ実感は無い。

でも、そうだったらと思うだけで、

少しだけ胸が温かくなる。

私は私になりたかったようだ。

8. 閃紅

その日、俺は誕生日を迎えた。

相変わらずとった覚えのある歳をとりなおすのは若干の違和感があり祝ってくれる皆に苦笑を返すことになったわけだが。

セルジオ・ピニンファリーナ、先生との出会いからもう数ヶ月が経ち両腕の治療の目処がたった事を伝えられた。

そしてその両腕の治療を機に前祝として今回の誕生日と一緒にそれを祝われる事となったわけだ。

いつもよりも少しだけ盛大に行われたそれに若干の気恥ずかしさはあるものの正直なところ嬉しくてたまらなかった。

治療については成功しない可能性もあるとは聞かされたが可笑しい事に不安は一つも無い。

俺の腕は治る。そう、確信がある。

それは医師がああ先生だからなんだろう。俺はああ先生を好いてこそいないが信頼はしているつもりだ。

あの自信に満ちた言動や雰囲気がああ思わせるのだろう。彼はやるといったらやるだろう、それだけの何かを持っている。

そういうところが羨ましくて、だから好きになれない、けど信頼は出来るけどさ。

で、今の俺は祝いもひと段落ついたわけだから皆にばれない様こそり外に出てきているわけだ。

別に一人になりたかったとかそんなわけではない。ただ風に当たって祝いの余韻にでも浸ろうかと思っただけだ。

しかしもう秋の終わりも見え始めた頃だ、せめて何かを羽織って着ていけばよかったかな。

「コウ君！」

と、どうやら抜け出したのもばれてしまったようだ。

「何も羽織つてなかったから寒いと思って」

「ん、抜け出したの気付いてたのか？」

手渡されたコートを羽織りつつ高町を見ると彼女は不思議そうにこちらを見返した。

「今日の主役はコウ君でしょ？見てるよ、ちゃんと」

「……そりゃ、どうも」

小さなむず痒さに高町から目をそらす。

ゆつくりと周りを見渡すと木々の葉は枯れ落ちてもう冬の始まりを告げている。

思えばあの事件、俺が両腕を失ってからもう一年近く経っているわけだ、

色々なことがあったんだと思う。しかし思い返さば俺か高町のことばかりでそのどれも似たり寄ったりな内容だ。

それが可笑しくて小さく笑みを零すと高町が不思議そうに首をかしげる。

「コウ君？」

「ん、なんでもない。そうだな、とりあえずベンチにでも座るか」
近くにあるベンチを指し腰を下ろす。

二人とも言葉を口にするには無くそんな空間が心地よかった。

「今日、楽しかったね」

ポツリと高町がつぶやく。俺はそれに頷き苦笑を浮かべた。

「少し騒がしかったけどな」

「私はそれが楽しかったんだけどね。最近はそういうの無かったから」

「まあ、そうだけどき。八神とかは何でああもハイテンションだったんだ？」

「にやはは、はやてちゃんはその……蒼天の書、だっけ？　その調整に最近忙しいみたい」

「ああ、ラインと共用するとかいうデバイス？　それなら少しでも息抜きになつてりゃいいけど」

「うん、そうだね！ あつ、そういえばコウ君ももらってたよね紫さんから」

「うん？」

「新しいデバイス！」

「ん？ ああ、これか」

首にかけられたチェーンを掴み胸元にあつたそれを引き寄せる。

青く光るデバイスコアが埋められた指輪、それが俺の新しいデバイスだ。

「名前はブレイブハート。捻りがないんだよつ、母さんは」

「ブレイブハート？」

「お前のレイジングハートとお揃いってことだろ」

苦笑をもらしつっつ飛ばした言葉に高町は顔を赤く染める。

「お、お揃い……」

恥ずかしそうにつぶやく高町を見て思わず頬が緩む。

デバイスの名前、母さんにしてはつまらない位安置な名前ではあるが、悪い気はしない。

「お……」

「ん？」

「お、おとお揃いと言え、言えばねっ！」

「た、高町？」

突然、声を荒げて高町が俺を見た。

鬼気迫る、と言うか何と言うか。顔を真っ赤に染めた茹蛸のような状態の彼女に思わず体を半歩引いた。

しかし高町は半歩分俺に近づく。触れ合うほどの距離。

目が、合った。

「これっ……」

差し出されたのは小さな箱。

綺麗なりボンで包まれた手のひらに収まるほどのそんな小さな箱。

「わ、私、まだコウ君に……誕生日のプレゼント、渡してなかったからっ」

「プレゼント……？」

手渡された箱を見る。

言われてみれば高町からはまだ何も貰ってはいなかったが。

「開けて、いい？」

おずおずと口にした高町はコクコクと何度も頷く。

「じゃ、じゃあ……」

箱を包んでいるリボンの両端を摘みゆつくりと解いていく。

ドクドクと心臓が煩くこれだけのことに自分がどれだけ期待しているのかがわかる。

正直な所、今日一番の期待を今この時にしてしまっているのだろう。

高町の存在は俺にとって大きいものだとはわかってはいたものこのれほどだとは……少し気恥ずかしい。

我事ながら呆れそうになりつつもリボンを解き終わる。

箱の蓋を開けるだけになったそれに手をかけて割れ物を扱うように慎重に蓋を開けた。

同時、目に飛び込んできた箱の中身に思わず驚いた。

「指、輪？」

飾りっ気は無く鈍く銀の光を発するシルバーリング。

高町の顔を見ると彼女は恥ずかしそうに顔を赤らめながらはにかむ。

そして手を首元に持っていくと何時からかかけられていたチェーンを引きそれにかけていた指輪、恐らくこのプレゼントと同種のものをごちらに見せる。

「にやはは、お、お揃い……なの」

自分で言っておいて恥ずかしかったのか高町は更に顔を赤くして俯く。

そんな彼女と手の中の指輪を見比べて思わず頬が緩んだ。

「あ、あのね。管理局で頑張ったからミッドのお金が、その、いっぱいあって……少し高いのでも大丈夫だったから。で、でもっ、お金で価値を決めようとしたわけじゃなくて！ その……ただ少しでもって」
探るように、俯いた顔を少しだけ持ち上げ上目遣いで高町がこちら

を見つめる。

「コウ君と……つながってたいな、って」

次に赤面するのはこちらだった。

恥ずかしいくせに言葉に出来てしまう。高町のそういう所、俺は苦手だ。

「気に入って、もらえたかな？」

どうかな、と首をかしげる高町に俺は顔中が熱くなっているのを感じながら小さく頷く。

「気に入った。これから大事にする」

高町に習ってデバイスを収めていたチェーンに指輪を納める。

指輪とデバイスがぶつかり合い高い音が響く。気がつけばただそんな事に頬を緩めている自分がいてそれが可笑しくてまた笑った。

「コウ君」

「ん？」

「お誕生日おめでとう」

「もう何度も聞いたよ」

「もう一度言いたかったの」

「そっか。まあ、ありがとう」

落ち着く、というのだろうか？

今思い出せば高町と出会った頃はずっとこんな感じだったような気がする。

ただ何をするのでもなくぼんやりと、二人でいるだけで俺は満足だった。それは今でも。

だからだろうか、少し懐かしくて二人で笑った。

「少し寒いね」

「そうだな」

「暖かい飲物でも買ってこようか？」

「んー、財布持ってきてない」

「それくらい奢るよ、誕生日だもん」

「……悪いな」

「いいっていいって」

「ありがとう」

「うん！じゃあ、待っててね」

「ついていかなくて大丈夫か？」

「子供じゃないもん。本当に待っててね！」

「わかったよ」

頷く俺に「絶対だよ！」高町は更に釘を打って走っていく。

なんでそんなにしつこいんだ？

なんて首を傾げていると、

結界が、公園を包み込んだ。

世界が色を失い反転する。

突然の事に驚愕する俺を迎えたのは拍手だった。

「誕生日おめでとう」

ソイツはそう言って俺の目の前に降り立った。

「あんたってそれなりに人望があるだな」

その小さな体躯に似合わない雰囲気をもとってソイツはニヤリと笑う。

「中々一人にならないからさ、どうしたらいいかと思ったよ」

俺はソイツの姿を知っていた。何度だって見たことがある。

「一人になったと思っただらおまけが付いてくるしさ。もう待ちくたびれたから、強引に行くことにした」

黒目黒髪、さほど高くない身長、見た目細身、年齢はおそらく十歳前後、

「と、自己紹介がまだだったな？」

そして、

「プロジェクトFの技術により生まれました。七峰紅助のクローン」

俺の顔。

「名を《レッド》」

ニヤリと、俺の顔でソイツは笑った。

※

「今後ともよろしく」そう言ってレッドと名乗ったソイツは軽く手を上げる。

「な、なんなんだよ……お前は？」

頭がついていかない。

まだ目の前に鏡が置かれていると言われた方が現実味があった。

「だからさ、今言ったじゃん。あんたのクローンだってば」

「なんでそんなものが作られる！どうやって作った！」

「そんなものって…本人の前で言う言葉かよ」

「答えろ！」

「お前が渡したんだろが」

ソイツは大きさに肩をすくめてため息を吐いた。

「お前の血液を身体データをさ。俺の親父、ジェイル・スカリエツティに」

何かが割れる音がした。

グルグルと頭の中でピースが組み立てられる。

先生のこと、クローニング医療のための検査。あれは全て、そういう、事？

「じゃあ、先生が」

「ご名答。セルジオ・ピニンファリーナ、本名はジェイル・スカリエツティ。稀代の次元犯罪者ですつてな」

「さすが俺のオリジナル」と口角を持ち上げるソイツに対し俺は何かが冷めていくのを感じていた。

俺の顔でヘラヘラ笑うソイツに怒るでもなく、自分の悲運を嘆くでもなく、ただ現実とは認めたくない。

夢であってほしい。

力が抜けて倒れそうになる俺にソイツが笑った。

「とりあえずさ、俺はお前を殺します」

「は？」

淡々と告げられた言葉に呆然とした。

「親父のやつがさお前の体が欲しいらしくてさ殺しても良いから連れてこいってさ」

「親父がホモって軽く死ぬるよな？」とソイツは笑ってみせる。

「まあ、だから殺します」

酷く人間味のない声だ。なんて呑気に思う。

しかし今となって何故死を恐れようか？一度死んだくせに、次の人生なんて有るのかはわからない、

けど、今よりマシなんじゃ。

そんな言葉が頭をよぎった。

「しかーし」

そう思った俺にソイツは告げた。

「どうもお前やる気がないだろ？」

俺の心を読んだかのようにソイツは俺に指を突き付ける。

「全力のお前を倒さないと意味がない。なんてバトル漫画じゃないから言わないが、生後数カ月の俺に一方的にやられるような奴じゃそのクローンの俺まで馬鹿にされるわけだ」

それはいただけないだろ？ソイツはそう言う。十分バトル漫画的

じゃないか。

しかし生後数カ月、あの糞先生は検査直後から作り始めてやがる。

「だから、俺ってば今お前を本気にさせる方法を思いつきました」

なにをしたって今更、なんて思う俺とどんなことをするつもりだ、なんて思う俺がいてっただけ笑った。

死に際でもまとまりがない。

が、ソイツが言った一言は、

「高町なのはを殺す」

初めて心の声をまとめさせた。

「お前が死んだら次は高町なのはを殺す。そしたら本気だすだろ？」

ニタニタ笑う顔を見て機械仕掛けの拳に力を込めた。

死んだら、高町のことも関係ない。

そんなことはわかっている。

でも、それでも、

「アイツだけはっ、殺させない」

「はは、やる気になったな。俺ってやっぱり親父の息子、天才だ」

笑顔のソイツを見て俺は胸元に掛かったデバイスに手を伸ばした。

「ブレイブハートツ」

《Set Up》

朱色が世界を染める。俺は今この瞬間、目の前の人物を敵と認識した。

※

《Fast Move》

魔法で加速し拳を振り抜いた。

それをソイツは軽く避けて笑う。

「おいおい、そんな出来損ないな腕でデバイス使っちゃっていいんですか？」

「黙れっ！」

この義手でデバイスを使う事に無理があるのはわかっている。

元々義手自体がデバイスであったしそれも日常生活を想定して作られたものであつて戦闘に使用するなど無理がある。

実際に今の魔法で義手があげてある悲鳴が聞こえている。

下手をしたら戦闘中に両腕の義手が使用不能になる可能性がある。

だが、それでもだ。

今は無理をすべき展開だ。

地面を抉り取りながら高速移動を繰り返す。

時には結界の壁、公園の遊具や電柱を足場に飛び回る俺にソイツはやはり笑っていた。

「かははっ、あんたはスーパーボールか何かかよ？よく跳ねるな！」

振りかぶる拳が軽く避けられる。思わず舌打ちをして次の魔力を込めた。

《Second Move》

魔法が発動した瞬間世界がスローになる。

再度振りかぶった拳が避けられるのを見て更に魔力を走らせた。

体の各部から魔力が噴出し視界が横にズレた。

無理な体勢からの体当たり、追撃の拳を振り抜いた。

が、

それを平然と受け止めたソイツが立っていた。

「は？」

初めて奴が笑み以外の表情を見せる。

どこか驚いたような呆れたような表情でソイツは口を開く。

「それで本当に本気なのか？」

「ありえねえ」そうソイツは首を振った。

「遅いし、軽いし、汚いし、本当に俺のオリジナルかよ？」

ため息を吐いて見せるそいつは先程までとは感じられる雰囲気
違った。

「そんなのだったら」

細められる黒の瞳に俺の姿が映った。

「簡単に殺しちゃうぜ」

体が、震えた。

奴の体から紅色の魔力が吹き出す。

まるで今まで押さえられていたかのように暴れまわるソレに木々
が揺れた。

同時に奴の腕にデバイスが構成されていく。

そして、奴の姿を見失った。

《Fast Move》

考えるより先に横に飛び退いた。
抉り取られる地面。
奴の魔力を伴った貫手の一撃が空を裂く。

もう一度奴の姿が消えた。

次に現れたのは俺の目の前。

繰り出される貫手。

逸らそうと伸ばした腕が力負けし魔力の余波により結界の壁まで
吹き飛ばされた。

追撃の一撃を転がるように避ける。

「ラピッドバレル！」

叫ぶように魔法を展開し右手に巻き付くようにシュータースファイ
アが構成された。

結界の壁に貫手を突き刺し一瞬だけ動きを止めた奴にアツパー
カットを打ち込む。

《DumDumUpper》

続くように撃ち出された魔力弾に奴の体が仰け反った。追撃に奴
の腹に左手を添え蓄積された魔力を解き放つ。

《QuickBustor》

朱色の閃光が奴の腹を抉る。

体を振るわせて数歩後退した奴を睨む。

それに対して奴は笑みを浮かべなおした。

「やればできるじゃん」

喉を鳴らして笑う奴は腹をさすると俺を睨んだ。

「それでこそ俺だ」

奴の姿が消える。

《Second Move》

此方へと駆ける奴を見つけ振り抜かれる貫手に左の拳を合わせる。

快音。

響き渡った音に体が震える。

再度振り抜かれる貫手に右の拳を。

何度となく繰り返される貫手に同じ数だけ拳を合わせた。

そして気が付いたのが異変だった。

左腕の反応が遅い。

苦虫を潰す俺に奴はニヤリと笑ってみせる。

気が付いてやがる。

そして数え切れない打ち合いでまた左の拳を振るう。

それに対して帰ってきたのが奴の喉を鳴らす音と機械的なデバイスの声だった。

《Impact》

一瞬奴の貫手がぶれてみえた。

そして激突。

左腕が爆発したかのように錯覚した。

思わず左腕を確認する。

左の義手が潰れていた。

驚愕、思わず肺に溜まった空気が抜ける。

それから立ち直る前に追撃が飛んできた。

左を庇って避ける。

腹に貫手が掠った。

いつかは使い物にならなくなる、そう思っただけはいたがいざなってみると考えていたより衝撃は強い。

下手を打てばこのまま右腕まで、

最悪の事態を思い浮かべ歯を食いしばった。

だが、

それがっ、どうした！

右の拳を振るう。

魔力を最大限に利用して奴の貫手を避ける。

後の事なんて考えるな。

奴を倒せ。

高町を、殺させるな。

高町を、守れ。

俺はアイツの、

なのはの、

ヒーローにッ

《Full Drive》

体全体が唸りをあげるように魔力を振り絞る。

朱色の魔力が嵐を生み出し辺り一帯の物体を吹き飛ばす。

その全ての魔力を右腕に注ぎ込む。

悲鳴をあげる右腕を無理やり押さえ込み奴を捉える。

見えるのは同じように逆巻いた紅色の魔力。

解き放つのはおそらく同時、

行け、

行けっ、

「サンライトツ、ブレイカ——ッ」

耳に届いたのは、誰かの笑い声。

※

気が付いたのは聞き覚えのある声を聞いてだった。

いつの間にか地面に打ち付けていた顔をゆっくりと上げる。

見えたのは高町、

そして、奴。

俺のクローン。

レッド。

振りかぶられる奴の腕。

《Fast Move》

ボロボロになった右腕とブレイブハートはそれでも答えてくれた。

体を、貫かれる。

最後に見たのは、

なのはの泣き顔だった。

俺は彼女を、

9. The End

突然現れた結界。内部へ入ろうとするものを拒絶するソレに私の何かがある。ソレは警戒を促していた。

何かがある。ソレは簡単にわかった。この公園を包む結界の中にいたのはコウ君が一人だけ。

コウ君に何かが。

そして私が結界の内部に入って最初に見たものはおかしなものだった。

結界の中心にソレは立っていた。

コウ君の形をしたナニカ。

それは結界の中に入ってきた私を笑顔で見ていた。

「貴方はナニ？」

地面において問う私にそれは少し驚いたような顔をした。

「俺が偽物だってわかるんだ？さすがとかなんというか」

可笑しなを言う。目の前の人物のどこがコウ君と一緒にと言えるのだろうか。

お前のようなのが千人いてもその中からコウ君を見つげられる。

「それで、貴方はナニ？」

「まあ、待てよ。そんなことより」

「貴方はナニ？」

思わずレイジングハートを突きつける。焦り出すそれに少しだけすっとした。

あのニヤニヤとした笑い方はコウ君の顔でしていいものではない。
しかたないなあ、なんてそれは頭を搔いてこちらを見た。

「俺、七峰紅助のクローン」

え？

「プロジェクトFって知ってるだろ？あの技術で作られた人造魔導師」

頭の中が白くなった。

コウ君の、クローン？

困惑する私にそれはニヤリと笑う。

「なんでどうしてって顔だな？特別に教えてやるよ」

ククク、そう喉を鳴らす音が響く。

それは私を指差した。

「お前のせいなんだよ」

何を言われたのかわからなかった。

「セルジオ、って名前に聞き覚えがあるよな？」

先生の名前が出るまでは。

「まさかっ!？」

「そのまさかだよ。そいつが俺の生みの親。その名前は偽名なんだけどな」

「本名は教えてやらねえ」と笑うそれ。

膝の力が抜けた。目の前のこれが先生に造られて、そしてコウ君のクローンだと言うのなら、

「お前が勧めてくれたおかげで俺は生まれた。感謝してるよ。お前が

いてくれたからオリジナルのことを親父が知れて、簡単に身体データまで採取できて、そして俺が生まれて」

それが吐き出す言葉が胸に突き刺さる。

どれもこれも私のせいだった？

先生と出会ったから？先生にコウ君を教えたから？

コウ君にクローニングを勧めたから？

私がコウ君に両腕をなくさせたから？

私がコウ君と出会ったから？

「そうだ。あれを見ろよ」

それは横を指して言った。

首を動かす。

嫌な予感はしていた。

コウ君はどこに行ったの、とか。

コウ君になにをしたの、とか。

だから私は後悔した。

こんなやつと話している場合じゃなかった。

コウ君の心配だけをしていればよかった。

コウ君を探していれば良かった。

だってそこには、

コウ君が倒れていた。

左腕がなく右腕はおかしな方向に曲がっていた。

「コウ、君？」

口から出たのは心配の声や悲鳴じゃなく疑問だった。

コウ君のそんな姿を想像した事がなかった。

どこかでコウ君は誰にも負けないと思っていた自分がいた。

だから、フエイトちゃんやはやてちゃん、ヴィータちゃんにだって本当は負けないんだって、思っていた。

いつも私を守ろうとするから、

私が足を引っ張ってるから、

私がいたからコウ君は、

なんて、

「中々歯ごたえはあったよ。やる気が無いようだったからお前を殺す、なんて言つてやつたら本気になってさ。そのくせがむしやらになりすぎてあの様だ。戦闘中に冷静についてのの良い見本だな」

「ま、俺が煽り方を間違えたんだけどさ」そう言ったそれに血の気が引くのがわかった。

また、私のせいだ。

コウ君がああなったのは全部私のせいだった。

私が、いたから。

コウ君はいつも私のせいで。

私は、私は、

「でさあ」

それが口を開く。

「流れるにお前を殺さなければいけないわけなんだが」

振り上げた腕が私に向けられている。

あれが私を殺すのだろう。
体が震える。

怖い。

死にたくない。

嫌だ。

だけど、

私のせいでコウ君が苦しむのなら。

私がいなくなれば、コウ君は、

目を閉じる。

ため息が聞こえた。

「お前たちは自殺願望者かなにかなのか？」

意味がわからない。そう首を振るそれ。

「これから殺す俺が言うのも可笑しいがお前ら馬鹿だな。自分の命を
投げるとか馬鹿だよ」

確かに馬鹿だ。

さすがはコウ君のクローンだ。言うことだけは正しい。

だけどその言葉は正しい人に向けるべき言葉だ。

私は馬鹿だから。

馬鹿だからコウ君のために死ぬる。

怖い、死ぬほど怖い。

それでもコウ君のためだと思うだけで私は。

「言って聞く馬鹿じゃないってやつだ」

空気の質が変わったのがわかった。

脛越しからその腕が引き絞られる様なんとなくわかった。

「じゃあな」

何か風を切る音がした。

肉を穿つ嫌な音。

痛みは、無い。

目を開く。

コウ君がいた。

お腹を貫かれたコウ君が私を見て笑った。

涙が流れる。

なんで？

なんで私を助けてくれるの？

「コウ、君」

コウ君の腹からあいつの腕が生えているように見える。

「結局こうなるのか」

それはつまらなそうにそう言って腕を引き抜いた。

途端にコウ君は倒れ、多くの血が地面の上を流れる。

同時、コウ君が首にかけていたチェーンが千切れお揃いと言って渡した指輪が転がる。

「あ、ああ」

コウ君に伸ばそうとした手が遮られる。

その腕がコウ君を抱き上げた。

「任務完了っつと」

それに先ほどみた嫌な笑顔はない。

何を考えているのか全くわからない無表情。

「じゃあ、こいつはもらってくから。こいつとはそう言う話だったから」

淡々と話すそれに私は目を見開いた。

「わ、私はー」

「あん？」

それは不思議そうな顔でこちらを見た。

「私は殺さないのー」

「はあ？なんで殺さないといけないんだよ」

「だ、だってー」

叫ぶ私に酷く面倒臭そうにため息を吐いて私を指差す。

「俺の任務は七峰紅助を殺してでも親父のもとに連れて行くことだ。お前を殺す理由がない」

というか、とそれは続けて口を開いた。

「お前って殺すほどの価値も無い。オリジナルがいないと何も出来ないくせに」

言葉も出なかった。

確かに私はコウ君がいないと何も出来ない。

だって、コウ君は私の全てだから。

コウ君を担いだそれはゆっくりと浮かび上がる。

「じゃあ、次こそ行くから」

伸ばした手は空をきった。

立ち上がろうとして力が入らず転ぶ。

やっぱりコウ君がいないと私は何も出来ない。

「ま、待って」

這うように近づく。

そんな私をそれはため息を吐く。

「待たねえよ。いい加減人に頼るな」

二人が消える。

私は全てを失ったようだ。

10. 約束

心地の良い浮遊感が失われることで俺は目を覚ました。

靄のかかる視界の中、辺りを見渡した。

どうやら筒型のガラスケースの中に俺はいるらしい。

その中には先程まで液体で満たされていたようで端々にゲル上の液体が見れた。

「目覚めたかな、少年」

声をかけられ振り向く。

口が三日月状に伸びる。

「おはよう、先生」

「ああ、おはよう」

声をかけてきた男性が目を細めて笑った。

セルジオ・ピニンファリーナ。

いや、元セルジオ・ピニンファリーナ。

今はジェイル・スカリエッティと呼ぶのが正しいだろう。

「とても落ち着いているようだ。それに私がどのような存在なのかもわかっていようだ。何故君がこのような場所にいるのかは覚えているかね?」

「覚えてる。お前の息子とやたらに拉致られた。それにお前の存在なんて大体想像できる」

「ふむ、どのような?」

「興味の為なら勝手に人のクローンを作ってしまうような大犯罪者」

「ふふ。ああ、それで正しいだろう。しかし全てわかっていて今の態度なのだとしたら君は私が想像していたより凶太いな」

「諦めるのが得意なだけだ」

「それはそれで面白い」

「…それより俺はまだ生きているのか？」

「ああ、生きている。もっとも死んでいたら今私と話していることは無いがね」

「私は靈魂など信じていない」なんて肩をすくめるスカリエツティ。

「そんな事より身体の調子はどうか？」

聞かれて体を見た。

ボロボロにされた傷は完全に治っている。

貫かれた腹も塞がっている。

そしてなにより、

無くなった両腕があった。

「身体の調子はすこぶる良いが気分は最悪だ。とりあえず俺の身体になにをした？」

睨む俺にスカリエツティは笑う。

「なに、新しい腕や臓器を付け替えてすっかり調整しただけだ」

「調整？」

スカリエツティが楽しそうにケタケタと笑う。

セレジオを名乗っていた時よりも元気だなによりだ。

「ここに運ばれてきた君は死んでいると変わらなかつたからね。生き返らせる為に色々と手を尽くしたのさ」

「体に変わりは？」

「ほぼ無いだろうね。君の体はただの人間と変わり無い。以前との違いが出るとしても時が経った後だ、それは成長と呼べるだろうね」

彼の言葉に俺はあまり驚きを感じなかった。
スカリエツティを見た瞬間に予想はしていた。
良くて体を戦闘機人に改造、レリックウエポンの実験体など。
まあ、そのくらいは覚悟していたが。
真つ当な人間の体に復元されるとは。
少しだけ、拍子抜けだ。

「ふむ、その反応を見ると大体は予想していたようだね？」

「俺のクローンなんか作る奴なんだろう？なにがあつたておかしくな
い」

「それはそうだ」

どうも俺の言葉が琴線にふれたらしくスカリエツティが大声で笑
う。

なにが面白いのだろうか。

「俺はてつきりもつと酷い体にされると思つたんだがな」

「確かに。私にはそう出来るだけの技術はある。それにそうしようと
も思つたのだがね」

「じゃあ何でしなかつた？」

投げかけた問いにスカリエツティはため息を吐く。

「我が息子、レッドが止めたのだよ」

アイツが？

腹を貫かれた感覚を思い出して腹をさする。

二度は経験したくない感覚だ。

「君は人間でないといけない、と彼は言っていたよ。君は絶対に此方
の味方につくことはない必ず敵対する。その時に相対するのは自分
だともね。どうやら息子は純粋な人間である君と異常種である自分、

どちらが上位種なのかを確かめたいようだ」

意味が分からない。

展開がバトル漫画すぎて頭がついて行っていない。

「というか異常種ってなんだ？アイツも身体は人間だろ？」

「ふむ、それは間違えだ。息子の身体には多少機械が埋め込まれている。勿論私が施した。戦闘能力の向上の為にね」

少し驚いた。

アイツはそんな反則をしていたのか。

どおりで強いわけだ。

おそらく戦闘機人かスカリエッツィの多少という言葉から戦闘機人擬きと言ったところか。

ま、今じゃ俺も人造人間擬きだが。

「で、お前は俺に何をさせたいんだよ。まさかお前の息子と潰し合えってわけじゃないだろ？」

「それもいいのかもしれない」

「はあ？」

馬鹿なことを呟いたスカリエッツィに思わず顔を覗き込んだ。

表情はえらく真面目だ。

「私には君や息子が何を考えているのかかが想像できない」

「他人だからな」

「他人だからこそわかることがあるだろう？それがわからない。君と息子が殺し合い、生き残った片割れは何を思うのだろうね？自らが七峰紅助として上位種だと確信し何を思うのだろう？」

ニイとスカリエッツィの口角が上がる。

「私は知りたい。知りたいのだ」

なにを？

「全てを」

だから？

「君には私の敵となってもらおう」

そして？

「君を私が打ち砕こう。正面から堂々と私らしいやり方で。その時息子は何を思うのだろうか？そして私は何を思うのだろうか？」
笑う、スカリエッツィは笑う。
遠く、近い未来を想像し。

スカリエッツィは笑う。

「私の敵になってくれるかね？」

「元よりそのつもりだ」

この時俺達の関係は決定した。

※

ガラスケースから出された俺は所持品を確認する。

とは言っても財布や携帯電話すら持っていなかった俺はどうやら無事だったらしいデバイスを首にかける。

「勝手に改造なんてしてないだろうな」

「さあ、どうだろうか？」

おどけてみせるスカリエッツィに舌を打つ。

改造しやがったな。

「君にとって不利になることはしていないよ」

「信じたことにしといてやる」

「それはありがたい」

あらかたの物を身に着けて気がついた。

デバイスのチェーンに足りないものがある。

「指輪は？」

「うん？」

指輪が無い。

「このチェーンにかかっていた指輪は！」

思わず大声を出す俺にスカリエッツィは不思議そうにこちらを見る。

「そのチェーンは私が用意したものだが。息子の話では先の戦闘で千切れたと聞いたが」

「指輪があつたんだよ!!」

「しかし、ここには無いね。恐らく君が息子と接触した場所でなくしたのだろう」

そんな言葉に思わず唇をかむ。

大切にするって言ったくせに。すぐ無くしてしまった。

「準備はできたかね？」

「っ、ああ」

苛立ちを胸にためつつもどうしようもないことはわかっている。

だから素直に頷いてスカリエッツィの声に耳を傾けた。

「ではそのポーターに乗りたまえ。君の世界に繋がっている」

地球、ね。

「俺の世界に送るのは良いけど勝手にその世界を襲うなよ？俺はミッドに移るつもりだから」

スカリエッツィが首を傾げる。

何故、と言いたいらしい。

「地球は魔法技術が確立されてないから、あまり巻き込みたくない。それにとミッドのほうがお互い暴れられる、だろ？」

「くく、それもそうだ」

「それじゃあ、俺は行く」

「では、また。次は戦場で、といったところか」

二人で笑う。

ゆつくりとポーターに乗り、飛ばされるような何ともいえない感覚を味わう。

思っていたよりスカリエッツィとは気があった。

やはりお互い似ているところがあつたのだろう。

欲望に忠実なところとかかな？

※

地球に戻った俺はなのはのもとに向かった。

場所を調べると俺の家にいる事が簡単にわかった。

母さんがいなかったことは運がよかったがサーチャーを飛ばしたのだ、あと五分もあれば気が付かれるだろう。

なのはは俺の部屋のベッドの上で眠っていた。

「よう」

かけた言葉にもちろん返事はない。

顔を覗き込むと瞳から出ている一筋の涙が見えた。

俺は彼女に酷いことをしたのだろう。

許してもらおうつもりはない。

だから、謝らない。

「聞いてくれるだけでいい」

ゆっくりと告げる。

「俺は本当にお前から離れる。一緒にいたくないとかじゃなくて近くにいと今回みたいにお前を傷つけそうだから。だから少し遠くへ行く。何処へ行くかは内緒、探しても良いけど元気になったらな？俺はそこで自分なりに色々な事をしてみようと思う。次はちゃんと上手くいくようにがんばるから、お前も頑張れ」

言って、もう少し言いたいことがあるのに言葉に出来ないで頭を掻いた。

まあ、長引いて気付かれるよりましか。

「……………ん？」

ふとなのはの首にかかった指輪が見えた。

「一つ、ある？」

恐らく俺がなくしてしまったものだろう。

なのはが拾っていてくれたのか。

「……よかった」

心の底から安堵のため息が漏れた。
起こさないようにと優しくチェーンに手をかけ指輪を一つ手に取る。

「もう無くさない、絶対に」

そう口にしてデバイスがつかなくなるチェーンに指輪をかけた。

「これで、俺とお前は繋がってるから」

そう少しかっこつけて踵を返した俺にその声は放たれた。

「コウ、君」

掠れたような声。だけど確かにそれは彼女の声だった。

振り向きそうになった体を止める。なのはが目を覚ましたのかはわからないけど、多分、彼女を見てしまえば俺は離れられなくなってしまうだろうから。

だから、ただ背中で彼女の声を受け止めた。

「私、がんばるから。いっぱい、いっぱいがんばるから」

泣きそうな声に俺は笑う。

「だからまた、また…」

「ああ、また」

俺は彼女と約束をしたようだ。

11. 道標

「これから、よろしくお願いします」

その言葉を口にした少女を俺はぼんやりと眺める。

熱く滾る様な炎を瞳に宿した少女はただ俺を見つめていた。

その炎の名は、決意。そう呼ぶのだろう。

※

一人の男性と出会った。

その出会いは偶然だが、今思えば運命的だったのだろう。

彼は正義感の強い人物で、留まる家を持たずふらふらとミッドのさまざまな場所を放浪していた俺に彼は声をかけてきた。

「妹と歳が近そうだったから」

なんて後に彼はそう言っただけで笑う。

それから多くの恩を売られた。食事に誘われるなど一つ一つは軽いものではあったが地球を離れた俺にはソレは確かな救いだった。

彼が少女の兄だと気が付いたのは初めて家に呼ばれた時だ。

少女は思っていた以上に普通の女の子で、よく笑い、よくしゃべり、そしてよく兄を敬う妹だった。

彼もそんな妹のことをよく思い、両親がすでに亡くなっているため親代わりとしてよくできた兄だったのだと思う。

だから、そんな彼を死なせたくなかった。

俺は知っていた。

彼が死ぬことを。

彼がこの先の未来に存在しない事を。

でも、俺を救ってくれていた彼を、暖かいものをくれた彼を、
今度は俺と、そう……

そして、俺は失敗した。

失敗して失敗して失敗した。

何もかもが上手くは進まず俺には何もできることは無かった。

管理局で働く彼に対して管理局を辞めた俺には力を貸すことはできず、妹のためにと身を削る彼に俺の声は届かなかった。

彼の死を知るだけの俺。抗うすべを持たない俺。そんな俺の掌から彼の命は唐突に零れ落ちていった。

出来たのは彼の最期を看取ること、それだけ。

力を振り絞って俺が出来たのは、たったそれだけのこと。

彼は苦悶の表情の中に小さく笑みを浮かべ何度も何度もつぶやいた。

お前の話を聞いておけばよかった。妹はどうなるのか。

自分が終わりに近づいていることを悟っていたのだろう。

だから最期に「妹を頼む」そう言ったのだろう。

彼の死に涙するものは少なかった。

任務中のミスにより亡くなった彼に対し管理局の人間はあまりいい思いをしていなかったのだろう。

俺が両腕を失った時も同じようなことがあった。皆が皆、なのはたちのような人間ではない。

俺はわかっていた。

けど、

少女は俺に問う。

何で兄は死ななければいけなかったの。

何で兄は悪く言われなければいけないの。

「何で兄さんを守ってくれなかったの？」

打ち付けられた言葉に返すことは出来なかった。
助けられたはずだった。

知っていたから。起こるとわかっていたから。

でも、駄目で、無理で、何もかも、全てが、俺は、無力。

助けられるはずだったくせに。

天涯孤独の身になった少女を俺は引き取ることにした。

もちろん彼の言葉に応えるためでもあったし、其れ位出来ないと自分自身が情けなさすぎるから。

引き取る際に今まで連絡を取っていなかった母さんに一報を入れた。少女を養子にするため両親の名義を貸して欲しいと。

母さんは俺の声を聞いて泣いた。少しだけ闇の書の事件の時や両腕を無くした時の事を思い出した。

しかし、不思議と心には響くことは無かった。もしかしたらそれは俺の両腕と同じように俺の中の何かが変わっていつているせいなのかもしれない。

母さんは俺の願いに快く頷いてくれた。ソレは確かに嬉しいと思っただけだ。

そうして俺は少女の家族になった。

少女の新しい兄として。

彼に、俺は成り代わった。

ティアナ・ランスターの兄に。

※

「紅助さん」

ソファの上に寝そべり、ただ天井を見上げていた俺に彼女、ティア

ナが声をかけた。

彼女はゆっくりと俺の腹の上に腰を下ろすとつぶやく様に言葉を口にする。

「兄さんには夢があつたんです」

こちらを見ずに吐き出す言葉はどこか自分自身に言い聞かせているようにも感じる。

「管理局で執務官になるって」

知ってる。何度も、何度も聞かされた話だ。

いつか執務官になってやるって、子供がプロ野球選手に憧れるように純粹に彼は、ティーダさんは口にしていた。

それが眩しくて、羨ましくて、憧れて。そんな彼が俺は好きだった。

「私が、なります」

言葉として吐かれた決意。

「執務官に、なります」

あの瞳に見た炎。

彼女がそう決めたのなら俺に出来ることなんて決まっている。

「だから、私に魔法を教えてくださいませんか」

俺はこの少女のために何かをしなければならぬ。

それが失敗した俺の罪滅ぼしだとわ言わない。これは義務だ。俺のすべき事。

多分、これが運命だ。

「ああ、いいよ」

頷いた俺にティアナは肩を震わせ驚いた顔でこちらを見た。

「教えてあげるよ。望むだけ、俺の知る限り」

「本当、ですか？」

少しだけティアナの瞳が揺れる。

今引き返すならば、子供の痲癩で済ますことが出来るのだろう。

しかし少女にとっての決意は重く、俺は少女に従うしかない。

本来なわば俺が止める出来なのだろう。亡くなった者の背を追う

ことは空しいと、そう教えるべきなのだろう。

ティーダさんならばそうしたかもしれない。

でも、それじゃあ、彼は消えてしまう。

覚えておく必要がある。

過ぎる日々の中で。過去にしか存在できない彼を。

ティアナは執務官と言う形で、俺はティアナと言う形で。

それが俺たちにとっての彼。それを作る。

「伝えなきや、皆に」

そうだ、俺達だけでなく皆に。

「ランスターの弾丸は全てを貫く最強の弾丸」

彼の死も、汚名も、全て貫いて彼を形作る。

その必要がある。

「ティアナが、伝えるんだ」

抱きしめた少女は静かに嗚咽をもらした。

恐らくここが、ティアナの始まりだ。

※

「そろそろ働こうと思う」

「え？」

数週間前から彼女の特等席となっている俺の腹の上でティアナが驚愕の声をあげた。

「紅助さんって働くんですか？」

「……なんだその俺が働かない種族だと思っていた、みたいな驚きかたは」

「だって紅助さんって毎日ウチに食事に来てたしよく泊まりに来てたじゃないですか。だから家とか仕事とか無い人なのかな、って」

なんだよそれ。

別に毎日来ていたわけではないし集りにきていたとかそんなのもない。

ティアナの言葉に若干の不満を持ちつつ話を続ける。

「俺だって働いてるよ。家は、無いけどホテルの部屋をとったりしてたし。まあ、この家に入り浸っていたのは否定しないが」

そういえばこの家。

今俺とティアナが暮らしている家は元々ランスター兄妹が住んでいた家をそのまま使用している。

ティアナにとってはそれが一番いいと思ったからだ。

「紅助さんはどんな仕事をしていたんですか？」

「ボディガードとか、用心棒とか」

「ボディガード？」

「ミッドだとある程度の魔導師なら年なんて関係ないからな。それに儲かる仕事だし」

管理局員以外の魔導師がしている仕事は大体そんなものだ。

例外をあげるなら魔道医師やユーノの様な遺跡調査や魔法関係施設の管理などか。

「管理局、じゃだめなんですか？」

ティアナが少しだけ不満そうに問う。

自分は管理局に行くのだから付いて来てくれないのか、という子供らしい我が儘なんだろう。

「管理局は一度辞めてるし、今更戻ってもな」

採用してくれるかも怪しいし、と苦笑を浮かべる俺にティアナは頬を膨らませて更に不満を表した。

「大丈夫ですよ。別にいいじゃないですか」

「一度決めたことだし、なあ?」

腹の上で跳ねる少女を抱きしめて頭を撫でてやる。

少しだけ呻き声を上げて抗議してみせるティアナだったが撫で続けていると観念したのか静かになり胸の中に納まった。

「でも、仕事はして欲しくありません……」

「ん?」

俺の胸に顔を埋めるティアナがぼぞりとつぶやいた。

聞き返す俺に向けた顔は桃色に染まり潤んだ瞳は心配そうに揺れている。

「帰ってきたら、紅助さんがいないのは寂しい、です……」

恥ずかしそうに頬を染めるティアナにまた苦笑がもれた。

「今までもそうだっただろう?」

「……今までは、誰かがいました。紅助さんだったり、兄さん、だったり」

「だからって俺に仕事をするなって言うのは」

「我が儘だって、わかっています」

「だったら」

「……でも、それだけじゃ」

宥める俺をティアナは強く抱きしめた。

「それだけじゃ、ないんですっ」

半ば叫びのような訴え。顔を真っ赤にさせたティアナの表情は羞

恥ではなく必死の形相が浮かんでいた。

「ボディガードとか、用心棒とか、危ないです。なにかあったらどうするんですか？」

ティーダさんの顔が思い浮かぶ。

この子は俺のことを心配してくれてるのか。なんて他人事のように納得して笑いたくなかった。

「兄さんだってっ、帰ってくるのが出来なかつたんですよっ？」

ついに泣き出してしまった彼女の頭を優しく撫でる。

なんでこう言う子達は他人の心配ばかりするのだろうか、ぼんやりとなのは達を思い出す。

彼女達もそうだった。自分が一番ではなくいつも周りの誰かのことを気にしている。

物語の主役だから？それともそれが普通の人間なんだろうか？

すでに癖になってしまった苦笑を顔に貼り付け俺はティアナに語りかけた。

「心配してくれるのはわかるよ、ありがとう。でも、このままじゃいけないことはわかるだろ？」

「そんなんっ、こと」

「もしティアナが管理局に勤めるなら、準備にだってお金はかかるんだよ」

「……はい」

「俺は、ティアナに管理局員として働いて欲しいよ。それで夢をかなえて欲しい。それはお前のためだし、俺のためでもある」

「私も、紅助さんのためにっ」

「それに、ティーダさんのためだ」

「っ」

ティアナの顔がくしゃりと歪んだ。

「俺はそのためなら何でもする。危ないこともだ。今更人の意見は聞けないよ」

「じゃあ、なんで私の」

「家族だから」

俺の言葉にティアナが目を見開いて驚いた。

「家族だから頑張れるし俺の我が儘を納得してほしい」

「そんなんっ」

また涙を流すティアナを優しく抱き締める。

「ティアナがいつぱい心配してくれたのはわかった。俺はソレで十分」

「紅助、さん」

ティアナは静かに涙を流す。

俺は女の子を泣かせることだけは得意になったようだ。

※

暫くして泣き止んだティアナが俺を見た。

「やっぱり納得出来ません」

そう言つて彼女は俺を掴む力を強めた。

「紅助さんに家族と言われたことは凄く嬉しかったです。でも、だからこそ納得ができません。紅助さんが私の事を想ってくれているように私も紅助さんの事……その、想ってるんです」

顔を真っ赤に染めて一生懸命話そうとするティアナを見つめる。

それはやはりティーダさんとよく似た顔をしていて瞳もよく見た優しい光が見えた。

「私はいつでも紅助さんが近くにいてほしいです。だから一緒に管理局で働きたい、一緒に夢を叶えたい」

「俺も執務官になれと？」

「それは…えつと…わ、私が執務官で紅助さんが執務官補佐、とか？」

「まあ、ティアナの補佐ならやってもいいが」

「じゃあ！」

ぱあつと笑顔を咲かせるティアナに苦笑で返す。

「だけどダメだ」

「な、なんでですか!？」

「内緒、俺が両親と暮らしてないのと同じだよ。だから管理局ではまだ働けない」

「う、ううー」

頬を膨らませるティアナは俺を睨んで怒鳴る。

「なんでそんなにいやがるんですか！我が儘すぎますよ！」

「お、怒るなよ」

「私は、紅助さんと一緒にいて一緒に夢を叶えて一緒に笑って一緒に泣いて、ずっとずっと一緒にいらればいいだけなんです！」

「じゅうぶん多いだろ」

「うう…な、なんでわかってくれないんですか？私だって、紅助さんの事を…私だってっ！」

ポコポコと力の入らない拳を俺の胸にぶつけてくるティアナを見てため息を吐く。

確か母が言うには小さい子の言うことはある程度で折れるべし、だったか？

「じゃあ勝負をしよう」

「勝負、ですか？」

首を傾げるティアナに指を一本立ててみせる。

「ティアナは一、二年後くらいに士官学校に入るだろ？」

「そのつもり、ですけど」

「もし士官学校を主席で卒業したら俺は管理局に、ティアナに関わる仕事をしてやろう」

「しゅ、主席!？」

言って、曖昧になりつつある記憶を探る。

薄れた記憶によると確かティアナかスバルは士官学校を主席で卒業したはず……たぶん。

どちらにしろあの人物と戦うのなら俺は管理局側に付くことになるのだろう。そんな予感もしている。

主席という言葉にまだ驚愕しているティアナを見る。

出来るならばこの子は道に迷わないようにしてあげたい。

だから俺は俺の敵を倒すため俺の出来ることをする。

ティアナにも力をつけてもらう。

少しでも迷わないように。

少しでも道標になるように。

俺は彼女の道造るようだ。

12. 再会

「どうなってるんだろ、これ？」

手を目の前で振るうと同時に、俺の魔力が一度輝いて辺りを漂う炎を弾き飛ばした。

その魔力の光は以前よりも力強く辺りを照らしてはいるが幾分か濁りが見える。

元々の俺の魔力光は朱色、だが最近になってそれが変化を始めている。

揺れる炎を払いつつ、俺はもう一度確認するように魔力光を目に映す。

藍色。

簡単に言うならばマーブル色、元々の朱色が所々藍色が混ざっている。

歳をとる内に魔力光が変色すると言う話は聞いたことが無い。

アストラル器官に近いリンカーコアの変異、というのは事例が少ないわけではないけれど……そうなってくると手がつけれないわけであって。

まあ、色が変わったからと言って何があるわけでもないし変化の理由はなんとなくだがわかるような気がする。

恐らくこの腕、なんだろう。

クローニング医療での事例としては聞いたことは無いがかかった医師が医師なわけで。

まあ、十中八九それ……なのだろう。

「ま、今更なんだけど、さっ」

言葉と同時に魔力を噴出し辺りの炎を消し飛ばす。

害は無い、はずだ。長年の修行と仕事での実践で魔力の出力や技術、体の面も伸びてきている。

まあ、魔法のことでは管理局の『高町なのは』のようにはいかないだろうが。

「いい気はしないけど」

でもまあ、本当に今更だ。

この両腕になつてもう数年は経っている。

死にさえしなければどうって事は無い。

「が、何か混ぜられていたりしてな」

言つてカラカラと笑う。

そうだとするなら俺はすでに【七峰紅助】とは別の存在になつていくわけだ。

それでも俺はまだ俺だ。ここにいて、ここに生きてる。

「つと、そんなこと考えてる場合じゃないか」

いつの間にか吹き飛ばしたはずの炎が巻き返してきている。

それをまた吹き飛ばし小さく息を吐いた。

この場所はミツドの北部に位置する臨海第八空港の中。

仕事のために利用しつつ何時大火災が起きるのかと警戒していたら、いきなりつてわけだ。

今回も仕事で使用していたら完全に被害者として巻き込まれていったようだ。

洒落としては笑えない状況だったりする。

辺りを渦巻く魔力の感覚からして強力な魔導師が二人ほど存在する。

恐らくテストタロツサと八神か。それ以外は並みの魔導師といったところを見るとなのはだけはこれはこの場にはいないようだ。

しまった、と少しだけ頭を抱える。多分俺の影響なのだろう、なのはがこの場にはいないのは。

だから俺が今向かっているのは天使だか女神だかの像の前。

目標はスバルの救出。

探知用の魔法を打ち切つて歩を進める。

恐らく今の魔法でテストタロツサ達に俺の存在はばれただろうがこの俺が七峰紅助とまではわかつてないだろう。

気にせず行こうと炎を払いつつ進んでいくと通路から出て広まった空間に入った。

見渡せば目的地の像もある。

その近くには小さな女の子がうずくまっているのも見える。

「あれがスバル、だよな？」

やけにびくびくと震えている女の子を見て思わず首をかしげる。

イメージとしてはスバルは風の子元気の子って感じでへそをだしたりなんざりしているなんて思っていたが、どうやらこの時代の彼女はまだ立派な女の子を勤めていたようだ、

「どうも最近記憶力がなあ」

こんこんと頭を小突いてみるも忘れた記憶が戻ってくるわけでもない。

と、どうやらふざけている場合でもないようだ。

先ほどからぐらぐらと倒れそうだった像が一際大きく揺れて少女を押しつぶそうとしていた。

地面を蹴る。

蹴った地面の弾ける音が耳に届いた数瞬後に拳と像が衝突した。

盛大な衝突音とともに崩れ落ちる像を見て嘆息、足元にうずくまっている少女を見た。

「間に合った、助けにきてやったぞ」

呆然、そう言った様子の少女に軽く頭を撫でてやるとくしやりと表情を崩し泣き始めた。

ティアナも普段からこれくらいしおらしいければな、なんて冗談も交えつつ少し困ったと辺りを見渡す。

この大火災、こんな子供をつれて逃げ道を探すのは若干つたないふと、なのはならどうしただろう。なんて考え天井を見つめた。

「……そうだ」

あいつならそうする。何時だつて一直線なのはなら、絶対に。

答えを得た俺は撫でていた手にしがみ付いて泣く少女に笑みを見

せてやる。

「もう大丈夫だ。安全な場所まで一直線だからな！」

天井を見上げる。少しだけ笑みがこぼれた。

「撃ち抜く!!」

《Divine Buster》

なのはの真似。

初めてするそんなことに少量の恥ずかしさと楽しさを覚えつつ外までぽっかりとあいた穴から少女を抱え飛び出す。

夜空の上は炎で少し熱され体を打つ風が心地よかった。

※

地面に降り立った俺と少女スバルが目にしたのは同じように地面に降りた魔導師と小さな影だった。

遠目から見ても見覚えのある金の髪に頬をひくつかせる。

向こうがこちらに気付いていないのが最後の助けでこそこそと逃げ出そうとする俺に少女が声を上げた。

「お姉ちゃんだ!!」

その声にびくりとしつつ少女の視線の先を見る。

あの金髪魔導師のすぐ傍、スバルと同じくらいの小さな影が彼女の姉らしい。

「目がいいんだな」なんて感想を抱きつつそのギンガだったかギヤラクシーだったかいまいち名前が思い出せない姉の方へ少女の背を押した。

「あ、あの！」

「ん？」

「名前、名前なんていうの、ですか！」

爛々と瞳を輝かせれ少女に苦笑を浮かべる。

ここはカツコ良く決めるところなんだろうか？

「俺の名前は相良紅助。ピンチのときに現れる正義の魔導師ってところかな」

言っておいて、少し後悔。

しかしそんな言葉を真に受けて更に瞳を輝かせる少女に笑み送る。

「それじゃあ、またいつか」

元気欲振られる手にこちらも振り替えし姉のもとへと駆けるスバルを見送る。

「任務完了、ってね」

満足げにつぶやく俺は気が付いていなかった。

一人の視線に。

見えているとは思わなかった。この距離、しかしスバルには姉が見えたように。俺がああ金髪魔導師が彼女だとわかったように。

彼女も俺をわかっていただけのだろう。

※

ピンポーン、と軽快な音で眠りかけていた意識が浮上する。

といったも体は動きたくないと言いやがるのでそのそと腹の辺りに目を向けた。

案の定、そこには何時の間にやら俺の腹の上を陣取っていたティアナがいて何故か俺の腹を撫でつつテレビを眺めていた。

「ティアナ、客」

「……今いいところなんです。紅助さんがどうぞ」

「俺も凄くいいところ。後十秒も目を閉じていれば眠りにつける」

むう、と二人して呻いた所で二度目の呼び鈴が鳴らされた。
見つめう俺とティアナ。

そして両者の拳が同時に振るわれる。

「くっ、あああっ!!」

苦悶に顔を歪めたのティアナだ。

俺がグー。

ティアナがチョキ。

答えはただそれだけだ。

「紅助さんってジャンケン強すぎませんか?」

「俺の方が年上だからな」

「関係ないですよお」と文句を垂れるティアナに勝ち誇った笑みをプレゼント。

実のところは拳を振り下ろす瞬間に相手の手を見てこちらの手を変えているだけだ。

近接戦闘型の魔導師なら誰でも出来る芸道である。やるやらないかは別としてだが。

俺の腹から飛び降りるティアナを見送って目を閉じる。

さあ、眠るとしようか。

と意識を沈ませたわけだが。

ティアナが戻ってきたのはその十秒も経たない内だった。

「紅助さんのお客さんです」

若干憎たらしげにこちらをにらむティアナから目を逸らしつつ玄関に向かう。

まったく俺の眠りを妨げてティアナを怒らせたのはどこのどいつ

だ。なんて責任転嫁もしつつ足を進めた先に待っていたは、

数日前に見たばかりの金糸の髪と揺れる赤い瞳。

そして胸にかかった軽い重みだった。

※

久しぶりに顔を合わせたテストタロツサは弱弱しいというのだろうか、どこかはかなげな雰囲気を負っていた。

俺を見るなり胸に飛び込んできた彼女を受け止める。

想像していたよりも身長が伸びていたりするところを見ると時の流れを感じずにはいられない。

「コースケ、コースケコースケコースケ。コー、スケエ」

何度と無く呼ばれる名前に懐かしさすら覚えつつ胸に感じる冷たさに苦笑がもれた。

あれから何年も経っているからなあ。思わず天井を見上げ思考にふける。

俺としては数年後に会うんだから、とは思っていたが。

先日の彼女を見てから少しだけ会うのが怖くなっていたりもしていた。

今更会いに行つてと言うのもあったし俺は彼女達に自分の安否すら伝えないなかつた。

だから、子供のような理由ではあるが……怖かった、怒られるのが。でも本当に顔を合わせてみるとこれだ。

怒るのではなく、心配してくれていた、のかな？
涙を流すテストタロツサの背を撫でる。

本当に最近では女性の涙ばかりを見ているような気がして嫌になる。泣かせるつもりはこれっぽっちも無いのだけれど。

しばらくして少しは落ち着いたテストタロツサは俺の胸から抜け出すとまだ潤んだ瞳のまま俺を睨み付ける。

「心配、したんだからねっ」

「心配させたよ」

「ずっと会いたかった」

「会わないようにしてた」

「意地悪なところは変わってない」

「テストロッサは変わったな」

「そ、そうかな？」

「うん、綺麗になった」

「も、もう、からかわないで！」

「はいはい」

「……………」

「うん？」

「……………久しぶり」

「……………ああ、久しぶり」

テストロッサが微笑む。

俺は苦笑した。

※

「それでなんでテストロッサがここにいるんだよ？」

「どうやってこの場所を知ったんだ？　という俺の言葉にテスト

ロッサの表情が歪む。

「ただそれだけでなんとなくわかってしまうのは小さい頃の付き合い
いゆえなのだろう。」

「どうせまた周りを見ずになんやかんやたってしまったりしたんだ
ろう。」

「案の定俺から視線を逸らしつつ頬を掻くテストロッサはぼそぼそ
と口を開く。」

「えっと……………数日前に空港で、コースケのような人を見つけて、ね？」
「恐らくあの事件の時だろう。」

「まさか見つかったとは思わなかったが……………」

「って、それはこの場所を知ってるのと関係ないだろう？　ま、まさかつけてきたんじゃないだろうな、ストーリー!?」

「ち、違うよ！　ストーリーなんてしてないよ!!」

「じゃあ何で……」

「く、空港の使用者をちよつと……教えてもらって。ほ、ほら……大火災があったし、その、私こう見えても執務官だから」

「しよ、職権乱用だ!」

「ち、違うってば！　これは……その、数年前から行方不明のコースケの捜索っていう……あのね?」

「さすがに言葉も出ないって感じだ……」

「うう、も、もうこの話はいいでしょ!!　コースケの話を聞かせてよ!」

捲くし立てる様に声を上げたテストロッサに若干の納得のいかなさもあるがある程度は飲む込むとしよう。テストロッサのことだし。

先ほどとは違う意味で涙目になっているテストロッサを宥めつつ話を聞く側に回る。

数度話を続けるうちに落ち着いてきたのか彼女は静かに目を細めこちらの顔を見た。

「何で地球に出たのかとか、あの日何があったのかとかは言えないんだよね?　コースケのことだから」

「ああ、悪い」

「いいよ。慣れっこだから、はやてとかなのはとかでね」

クスリと笑うテストロッサが少し懐かしく思う。

確かに八神やなのは人の話を聞かず突っ走る事は多々あったが。

「なのはにも何も話してないんだよね?」

「ん、ああ。出来ればこの場所も教えないでくれるとありがたい」

「……理由は?」

「いえない」

「だよね」

少し残念そうに微笑むテストロッサに申し訳なさは感じる。

しかしなのはと会うのはまだ早いと思っている。

ティアナのこともあるしまだ自分に自信が無いと言うのもある。

「なのは、どうしてる。元気にしてるか？」

おずおずと口にした俺にテストタロツサは小さく微笑み、

「うん。元気……うん？」

何故か首をかしげた。

「どうした？」

「え、いや……コースケ、今なのはって」

「言っただけど？」

「あ、えと、ごめんね。コースケがなのはの事を名前で呼ぶから」

「だからびつくりした」と控えめに笑う彼女を半眼でにらむ。

俺をいつたいなんだと思っっているんだ。

「コースケって恥ずかしがりなところがあつたから……えへへ」

「……否定は、しないけどさ。それでも俺だった歳はとるし考えだつて変わるんだよ」

「そうだけど、私のことはテストタロツサって」

「ふむ、不満？」

「べ、別にそういうわけじゃ」

ふと昔のことを思い出す。

確かバニングスも同じような事を言つて名前に拘っていた様な。

何かを期待するようにこちらの様子を伺っているテストタロツサにため息を耐えつつ仕方ないと口を開いた。

「……フェイト」

つぶやいた言葉に彼女は少しだけ驚きもじもじと体を揺らす。

こちらと言えば改めて名前を呼ぶのは何故か気恥ずかしく頬が少しだけ熱い。

「ちよつとだけ、恥ずかしい」

「なら、やめておく？」

「ううん。恥ずかしいけど……嬉しいよ」

頬を染めつつ小さく笑うフェイトに女性としての成長を感じ思わず目を逸らす。

名前一つでフェイトに驚かれるのも少しはわかる気がした。

「それで、なのはは？」

「えつと……元氣、だよ？」

「なんか、引つかかりある言い方だな？」

「だって元氣なんだもん」

フェイトの言い分が理解できず首を傾げる。

元氣だから引つかかりがある？ いったいどういことだ。

「コースケがいらないのに元氣なのがおかしいんだよ」

「……………」

「なんかそのどこがおかしいんだ、つて顔だよね？」

いや、まさにソレなんだが。

「コースケがいなくなつてから一ヶ月くらいは酷かったんだよ？ 凄く

不安定だったし…その、危ないこともしようとした」

フェイトの顔が悲しげに歪む。

罪悪感をおぼえる。

「でも、一ヶ月くらいしていきなり元氣になった。色んなことをしだしたし管理局にも積極的に関わるようになったんだ。みんな無理して明るくしてるつて言うんだけどどこか違うつていうか…」

一ヶ月。

おそらく俺が最後になのはと顔を合わせた時だ。

思わず苦笑する俺にフェイトは目を細める。

「もしかして、コースケがなにかしたの？」

「……ま、まあ、一度だけ会った。別れる最後に」

頭を掻きつつ小さく頷いた俺にフェイトはため息を吐く。

「なのはも言ってくればいいのに……コースケもコースケだよ。なのはばかり特別扱いして」

……そう、かな？

特別扱いなんてしているわけじゃないと自分では思っていたし気にもしていなかったのだが。

「ふむ、じゃあフェイトにも特別扱いをしてやればいいのか？」

「へ？ なっ!？」

ぼつ、とフェイトの顔が朱に染まる。

そんなになるような言葉を言ったつもりは無かったが。

「よくわからないけど、俺はそれほどなのは特別扱いしてるつもりはないよ。あいつとは一番近くて、付き合いが長いだけ……思う事はあるけどさ」

でも、元々全員一緒だった。

皆が皆、眩しいくらいに強くて、俺には無い何かを持っている。

一番最初に惹かれたのがなのはだっただけで、多分そうなんだろう。

フェイトに視線を戻すと彼女は優しく微笑む。

「コースケって私が思ってたより単純なんだね」

「なんだよ、それ？」

「そのまんまだよ。例えばコースケはなのはが好き？」

「好きだよ」

「……即答しちゃうんだ」

「やっぱり単純だからかな」なんて微笑むフェイトを見て首をかしげる。

単純単純ってようは何を言いたいのだろうか？

「じゃあ、はやては？はやてのことは好き？」

「まあ、好きだな」

「そっか、ふふ」

「何が可笑しいんだよ？」

相変わらず口元を緩めるフェイトに対しこちらは何が何だかわからなくて少しむず痒い。

「じゃあ、最後。私の事も……好き？」

「……勿論、俺はフェイトが好きだよ」

「……………」

「……………うん？」

「あつ、ご、ごめんね。その……予想以上の威力というか、嬉しいんだけど……そう真っ直ぐに言われると、ね」

「……………？で、それがどうしたんだよ？」

「簡単に流すんだなあ」なんてフェイトが何かぶつくさと呟いている

ようだがどうやらそれは今の会話とは関係が無いようで、ゆつくりとこちらを見て可笑しそうに笑う。

「やっぱりコースケは単純なんだよ」

「単純、なのか？」

「ふふ、うん。だって、私はそんなに簡単に人の事を好きって言えないもの」

「それは、なんで？」

「【好き】って言葉が特別だから」

問う俺にフェイトはクスリと笑いゆつくりとそれを口にした。

また、特別か。

「好きって言葉の意味は人それぞれで私の言う特別もその一つかもしれない。けどコースケの好きはわかりやすいよ」

単純だからね、と言うフェイトに腑に落ちないところがあるもの笑みを絶やすことの無い彼女を見て落ち着きを保つ。

フェイトはフェイトなりの考えを持っているのだろうし俺は俺なりの考えを持っている。

そういうのはなのはの時で学んだ。話さないとわかってもらえないし聞かないとわかれなないんだ。

「コースケは好きと嫌いが近いんだよ」

「近い？」

「上手くは言えないけどコースケは嫌いな人でも好きになれる。最初の印象は最悪でも話すと気が合うって時は無かったかな？」

「……………ああ」

聞かれて思い出したのはあの先生、スカリエッツィのことだ。

最初は嫌いだった。俺じゃない俺を見ているようで、気持ち悪くて。

でも今は敵として欲望に忠実で、真っ直ぐなところをは悪く思っていない。と言うか好ましいとさえ思う。

「コースケの好きと嫌いはコインの裏と表みたい。どんな人でも好き

になれるしどんな人でも嫌いになれる。単純でとても純粋」

それを愛しむように言うフェイト。

それでも俺は納得が出来ない。俺はそんなに純粋な存在じゃない。もつと汚く、小さく、情けない人間だ。

俺はそんな俺が嫌いで、好きになれるなんて思えない。

そんなことを思っているのが表情でばれたのかフェイトがこちらを見た。

「もし、コースケにどうしても好きになれない人がいても大丈夫だよ」

綺麗、彼女を見て思う。

「ゆっくり、ゆっくり付き合っていけばいつかは好きになれる。コースケは綺麗だから」

そう断言したフェイトに俺は矢張りと思うものがあつた。

綺麗なのは目の前の彼女だ。フェイトにこそ言うべき言葉だ。

こんな俺のことを信じて疑わない。俺はこの世界で生まれてくるはずじゃなかった俺だ。それをこんなにも信じてくれる。

暖かくて優しい。

だからこそ、幸せになるべきなんだ。

なのもそうだ。

俺を信じてくれた。

だから好きなんだ。

俺はこの世界の俺じゃない。

近く遠いどこかで生まれ、この場にいるはずの誰かを喰らい、そしてここにいます。

そんな俺を信じてくれた。

だからこそ俺は彼女達が好きで、幸せにしたいんだ。

フェイトと再会してよかった。

俺の戦う意味、彼女達の幸せ。

俺を信じてくれる分だけ彼女達を幸せにしたい。

この先にあるはずの未来で、みんなが笑って終われる未来で。

俺はそんな未来を彼女に捧げたいようだ。

13. わたしのりゆう。わたしのこたえ

紅助さんを訪ねてきた女性は同姓の私が見ても思ってしまうくらいに美人だった。

まずは髪が凄く綺麗、光を弾く様に輝く金糸の髪は女だからこそ羨ましく、どんな手入れをしているのか問いただきたいくらい。

それに顔が小さく細い体とバランスがいい。その中でも赤く光る宝石のような瞳がどこか幻想的な雰囲気醸し出している。

それに体は先ほど言ったように細いのだが出るところが出ていて隙の無いスタイル。ため息すら漏らしそうになる。

そして何より彼女自身から滲み出るような雰囲気。

儂げなそれは私でさえ守ってあげたいと思う。濡れる瞳は色気を、落ち着き無く動く手は愛らしさを、そしておずおずと口にしたコースケさんの名前には愛情がこもっている様な気がした。

だから、

彼の胸で泣く女性に、

私の知らない笑顔を彼に浮かべさせた女性に、

昔から彼を知っていた様子の女性に、

言葉にも出来ない、煮えたぎるような想いを抱いた。

こつそりと二人の様子をのぞいてしまったことに後悔する。

言いようがなくどうすれば治まるかもわからない胸の痛みにうずくまる。

「ティアナ？」

だから心配を含んだその声に救われた気がして勢いよく顔を上げた。

そして、

彼の後ろで微笑む女性を見て、

ずきり

胸が一際強く痛んだ。

※

「私はフェイト・T・ハラオウン。よろしくね」

「……ティアナ・ランスターです。ティアナでいいです。フェイト、さん」

無垢な笑顔で差し出した手がとられるのを見てこの人は本当に良い人なんだなあと、ぼんやり思った。

どうもこのフェイトさんという女性、とても慌ててこの家を訪ねてきたらしく近くに頼れる家も泊まりのホテルも用意していないらしい。

だから紅助さんと話している内に暗くなった空を見て内心困惑していたとか。

まあ、自宅が管理外世界にあると言うとこんな時間になると転移施設もやっていないので困ってしまうのは当然か。

それなりに、本当にそれなりに察しのいい紅助さんがそんな彼女に気付かないはずもなく。

「時間、大丈夫？ なんなら泊まっていく？」
なんて提案したそうさ。

今更だが紅助さんはホストにでもなったほうが稼げる気がしないでもない。

そして今夜だけこの家に泊まることになった彼女と私は何故か机を挟んで向かい合っていた。

紅助さんはキッチンで夕飯の用意をしている。

本当だったら私も手伝いたいくらいなのだが私は兄がいた頃、何故か包丁だけは持たせてもらえず簡単な料理しか今でも作れないわけだ。

だからいつもは紅助さんに料理を習いながら夕飯の準備をしているのだが、お客さんを一人にするのは心苦しいと言うことでこんなことになってしまったというわけらしい。

「ティアナは、コースケの妹……でいいのかな？」

「えっと、はい。血は繋がってないですけど、養子としてはそんな感じですよ」

思わず「コーすけじゃなくてこうすけです」なんて文句を言いそうになる。

しかしそれが言いなれているようでフェイトさんはこれと言って問題ないという顔をしている。

ニコニコと笑うフェイトさんはキッチンに立っている紅助さんを見ていて、その眼差しには少しだけ熱がこもっていた。

また、胸がズキリと痛む。

だから、こんな言葉が零れたのだろう。

「フェイトさんは、紅助さんの……その、恋人、なんですか？」

言って後悔する。

知りたい、けど聞きたくない。

矛盾した気持ちで胸を蠢く。

この人が彼の恋人じゃ無かったら何だと言うのか。

恋人だったら、なんだと言うのか。

私に出来ることは祝福するくらいで……

最初にこの人を見た時も、今この時も、二人はお似合いに見える。悲しいような、嬉しいような。私の前では彼はあまり笑わないから、フェイトさんが来て彼が笑ってくれたのは嬉しい。

納得できない気持ちは何故か心にはあった。でも、この人ならという安心感もフェイトさんは持っていた。

だから、私の目の前で体中を真っ赤にした彼女を見て思わず首を傾げた。

「わ、私がコースケの恋人!？」

茹蟄のようになりながら慌てるフェイトさんにやはり可愛らしい人だと再認識する。

「違う、違うよ!？」 私とコースケは友達であって……こ、恋人とかじゃっ!？」

「……えっと、まだ付き合っていないってことですか?」

続く私の質問に「そ、そうじゃなくて」と泣きそうになりながらも否定する彼女。

「私はコースケの恋人じゃないし……その、付き合うつもりも、ないよ?」

「え?」

思わず呆然とした。

何故、と言う気持ちで心が埋まる。

私は元々兄と二人で暮らしていたからこの歳ながら多くの人と関わってきたつもりだ。

だから人を見る目はあると思うし。その人の仕草や表情で大体のことはわかる。

紅助さんと初めて会った時もどんな人物かは大体わかった。

寂しがり屋で優しい人。

そして実際そうだった。

だから目の前の彼女のこともわかる。

紅助さんとよく似た匂いがして、とても羨ましいと感じる。

私も、そんな風になりたいとも思う。

だから、彼女ならって、

思ってたんだ。

※

私は兄の事を話す紅助さんが嫌いだ。

紅助さんは寂しがり屋だから兄の死を引き摺っているのはわかっていた。

でもそれは私の背負うもののはずだ。兄の事は私が背負うべきものなんだ。

だから紅助さんにはそれを引き摺ってほしくなかった。

でも紅助さんは優しく。それは誰にでもだし、なんにでも。

だから彼は流されやすい。

私の悲しみで彼も悲しんでいるんじゃないだろうか。ずっとそう思ってきた。

でも私にはどうすることも出来ないのはわかっている。

私が追うのは兄の夢でその背中だ。

それは変えられないから紅助さんを変えるのは私じゃ無理だ。

だからフェイトさんに、なんて気持ちもあった。

奥歯をかみ締める。

そんな私の姿をフェイトさんは見ていたのか気が付けば彼女は優しい微笑みを浮かべていた。

なんとなくわかる。この人は紅助さんと似た人だ。私のこの気持ちを軽くしようとしてくれる。

「私は、コースケの事が好きだったよ」

ほら、やっぱり。

「それは勿論、likeじゃなくてloveの方。コースケの隣で好きって囁いてもらえるだけでどれだけ幸せなんだろうって毎晩考えたりコースケに何をしてあげたら幸せになってくれるだろうっていっぱい考えた。だから何が好きなのか、どんな事をするか笑ってくれるのか、色々試してもみた」

思い出すように言う彼女の顔は少し悲しそう、そして寂しそう。

その顔がどんな表情より、どんな人の表情より美しく感じて私は息を呑んだ。

「そしたらね、コースケの考えている事がわかるようになった。今あれがしたい。あれが欲しい。そんな小さいことから何でも。もしかしたらそれは私の妄想かもしれない、愛した人の気持ちが変わったら嬉しいって言う馬鹿な」

だけどね、

「わかるようになったら、好きになるのをやめちゃった」

「なん、で?」

思わず疑問が零れる。そんな私に彼女は微笑んだ。

「コースケが見てるのはいつも私じゃないから」

微笑んで、泣きそうな顔をした。

「コースケには私じゃなかったのかな。それが辛くて、怖くて、逃げたんだよ」

臆病かな？と泣きそうな顔で言う彼女に私は言葉が出なかった。私はその気持ちを知ってる。

コースケさんは私を通して兄を見ていると思っっているから。だから、それは、私の気持ちでもあって、でも、

「私が頑張れば、どうにかなったのかも知れない。でも、私が好きなのはそのコースケだったから……私が求めて、コースケが変わってしまうのが嫌だった」

変わってしまうのが、怖い？

私は紅助さんに兄を見て欲しくなくて、でも、それで彼は変わってしまうの？

「私はコースケの傍にいられるだけで、多分幸せなんだと思う」
フェイトさんは自分の胸に手を置き目を閉じる。

「だから、恋とか愛とか、ずっと考え続けた私の紅助は……」

それはまるで祈るようで、

「私だけの紅助は……」

それはまるで、

「心の奥に大切にしまっておくんだ」

恋する乙女のようにだった。

※

その夜、私は何故か紅助さんと同じベッドで眠ることになった。元々来客用として使っていたものを紅助さんが使っていたというのもあったし兄の部屋はまだ誰も使いたくないと言うのもあったから。

フェイトさんには私のベッドで我慢してもらい私は紅助さんと眠ることになった。

私の事を完全に子供扱いしている紅助さんに少しがっかりしつつもそれが紅助さんなんだって安心もする。

「歳は、そんなに離れてるわけじゃないのに」

小さく文句を言っつて紅助さんの寝顔を見つめる。

あの話を終えたフェイトさんを私はとても美しく感じた。人として、女性として彼女は一つの終わりを迎えている。

だけどそれは悲しくて、私は彼女のようになりたくないとも思っている。

私は私が想う紅助さんへ気持ちが何なのかよくわからない。

それが恋なのか、

それが愛なのか、

わからない。

「もし、ティアナが私と同じ気持ちになった時。今話した私の気持ちは忘れてくれると嬉しいな」

そう、フェイトさんは言った。

「ティアナはティアナだから、私と同じ後悔はしないでね」

悲しそうに、寂しそうに、そう言った。

もしかしたら私の辿る道は彼女と同じなのかもしれない。

でも、後悔だけはしたくない。それは確かで、フェイトさんから託された思いでもある。

私も紅助さんがこんなにも近くにいただけで嬉しい。

それは紅助さんを心の拠り所にしてこの形容しがたい気持ちから逃げていただけなんだろうか。

フェイトさんのように紅助さんの事を考えれば何かが掴めるのだ

ろうか。

紅助さんの頬を撫でる。

もしもこの気持ちに恋や愛だとすれば、私はいつか後悔することになるかもしれない。

でも、私は私でたった一つの答えを探したい。

その答えが後悔だというのなら、私は、その先に、後悔の向こう側へ、

私は私の答えを探すようだ。

14. 鼓動

ドアを数回軽く叩く。

返事は無い。

名前を読んでみる。

返事は無い。

思わずティアナの自室の前で項垂れた。

ティアナが部屋に閉じこもり始めてからそろそろ一時間が過ぎるだろうか。

この始まりは今日、士官学校の入試結果が発表されたのが切欠だ。

丁度休みだから、何て言いつつもしつかりと休みを取っていた俺はティアナと二人でその結果を確認しに行ったわけだ。

不合格。

簡単に記せばただそれだけの事。

合格する人物がいるのだから不合格になることもある。そうわかってはいたものの実際になってみるとそんな一言で片付けられるほど簡単な事ではなかった。

俺がそれくらいだったのだからティアナが感じたものは更に辛いものだったのだろう。

俺が勝手に言い出した勝負のこともあっただろうし、最近のティアナにはどこか張り詰めているような雰囲気もあった。

あんな勝負を売らなければ、なんて自分を恨んでも見るが後の祭りだ。

結果的にティアナは部屋に鍵をかけて閉じこもってしまい、俺は何も出来ることは無い。

呼ぶ声は届いているのだろうか？

せめてティアナに声だけでも届いていれば。

そう、もう一度声をかけようとした時。

カチャリという軽い音が響きドアの鍵が開かれたのがわかった。

「あっ」

無意識に握り締めたドアノブ。まわすことは躊躇った。

入って良いのか？

そう考えてしまったら力が入らない。

ティアナの顔をみて何と声をかければいいのか、どんな顔をすれば

いいのか。

頭の中がぐちゃぐちゃとして気持ちが悪い。

色々と、不幸なことだけは人一倍受けてきたつもりではあるがこん

などときにはその経験が役に立たない。

だから、

「入って、きてください」

その言葉に救われたような気がして、思わずドアノブをまわしていた。

※

部屋の中は薄暗く、ベッドの傍に置かれていたスタンドライトの淡い光だけがティアナをそつと照らしていた。

俯く彼女は此方に視線を向けず自身が腰を下ろしているベッドを軽く叩いた。どうやらそこに座れといたらしい。

指示通りに腰を下ろし気が疲れないように小さく息を吐いた。すると胸に重みがかかった。突然のことに目を見開くと俺の胸に収まっているティアナがいた。

俺をいすに見立てたように背を預けてくる彼女は小さく呟く。

「すみまつ、せん、でした」

嗚咽交じりの声に胸が痛む。

そしてこの体勢が泣き顔を見せまいとするティアナの強がりだと気付いた。

「なんで謝る？」

「っ。私の、力不足でした、から」

しゃくりあげた声を無理やり吐き出したティアナは肩を震わせる。

確かにこの姿勢では彼女の顔を見ることは出来ないが声から、その様子から彼女の顔を想像するのは容易だ。

だから、俺はティアナを……

「それは、俺に謝ることじゃないだろ」

泣かせてやる事にした。

「……………は、いつ」

吐き出す言葉は弱弱い。抱きすくめるように、腕を前に回すとティアナはもう一度肩を震わせた。

いつものような鋭さが抜けた彼女に此方まで胸が痛む。

しかしティアナは少しずつ、ゆつくりと口を開いた。

「ごめん、なさい。ごめんなさい……私、紅助さんにつ、逃げようとしませんでした。全部、紅助さんのせいに、しようと思いました」

ポツポツと俺の腕に水滴が落ちた。それを隠すようにしてティアナは背を丸めると小さくうめき声を上げた。

「受かりたかった、よお……私、頑張ったのにつ、紅助さんに、褒めて欲しかったのにつ。私でも出来るだつて。見て欲しかった、これからの事だつていっぱい、いっぱい考えたのに」

知ってた。

夜中にこつそりと勉強をして眠たそうにしていたこと。

試験後になつても不安で眠れず、やっぱり眠たそうにしていたことも。

涙を流すティアナを抱きしめてみて思い出したのは母だった。

この世界での母ではない。俺が生まれ直す以前の、もう一人の母だ。

俺に対してはとても甘い女性だった。だから俺が涙を流すと今と同じように抱きしめてくれた。

抱きしめられた胸の中では母の心臓の鼓動が子守唄のように聞こえて、それを聞くのが俺は好きだった。

優しく、暖かい音。

だからだろうか、涙を流すティアナを見て、抱いて、この鼓動を聞いて落ち着いたのは。

ティアナを包み込むように抱きしめる。

彼女にも聞こえているだろうか。この音が。

俺の音が。

荒れた海のような音が静かに、落ち着いた音へと変わっていく。

自然と笑みがこぼれた。

そして、

少しだけ、

本当に少しだけ、

母さんの顔が、恋しくなった。

※

「少し、考えてみようと思います」

それからしばらくして泣き止んだティアナが落ち着いた声でそう言った。

「これから先、どうするのか、どうすべきなのか」

言葉には元の鋭さを感じさせ、彼女の凜とした声が耳に響く。

「士官学校の入学を次に回すつもりは無いです。兄さんの想いを晴ら

すためには学歴なんて関係ありませんし、立ち止まってはいただけせんから」

「じゃあ、空か陸に？」

「はい。私は陸士学校に行こうと思っています。今はミッドから離れたくは無いですし」

駄目ですか？と振り向いて笑うティアナにほっとした。

「ティアナが考えて決めたならそれが一番だ。俺が口を出すことは無いよ」

ティアナは俺なんかよりも頭がいい。考えるのが得意だ。

だから、もう少しで彼女に俺は必要なくなるのだろう。

ティアナと多くの時間をすごして知った。彼女には俺に無いものを沢山持っている。

それが羨ましく思った。そのせいだろうか、彼女に必要とされなくなるのが少し怖く、悲しい。

だけど、嬉しく思っている自分もいる。

この矛盾した気持ちは何なのだろうか。

多分その正体がわかるのは彼女が俺から離れた後なのだろう。いつもの、ように。

「紅助さん？」

不思議そうな顔をして此方を覗き込んでくるティアナに笑いかける。

「なんでもない」

「本当ですか？」

そう心配してみせるティアナの頭を撫でも一度思案する。

少しずつではあるが舞台が整いつつある。

現状の記憶ではすでに何が元の未来とずれていて何が正しいのかはわからないほどに擦り切れている。

わかるのは大体の流れのみ、だから俺に出来ることは俺が思う正しさをなぞるくらいだ。

ティアナはもう大丈夫。

彼女はもう前を向いている。

俺が想像できない遙か前を。

だから、次だ。

何をすればいいかなんてわからない。

何をすべきかなんて知らない。

ただ前だけを、

俺は次の一步を踏み出すようだ。

目を覚ますと誰かに抱きしめられていることに気が付いた。顔を上げると見慣れた紅助さんの顔があり静かに寝息を立てている。

「あのまま寝てしまった、かな」

暗い部屋の中を見渡す。どうやら夜は明けていないようだ。

私を抱きしめている紅助さんは深く眠っている様子で起きる気配がなく、なんとか彼の腕の中から抜け出そうと身をよじってみるものの抜け出すことは出来ず逆に抱きしめられる力が強くなってしまい少しだけ頬が熱くなった。

今更ながら彼の前であんなにも無いいたのは兄が亡くなった時ぶりでも恥ずかしい。

本当は紅助さんの前で泣くこと自体あまり無いため余計に恥ずかしさが強い。

元々紅助さんには迷惑をかけたくないという理由で泣くのを我慢したりしていたわけだが今となつては彼に自分の弱さを見せたくないというものが大きい、

彼と二人で暮らし始めてもう何年も経つわけだが兄の友人だった彼と妹の私、最初の頃は距離を掴みかねた。

紅助さん自体はよく家に来ていたこともあり第二の兄のように思っていたが実際に家族となつて戸惑っていた、というのもある。

しかし本当は彼が私を透して兄を見ていたからなのだと思う。私が彼を透して兄を見ていたとは言わないし実際にそうだった。

だがその頃の私は「私には紅助さんしかいないのに紅助さんは私ではなく兄を見ている」なんて考えてしまっていたわけだ。

今になると顔から火が出そうなほど恥ずかしい話だが当時は本気でそう思っていた。

仕舞いにはその視線に耐え切れず癩癩を起こしてしまった。正直、

思い出したくも無い過去だ。

でも「私を見て」なんて喚く私をとて悲しそうな顔をした紅助さんが頭を下げたのはしつかりと覚えている。

その時からだ、私が彼に迷惑をかけたくはないと思いだしたのは。あの時、私には紅助さんしかいなかった。彼以外の人物を信じることなんて出来なかつたし今でも大人はあまり信用できない。

いつか兄のように掌を返されるのでは、なんて思うからだ。

だからたった一人、世界で唯一信じられる人物である紅助さんにそんな顔をして欲しくなかつた。

私を通して兄を見ていてもいい、私の事を見てくれなくてもいい、でも私の前では笑っていて欲しい。

不安になるから、紅助さんしかいないのに、彼が悲しむと私だって悲しい、だから私は彼に悲しんで欲しくなかつた。

しかし、今は違う。

紅助さんと過ごして、フェイトさんと出会い、私は少しずつ変わってきているのだろう。

隣にいたい。

そう思うようになった。

縫るでもなく、背を追うでもなく、私は彼の隣にいたい。

彼のためでも、私のためでもなく、二人でいたい。

だから私は知りたい。

彼が何を見て、何を感じ、何を思うのか。

彼の悲しみが私の悲しみでは無く、彼の喜びが私の喜びでありたい。

この気持ちが恋なのか愛なのか、それともただの自己満足なのかはわからない。

だけどそうしたいと思うのは確かだ、誰にも否定は出来ない私の気持ちだ。

まあ、だからこそ私は弱さを見せたくなかつた。

今では遅いけれど、と自嘲する。

強がりです塗り固めた私の気持ち。

だって、私が悲しむと紅助さんはきつと悲しんでしまおうと思ったから。

紅助さんはそういう人だ、人の気持ちに弱く脆い。

そして、正直な人だ。

自分の気持ちには嘘がつけなくて、悩んで苦しんで。

私から兄を見ているのもきつと彼は後悔したのだろう。何度も、何度も。

でも、兄を忘れることが出来無い。私と同じ。

私も、同じだ。

だから、弱い。

認めよう。

私は紅助さんがいないとどうしようもなく弱い、駄目な女だ。

彼に支えられてやっと生きている。

それを認めて、受け入れる。

遠い未来の、私のために。

だから、今くらいは甘えさせてください。

いつか、きつといつか追いつくから。

彼の体を抱き返す。

心地よくて、胸の中が暖かくなる。

それがきつと幸せで、自然と瞼が重くなった。

頬が緩む。

明日の朝目が覚めてすぐに彼の顔が見られるだろう。

それだけで嬉しくて、私は笑顔のままゆっくりと眠りに落ちた。

※

だから、なのだろう。

翌朝、キッチンに立つ紅助さんを思わず睨み付けてしまったのは。

「どうしたっ？」

「……何でも、無いです」

私の視線もどこ吹く風ナ彼から顔を逸らす。

二人で決めたルールとして朝食は先に起きたほうが造る、と言うものがある。

私の料理の練習のためであり、それは別に悪いとは思わない。

紅助さんがキッチンにいるの彼が私より早く起きたからだというのもわかる、

だけど、思わず口はへの字を描く。

並べられた朝食を、そんな口へ黙って運ぶ私を見て紅助さんは首を傾げた。

別に、怒っているってわけじゃない。

目を覚ました時に紅助さんが傍にいないくて不安になってしまった、何てこともけしてない。

無いんです。

しかし納得のいかない気持ちを態度に出しつつ使い終えた食器を片付ける。

食後はいつもどおり横になっている紅助さんに「牛になりますよ」なんて軽口を飛ばしつつその体の上に腰を下ろす。

適当にニュースを確認するが特に物珍しいものもなくぼんやりとテレビ画面を眺めていると下から声がかかった。

「今日の予定は？」

私がまだ機嫌が悪いと思っているのだろう、小さめの声で聞いてきた紅助さんを見る。

「休日なので特に考えていません。紅助さんは？」

「こっちも休み、用事も無い」

連休をとっていた。と言う紅助さんに申し訳なく思う。昨日は私のせいで紅助さんの休日を潰してしまった。情けない、申し訳ないと暗くなる私に紅助さんは微笑みかける。

「じゃあ二人でどこかに出かけようか」

「え？」

紅助さんの言葉に首を傾げる。

「どこかに遊びに行くか店を見て回るだけでもいい。少し息抜きをしよう。それとも家にいる方がいいか？」

「え、いい、いえ。その、行きたい、です」

何故か胸が高鳴り先ほどまでの黒い気持ちが四散する。

都合のいい、なんて思いつつ嬉しくなるのはとまらない。

考えてみれば二人で出かけることなんてほとんど無いのではないだろうか。

休日が揃う事自体が珍しい昔は昔で私より兄の方が紅助さんとは親しかった。

よく嫉妬したんだっけ。勿論、紅助さんに対しても、兄に対しても。だからなのだろう、凄く楽しみなのは。

「それじゃあ、どこへ行くの？」

紅助さんの言葉に今までに無いくらい頭を回転させている私だった。

子供、だなあ。

※

二人で足を運んだのは水族館。

身近でそれなりに大きい娯楽施設として思い浮かんだのがそこだったからだ。

思っていたより人が多い。

逸れないようにと紅助さんに手を引かれる。彼が私の事を子供扱いしているのはわかってはいるがさすがに手を引かれるほどではない。

そう文句を言おうとしていたのだが。

手を掴まれたらそんなこともいえなくなってしまった。

ドクンと胸が跳ねる。思わず驚いて口を閉じた。

何事だと胸をさすってみるけれど体調に変化は無い。その後も何度か胸をさすってみたがこれと言って何があるわけでもなく紅助さ

んが握っている手を仕方なく握り返した。

口にしようとしていた文句は、気が付くと忘れていた。

色々な魚を二人で見ている。

ミッドの魚はどこか可笑しいと苦笑する紅助さんに私はどこが可笑しいのかと首を傾げたり。

数え切れない魚の群れに二人して驚いてみたり。目の前まできているイルカの鼻先を撫で、笑いあったり。

楽しい時間だった。

ずっと続けば良いのに、なんて何度も思った。

だから、ここではつきりさせないと、とも思っていた。

「紅助さん」

家に戻ってきて、私は紅助さんと話すのを決めた。

「勝負の事を覚えていますか？」

その言葉に紅助さんは表情を変えない。

もしかしたら私の雰囲気に出ているのかもしれない。

「士官学校を主席ってやつだろ？別に俺は陸士学校でも」

「紅助さん」

苦笑して、言葉を紡ごうとしている彼を止める。

「勝負は、私の負けです」

紅助さんは少しだけ驚愕に表情を歪める。

「私は管理局へ行き、紅助さんは好きなことをしてください。私は私で頑張りますから紅助さんは私を見なくていいんです」

言って胸が痛む。

本当は何時までも紅助さんと一緒にいたい。

更に顔を歪める彼を見て、強くそう思う。

「俺は、っ」

「私は大丈夫ですから。一人でも、絶対に執務官になってみせます」

紅助さんが私の顔を見た。

私は今どんな顔をしているのだろうか。
できれば笑っていられていると嬉しい。

「たまに、たまにでいいんです」

「え？」

呟くように言う。

「私が困った時、力になってくれますか？」

紅助さんは、静かに頷いた。

※

その夜、私は布団に包まりながら眠れない夜をすごしていた。

胸の高鳴りが収まらない。

紅助さんが頷いてくれたのをみて、どれほど嬉しかっただろうか。
彼に認められたような、彼に近づけたような、
それだけじゃない、上手く言葉に出来ないけど、
たぶん、きつと、この気持ちはこう言うんだ。

「私は、紅助さんに恋してる」

口にして胸が一際大きく高鳴った。

まるで魔法の言葉。壊れそうで怖くて、でも心地のいい気持ち。私は、私は紅助さんが好き。

いつか私は彼のものになりたいし彼を私のものにしてしまいたい。フェイトさんはこんな気持ちを抱いていたのだろうか？

今にもどこかへ飛び出しそうな体を押さえつけるように抱きしめる。

こんなに、

私、

ああ、そうだ。

私は、

私は、

私は、

紅助さんを、

私は彼を恋したようだ。

番外1. 私の私

私が彼を好きになったのはいつの事だったのだろうか。

たしかあれは闇の書による一連の事件が落ち着いてコースケが目
を覚ました頃。

私がないのはの代わりに入院中のコースケを看ていた時が始まり
だったのかな。

「……………あつ」

パチリと目を開いたコースケを見て、そんな間の抜けた声が漏れ
た。

思ったことは本当に目を覚ましたんだ。そんなことだったと思う。

都合上、私がコースケの目覚める姿を見たのはこれが初めてで少し
驚いたこともあった。

「……………テスト、ロツサ？」

少し枯れた、しかし聞き覚えのある声が響く。

まだ眠たそうな瞳をこちらに向ける彼を見て安心した。

目覚めない彼を何度も見たから。

涙を流す友達と一緒に。

それを目にする度に彼はもう目覚めないのではないだろうか、と
思った。思ってしまった。

自分の無力さに嘆いた。あと少し早ければ、なんて数え切れないほ
ど後悔した。

しかし、涙は流せなかった。

涙を流したところで、なんて考えもあつたけれどそれが本心と言う
わけではなかっただろう。

なのはやコースケと私は違うから。

胸の中で燻っていた闇。

皆に言ってしまうえば怒られるだろうけど私は私が一番信じられない。

母に貰った記憶だったり。

この身体だったり。

どこまでが私で、どこからが私ではないのか。

不安で仕方なかった。

だからなのは達が泣く分だけ違う私が、なんて考えもあった。

真つ当な人間では無いのは確かにコンプレックスではあったし何故なのと同じように産まれなかったのかともよく考える。

だけれどもその時だけはソレに感謝した。

皆とは違う自分に、

泣かない自分に、

コースケのために動ける自分に、

なんて風に。

今になってみると恥ずかしい。

まあ、だけど私も少しは成長していたようだ。

闇を超えて、私は少しだけ強くなったんだと思う。

だから、

気が付けば頬に涙が伝っていた。

コースケが目覚めてくれたのが嬉しくて、名前を呼んでくれたのが懐かしくて。

本当のことを言うのと彼に聞きなれるほど名前を呼んでもらった覚えは無い。

当時の私は彼と仲がよかったわけではないし私が彼を友達と思っ

ていても彼が私にそう思っているとは考えていなかった。

出会った頃からどこか避けられているようにも感じていたしなのはどのビデオレターにも彼が出てくることは稀だった。

だけど私の名前を呼ぶ彼の声が聞きなれていると思ったのは気のせいではないのだろう。

彼の声は私の耳によく響く。

別に特別なことでもないだろうし、他の人もそうなのかもしれない。

だけど私にはとても特別に気がして涙が止まらなかった。

「泣くんだ……」

どこか面白くなさそうなコースケが呟く。

「嬉しいん、だもん」

拭っても拭っても絶えない涙を流す私に彼はため息を吐いた。

「見飽きた」

そういう彼は私の頬に手を伸ばし流れる涙を拭う。

「高町にユーノ、バニングスや月村だって泣いたし、初めて顔を合わせた八神もそうだった」

しかたないよ、そう思う。

なのはは勿論すずかやアリサ、あのクロノだってコースケを心配してた。結局のところ、私も。

だから心配させた分だけ当然。そう思っていた。

「笑ってくれたっていいのに」

小さく、本当に小さく呟かれた言葉が耳に届くまでは。

彼の弱いところを始めて見た。

初めて出会った時からなのは守っていたし今回だってそう。

彼に聞いたら違うって否定するだろうけど私から見たコースケは優しくて強い人。

ふと、『私ってコースケの何を知っているのだろうか？』なんて疑問が頭に浮かぶ。

何も知らない。

私は彼の事を『よくわからない男の子』なんて言っていてわかってる事を止めていた。

なのはみたいに話をしたわでもなく、ただ完結していた。

だから

引きつる頬を無理やり持ち上げる。

涙は止まらなかったけどそれは仕方がない。

「あ、ありがとう。ありがとう、コースケ」

笑顔。

しっかりと笑えているなんて思えない。

もしかしたらただの泣き顔になっているかもしれない。

そんな私に彼は大きく息を吐いてみせる。

「……コースケじゃなくてこうすけだ」

言われた言葉にびくりと肩が震えた。

しかしコースケはしっかりと私を見据え、

「でも、まあ」

ゆっくりと、

「ありがとう」

苦笑した。

それが、私のコースケに対する『知りたい』の一步目で、

私の【好き】の始まり。

※

それから私の『知りたい』は日に日に大きくなっていったんだと思う。

コースケが退院した後はよく彼の後ろについて歩くようになっていた。

そんな私にコースケは少しだけ不思議そうにしていたけど引き離そうとはしなかった。

そういうところがコースケの優しさなんだって気が付くのはさほど時間はかからなかった。

「甘いものが好き」

そのコースケの言葉を聞いてなのはからクッキーの焼き方を教えてもらったことがあった

「おいしかった、ありがとう」

その言葉が嬉しくて何度も焼いて持っていったり違うお菓子の作り方を習ったりしたのを覚えている。

そのたびに見せる彼の笑顔がとても綺麗でいつの間にか目的が『コースケの事を知る』から『コースケの笑顔がみたい』に変わっていた。

この頃から私はコースケのことが完全に好きになっていたのだろう。

思い出してみるとなんて単純。

そしてこの頃の私はコースケを中心に回っていた。

コースケといるときは、どうやったら笑ってくれるのだろうと考え、一緒にいない時は、やっぱりどうやったら笑ってくれるのだろうと、考えていた。

そんな日々が続いて私の彼への想いが特別なものなんだって気付いたのは簡単な事だった。

たしかなのはが管理局の仕事でいなかった日。

私はこつそりとコースケの家に遊びに行った。

彼が気に入ってくれたクッキーを片手に彼のもとに向かう。

今日はどんな笑顔を見せてくれるだろう、なんて考えると頬が緩んだ。

だから、つまらなさそうな顔をしていたコースケを見て思わずムツとしてしまった。

なのはがいないせい、ということがわかったってこともあったから、だと思ふ。

ぼんやりと庭の木を見つめているコースケの隣に腰を下ろす。

「テストタロツサ？」

突然現れた私に彼は驚き目を丸くする。

そんな彼に対し無言でクッキーを一枚差し出す。それを見たコースケが困っていることもわかった。

いきなり、どうして、なんで、といったところだ。

何も言おうとしない私にコースケは仕方なくクッキーを口に運ぶ。頬が密かに緩むのが見えた。同じように私の頬も緩む。

一枚食べ終えることにもう一枚、もう一枚と手渡していく。

文句も言わず黙々とクッキーを口にするコースケに優しさを感じた。

彼には私が不機嫌な事なんてわかっていたんだろう。

ちようどクッキーが最後の一枚になったころコースケが口を開いた。

「俺はテストタロツサの作るお菓子、好きだな」

言われた言葉に胸が痺れる。

「ずっと食べているから美味しくなっていくのもよくわかったしね。テストロツサって周りにいる奴ことばかり考える癖があるからさ人の為の料理とか得意なのかな？」

首を傾げるコースケに目を奪われる。

彼の一举一動が気になってしまう。

元々は彼が気になったただけだ、今でもそうなのだが。

だけどこんな気持ちになったことは無い。

胸が締め付けられるように痛む。だけどそれが心地よくておかしかなりそう、そんな不思議な気持ち。

なのは達、友達に向けるものとは違う。

コースケが私の事を口にする、私の事を考えてくれると思うと。

何なのだろう、この気持ちは？

もしかして、私は。

「だから、別に俺だけにくれるんじゃないやなくて…でも俺にくれるのは嬉しいんだよ。その、味とか好きだし。美味しいし。あー、なにが言いたいかと、いうとだな。えっと…その」

私はコースケが？

「その……ありがとう」

好き？

思わず握っていたコースケの手は暖かく、すぐそこにコースケがいてくれる事を感じさせてくれた。

※

そうだ、私はそうやって恋をしたんだっけ。

目を開き思い出を断ち切る。

時計を見ると思っていたより時間がたっていた。

張り切りすぎて待ち合わせ時間よりかなり早く来てしまったけれど丁度よかったのかもしれない。

「来るならそろそろ、かな？」

口元がにやける。

自分の姿を見直す。

うん、変なところは無い。

久しぶりにクッキーも焼いてみた。

腰を下ろしていた噴水の縁から立ち上がる。

「よしー。」

なんて意味も無く気合を入れて拳を握り締めた。

あとは、

「悪いフェイト。遅くなった、かな？」

そう言って現れた彼に微笑んであげるだけ。

胸がトクンと跳ねたけど、やがて静かに収まった。

番外2. 彼の彼

「ティアナが、さあ……」

情けない声をあげながら机に上半身を横たえたコースケの頭を撫でる。

「愚痴を聞いて欲しい」なんて彼から連絡を受けたのが数日前。

突然のことに驚いたがよくよく考えてみればそれほど可笑しいことでもない。

コースケがまだ私達と一緒に過ごしていた頃は彼の愚痴を聞くのが私の役目だったし。

何故その役目が私なのか、って言うのは正直のところ私にはわからない。

コースケの気紛れなのかもしれないし私が彼の琴線に触れたのかもしれない。

そういえば一度だけ聞いたことがあったっけ？

何で私なの？ って。

「……考えたことなかった」

何が？ と問う私に彼は可笑しそうに笑う。

「お前以外に、って言うことだよ。今更テストロッサ以外ってのも考えられないけど」

結局彼が何を考えているのかはわからなかった。

まあ。彼にとつての私がどこか特別なのかもしれないと言うことはわかった。

嬉しくないと言えば嘘になるかな。

手元にある紅茶を傾けコースケを見る。

なんだか昔に戻ったみたい。

私がコースケの愚痴を聞くようになったのは丁度初恋に覚めた頃だったっけ？

つまり私が最もコースケを理解していて、最も私が弱かった頃だ。

私が彼に向けていた気持ちが【恋】という確かな形になった時、私はこの気持ちを持って余した。

初恋と言うだけあって感じたことの無い気持ちばかりが胸を溢れていた。

見るもの全てが光って見えたり自分のことがとても矮小な存在に感じたり小さい事はすぐに忘れたり、揺ら揺らと私は揺れていた。

幸せな事も沢山あったけどそうじゃないことも勿論あった。

でも私が彼の事を知れたのはその中でも一番幸せなことだったと思う。

彼と過ごすうちに彼のこと自然とわかるようになった。口に出さないでも伝わるってやつかな？

なんとなく彼の気持ちがわかるって程度からだったけど。

それから私は変わっていったらしい。本人である私はわからなかったけど近くにいた人達にはわかっていったらしい。

例をあげると仕草とか好物とか小さいものから変わっていったらしい。

確かに甘いものが好きになったりしてとある数字に困ったりしたっけ。

結局私が自分の変化に気が付いたのは私の考え方が変わっていた後だ。

私が紅助に近づいていたんだと思う。

彼をわかるようになって来て少しずつ彼に似てきていたんだろう。

で、気が付けば私の中に【紅助】がいた。

言葉にしたところで上手く表現しきれないけれどだいたいそんな感じだった。

私の中の【紅助】が教えてくれる。今あれがしたいよ、とか今あれが欲しいな、とか。

今更考えてみると初恋にしても少し可笑しいんじゃないかな、とは思う。

でも嬉しかったといえば嬉しかった。

甘いものが食べたいな、って【紅助】が言っている時に持っていっ

てあげると何時だって笑ってくれた。

暇だなあ、って【紅助】が言っている時に近づくと何時だってかまってくれた。

その分だけ笑顔が見れたし、その分だけコースケの近くにいられた。

でも、ある時に気付いてしまった。

【紅助】口にする人っていつもなのはだな、って。

気付かなければよかった。

なのは、

なのは、

なのは、

いつだって、いつだっていつだっていつだって、

コースケが見てるのは、

私なのはだじゃない。

嫉妬、したのだろう。

羨ましくて、とても羨ましくて、

憎んでしまいそうになるほどに。

それが怖かった。

私は、コースケが好きなくらい……

なのはのことが好き。

それも多分本物で、どちらかを選ばなければっていう事を考えたく
なかった。

でも、コースケが好きで。

でも、なのはが好きで。

逃げた。

仕方がない、よね？

私が好きなのは、私を見てくれないコースケだったんだもの。

好きになってしまった私が悪かったのかな。

でもコースケを好きになったことは悪くなかったと思いたい。

好きになったから知れたことだって沢山あるから。

好きになるって気持ちや、

力になりたいって気持ちや、

傍にいてだけで満たされるって気持ち。

大切なことをいっぱい貰ったから、私はそれで満足しよう。

でももう少し私が我が儘だったら、なんて時々思う。

なのはかコースケじゃなくて、なのはとコースケを手に入れる事が

出来たのかもしれない。

でも私は今のコースケとなのはが好きで、それで十分だったから。

私には私の「紅助」だけで大丈夫。

心の奥に大切にしまっておく。

私の初恋、私の嫉妬、私の幸せ。

残ったのは少しの後悔。

それでも、コースケとたまにお喋りをして甘いものをつまんでそし

て笑い合えればそれで十分。

それに今は、私だけに弱さを見せてくれるコースケがいる。

恋とは少し違うけれど、私はそれで満足しているから。

※

うなだれるコースケに微笑みかける。

「仕方ないよ。ティアナもコースケとずっと一緒にいるわけじゃないんだから」

「そう、だけどさあ……せめて陸士学校を卒業してからとかでも」

「そういうのは思い立ったが吉日って言うんだよ」

私の言葉に「でも」と食い下がる彼を見て思わずため息が漏れそうになった。

コースケはおかしい。

彼はいつだって他人のことばかり心配しているし影響されている。

なのにコースケは誰も見ていないのだろう。私がそうだったように恐らくティアナも。

それとも違う誰かを見ているの？

彼に対する疑問は尽きない。

もしかしたら、胸の奥に聞いてみれば少しは理解できるのかも知れない。

トクリと小さく胸が弾む。

それを私は、

「コースケは心配しすぎなんだよ！」

静かに振り払った。

「ティアナはなんだかんだ言っつてしつかりとした子だよ。それくらいは付き合いが短い私でもわかるもん」

「それは、俺もわかってる」

「じゃあコースケはティアナの考えを肯定すべきじゃないのかな。ティアナにだっつてしつかりとした目標があるはずだよ。それに対してコースケがどうすべきなのかはわかるでしょ？」

「……………うん」

語気を強める私にコースケは肩を縮こまらせる。

その姿はどこか愛らしいものを感じさせるが緩みかける頬を固めて私はコースケを睨んだ。

「……………ごめん、なさい」

降参、というようにコースケは両手を上げる。

「なんだか、俺がお前に愚痴を言うといつも言い負かされてるような気がする」

「実際にそうでしょう？コースケが私に愚痴を言うときなんて正しい答えじゃないときなんだから」

「はは、厳しいことで」

苦笑を浮かべる彼に微笑んで返す。

実際、彼の愚痴に私が正しいなんて一度も思ったことがない。今でも《紅助》の思考に引きずられてるくせにだ。

たぶんコースケは自分が正しくないと自分で思っている。だから私なんかになんか吐き出してくれている。

一種の信頼を向けられて嬉しくないはずがない。

嬉しい、嬉しい、嬉しい。

正直に言おう。

私は今でもコースケが好きだ。

だけどそれ以上、

《コースケの親友という私》が好きだ。

私はコースケの親友で背中を支えてあげられる私が大好き。

だから私は今が幸せでこの答が正しいものと胸を張って言える。

たぶん私はどんな環境にいても、どんな人が周りにいても私は私を好きになる。

そんな身勝手な人間だ。

それが私の形だし私の正しさ。

どこまでいっても身勝手でどれほど足掻いても自分が中心。

それが、私。

でも、それを認めてあげられるのも私で。

コースケに恋している私。

コースケに恋をしていた私。

コースケに夢を見た私。

全部私で愛すべき自分。

だから今の私がいる。

彼のための私がいる。

「それじゃあどこか遊びにいこうか？」

「えっ?」

突然の言葉に彼は目を丸くする。

「話は終わったんだから次は私の番だよね? 愚痴を聞かせるだけとは、言わせないよ」

私の笑顔に彼は頬をひくつかせ乾いた声を上げる。

「わかった、わかったよ。今日は一日付き合います。これでいいんだろ?」

「うん!」

私は嬉しくて笑い。

彼は困ったように苦笑する。

私は私の今が幸せで、

この選択に間違いはないのだから。

I F I . 好きの星空は恋

私は、コースケが私の事を好きでいて欲しいとは願わない。

確かにそれは想像するだけで幸せで、とても暖かい気持ちになれるけど、私は願うことはしない。

だって、

私が彼を好きなら、それだけでいい。

そう、だよね。

※

そう、思っていた。

だから私は、

「私は、コースケの事が好きだったんだ」

彼に、そんな事を口にした。

夕暮れ時の喫茶店。

紅茶の匂いが鼻をくすぐって、小さな笑みがこぼれた。

目の前の彼は私が何を言ったのか理解できなかったようで目を見開いて固まっている。

「言っておきながら、唐突……だよね？」

今日は偶々二人の休日が重なって、それじゃあ一日を二人で遊ぼうか、なんてことになっていた。

映画を見たり、洋服を選んでもらったり、小物を見て回ったり。

思い返すと本当に楽しい一日だった。
誘ってくれたのはコースケの方だ。

暇ならどうかな、って少し恥ずかしそうに言う彼が可愛くて私は大きく頷いた。

コースケと二人でいるのは楽しいし、小さい頃より二人でいる時間、と言うよりコースケと過ごせる時間が少なかったからこちらとしても大歓迎だった。

それにコースケは最近になってよく笑ってくれるようになったから。

ああ、そうか。

もう、十年も前になるんだ。

なのはが大怪我を負った事件から。

その時、その場所にコースケはいたらしい、なのはが墮ちるところをその目で見ていたようだ。

当時のコースケの様子は酷いという言葉では足りないくらいに荒れていて、私はそれを見ていることしか出来なかった。

届かなかった、彼が言った。

俺のせい、俺が悪い、ごめんなさい、彼の口から吐き出される言葉。私は、彼を慰める事しか出来ない。

違うよ、コースケは悪くない、大丈夫だよ、一つ一つ彼の言葉を否定していくことしか出来なくて。

思わず抱きしめた彼の体は冷たく、それがただ怖かった。

このまま消えてしまいそうで、私の目の前から、無くなってしまいで。

そんなコースケに対してなのはは可笑しいくらいに強くなったんだと思う。

私は魔法が好きだから、そう言って彼女が笑う。

眩しいような、嬉しいような。

魔法を使えないかもって聞いて、怖いと言うより悔しい。

そう言う彼女に何故、と思った。

私は魔法が使えなくなるなんて怖い、どうしようもなく。

魔法は皆との繋がりで絆で、そして思い出だ。だからそれが無くなってしまうと、誰も私を見てくれなくなる。

今まで積み上げてきたもの、私に唯一あるもの、私がこれから得ていくはずのもの、全部がなくなってしまう。

でも、なのはは違った。

「確かに、魔法があったからフェイトちゃんに出会えた」

思い出すように紡がれる言葉。

「でも、魔法が無くても私はフェイトちゃんに声をかけるよ」

たった、それだけの理由。

なのはは強いな、素直にそう思った。

一緒にその言葉を聞いていたコースケも何かを思ったのだろう。

瞳に少しだけ光が戻っていた。

ずるい、羨ましい、そんな感情の中で「やっぱり勝てない」そんな

気持ちも確かにあった。

私ではなのはに勝てない。

コースケは、私じゃ駄目か。

なんて。

その後のコースケは魔導師を辞めて地球のみで暮らすことになった。

「魔法じゃなくても出来ること、俺ももつと知りたいから」そう言った彼の笑顔は綺麗で、やっぱり好きだなって思った。

そして、その笑顔が、今日の前にあった。

だから私は、それを振り払うために、

「うん。私はコースケが好きだった」

そう、口にする。

「君の、笑顔が好きだった」

振り払って、前に進むために、なんだと思う。

「君の、優しさが好きだった」

いつまでも縛られ続けるわけにはいかなくて。

コースケにも悪いから、だからこういう形で私は彼をあきらめる。
「最初は、コースケの事を知りたいだけだった。私とコースケって最初は繋がりが薄かったから」

やっぱり避けられていたのかな、なんて思い出して笑う。

「甘いものが好きなのを知って、初めてクツキーを焼いてあげた時に言ってくれた、おいしかった、ありがとう。その言葉が何よりも嬉しかった」

今にして思えば、それが私の始めての魔法以外で誰かに何かを出来た思い出。

私にも、魔法以外で残るものがあつた。

「私の作るお菓子が好きだつて言ってくれると、胸が張り裂けそうになるくらい幸せになって、私つて君の事が好きなんだなつて気が付いた」

私はコースケを知りたかつただけだつたのに。

好きになつて、好きだから知りたくなつた。

「実は、初恋なんだよ？ でも、やっぱり初恋つて叶わないのかな」
首を傾げくすりと笑う。

もしそれが真実だつたら、少しだけ救われるけど、とても悲しいね。

「私がコースケを好きだつた頃、コースケの考えてることなら大体はわかるようになった頃があつたんだ」

何をしたい、何が欲しい、みたいなのは簡単に。

「でも、わからないこともいっぱいあつたんだと思う。私は本物のコースケじゃないから」

やっぱりあれは私の妄想だつたんだと思う。

好きで好きでしょうがなかつた私の、妄想。

「コースケがね、他の誰かを見ているのが嫌だつた。嫉妬、かな」
醜くて、悲しい気持ちだつた。

こんな気持ちがあるなんて当時の私は知らなかつたから、自分が嫌になりそうだつた。

「でも、君の見ている人はいつも私も好きな人。そうじゃ無かつたら良かつたのに」

そうじゃなかったら、私はコースケを……なんて。
この考えも醜いか。別に過去に後悔を残しているわけじゃない。
世界に可能性があつて、私が勝った未来があつたらいいな、なんて
欲望。

「もう一度言うけど、私はコースケが好きだったんだ」

誰よりもってわけじゃないけど。

「好きだった」

一緒になりたいって思う程度には。

「でも、これで諦める」

ただ知っていて欲しかった。
そんな私がいたことを。

「ごめんね」

それは誰に向けた言葉なのか。
胸が少し痛いけど、
涙は、流れない。

※

私の突然の話を聞いた彼は呆然としていた。
「本当にごめんね。いきなり、過ぎたよね」

大丈夫？ そう尋ねる私をやっと彼は見た。

「は、ははっ……」

口から出されたのは乾いた笑い声。

やっぱり唐突過ぎたのかな？ 引かれた、のかも。
が、不安になる私をよそに彼はばたりと机に項垂れた。

「そんな、ああ、うん」

ぼそぼそと呟かれる言葉の意味はわからない。

でもやっぱり迷惑だったのかななんて後ろ向きな思いばかりが浮かび上がってきて、いけない。

コースケに嫌な気持ちになってもらいたくて言ったわけじゃないのに。

私は今でもコースケの笑顔が好きだから。

恋じゃなく、愛じゃなく、ただ純粹に好き。

だから、こんな。

「……………あのさ」

ぼそり、コースケが呟いた。

「うん？」

思わず間の抜けた声で聞き返す。

彼は机に項垂れたまま言葉を吐いた。

「俺は、ふられたわけだ。フェイトは、俺のこと好きじゃないってっ」「え、え？」

早口で捲くし立てるように言われる言葉に耳が付いていかず混乱する。

「でも今俺も言いたいことがあって、聞いてほしいことがあって、知ってほしいことがある」

次第に強くなる声に周りの人がこちらに目を向ける。

ぼつ、と顔を上げた彼と視線が交差する。吸い込まれるように絡み合い、彼から目を離せなくなった。

先ほどとは違いゆっくりと開かれる口。伝えられる言葉。

「俺は、フェイトが好きだ」

「……………え？」

※

「それで、私に相談しに来たど？」

「……………うん」

なんとか絞りだした声に目の前の人物、高町なのははため息を吐いた。

コースケに、その……………こ、告白されたのがすでに昨日のこと。

あの後、周りの視線に気が付いたコースケは顔を真っ赤にして逃げるように去っていった。

私はどうしていいかわからずただ呆然としていたところ、お店の店員さんに声をかけられ正気に戻った。

と言うか私とコースケが行く喫茶店なんて決まって翠屋なわけであって、声をかけてきた人は目の前にいる人物の父親だったりするわけ。

思い出すだけで、顔から火が噴き出しそうっ。

結局、それからコースケとは一度も顔を合わせる事が無く休暇が終わってしまっって、私はミッドに帰ってきた。

それでどうしていいかわからずなのはに相談をした、というわけだ。

「顔を真っ赤にして突然なにか、なんて思ったけど……………そんなことかぁ」

はあ、ともう一度なのはがため息を吐く。

「わ、私は、真剣にっ」

「だって、コウ君がフェイトちゃんのことを好きだったって、知ってたし」

「……………え？」

知って、た？

「なっ、何で、どうして!?!」

「え、いや……長い付き合いだし」

何かが崩れる音がする。

でも、じゃあ、私の考えてた、思っていた事って。

「フェイトちゃんはやっぱり気付いてなかったんだ」

「……コースケはなのはが好きだと思ってた」

「わ、私?!」

「……うん」

「た、確かに私はコウ君が好きかもって時はあつたけど……今になつてみると家族みたいなものだったし、親愛と言うか、お兄ちゃんみたいな」

「恋、じゃ無かったの?」

「……うーん。どうだろう?」

笑って首を傾げるなのはに思わず頬を膨らませる。

「真面目に伝えてよっ」

「ごめんごめん。えっと、正直な所、よくわからない。私はコウ君の事は好きだったけどそれが恋とか愛だったのかは怪しいんだ」

「……なんで?」

「掘り所にしてたって言うのが大きいから、かな」

「掘り所?」

「うん。悪く言うとは依存してた。私は小さい頃コウ君がいないと駄目な人間だって自分のことを思っていたんだ」

「……なのはが?」

「そう、私が」

想像、出来ない。

なのはは出会った頃から真っ直ぐだと思っていた。

強くて折れなくて、それが彼女で、だからこそコースケの隣にいられたんだと思っていた。

「少し昔話でもしようか」

そう言ってなのはが笑う。

「私はね、人より明るい性格をしているわけではないし人より頭が良い訳でもなければ人より運動が得意なわけでもなかった。人より、つて言えるものが無かったんだ」

「そんなこと……」

「勿論今は違うよ。私は私だつて胸を張つて言える。でも昔の私は言えなかったんだ」

目を瞑るなのはが何を考えているはわからない。

懐かしんでいるのか、後悔しているのか。

「お父さんが怪我をしてね、私は小さかったから何も出来なくて。うん、しても邪魔なだけだった。だから迷惑をかけたために何もしない、つて言うのを覚えた」

「何もしない？」

「そう、何もしない。遊ぶことも、友達を作ること」

なんでそんな、そう思った。

遊んでよかっただろうし、友達だつて作つてよかったはずだ。

「なにも出来ないつて言うのが子供ながら負い目だったんだろうね。家族が大変なのに私だけ楽するのは気が引けたんだ」

吐き出されるように言われた言葉に共感するものはあった。

母さんが、アリシアが、つて私も考えた時があったから、かな。

でもなのはそれが可笑しいことのように笑っている。それが私にとつては不思議だった。

「そんな時にコウ君と出会ったんだ」

「コースケと」

「最初は煩わしくてコウ君を突っ撥ねてたけど、やっぱり誰かというつて言うのは楽しかったり嬉しかったりして……酔つてたんだ」

「酔う……？」

「うん、その頃の私にはコウ君しかいなかったから。コウ君から色々教えてもらったつて、友達の作り方とか」

「聞いた事がある。お話をする、だよな？」

「うん、お話をすることが友達の始まり。あの頃はコウ君が私の世界の中心だったなあ。コウ君といれば何だつてわかつたし嫌なことは

無かったから」

「その気持ち、わかる。コースケの周りは心地良い」

「だよ。コウ君はよく自分が自分がつて言ってるけど、結局のところ考えてるのは私達の事なんだ。だから、なのかな」

「うん？」

「私はさ、コウ君じゃなくてもよかったと思うんだ」

コースケじゃなくても？

少し寂しそうに笑うのはが目に移る。

押せば倒れそうで、握ってしまえば折れそうで、そんな弱弱しい姿。

「本当はお母さんやお父さんにかまって欲しかったんだと思う。その代わりがコウ君だっただけで……」

「……………」

言葉が、出ない。

私もそうなのかもしれない。

母の代わりを、彼に求めていたのでは？

「フェイトちゃん、コウ君のことって好き？」

「……………私は」

どう、なんだろう？

私は、本当にコースケが好き？

「じゃあ、コウ君の好きなところは？ 私で言えば私を見てくれるところ、とか」

コースケの好きな、ところ。

「……………笑顔」

言葉は、自然と出た。

「優しい、ところ」

うん。

彼の笑顔は好きだ。

零れるような、自然と出た笑顔。

それを見ると何故か安心してこちらまで笑顔になってしまう。

優しいところも好き。

私が何かに負けそうなとき、何も言わずに傍にいてくれる。

彼は何もしてないって言うけれど、私は確かに助けられていた。彼が、弱いところも好き。

脆くて、すぐ壊れそうになる。けれどそれを乗り越えてコースケはもつと綺麗になる。

だから背中を支えてあげたくて、傍にいてあげたくなくなってしまった。

それに、それに……

考えれば、考えるほどに、私が好きな彼は、

「いっぱい、あるでしょ？」

「……うん」

「好きじゃ、たりない？」

「うん」

好きじゃ、たりない。

色んな、色んなコースケが好きで。

思い出した。

これが、

恋。

甘くて、

苦くて、

心地良い、

そんな気持ち。

「コウ君も、そうだったんだよ」

「コースケ、も？」

「フエイトちゃんが好きで、好きじゃたりなくて。だから声にしたんじゃないかな？」

私が、好きって？

「フエイトちゃんがもしコウ君の気持ちが変わるなら、少しでも聞いてあげて。ちゃんと耳で、コウ君の声を」

「……………うん」

「好きで止まっちゃった私からの忠告、声にしなきゃ忘れちゃうから」
「うん」

声に、声にする、か。

今思えば、コースケへの恋を口にしたのは今回が初めて。

ずっと自分の胸の中に閉まっていた。怖かったのかも知れない。口に出して形にすることで壊れてしまうのが嫌だから。

でも、閉まっているうちにわからなくなつて、なんで好きだったのかとか、なんで彼を選んだのかとか。

理由なんて、選べない。

好きで、

好きで、

いっぱい好きだから、

彼が、好き。

それが、本当の私の恋。

※

「聞きたいことが、あるの」

そう言った私にコースケはしつかりと頷いた。

静かな、夜。場所はミッドの家の近くにあった公園。

コースケがこつちに来てくれるって言うてくれたからそうだった。

そういう小さい優しさでも嬉しくなつて彼を目にした時、自然と笑みが零れた。

「少し、寒いね」

少し離れた距離で向かい合う。

「ああ」

「小さい頃は寒さなんて気にならなかつたけど、今じゃね」

「小さい頃と比べたら、そりゃあ」

「雪とか好きだったもん。触っても全然平気で」

「今じゃ触ろうとはあんまり思わないね」

「うん。昔はさ、コースケやなのは、はやてたちといっぱい遊んだね。

雪合戦とか」

「必然的に男の俺が集中して狙われた」

「あはは、そうだっけ？」

「そうだった。まあ、負けた覚えはないけど」

「ルールとか、決めてたかなあ？」

「……どうだったか」

逃げるように視線を逸らすコースケを見て笑う。

小さい頃はまだ皆一緒が当たり前で、楽しかった思い出しかない。

数瞬の間、自然と視線が合つて、口が勝手に動いた。

「コースケは私が好きなの？」

「……ああ、好きだ」

答えられた言葉は素直に嬉しかった。

少し恥ずかしくて胸が温かくなるような喜び。

「何で、好きなの？　どんなところが好きなの？」

「……………」

そうだな、と考えるコースケに私はドキドキと胸を震わせていた。

別にわからない、とかそういう答えでもいい。コースケが出した答えなら、どんなものでも。

だから、困ったように苦笑した彼を見て、私は、

「嫌いなのところが無いから、全部好き」

安心、したのだろうか。
やっぱり、彼の笑顔を見ると落ち着いて、勝手に頬が緩む。

「俺は、フェイトの優しいところとかいつも支えてくれるところ、芯が強いところ、少し抜けてるところ、全部好きだ」

彼の声を聞けることが嬉しくて、私のために答えてくれるのが嬉しくて、

「だから、フェイトが俺を好きじゃなくなってもそれはそれでいいんだ」

もっと、

「それが、俺の好きなフェイトだから」

もっと、欲しくなる。

「私は、コースケが好きだった」

「ああ」

「笑顔を見ると、安心するし、優しくされると嬉しくなる」

「俺もそうだ」

「でも、私は今まで君みたいなコースケを知らなかった」

知らなかったんだ。

だから、

こんなにドキドキして、

こんなに君の事を、

知りたい。

「そんなに、私が好きなの？」

「……うん、こんなにお前が好き」

「コースケを好きじゃない私でも、いいの？」

「それもフエイトだから」

「それじゃあ……」

そんなコースケも

「好きに、なっちゃうよ」

ゆっくりと、コースケに近づく。

「触れ合うほどの近さで、彼の暖かさを感じた。」

「私の初恋はね。少し前の、コースケだった」

笑顔が素敵で、いつも優しくしてくれるコースケ。

「でも、今度の恋は、こんなコースケ、なんだ」

私を、好きって言ってくれたコースケ。

手を伸ばし、指が彼の頬を伝い掌が包み込んだ。

抱きかかえるように引き寄せて、

私と彼の境が無くなった。

こんなにも私は彼のことを好きでいる。

昔。

それは私が思っているより遠い昔のことなのだろう。

ある少年と出会った。

その少年は自らを紅助と名乗った。

私はまだその彼をコウ君と呼んでいなかった頃のことだ。

彼は私を高町さんと呼び、私は彼をコウスケ君と呼んでいた。

私は彼のことは好きじゃなかった。と言っても嫌いというわけでもない。

苦手、だったんだろう。

小さい頃の私は人付き合いがいいとはお世辞にも言えなかったから向こうから関わってくる彼に少しだけ困惑していた。

あの日も、声をかけてきたのは彼、コウスケ君からだ。

雨、雨が降っていた。

寒いな、って思いながら傘を差して公園のブランコを揺らしていた。

勿論ブランコを揺らしているせいでさしている傘は殆ど役に立っていない。

でも、気にはしない。気にする程の余裕が無かったのかも知れない。

こんな事をしてお母さんが心配するんだろうな、っていう考えはあつたけどそれより迷惑をかけるんだろうなっていう考えで胸が痛かった。

でも、家にいるよりはましだった。

お父さんが怪我をして、こんな日でも皆が急がしそうで、私だけ取り残される。

それを自分の目で確かめるのは苦痛でこっそり逃げ出してきた。

それが今回の経緯だ。

だから本当は雨が冷くて寒いとか、誰もいない公園は寂しいとか、そんなことはどうでもよかった。

ただ、胸が痛くて。

締め付けられるように痛くて。

助けて、って言いたかったんだと思う。

だから、

「高町さん？」

そんな不思議そうな声と共に現れた彼を見て、不覚にも絆されそうになった。

コウスケ君は私を見るなり近寄ってきてこちらの手をとって私の顔をのぞく。

「冷たい、いつからここに？」

「わかんない。暇だったから、遊びに来たの……」

自分の口から出た言い訳としてはわかりやすい嘘。

口から出してすぐばれるんだらうなって思った。

コウスケ君は怒るだろうな、そんな予想を立てて彼の瞳を見る。

「そっか」

けど、彼はそれだけでまったく怒りを見せることは無かった。

不思議、に思った。コウスケ君はいいこだからこんな迷惑な私を見て怒るものだと思っていた。

なのに彼は私の手を軽く引いて笑う。

「寒いね？」

「……うん」

ポツリポツリと会話としては拙い一言と共に頷くと彼は更に私の手を引いた。

「じゃあ、俺の家にも行こう」

「……え？」

何故そうなったのかはわからない。

でも気が付くと私は彼の家にいて彼のお母さんに進められるまま

冷えた体をお風呂で温めていた。

お風呂からあがり何処か居心地の悪さを感じつつ辺りを見ていると電話をしている彼のお母さんが見えた。

話からするに私の家に電話をしているようだ。距離としてはそんなに遠くはなかったみたいだけど矢張り胸が少し痛んだ。

そのままぼんやりしていた私に様子を見に来たのだろうコウスケ君が声をかけてきた。

「俺の部屋に行こうか」

「……ん」

人の家、という勝手のわからない状況で流されるように頷く。

始めてはいる歳の近い人物の部屋、でも彼の部屋は少し変わっていた。

あるのはベッドと本棚に机、何にも無いんだ。ポツリと思う。

男のこの部屋だからかな、とも思ったしそれとも彼だけがそのようなかなとも考えた。

結局答えは出なくてただぼんやりを部屋の様子を目に写し続けた。

そんな様子が可笑しかったのか私を見たコウスケ君が微笑む。

「やっぱり、なにも無いかな?」

考えてることがばれた?」

すこしドキリとしつつ首を横に振る。正直に言うのは何だか失礼に思えた。

「いいよ。自分でもそう思うから」

適当なところでどうぞ、なんて言いつつ椅子をこちらに譲ってきた彼の好意に与りソレに腰を下ろす。

彼はその前にあるベッドへ腰を下ろしてこちらを見た。

「俺は、趣味ってものが良くわからなくてさ」

そんな風に語りだした彼の表情は何を考えているかわからない。

始めてみる顔だった。喜びでも悲しみでもない、ぐちゃぐちゃな表情。

「したい事だつて、特に無い」

「そう、なんだ」

「うん。だから形に出てるんだと思うよ、この部屋は」

「したいことが無い、かあ。」

「私はある。お母さんやお父さんの役に立ちたい。」

「でも、無理かな。それはわかってる。」

「今日は雨が降ってたからさ、いつも遊んでる時間に公園は使えないかなって思ってたけど。やる事が無いから散歩をしてたんだ。そうしたら高町さんがいて、驚いた。高町さんはどうしたの？」

「……私は」

「少し口ごもる。何と云えばいいのだろうか。」

「私も、本当に暇で……やる事が、出来る事がなかったから」

「そうなんだ。じゃあ、今出来ることでもやる？」

「できる、こと？」

「うん。別に何だっていいよ。その本棚から好きな本をとって読んでもいいしもう少し話をしたいのなら話をしよう。話題だってなんだったっていいんだ」

「何だっていい、か。」

「安心、というのだろうか。言葉にされただけで心が落ち着いたような気がした。」

「本当に彼は私が何をしても受け入れてくれるのだろうか。」

「わからない。」

「わからないけど、少しだけ笑える気がした。」

「……コウスケ君の」

「うん？」

「コウスケ君の、事が知りたい」

「彼なら、って。」

※

コウ君と離れて過ごす日々の事を思い出そう。

正直、味気ない日常だったな。

コウ君がいなくなつてから一ヶ月くらいは自分で言うのもなんだけど生きてるんだか死んでるんだかわからないような日々だった。

でも、ある日コウ君の部屋で泣きつかれて眠ってしまった紫さんに起こされた時、気が付けば首にかけていた指輪が一つだけになっていた。

おかしいとは思つたけど不思議とコウ君だ、なんて思った。

たぶん、夢のようなものを見ていたからだろう。私はコウ君と話して、少しの間のお別れを口にした。

だから、いつか会えるんだって信じてた。

それからはコウ君のため！なんて我ながらいじらしく頑張つてみた利していた。

が、今になるとその頑張りに見合ったものをもらえた覚えが無かつたな。

そりゃあ、頑張つたら誰かしらに褒めてはもらえたけどさ。別にその人のために頑張つたわけじゃなくて……それならコウ君に馬鹿にされた方がましだったよ。

でも努力だけは怠らなかつたよ？ 再開するときに駄目な私じゃ嫌だから。

暫くして「もしかして名前が売れてきたかも」なんて思うときが来て、それが事実だということもすぐに理解できる事が起きた。

戦技教導隊。

そんなところに私は引き抜かれることになった。

みんなの話によるとそれはとても名誉なことだったらしい。

正直なところ私にはわからなかつたけど、簡単に言えば「皆にちよースゴい魔導師としてみとめられたんや」って事らしい。

さすがはやてちゃん、わかりやすい説明だなあ。つて当時は納得したけど、ちよースゴいは無いよね。

でも、教導隊に引き抜かれたこと自体は良かったことだったんじゃないかな？

教導隊には当時の私以上の實力を持つ人なんて大勢いたから簡単に褒められることも無かったし学べる事だって山ほどあったから。

結局、一時しのぎにしかならなかったけど。

当時の私以上、って言ったわけだけどその私以上の實力者も気が付けば私なんかより實力が下になっていた。

すると望んでも無い褒め言葉がまた流れ出して変な通り名まで出来てしまった。

エースオブエース、そんな風に呼ばれて持て囃されたが私としては何でそんなことになってしまったのかさっぱりだった。

だって、私は頑張っていただけだもの。皆も頑張れば出来るはずだよ。

なんて、思ってたんだっけ。

でも、もし頑張らなかつたら、この声は消えちゃうのかな？

そう考え付いて、行動に移した結果。

「こんなものなんだ」

それが答え。

皆も頑張ってた。

頑張って、その程度。

その答えに悲しみも哀れみも無い。

ただ、少しだけ驚いた。

「世界ってこんなに色褪せてるんだ」

そんなことに少しだけ驚いた。ただそれだけ。

赤も青も緑も黄色も黒や灰色だっていらぬ。

私はただの一色が欲しいだけなのに。

彼に会いたい。

ずっと言わなかった。

涙みたいな気持ちだが、零れた。

それから私は自分の実力を上げるより他人の実力を挙げることに力を注いだ。

せめて好きな色の画用紙が無いのなら、私が色鉛筆を持とう。なんて。

色んな場所で色んな人に魔法を教えた。

人それぞれの色を見て、

白い、

白い少女と出会った。

ティアナ。

ティアナ・ランスター。

それが彼女の名前。

彼女は私が魔法を教えていた生徒の一人だった。

初めて目にした時からなんとなく周りとは違うと思っていた。

彼女はけして強い魔力を持っているわけでも希少なスキルを保有しているわけでもない。遠くから見ればどこにだっている普通の女の子だった。

だけど彼女の周りには多くの人が集まり、その数だけ笑顔があった。

空気、雰囲気と呼ばばいいのだろうか。彼女の周りのそれはやけに心地よくまるで昔に戻ったような気分になんた。

コウ君がいて私やフェイトちゃん達がいる、そんな昔の事の様。

目線に違いがあったのかもしれない。今と過去しかない私と先を見ているティアナ。

私に無いものを彼女はもっていたからこんなにも惹かれたのだろうか。

それは彼に対しても言えた。

彼は私に無いものを多くくれた。だから恋しくて、愛しくて。

だからティアナと出会えたことは本当に嬉しかった。

私はコウ君の事をまだ忘れていない。忘れられないんだなあ、つて。

※

魔力弾を飛ばしガジェット・ドローンⅡ型と呼ばれる機械兵器を撃ち落とす。

列車で運搬やれているレリックの回収任務。また簡単に終わりそうだ、なんて心の中でため息を吐く。

列車内は小隊の新人達に任せため私は空の邪魔者を駆除する事が役目だ。フェイトちゃんもいるしそんなに時間はかからないだろう。

そう言えばこのガジェットⅡ型、Ⅱ型と言うだけあってⅠ型も存在するのだが、このガジェットシリーズはなんとあの先生の作品らしい。

先生の本当の名前はジェイル・スカリエツティとか言うらしくこのガジェットに堂々と名前が刻み込まれていた。

そこから人物の写真データへと飛び、先生の顔と一致したと言うわけだ。

今でも先生とは読んでいるがこんなガラクタを造ったり何の役に立つのかわからないレリックを狙ったりと何を考えているんだかまったくわからない。

しかし先生の本名が知れたのは大きい。

先生の影すら見えなかった過去とは違い背中まで見えてきていると思うのだ。

まあ、しかし今もこんな塵掃除のような事をしているわけだけど、気が付けば対象の列車から思った以上に距離が離されている。考え事のしすぎだ、そう自分の甘さを叱咤したその時、

紅色の光が空を貫いた。

ドクリと胸が跳ねる。

背後から迫る紅色の砲撃に振り向き様の手刀を合わせた。

《Phoenix Wing》

魔力を纏わせた手刀が砲撃とぶつかり合いそれを弾き返す。

跳ね返った砲撃を軽く避けそいつは現れた。

「お前って後頭部に目でもあるのか？」

レッド。

こいつだ。

こいつがいたから私達は。

でも、こいつを生み出したのは私で、私の罪で、

だから、

私が終わらせないといけない。

軽い口調とニヤニヤと口元を緩めるソイツを見て胸の奥底から湧き上がるものがある。

怒り。煮えたぎるようなそのせいで体が上手く制御できない。八年も前の事を今でも忘れていない自分に女々しく思うがそれを嬉しいとすら思っている自分がいる。

形にならないその怒りを型に流し込むようにレイジングハートへ魔力を注ぎ込んで数個の魔力球を発現させる。

「おいおい、物騒だな？」

「先に手をさしたのは、そっちでしょっ!!」

叫び、空を舞う。一瞬にして距離が詰まりすぐさまレッドの拳が振るわれた。

それをレイジングハートで受け止めお返しと魔力球を放つ。

一つ目、残っていた拳でつぶされる。二つ目、右足。三つ目、左足。いまっ、

四つ目の魔力球が無防備になったレッドに触れた。

その瞬間、

レッドの体が霧のようにかすれて消えた。

高速移動、わかつていたものの思わず奥歯を噛み締める。

「そう怒るなって、折角の再会だろ？　もう少し可愛らしくできないのかよ？」

「……する必要がないんじゃないかな？　私としてはお前を墮とせれば満足だから」

「本当に可愛げがないのな。オリジナルがお前から離れたのも納得できよ」

「っ、コウ君のことを。コウ君のことをお前がわかった風に言うな!!」

絶対にまた会えるんだ。

私とコウ君は、また。

「だから、だから私が終わらせなきゃ……お前も、先生も。全部、全部終わらせて、また私は!!」

私には、コウ君が必要なんだ、コウ君がいないと、駄目なんだ。

何も始まらないし、何も終わらない。

だから、邪魔なの。

偽者も、

先生も、

ねえ、だから、

「消えてよっ。」

じゃないと、コウ君に会えないよ？

※

繰り返される手刀を同じ様に魔力を纏わせた手刀で捌く。反撃として周囲に浮かせていた魔力球達を撃ち出すがそれらは腕の一振りですべてが切り裂かれ桃色の光は空に溶けて消えた。

私とレッドの相性はやはり最悪と言っているいいものだった。

動きを止めて射撃魔法を使用する遠距離型の私と縦横無尽に動き回り相手の隙をつく近、中距離型のレッドとは私が不利になることが簡単に理解できる。

高速で動き回る相手は狙いにくい上にヤツが放つ貫手や手刀は私がかかっている魔力壁をいとも容易く打ち破ってくる。そのためこちらでも相手の狙いを定めさせない為に動き回らなければならない。

自分のスタンスを捨てることは思った以上にストレスが大きい。思わず舌打ちが漏れる。

レッドは高速移動系統の魔法を多用し消えては現れ現れては消える。私から一定の距離をとりこちらの呼吸を乱しにきていた。

数度目の手刀を受け流し私は近くの岩場に足を下ろす。

一度短く息を吐き出し思考を切り替える。

実のところ私は別段砲撃手という訳ではない。

ただそれが一番長くそして最も得意と言うだけだ。

今までの間に他の方法にも手を出した事がある。

近接戦闘やオールラウンド、勿論高速間戦闘もだ。

《Calamity Wall》

「もう一回っ！」

私を中心に半円状の衝撃波が直進する。

それを二回、丁度円を描くように衝撃波が進んでいき進行方向に並ぶ岩を削り地形を平地へと変えていく。

案の定衝撃波を避けようと上昇したレッドにレイジングハートの穂先を向ける。

「デイバイン、バスターツ！」

桃色の柱が空を貫く。

《Fast Move》《Second Move》

続けて紡いだ魔法で一瞬にして感覚が高速化される。小さい頃にコウ君の真似をしようと覚えた魔法だそれなりに使い慣れている。砲撃を避けたレッドにレイジングハートを突きつけ足から魔力を爆発させるように噴き出させた。

吹き飛ばすように空を駆け抜ける。ついでとばかりにバリアジャケットを魔力に転換し噴き出す魔力に上乘せする。

擬似ソニックフォーム、といったところか。フェイトちゃんの真似を試してみたが思った以上の効果だ。守りを捨てる分だけ高速移動に魔力や思考を乗せやすい。ただ文句を言うとしたら体の各所がスーナーすることかな？

高速移動時のレッドよりもう一段階速い超高速、ゆっくりと驚愕へと表情を変えるそいつを見て口角が上り上がった。

《Bind Shot》

レイジングハートがバインド効果を持つ魔力弾を吐き出しレッドを縛り上げる。

《Mode Exceilion》

先端部に構成したストライカーフレームをレッドの腹に突き刺して収束させていた魔力を解き放つ。

「エクセリオン、バスターツ!!」

桃色の魔力が空を染め上げた。一撃必殺、勝利を確信して、

「なっ!？」

突然、背後からの衝撃に地面まで落とされた。

視界の端に紅色の光がちらつく。

「なん、で」

立ち上がった私は見る。レッドの姿を。

ダメージがないどころか汚れの一つもない姿に驚愕する。

レッドが喉を鳴らす。

「悪いね、俺って幻影系の魔法適正もあるんだ」

言葉と同時にレッドの姿がぶれる。

高速移動、身構え、目を凝らした。

が、レッドはその位置から動く事はなかった。

不穏に思うと私にヤツの声が飛ぶ。

「どこを見てるんだ？」

声は、後ろから。

即座に振り向く私にレッドが笑い顔を向ける。

前を見直す、確かに先程の場所にもレッドの姿があった。

本当に幻影魔法？ いや、そんなものを使う素振りはなかった。

頭を回転させる私にレッドが笑う。

「高速移動による魔術痕跡の隠蔽って所かな。高速移動で使われる大量の魔力で幻影に使った痕跡を吹き飛ばしてるって単純なものだけだよ」

ニヤニヤ笑うそいつは得意げにそういう。

簡単にこそ言っているがその行動事態は高ランクスキルなのだろう。

今の方法を聞いただけで試して見ても恐らく作り出した幻影ごと

かき消してしまおう。

恐らくやつは幻影魔法の魔方陣やその痕跡に的を絞って高速移動の魔力をぶつけている。

単純かつ繊細で、攻略し難い。

相変わらず笑顔のレッドに歯を食いしばった。まるで怒りが体を燃やすような感覚を感じる。

「あ、そーういや」

ふと、思い出したようにレッドは口を開く。

「ソイツも幻影だ」

声は、横から。風を切る音と共に耳へ届いた。

振るわれた拳を転がるように避けて睨む。先ほど話していたレッドは空気に溶けるようにして消えた。

「そらそら、どんどん行くぞっ！」

言葉と同時にレッドの体が消える。

現れたのは目の前でこちらも腕を振るうがたやすく避けられ纏わり付くように近距離にまた現れる。

離れようと、しないならっ。

「モードリリースッ」

レイジングハートを待機状態にまで戻し両の拳に魔力刃を発現させた。

「近接戦闘が出来ないわけじゃない！」

繰り出される貫手を弾き数度切り結ぶ、思った以上に相手側もこの距離では行動を制限されるのかまだ目で追える。

これならば、私でもっ。

足をバインドで絡め取りバランスを崩したところで両腕を跳ねる。がら空きになった胴体に魔力刃を突き刺しそのまま力任せに引き

裂いた。

血液の代わりに紅色の魔力が噴出す。

「残念無念、それも幻影だ」

声は後ろから。

ズタズタになった幻影が消えるのを見てレッドを睨む。

ニヤニヤとした表情は消えず一々頭が煮え返りそう。

そんな私に対して余裕を見せるレッドは笑うだけに留まらずこちらに拍手を送り出す。

「凄い凄い。お前って本当に何でも出来るんだな。流石エースオブエース」

パチパチと送られてくるその音が耳に付く。

あいつに褒められたところで怒りが更に湧き上がるだけだ。

「よし、じゃあ次はっ」

レッドの姿がぶれる。残像が一体作られる。

「どれが」

もう一度、二体目。

「本物でしよう?」

四体、八体、十六体。増える、増える増える増える増える。

気持ちが悪。コウ君の形をした偽物が何人も。何人も、何人も。どれもこれも偽物だ。そんなやつがなんでコウ君の形をしている

の?

もう、我慢、出来ないよっ。

「消え、ちやえ」

もう、もうもうもう!!

「消して、斬って潰して折って曲げて摩って千切って集めて蹴って埋めて刺して抉って壊して飛ばして沈めて解して焼いて溶かして固めて落として勿ねて殴って縛って晒して裂いて轢いて撃って詰めて剥いで磔て」

全部、

「消してやる」

飛び出す。一体を串刺しにして右肩を殴られる。

二体目を引き裂いて左足を殴られる。

三体目の首を跳ね飛ばし背中を殴られる。

四体目をバラバラにしてお腹を殴られる。

五体目を、

六体目を、

七体目を、

八体目を、

殴られる。

殴られる。

殴られる。

殴られる。

ふざけるな。

私のコウ君を汚すな、貶めるな。

偽者の癖に、作り物の癖に。

私は、コウ君と一緒にいたいただけなのに。

何で邪魔をするの？

なんで、どうして、

私が、悪いの？

何が、悪いの？

どうすればよかったの？

痛い、痛いよ。

そんな顔で叩かないで。

そんな形で触らないで。

止めて、

許してよ、

コウ君は、迷惑だったの？

私じゃ、駄目だったの？

でも、

私はもう、一人じやなにも出来ないよ。

コウ君がいないと、私は。

これでも私、頑張ったんだよ。

一人でちゃんと頑張った。

ずっと泣かなかった。

寂しいけど、寒いけど、我慢したよ。

だから、だから、

助けて。

誰か助けて。

ねえ、

助けてよ。

コウ、君。

「——なのはっ!!」

誰の声？

わからない。

まるで、

私が擦り切れていくようだ。

声、声？

ああ、声が聞こえた。

名前を呼んだんだと思う。私の。

誰が？

わからない。

聞き覚えがあるような気がするし、無いような気もする。

男の人だつてことはわかる。

男の人……男の人？

凄く気になる。誰、何？

私はその人を確かめないといけない気がする。

でも、瞼が重い。

目を開けばその人は目の前にいると思うのだけれど。

重い、瞼が、意識も。

ゆつくりと沈んでいく。

どこへ？

また？

また、夢を見るの？

いつもの様に？

昔の？

幸せだった夢を？

辛い夢を？

だめ、重い。重い。

あれ、

私は、

何を、

※

「んっ……………にゃ？」

ゆっくりと、頭を撫でられる感覚で目を覚ました。

心地いい目覚め。

「お母、さん？」

暖かい掌に思わず目を細める。

もう少し眠っていたらという感情ともう少し撫でられていた
いって感情がぶつかり合って幸せなんだな、なんて答えがポツリと浮
かんだ。

すんすんと鼻を鳴らすと柔らかい匂いが鼻腔をくすぐる。このま
ま、撫でられたまま眠っていればもつと幸せで、ゆっくりと意識を沈
めていった時、

「お母さん、ではないかな？」

声が聞こえた。

聞き覚えがある。男の子の声。

あれ？ つと思ひ薄く目を開けると見覚えのある顔がそこにあつ
た。

「コウ、スケくん？」

「うん。起こしちやったかな？」

何で、私の部屋にいるの？

浮かび上がる当然の疑問。まだ眠気が覚めない頭でそんなことを
考えながら私はベッドに体を沈ませる。

そんな私にコウスケ君は苦笑を浮かべるともう一度優しく頭を撫
でた。

「もうすぐお昼だよ？」

「……………ごはん？」

そうだね、と頷くコウスケ君。

それだったら、起きなきや。と起き上がりしっかりと目を開いて。

私は思い出した。

雨の中、公園へ遊びにいったこと。

コウスケ君に声をかけられたこと。

コウスケ君の家に連れられたこと。

コウスケ君とお話していたこと。

全部思い出してカツと顔が熱くなった。

な、なんで私は眠っていたの？

場所は変わらずコウスケ君の部屋。何も無い、簡素な部屋だ。

と、言うことはこのベッドはコウスケ君の物で……

バツとベッドの上から飛び退く。

「ご、ごめんなさいっ。私、寝ちゃってっ」

反射のように謝って恐る恐るコウスケ君を見た。

「ん？ 別にいいよ。おはよう、高町さん」

なんで、笑ってるの？

優しいな笑顔でこちらを見るコウスケくんを不思議に思う。

前から思っていて認めてこそいかなかったがコウスケ君は優しい人だ。

私とは違い多くの人に好かれて一人で何でも出来て、そんないい人なんだ。

だから羨ましくて、そういうところが好きになれなくて。

でも、口にしても私じゃなにも伝えられないしコウスケ君はわかってくれないし……

もやもやした気持ちが少しずつ溜まっていく。

その後、お昼をコウスケ君の家でご馳走になって私はまたコウスケ君の部屋に戻っていた。

窓の外はまだ雨が降り続いていていつものように公園に行くわけにはいかないようだ。

部屋を見渡すとコウスケ君も少し暇そうにしていた。

いつもの彼はお兄ちゃんのようにかくとうぎっ？を習っているらしいけど今日はその習い事が無いらしい。

コウスケ君もいろんなことをしているんだなあ、なんて思いつつ自分のことも考えてみる。

私の家は道場などがあるけど、お父さんやお母さんは私に習わせるつもりは無いようだし私としても運動はあまり得意じゃないからやりたいとは思わない。

勉強とか、音楽とかそんな習い事にも興味はないし……強いて上げるなら、時々お母さんが教えてくれるお菓子の作り方かな。

最近はあまり教えてくれないけど、それは教わっていて楽しいと思う。

コウスケ君の習い事もそうなのかな？

ぼんやりとコウスケ君を眺めていたのが気付かれたのだろう、コウスケ君と目が合う。

「どうしたの？」

「……ううん。なんでもない」

「なにか気になることでもあった？」

……気になる、といつてもコウスケ君のことだ。

コウスケ君はしたいことが無いって言ったのになんで習い事をしているのか、とか。

本当にしたいことが何も無いのか、とか。

でも、聞いていいことなの？

「何でも聞いてくれていいよ？」

何も言わない私を不思議に思ったのか彼が首を傾げる。

「何でも？」

「ん？うん。何でも」

じゃあ、聞いていいのだろうか？

迷惑にはならないのだろうか？

「コウスケ君は、なにもしたいことが無いって言ったよね？」

恐る恐る口を開く。

その時私は本当に怖かったのだ。

「本当になにもしたいことが無いの？」

人と人の心に距離があるのだとしたら、私はコウスケ君にどれだけ近づいていいのだろうか。

それはお母さん達にも言えた。どれくらいの近さなら私は邪魔じゃないのだろうか。

手探りで探すのはただただ怖くて、今この時もコウスケ君に迷惑をかけているんじゃないかと心配になる。

そんな私の質問にコウスケ君は腕を組んで考え出した。

「したいこと……か」

やっぱり、聞いちゃいけないことだったのだろうか？

びくびくとする私。コウスケ君は少しの時間を置いてこちらを見た。

「一つだけ、あるかもしれない」

「したい、こと？」

「うん」

顔は笑顔。

怒っていないことに安心してコウスケ君の声に耳をすませる。

けど、私はそのとき気付けずにいた。

コウスケ君が本当は笑っていなかったことを。

もしかしたら、彼は泣いていたのかもしれない。

だって彼の声が。

「友達を作りたい」

こんなにも悲しそうだったんだから。

コウスケ君の口にした答えは私には理解できなかった。

私は知っているコウスケ君が多くの人に好かれていることを。

コウスケ君が私に始めて声をかけてくる以前から私は彼のことを知っていた。

いつも回りに誰かがいて一人にいる方が珍しいくらいだったのを覚えている。

なのに、なんで？

「いつもの公園で声をかけてくる子達は……」

零れた疑問にコウスケ君は苦笑を浮かべた。

「友達と思つたことは無いよ」

思つたことはない？

「仲が悪いの？ 嫌いななの？」

「別に仲が悪いってわけじゃないし、嫌いなわけでもないよ」

「じゃあ、なんで」

「俺の我が儘、かな？」

我が、儘？

「皆は、特別じゃない」

眩かれた言葉の意味は矢張り私にはわからなかった。

そしてまた浮かび出る疑問、

それじゃあ、私は？

友達になりたいと思つたわけじゃない。

たぶん継るような気持ちだったんだと思う。

お母さんもお父さんも、お兄ちゃんやお姉ちゃんだって私の周りには来てくれないのに、

コウスケ君も違つたら、つていう。

思わずコウスケ君を見つめて、目線が交差した。

「だから、君を選んだ」

静かな声が部屋に響く。

ゆつくりとコウスケ君がこちらに手を差し伸べる。

「高町なのはさん」

コウスケ君の目はいつもより真剣で私を貫くように見つめている。

「俺の友達になってくれませんか？」

私は、
その言葉に私は、
聞きたかった。

ただ、一言。

何でコウ君は、私を選んでくれたの？

※

体中に感じる痛みで目を覚ます。

また、夢を見た。コウ君との思い出の夢。

最近になってよく見るようになった辛い夢。

私が一人になったことを嫌でも思い出させる、そんな夢だ。
だから、

目を開けた瞬間、

涙が流れた。

「……………え？」

見覚えのある、顔。

体は私が覚えているよりも大きくなっている。

でも、目の前の彼が誰なのか一目見ただけでわかった。

わからないはずがない、

忘れるはずが無い、

だって、

だってっ、

私は、彼にっ

「遅くなった、なのは」

「コウ、君ッ」

恋を、しているのだから。

※

私を抱きかかえていたコウ君は一度私から目を離すと上空に浮かんでいるレッドを睨んだ。

表情は見えない、しかし彼から感じる雰囲気は怒りに染まっていくのがわかる。

「悪いけど、ここで少し休んでいてくれ」

そう、地面に私を下ろしたコウ君に手を伸ばす。

コウ君はレッドと戦うつもりだ。

それだけは止めたかった。

アイツは私の罪で、私が生み出して、だから、

コウ君は関係無い。全部、全部私が、私が始めたから、私が終わらせないといけないのに。

ゆっくりと私から離れていくコウ君に必死に手を伸ばす。

それだけしか出来ない。

体中が痛みを発し、声だつて上手く出せない。

だけど、止めなきや。

コウ君は、アイツとだけは戦っちゃいけない。

また、私の前からいなくなっちゃう。

やっと会えたのに。

言いたい事だつていっぱいある。

やりたい事だつていっぱいある。

でも、

私がいたら、こんな私がいるから、コウ君は、守ってしまう。

何も変わってない、変えられてない、あの時から、コウ君を失ったときから。

私は、あの時からコウ君のためなら死んでしまっただけでいいって思っている。

でも、コウ君がいなくなるのは嫌だ。

私にとってのコウ君は、生きる意味で、コウ君がいるから私がついて。だから、私は、

空を覆うように、二人の魔力光が煌く。

幾度と無く拳がぶつかり合いソレによって生み出される衝撃が私の体を揺らす。

私が、

「止め、ないとッ」

レイジングハートを握り締める。

まだ体中が痛くて、立つ事すら辛いけど、やらなくちゃいけないんだ。

あの時とは違う。

私が、変える。

「レイジングハート、フル、ドライブ」

体中の魔力が唸りを上げる。

耐え切れない私の体は悲鳴を上げているけれど、そんなの関係無い。

私が、コウ君を守らなきゃ。

私が、全部終わらせなきゃ。

「スターライト……ッ」

私が、私でいるために。

「ブレイ、カ——ッ！」

私は、今からやり直すようだ。

I F 2. 君は私の大切な

私にとっての彼は、

そういう風に考えたことが無かったのは彼に負い目があったから。

でも、彼は、

隣にいと幸せで、

声を聞くと落ち着いて、

触れ合おうと安心する。

たぶんそれは皆が言うような気持ちじゃない。

私と彼が、家族だから。

血が繋がってるわけじゃない。

書類の上でもそうじゃない。

ただ、私と彼は繋がっている。

だから私と彼は家族で、

心と心で繋がった、大切な、大切な存在。

それが、私の家族。

※

「ただいま」

久しぶりに帰宅する。

六課の解体からさほど時はたつてないとはいえ最近の忙しさには流石の私でも思うところはある。

まだまだ若いとはいえ、いや、若いからこそこんな仕事生活でいいのか、なんていう風に。

でも、まあ、満足はそれなりにしているし遣り甲斐もある。

折角の帰宅なんだ、ゆつくりと休もう。

そんな風に物々と我ながら小さい考えを打ち切ると目の前に小さな人影が飛んできた。

「おかえりなさいです、はやてちゃん！」

「ただいま、リイン」

飛んできた人影、リインフォー스ツヴァイの頭を一撫で、するとリインに続いてもう一人がこちらに歩いてくる。

「お帰り、はやて」

「ん、紅助君もただいま」

七峰紅助君。

彼が魔導師をやめてもう何年もたつけど最近になってミッドに渡ってこちらで暮らすようになった。

それも六課の解体されるくらいの時やつたっけ？

理由は聞いてないしもうわからんけどそれからはちよくちよくお世話になったりしていて優しい男の子。

「夕飯はできてるよ、ついでに風呂も。どっちを先にする？」

「んー、皆は？」

「全員帰宅済み、はやてが最後」

「おお、皆集まるんは久しぶりやね。じゃあ、ご飯を先にしよか」

「了解、じゃあ行きますか」

さり気無く紅助君は私から荷物とコートを奪うと笑って家の奥へ歩き出す。

本当に彼にはお世話になっているな、ふとそう思った。

ミッドへ彼が渡って少しして彼を自宅に呼んだのが初めだったか。

仕事が大変で料理をするのも億劫だ、なんて昔では考えられないようなことを口にしたのが始まり。

それを聞いた紅助君がだったら、なんて風によく家に来て今日みたいに色々してくれるようになった。

おかげで家族みんなの笑顔も増えたと思うし私も嬉しい。紅助君には本当に頭が上がらない。

仕事着から着替えりリビングへ向かうと料理を囲んで待っていた家族達が私を迎えてくれた。

皆笑顔で、幸せってこういうのなんやな、なんて私も笑顔になった。

「ん、これ美味しい」

「それはどうも」

口に運んだ料理に思わずそんな言葉が零れ紅助君がにこりと笑う。

なんか、悔しい。料理と言えば私の得意分野のはずだったのだが最近では完全に紅助くん任せにしているし下手したら追い抜かれる事だって……

そんな考えが顔に出ていたのか紅助君がこちらを見て微笑んでい

る。

「そろそろ師匠を越える時ですかね？」

「むう、まだまだや。私だってこれくらい……」

出来る。まだ、出来るはず？

紅助君に料理を教えたのは成功だったのか失敗だったのか。

とは言え教えたのも十年近く前になるんだし師匠なんて呼ばれるのもおかしい話だ。

なのはちゃんが入院していた頃の事だったかな。

目に見えて落ち込んでいた紅助君をどうにか元通りになってほし

いって教えたんだったか。

趣味の一つにでもなつて気を紛らわせてくれればとも思っていたが、これ程とは……ぐぬぬ。

微笑む彼に目を向けて少しだけ、昔のことを思い出した。

料理を教えたこと。

何故彼のが気になるのか。

ズキリと胸が痛む。

ああ、思い出さなければよかったのに。

そもそも私が紅助君を気にしていたのは夜天の書での事件で負い目からだ。

彼がなのはちゃんを守って意識不明の重体に陥ったのは聞いた。

私はそれを事件が終わるまで知らなかった。自分が中心となった事件での犠牲者だったのに。

彼が目を覚めたのは事件が収束しリインフォースが消える数日前。

その間私は何度も彼の眠る姿を目にした。頭に過ったのは良くない考えばかり。

このまま目を覚まさなかつたら、なんて風に。

私が背負うと決めた罪の形が目の前にある。

なのに私は罪悪感にかられるでもなく、ただただ恐怖していた。

怖かった。

怖くて、どうしようもなくて。

背負うと口にして目に見える形でそれと向き合った時、私は何も出
来ず、ただの矮小な存在で。

それが私の負い目。

彼に私は何もしてあげられなかった。

無力だった罪悪感。

だから、時々考える。

彼は私を怨んでいないのか。

私は彼に対してこれでいいのか。

でも、怖くて聞けない。

私は、まだ無力で彼に何もしてあげられない。

※

「それでな、紅助君が――」

「へー……」

翌日、私はこれまた久しぶりの休暇に運良くそれが重なったフェイトちゃん、なのはちゃんとお茶をしとるわけなんやけど。

「む、なのはちゃん聞いとる？」

「うんうん、聞いとる聞いとる」

これは聞いてないな。思わず頬を膨らませ抗議を口にしようとした時、なのはちゃんが指を立てて私をさした。

「そういえば」

「うん？」

タイミングをずらされた私は言葉を飲み込んでなのはちゃんを見る。

彼女は何処かニヤニヤした顔でこちらを伺い、ゆっくりと口を開いた。

「はやてちゃんっていつになったらコウ君と籍を入れるの？」

「……………ん？」

「……………セキ？」

セキ、席、咳…………？」

「あ、私も気になるな。それ」

えと、フェイトちゃんまでなんや？

セキ、って……………うん？

「はやてとコースケはいつ結婚するの？」

「……………け？」

「……………ケツ!？」

「け、結婚?! な、なんやそれ!! 誰が、誰と、何っ?!」

「え、だから……はやてちゃんが、コウ君と、結婚、でしょ?」
な、なんや、なんやなんや!?

どういうこと!?

私が!?

紅助君と!?

け、結婚!?

「ど、どこの話なんそれ!? なんで私と紅助君が!!」

思わず身を乗り出して詰め寄る。

そない話一度もしてないやん。だいたい私と紅助君は付き合っ
てす無いのに、結婚て、結婚て!!

そんな私に目の前の二人はぼかんと口をあけて驚いている。

「わ、私おかしな事言ったかな?」

「言うとするやろ!」

「お、落ち着いてはやて!」

私を宥めようとするフェイトちゃんを押しつける。

つまり、つまり、どういうことや!?

「二人は私と紅助君がそういう関係やとでも思っとするん!」

「え、そうじゃないの?」

「はやてとコースケは付き合ってるんでしょ?」

なっ、なあっ!?

「ちっ、があう!! 私と紅助君の関係は清く正しくやなあ!!」

「で、でもコースケってはやてと同居してるんでしょ?」

「そうやけど! 一緒の家に住んでますけど!」

「ご飯とかも用意してもらったりして、尽くしてもらってるんだよね?」

「用意してもらってますけど! 尽くしてもらってますけど!」

それが何!?

そら紅助君がこっちに住むとき一人暮らしは寂しそうやからって
声をかけて家に住まわせてあげたりしとるけど。

そら最近の紅助君は甲斐甲斐しく私のお世話してくれたりしてな

にかと助かつとるけど。

時々一緒に買い物に行ったり遊びに行ったり、なにかあったらプレゼントをもらったりあげたりしてますけど。

なんか最近よう手をつないだりしてますけど。距離感が近かったりしてますけど。

.....あれ？

「わ、私って.....紅助君と付き合っていない、だよな？」

「.....ええー」

そ、そんな冷たい目で見んでもええやん。

だって、そんなこと考えもせんかったもん。しょうがないやん。

「つまり、私は紅助君とは付き合ってなくて.....でも、同居してて、よく二人で遊びに行ったりして.....」

「やっぱりデートとかはしてたんだ？」

「で、でで、デート!? な、なんやそれ、美味しいん!？」

「いや、いやいや。ごめん、もう一回だけ落ち着こうか」

深呼吸深呼吸、となのはちゃんの言葉通り深呼吸を数回。

あかん、頭がどうにかなつとった。

「それで、コースケとは結婚しないの?」

「け、結婚!? コースケ君が!？」

「フェイトちゃん!? 少し黙ろうか!？」

.....

.....

.....

「えっと、私が話を進めちゃうんだけど……つまりははやてちゃんと
コウ君は別に付き合ったり彼氏彼女の関係だったりはしないんだ？」
「うん、うん」

なのはちゃんの言葉にコクコクと何度も頷く。

確かにただの友達にしては近しい関係すぎるとはおもうが私と紅
助くんは徹頭徹尾【友達】だ。

彼氏でもなければ婚約者でもない。

「てつきり付き合ってるものだと思ってたんだけどなあ」

少し残念そうに言う二人。

「といひかなんで私と紅助君が付き合つとる事になつてるん？」
最もな疑問はそれだ。

なんで付き合う、を跳躍して結婚なんて話になったのか。

問うた私に対し二人は苦笑いを浮かべた。

「それは、ねえ」

「……うん」

「なに、なんなん？」

「こうやってはやてと会うと大体ははやてってコースケの話をしてる
し」

「コウ君と会つたら大体ははやてちゃんの話をしてるから……ね？」

「ね、って！勘違いやん！二人の勘違いやん!!」

「にやはは、ごめんね、はやてちゃん」

「ごめん、はやて」

許して、と手を合わせる二人に頬を膨らませる。

こんな恥ずかしい思いをさせられてそう簡単に許せるもんか。

「でも、付き合っていないにしろ意識してるとは思うんだけどなあ」

「うんうん。もう大分経つからね、一緒に暮らし始めて」

「……………許してもらうつもりあるん、二人とも？」

「まあまあ、そこは優しいはやてちゃんがね」

「そうそう」

「……むう」

「それで、だけど、実際のところどうなのかな？」

「どう、って?」

「はやてはコースケのこと好きじゃないのかなって」

「好きって、言われても……」

そんな事、考えたことは無いし。

紅助くんは紅助くんやし、彼氏とか付き合って欲しいとか……そんなな。

「うーん、じゃあコースケはどう思ってるのかな?」

「それこそようわからん……」

紅助君が私の事、もしかしたら怨んでたり、しないかな?

私さえおらんければあの時、みたいに。

「じゃあ聞いてみたらどうかかな?」

簡単に、本当に簡単になのはちやんが言うた。

そんな風に聞けたら苦労せんというか、なんと言うか。

いじいじとしている私に痺れを切らしたのだろうなのはちやんが口を開く。

「私から見たらチャンスだと思っけどな」

「チャンス?」

「二人の関係を改めるチャンス」

私と紅助君の関係を改める?

「……そうだね。はやてとコースケは一度相手がどう思っているのか、自分がどう思っているのかをちゃんと認識すべきだと思うよ?」

「フエイトちゃん、も?」

「うん。たぶん、今の状況は長く続かないよ。人の関係なんて簡単に変わっちゃうものだから、だから知らなきゃいけないんだと思う。自分が相手に何をしたいのか、相手が自分に何をしたいのか」

今の状況は長く続かない。それは少し、嫌だ。

私は今、家族がいて、紅助君がいて、皆笑ってられる今がとても愛しい。

それがずっと続いて欲しい。いつまでも。

「聞いてみるべき、なんかな?」

「そうだね」

「私もそう思う」

頷く二人に不安が募る私。

二人の言葉に文句があるわけではない。

私だってこんなあなあな状況がずっと続くとは思っていない。

それに私だって知りたい。

彼は私を怨んでいるのか、

それとも、

だから、

「聞いて見る。紅助君に」

※

なんてかつこつけて見たものの。

二人つきりになると、怖くて、

かちやかちやと食器の鳴る音がする。

手にかかる水は冷たくて、でも隣に、肩がぶつかりそうな距離に彼がいると思うとなんとというか……緊張する。

別に今のように彼と一緒に皿を洗ったりした事が無いわけじゃない。

どちらかといえればよくする方だ。でもいつもはこんな気持ちにはならないのに。

あの二人のせいや。そう頭の中で悪態をつき隣に経つ紅助君に意識を向ける。

「あ、あー……こ、紅助君？」

「ん？」

自分で口にしておきながらなんだが、凄く不自然な声のかけ方。

紅助くんも何かあると気付いているのだろう。不思議そうにこち

らを見る。

「うう……あの、な。その、えつと……」

「……………」

おかしな子、と思われているのだろうか？

自然と頬が熱くなり逃げるように彼から顔を背ける。

「あの、あのな。紅助君って最近ようお世話してくれるよね、私の」

「ん、そうかな？」

くすり、紅助君が笑う。

そういうの、ずるい。わかってないふりをして平然と優しくする。

そういうの、本当にずるい。

「ご飯だって作ってくれるし、家の掃除だって最近はまかせっきり、と

いうか家事は殆どやってくれてるやん」

「……まあ、言われてみれば」

「なのに私が休みの時は遊びにつれてってくれたり、私の我が儘も聞

いてくれる」

「それは、俺も楽しいし」

「……本当？」

「本当」

ちらりと彼の顔を盗み見る。

見えたのは、笑顔。本当に、笑顔？

私が今、疑心暗鬼に陥っていると言うことは自分でも何となくわかる。

自分の中の『恨まれているのでは？』という気持ちが強すぎて何を聞いても彼の言葉を信じる事が出来ない。

でも、ちゃんと聞かないと。彼の、言葉を、ちゃんと理解しないといけない。

それは勇気とかそんな綺麗なものから出た想いじゃない、たぶんただの知識欲。

私は知りたい、なぜ紅助君はそんなに優しいの？

私は知りたい、なぜ紅助君はそんなに綺麗なの？

私は知りたい、なぜ紅助君はそんなに、

そんなに、

「ねえ、紅助くん」

「なんだよ、次は？」

「紅助君は、なんで、なんで私に優しくしてくれるの？」

眩くような小さな声に、やはり彼は笑った。

「好きだから」

「え？」

※

『待たせてごめんね、ヴィヴィオを寝かせるのにちよつと時間掛かったちゃって』

『皆そろったね、それじゃ聞こうか？』

暗闇の中に浮かぶディスプレイから二人の笑顔が見える。

あの後、私は何をしたのか、何を言ったのか覚えていない。

気が付いたら眼の前にいたはずの紅助君はいなくなっていて、私はこちらやってなのはちゃんとフェイトちゃんと相談をしようとしている。

正直、頭の整理が出来ていない。だからこうやって助けを求めた。家族の誰にも話さなかったのは恐らく家長としての最後のプライドだったのか、そんな物を気にしている場合でもないと思うのだけ

ど。

二人が私を見つめている中、私はぼそりと言葉を吐き出す。

「……………き、って」

『え?』

喉が、渇く。

ただの一言で体がぼんやりと熱くなるのを感じながら紅助くんの言葉を思い出す。

「紅助君に、好きって、言われました……………」

『おおっ』

私の搾り出した言葉に花が咲くような笑顔で返す二人。

その気持ちは乙女として理解できるけど二人も出来るなら当事者である私の気持ちもわかって欲しい。

『どんな風にどんな風に!』

「こう、一緒にお皿を洗ってる時に、なんで優しくしてくれるのって聞いたら……………その、好きだからって」

『うわあ、コウ君もわかってないなあ。もうちよつとロマンチックな場面とかなかったのかなあ?』

なのはちゃんはそう言うけどね、私にとっては日常こそがロマンチックと言うか……………何を言っているんだか。

『それで、はやては何て答えたの?』

「まだ、返事を……………してません」

『ええー』

そんな目で見られたって……………その、本当に突然だったですし。

そんなこと言われるなんて思ってた無かったですし。

『それじゃあ、はやてはどうするつもりなの?』

「どう、するって……………」

『コウ君もそれなりに勇気をだしたんだと思うよ? だからはやてちゃんは返事をどうするのかな』

「勇気……………そう、なんかなあ?」

本当に紅助君は勇気なんて出したのだろうか。

正直、私にはからかわれている様にも思える。

でも、そんな感じじゃなかった。

自分で言うのはなんだが人を見る目は持っているつもりだ。嘘を見抜くくらいなら、それに紅助君とは付き合いも長いからわかってるつもりだけだ。

「うう……どうしたら、ええんかな」

思わず、頭を掲げる。

本当にどうすればいいのかわからない。

『はやてははやての思うようにすればいいんだよ』

「思う、ように?」

『まあ、私達には無理強いできないから。ただ、はやてちゃんがどう思っているのかちゃんとコウ君に伝えてあげて欲しいな』

「……………うん」

『好きって言われてどう思ったのか、それからコウ君とこれからどうしたいか、どうするべきか』

どうしたいか、どうするべきか。

私は、やりたい事が、やらなければいけない事が沢山ある。

私が、どうしたいのか、どうするべきなのか、か。

私は、

『大丈夫、コースケはどんなはやてでも受け入れてくれるよ』

『むしろ受け入れてくれなきゃ困るよね。スターライトブレイカーしちやうよ』

「あはは」

……………うん。

「言ってくる、返事」

『ん、頑張って』

『何かあったらまた呼んでね?』

「うん、ありがとう」

二人にお礼をいい、通信をきる。
胸の中は少し軽くなつて考えはまとまった。

行こつか、紅助君のところに。

私の、気持ち伝えに。

※

ノックを数回、声をかける。

「私、はやてやけど」

「はやて？ 何かあった？」

「ちよつとお話せんかな？」

「ん、わかった」

返事と共にドアが開かれる。

その先に紅助君がいて自然と笑みが零れた。

「返事、言いにきたんやけど」

「ああ、そつか」

真つ直ぐ見つめた紅助君は薄く笑みを浮かべている。

彼には不安とかは無いのだろうか。

「まず、やけど。紅助君が言った『好き』ってそういう意味、でいいかな？」

「うん、はやてが考えているのでいいと思う。俺ははやてが好きでずっと一緒にいたい」

真つ直ぐな言葉。頬が熱くなるのがわかる。

「じゃ、じゃあ、聞いてくれる？」

「わかった」

私はこんななドキドキと落ち着かないのに紅助君はいつも道理で少しだけ気に食わない。

でも、逆に考えると紅助君が落ち着いて聞いてくれるなら私も安心

して話を出来る。

「私は、紅助君に好きって言ってもらって嬉しかった」

本当に、嬉しかった。

戸惑いの方が大きかったのはあるけど確かにそういう気持ちもあつた。

だからこそその戸惑い、ともいえるかもしれない。

一緒にいて不快に思ったことはないし気が付けば手を繋いでいるくらい私は彼に気を許している。

だから彼が私に向けるような気持ちは私にもあつたのだろう。

「でも、ね」

でも、それでも、私はそれじゃあ駄目だ。

「私は、紅助君と一緒に出来ない」

その言葉に紅助君はすこし驚くように目を見開いた。

少し勝つたような気分。私はこの一言が言えたことに少しだけ安堵し言葉を続ける。

「理由はいっぱいある。例えば私は紅助君を満足させられる自信が無い」

それは負い目からくるものなんだろう。

また私と入ることで紅助君に何かあるんじゃないか、そんな不安。

そして私は今でこそ夜天の主ではあるが過去に闇の書の主であつたことは変わらない。

そのため恨まれることもある、私はそれを覚悟しているし何をされたつてかまわないとさえ思っている。

でも、それで紅助君が巻き込まれるのは駄目だ。

私のせいでもう紅助君を傷付けたくない。それだけは絶対。

「それに私はこれから、やりたいことがまだ沢山ある。やらないといけないことが沢山ある」

六課が終わりじゃなくこれからもそしてその先も。

それがいつ終わるのかはわからない、もしかしたら私だけじゃ終われないのかもしれない。

「だから、私は紅助君を一番にできん」

確かに紅助君と一緒にいるのは幸せだしどんな時だって安心できる。

でも、それに甘えてはいられない。ずっと頼りつきりでは私が駄目になってしまう。

それが怖い、何も出来なくなってしまうのが怖い。私は前に進み続けていたい。

「私は皆が思ってるほど器用な人間やない。だから人が人を好きになるってもっと簡単な話なんかもしれないけど、私は紅助君が好きでいてくれるだけ好きでいてあげたい」

それは私の一番になってしまいうくらい。

もちろん紅助君がそんなに私の事を思ってくれている、なんて自信は無い。

でもどんな好きでも、どんな愛でも、私は一番嬉しくて、幸せで、だから辛い。

進み続けるために生きるか、

一人のために生きるか、

どちらか一つしか選べない自分が辛い。

「紅助君の気持ちは嬉しい。でも、ごめん」

私は、馬鹿な人間や。

精一杯、作りに作った笑顔を顔に貼り付けて紅助君を見た。

「えっ？」

思わず、口から零れたのは疑問符。

笑っていた。

彼は、紅助君は私を見て笑っていた。

何で、何が？混乱する私に彼は大きく口を開いた。

「それがどうした」

それが、どうした？

「理由はわかった」

「だったら！」

「自信がないなら、毎日俺がはやてといてどれだけ満たされるか教えてやる」

「なっ!?!」

開いた口がふさがらない、というのはこういう意味なのだろう。

カツ、と今まで以上に頬が熱くなる。

「そ、そんなもんだいじゃっ」

「それに」

熱を逃がすように強く吠えた言葉がさえぎられる。

「はやてが一番にしてくれなくていいんだ」

だって、そう彼は私を見た。

目と目が合う。縫い付けられるように目が離せなくなる。

「俺がはやての一番になるから」

真っ直ぐ、ただ真っ直ぐ。

なんで、紅助君はそうなの？

「はやてに好かれるなら何だってする。俺がはやての何番目でも一番まで上ってやる」

いつだって私の前じゃ笑顔で、辛いときとかないのかな？

私という嫌な事とかないのかな？

そんなことを考える私に彼はやっぱり笑う。

「俺ははやての隣にいたいから」

馬鹿馬鹿しい位に単純でくだらない。

でも、そういうのずるい。

「紅助君の、そういうところ……嫌い」

そうやって甘えさせて、駄目にさせる。

私の気持ちなんて考えてないんじゃないのか。

「私は、私だって……っ」

握り締めた拳は痛くて、まぶたの奥から零れそうになるそれを隠すように俯く。

「紅助君と、一緒にいたいっ」

でも、それじゃあ、

「紅助君は、私になんとも思わないのっ？」

迷惑だって何度だってかけただろう。

ソレに今だって、迷惑をかけているんじゃない。

「私はっ、私、は……っ」

嗚咽交じりの言葉、かつこ悪い。

ついに零れだした涙、それを伸ばされた手で拭われ引き寄せられる。

「あっ……」

わかったのは抱き寄せられた、ただそれだけ。
暖かくて、心地よくて、安心して、

「そういうのが、ずるいつ」

見上げた視界には紅助君の顔が広がっていて、また涙がこぼれた。

「私だって、紅助君がっ」

手を繋ぐでもなく、抱き合うでもなく、

「好き」

触れ合うそれは、熱く、甘く、幸せで、

「紅助君は、私のために生きてくれる？」

永遠に繋がっていたい。

※

「結局、はやてちゃんとコウ君ってどういう関係になったの？」

あれから数日またの休日に集まった私達が話すのは結局その話題。
「うんうん。付き合うことになったの？ それとも本当に結婚とか
？」

「んー、結婚はまだ早いかな？」

「じゃあ、付き合うことに？」

「どうだろう？ えっと、私と紅助君の関係、は」

私と紅助君の関係、

それを簡単に表すなら、

「家族、かな？」

心と心で繋がった存在。

彼は、私の大切な家族。

ああ、今日も幸せや。

18. しんじてよ

昔、私が紅助さんに恋をしてから少し時がたった頃。

あることを紅助さんに聞いた。

紅助さんがいつもデバイスと共に首にかけている指輪のことだ。

確かその時はただ話題が欲しかった、それだけで聞いたことだったっけ。

少しでも紅助さんと話していたくて、何でもいいから、なんて口から出た言葉。

「その指輪、いつも首にかけてますよね？」

「うん？」

不意を付くように言った突然の問いに紅助さんはこちらに目を向けた。

「指輪です、指輪。指にかけるわけでもないしお洒落って言うにはかけてない日は無いですし」

「ああ、これ？」

そう首にかかった指輪を手にとった紅助さんが少しだけ微笑む。

優しげなその表情に小さく胸が震えた。

そんな自分の反応に恋をしてるんだなあ、なんて思いつつ紅助さんの声に耳を向ける。

「俺がミッドに渡ってくるときに貰ったプレゼント、かな？」

「フェイトさん、とかからですか？」

「いや、フェイトの友達で、まあ、俺の友達でもあるやつから」

……紅助さんの友達。

改めて私が知っている紅助さんは彼のほんの一部でしかない気がする。

私は紅助さんの私と出会う以前のこととはほんの少ししか知らない。

管理外世界出身であること。片親であること。何かがありミッドへ渡ってきたこと。

そのくらいしか私は知らない。

勿論知りたいとは思うけれど聞こうとまでは思っていないかった。

いつか話してくれる時が来ればいいかな、くらいで。

信頼していたしその分信頼されているとも思っていた。

だから紅助さんにどんな友達がいても、いくら紅助さんがそれを嬉しそうに話していても、

私は、別に、

だけど、

だけど、

少しだけ、少しだけ嫉妬して、

少しだけ、後悔して、

やっぱり、聞かなければよかった、とか。

思ったり、して。

「ティアナ？」

気付けば私は紅助さんの顔から視線を逸らすように俯いていて、それを心配した紅助さんが私を呼ぶ。

自分でも今のこの気持ちを制御できないことはわかっていた。

小さい事でこんなにも落ち込んだり、逆に喜んだり。

もどかしく煩わしいこの気持ち、しかしそれが愛しい。

ゆっくりと顔を上げ紅助さんを見る。

浮かんでくるのはやっぱり、好き、そんな気持ち。

もう、どしようもない。

※

空へと桃色の砲撃が上つていく。

結界を引き裂いて上へ上へと昇っていくそれはゆっくりと空に溶けて消えた。

「……なのは、さん？」

見覚えのある魔力光、やはり何者かとの戦闘中だったのだろうか。レリックの回収が滞りなく終了し、ライン曹長から聞かされたのはさんと今日配属される予定だった外部協力者に連絡が取れないという話。

その外部協力者の名前を聞いた時、正直のところ聞き間違えたのではないかと本気で疑った。

外部協力者は、紅助さん、私の義兄だ。

何度も聞きなおして、やはりそれが自分の知る紅助さんだとわかった時に感じたのは少量の怒りと多量の情けなさだ。

もう何年も前の事だけれど私はしっかりと覚えている。

陸士学校に入学する前、私は紅助さんと約束したのだ。

私は管理局へ行き、彼は彼の選ぶ道を行く。

私は自分で、自分の力でこの道を歩むことを決意した大事な約束。

紅助さんに私の、私と兄を背負わせたくはなかったから、決めた約束。

なのに、

約束したはずだよね、

私が信じられなかったのかな、

頼りなくみえたのかな、

そんな言葉が頭の中をグルグルと回る。

聞きたかった。確かめたかった。

彼の真意を。

なんで私との約束を破ったのかを。

だから、空へと昇るそれを見た瞬間に私の足は動いていた。

頭の中の冷静な部分では危険だ、様子を見るべきだと警告を促しているのに足は止まらない。

幸運だったのはそれは戦闘終了の合図であった事。
不運だったのは私は見てしまった事。

紅助さんに良く似た、
誰かを。

その場から去ろうとするその人物と一瞬だけ目が合う。

輝くような金色の目に目を奪われる。

それも一瞬の事、その誰かはすぐさま背を向けると姿がぼやけて姿を消した。

そこに残ったのは倒れ付すなのはさんとソレに駆け寄る紅助さん、
そしてそれをただ見ていた私。

何がどうなって、とか。
わからない。

私の理解の外で何かが起こっている気がした。

※

「本日より古代遺物管理部、機動六課に勤める事になりました七峰紅助です。一応嘱託魔導師、外部協力者として雇われています。どうぞよろしく」

そう、紅助さんが簡潔、というよりてきとうに自己紹介をしたのを見て頭に血が上るのを感じた。

任務が終わり、六課の本部へと帰還した私達に待っていたのはそんな事。皆も怪我を負ったのはさんの事を気にしているのだろう、その表情は優れない。

私だった元はと言えば紅助さんが約束を破った事を問うつもりだったはずだ。

それがあんな摩訶不思議な状況に陥ったせいでも有耶無耶になって

いた。

勿論あの紅助さんのそっくりさんの事も気になるのだが口に出すと紅助さんは良い顔をしないのだ。言いたくない事を問い詰めるわけにもいかないし迷惑もなるべくかけたくはない。だから今はそのことを忘れる事にした。

実を言うとはやてさんから口止めをされている。「見たものは忘れたほうがいい」なんて古臭い上にわかりにくい台詞で、だったが。確かに気にならないと言えば嘘になるし今すぐにでも知りたいと思っている。

けど、私は紅助さんを信じているから。いつか話してくれるって。だから遅くても早くても関係なんて無い。

信じられたいなら信じる。

そんなくさい信念を私は持っているのだから。

と、話がずれてしまったが。

ようは私が信じていた紅助さんに裏切られた。そういう話だ。

紅助さんが一人でいる時をみて話しかける。

「紅助さんー！」

「んあ？」

間抜けな声をあげる彼を見てまた怒りの度合いが少しだけ上がる。曲がりなりにも紅助さんは私の兄なのだ。彼が私の義兄だと言うことを知っているのはスバル、フェイトさん、そしてはやてさんの三人だけだ。別に話す必要なんてないと思っていたし一度話してしまおうと余計な事まで口にしてしまいそうであまり話したくはない。

まあ、兎に角私と彼が家族だと知っている人物は限られるのだが。だからといって兄の情けない姿を人前に晒せるほど駄目な妹をしていないのだ。

猫背になった背中を叩いてピンと伸ばす。ポケットに突っ込んだ手を引っ張り出して寝癖で乱れた髪を手櫛で寝かしつける。

「よしっ」

「……えつと、なに？」

怪訝な表情を浮かべて私を見る紅助さんに指を突き付けてやる。

「仕事中はちゃんとしてください！」

「え、ああ、うん」

「返事はしつかりっ！」

「は、はい」

「もう……えつと、それじゃあ話、いいですか？」

私の言葉に紅助さんは苦笑する。

紅助さんだってただの馬鹿ではない。私の言いたいことくらいはわかっているのだろう。

「なんで紅助さんがここにいるんですか？」

「…仕事だから」

当たり前だろ、と言うように口を開いた紅助さんを睨む。

「約束、覚えてないんですか？」

「……覚えてるよ。けど俺は別にはやてやフェイトに誘われたからここにいるわけじゃない。もっと上にいる人物に雇われてる。簡単に断れる話じゃなかった」

「でもっ」

「ティアナを信じていないわけじゃないよ」

「本当、ですか？」

「嘘付いてどうする。それとも、ティアナは俺と一緒にはいやとか？」

「そんなのじゃないっ。そんなのじゃ、ないんです、けど……」

思わず俯いてしまう。

本当はこんな迷惑をかけたかったわけではなかったのに。

ただ紅助さんは本当に私を信じてくれたのかって、少しだけわからなくなっただけ。そんな子供のような駄々。

信じられたいなら信じる？信じ切れなかったのは私だ。今日の私は本当に駄目だ。なにをやっても紅助さんに迷惑をかけそうな気がする。今の私は彼の側にいるべきではない。わかっているけど、離れ

たく、ない。

そんな私に対して紅助さんは俯いたままの頭を掴み乱暴に撫でてくる。

「泣いてる?」

「泣いて、ません」

「じゃあ顔見せてみ」

「……見せられません。見せたく、ないです」

はあ、と紅助さんのため息が聞こえた。

「泣き虫にはもうなれてるんだよ」

両頬を掴まれ無理やり顔を上げさせられた。滲んだ視界に紅助さんがいて嫌がる私に呆れたよう顔で口を開いた。

「泣いてんじゃん」

「まだっ、泣いてません」

屁理屈だ。まだ涙を流してないだけでまぶたの奥には今にも零れ落ちそうなほどの涙が溜まっていた。

「泣いてもいいよ」

「泣きまっ、せん」

「強がり」

「私、強いっ、強い子だもんっ。泣きたく、ないですっ!」

「知ってる。泣き虫で強情で聞き分けがあるんだかないんだか」

「泣き虫じゃあない、です。こんなの、紅助さんの前だけでっ」

「俺だけ?」

「そう、です」

「じゃあ、俺だけが本当のティアナをしっているわけだ。まあ、ティアナのこととは全部知ってるけどな」

だから、

「色々考えてることも知ってるよ。俺のことで迷ったりしてることも」

だけど、

「俺は、信じてるから」

「なに、を？」

「ティアナが俺のことを信じてくれてるって」

そう言つて紅助さんは笑う。

「信じてやらなきゃ、信じれないだろう？」

聞き覚えのある言葉に笑みがこぼれる。

「くさい、すぐくくさいですよ」

けど、

「嫌いじゃ、ないです」

私にも紅助さんと同じものがある。

それが嬉しく、幸せで、

私は、

私は醜く甘い恋をしているようだ。

19. Again

やっぱり私は、コウ君に恋をしていた。

医務室からこつそりと抜け出した私はコウ君を探していた。

何年も今日という日を待ち続けてきた。

何度も、何度も想像した今日。それが今なんだというのが少し信じれなくてまるで夢を見ているような気分だ。

一歩ずつ踏み出す足がふわふわと浮かび上がりそうに歩を進める度に胸の奥が高鳴った。

鏡を見つける度に身嗜みを確認していたり男性局員の姿を見つける度に緊張してしまったり。

いくら時間が経とうと落ち着かない自分がいる。

それが恥ずかしいどころか嬉しくて気が付けば笑顔を浮かべている。一言目はなんて言おう？

久しぶり、かな？

遅い！って文句をいって見るのもいいかも。

おかえり、って笑ってあげるのもいいなあ。

とりあえず抱きしめちやうのもの……

うん、それがいいかも。

その一瞬を夢見るように歩き回る。

そんな私を呼ぶ声で私は足を止めた。

「なのは！」

「あっ、フェイトちゃん」

なんだフェイトちゃんか、なんて失礼なことを考えてしまった。なんだか申し訳ない。

「もう大丈夫なの？」

「う、うん。大丈夫なの」

嘘、大丈夫じゃない。

シヤマルさんからは少しの間安静に、なんて言われていたけれど

待っていていられる筈もなく隙を見て抜け出してきたのだ。実はまだ体が痛んでいたりする。

「あ、あのね。コウ君を、探してるんだけど」

「あ、コースケ？えと、私はわからないけど。どこに行ったのかな？」
むう、コウ君はいつたどこにいたのか。

もしかしたらまだ私から隠れてるんじゃないのかな？

そんな風に唸っているとフェイトちゃんがクスリと笑う。

「一緒に探そうか」

「え？」

「一緒に探そう？そのほうが早く見つかるよ」

「いい、の？」

「うん。それに今のなのは凄く興奮してるみたいなんだもん。それじゃあコースケに変な子って思われるよ？」

「ほ、本当!？」

「本当。だから色々話しながら探そうか。少しは落ち着くだろうか」

「う、うん」

……私はそんなに興奮していたのだろうか？

そりゃあ胸はドキドキうるさいし顔は熱いし体を動かしてないと落ち着かないけど、変な子って思われるほどじゃ…

悶々と頭を悩ます私を見てフェイトちゃんちゃんが笑う。

「ほら、行こう！」

「あつ、うん。待って！」

引つ張られる腕によるめきつつも表情は笑顔を浮かべている。

思い返して見ればこんなに素直に笑えたのもいつぶりか。コウ君がいなくなつて私だけじゃなく、コウ君と付き合いのある人達の誰もが感じていただろう重い緊張感。

何故こうなつたのか、何が悪かつたのか。皆が考えてそれぞろの答えを出した。

私の力不足のようにフェイトちゃん客観視をしていたと言った。だから私は力を付けフェイトちゃんは自分の為にコウ君を探した。

それでもその緊張感は拭えるものじゃなかった。
また、次は、なんて考えないわけがない。

一度の失敗で、小さな間違えで、その代償がずっと纏わりついていった。

だけどコウ君が帰ってきた今、その嫌な緊張感が消え去った。
忘れたわけではない。

ただ嬉しかった。

まだ終わっていないなかったことに、そして次があることに。

だから次はこうならなかったために、

後悔をしないために、

私達はやらなければいけないことを決めた。

だから安心して笑える。

そんな今がきたことが嬉しかった。

※

「コウ君と私が出会った時の話？」

「うん。そう言えば聞いたことなかたなって」

「そうだったかな？」

フエイトちゃんの言葉に当時の事を思い出す。

あの頃はお父さんが入院し私の周りが慌ただしくなっていたときだ。

そうは言っても子供の私では家族にできることなんて無く私はただ手の掛からない子供を求められるだけだった。

もちろん私はそれに従った。本当は寂しかったけど、なんて言えずに。

そんな中で出会ったのがコウ君。昔で言うコウスケ君。

昔の私は彼の事を好きどころか嫌いとする思っていた。

当時の私は人付き合いが苦手でそんな私を気にしてくれる子なんてのもいないからいつも独りでブランコを揺らしていた。

それに対してコウ君は人気者でいつも何人かの塊で遊んでいるのを見かけた。理由は知っている。彼は私と歳が同じなのに何でも知っていたし何でも出来た。

別に羨ましかつたってわけじゃない。誰かと遊びたいとはあまり思えなかつたし大勢の人に囲まれるのは苦手だつたから。

だから、コウ君が私に近づいてきたことは正直、迷惑としか思えなかつた。

「俺と遊んでください」

そんな畏まつた風に言われた言葉を今でも覚えている。

突然私の前に立って彼が口にした言葉だ。皆から人気のある彼が何で私の前なんかにいるのかがわからなかつたし彼の後ろに見える数人の影がこちらに向けてくる視線が怖かつた。

だから最初はコウ君となんて遊びたくなくてブランコを一漕ぎしてコウ君を蹴飛ばし、逃げ帰つたつて言うのが私と彼の出会い。

勿論これで終わりつてわけじゃないよ。

そんな断り方をした次の日、またコウ君は現れた。

同じように畏まつた風に言葉を吐くコウ君に少し困惑した。

私としてはかまつて欲しくないつて言うのが強かつたからその日も蹴飛ばしてやつたつて。

でもその次の日もまた次の日も私のところにくるんだから、絶対おかしいつて思つた。

「もしかして私に惚れてるんじゃない」

最終的に出た答えがそれ。

今になってみると顔から火が出そうなほど恥ずかしいよ。フェイトちゃんだから話すんだからね。

まあ、そう考えるとなんだか気恥ずかしくなつてしまつて作業になつていたコウ君を蹴飛ばすつてことも出来なくなつちやつて。

気が付いたらいいよつて返事をした。

一緒にブランコを揺らしてコウ君の迎えが来るのを待つてた。でもそれがなかなか来なくておかしいなつて思い始めた時。

「何時帰るの？」

ってコウ君が口にした。

こっちの台詞だ！なんて怒るとなんでか笑って返されて、

「迎えは来ない」

って。

コウ君はその頃からしつかりした子だったからそうゆう子供だけのところは親は気にしてくれないって。

じゃあなんで遅くまでいるのって聞くとお前が聞くかって風にため息を吐いて、

「君が帰らないから」

の一言。

最初は意味がわからなかった。

なんで私が帰らないとコウ君が帰れないのか。

結局わからなくてその日は心配して探しにきた家族にそれぞれ怒られながら帰ったんだ。

コウ君の言葉の意味がわかったのがそれから一週間くらい後。

その間もコウ君とは遊んでいたんだけど私にはあの意味が全然わからなくて。

いっぱい考えはしたんだけど結局わからなくてお母さんに聞いたんだ。迷惑にならないかな、なんてビクビクして聞いた答えが、

「心配してくれてるのよ」

っていうのだった。

私が一人だったから？寂しそうだったから？色々理由は考えられただけで結局「惚れているから」って答えになった。

そんなのでも私は嬉しくて私を必要としてくれる人がいるんだって凄く幸せな気持ちになれた。

「心配してくれてるんだよね？」

気付かされた次の日。私は得意気にコウ君に話したんだけどコウ君はくすりと笑ってそうかもね、なんて言う。だから「あ、やっぱり惚れられてるな」って私は。

思わせぶりなコウ君が悪いんだよ！

絶対にそうだ！

でも、まあ、気が付いたら好きになっていたのは私の方で……

コウ君が善意でしてくれたって気付いたのもそれくらいの頃。
なんで気付いたかは、恥ずかしいから内緒。

私が好きになった理由は多分ただ側にいてくれたから。

支えられてたんだなって、今になってわかる。

一人でいるのは寂しいから。

小さな嬉しさとか、幸せとか、

そんな掛け替えのないものをくれるコウ君が好きになったんだ。

「こんなところ、かな。なんだか恥ずかしい」

「ふふ、コースケはあんまり変わらないみたいだけど人付き合いが苦
手なのはなあ。少しおかしい」

「そ、そうかなあ？」

「そうだよ。あつ！」

「フェイトちゃん？」

「コースケ！」

「え？」

※

その光景を見た瞬間、頭の中がかつと熱くなった。

いたのはコウ君とティアナ。

声はよく聞こえない。

ただコウ君の姿だけが視界いっぱい広がって。
考えるより先に体が動いていた。

フェイトちゃんの声は聞こえた。けど無視をした。

コウ君の手をとって引つ張る。

コウ君と、ティアナ。二人とも驚く顔を横目で見つつ私はコウ君を連れ去った。

ただ二人つきりになりたくて。

人気がない場所に付くとコウ君を壁に押し付ける。抵抗されないことに疑問はあつたけど気にはしなかった。

顔を押しさえつける。

驚愕の表情。

唇を奪った。

荒々しく。

熱く。

執拗に。

一方的なそれに意味があつた訳ではない。
ただ気持ちを形として伝えたかっただけ。

また会えて嬉しかった。

ずっと待っていた。

この時を、この一瞬を。

手を繋いで、抱きしめ合って、口付けして。

何でも伝えたい。

私の気持ちを、

好き。

好き。

好き。

好き。

大好きなんだって。

ねえ、伝わってるのかな？

私はね、

ずっと君を待っているんだよ？

ずっと、ずっと。

褒めて、くれるかな？

頭を撫でて欲しいな。

笑った顔を見せて欲しい。

ゆっくりと唇を離し彼の顔を見る。

「久し、ぶり、遅い、よ……ずっと待ってた、私っ」

コウ君を見るまでずっと考えていた言葉が出てこない。ただただ零れるのは拙い言葉と頬を伝う冷たい涙。そんな私にコウ君は笑った顔を見せ、包み込むように抱きしめられた。

「暖かあい……」

幸せで、ただ幸せで。

抱き合う私の耳元で彼がささやく。

「ごめん、ごめんな」

「コウ、君？」

「そりゃあ、心配かけたよな」

「心配、したよ」

「謝ってもだめかもしれない。だから、色んな事を話したい」

「話、す？」

「今まで見てきたこと、二人で見れなかったこと、口にした食べ物とか、聴いた曲とか、いっぱい張る。勿論、なのはと一緒にしたいたい事も」

「うん、私もコウ君としたいことある」

「いっぱい話そう。これからのことも、これまでのことも」

「うん、うんっ！」

声を聴くだけで、嬉しくて。

まるで今まで溜めていたものが流されるような気分。

世界が一気に色を取り戻す。

彼という一色を、

貴方が、ここにいます。

それだけで私はこんなにも生きている。

もっともっと、

熱く、

深く、

溶け合うほどに繋がりたい。
伝えたいよ。

好きでも、

大好きでも、

伝えきれないこの気持ち。

大切な、

大切な、私の想い。

ねえ、だから、

「おかえり、コウ君」

「ただいま、なのは」

私は弾けるような一瞬に恋をしているようだ。

私、高町なのはにとって彼という存在は所謂ヒーローと呼ばれるそれと同じ意味を持っている。

それは私が作り出した偶像だったとしても、彼は確かに私の物語のヒーロー、主人公で最も憧れて恋い焦がれた存在だった。

それは、今この時も、
彼は私の世界の中心だ。

※

私のために悩んでいることは知っていた。苦しんでいることも知っていた。

それなのに私は何も出来なかった。

私は魔法と一緒に無くしてしまった何かが、私にその一步を踏み出せなくさせていた。

だけど彼は立ち上がり、今、私の前にいる。

目の前に広がる彼の顔は涙で歪んでしつかりとは見えない。

いつもみたいに微笑んでくれているのだろう。

それは簡単に想像できた。

コウ君は、私みたいに泣かないもんね？

「次は高町の番」

彼の声はやけに落ち着いていた。それが私には悲しくて。

私はいつだって彼の背中を探している。

見えないほどの差を感じるその背を。

彼と私の違い。

目の前の壁を越えられるか、越えられないか。

小さな違いでこんなにも遠い。

昔はそんなけとを考えもしなかつのに。

二人でいるだけで楽しくてそれで幸せだった。

彼と見た多くのは綺羅々々と輝いていて、全てのものが新鮮だった。

二人で歩いた街の風景だったり。

二人で口にした料理の味だったり。

魔法だって、そうだ。

ユーノ君との出会いから始まって、コウ君の本当の姿を知った。

私にも出来ることがある、彼に今までの恩返しができる。

そうすれば、彼と対等な私に、

なんて、

夢を、見ていた。

彼の両腕からは二度とあの温かみを感じる事は出来なくなり、私は返しきれない程の恩をもらった。

もう、あの掌で撫でてくれることもあの腕で抱きしめてくれることもない。

私が、そうした。

それでも、

そうだから、

私は弱くて、

彼に甘えてしまう。

自分の罪を認めたくなくて、

「必死に甘えて、逃げて、隠して、

今の私が、彼に出来ること。

そんなのって、あるのかなっ？

※

「わたし、はっ」

口を開けば声は情けないほどに震えていて、それでもコウ君は笑って聞いてくれる。

それが、辛い。

「コウ、君につ、何かしてあげたくて……コウ君が、私にしてくれたみたいに」

涙を流せば流すほど情けなくなる。

「コウ君は、十分私を幸せにしてくれてるよ、次は、私からずっと思ってた」

でも、ね。

「私は、アリサちゃんみたいに頭はよくないし、すずかちゃんみたいに体を動かすのが得意じゃない。だから、私が出来るのは魔法だけでっ」

みつともない私にコウ君は頭を撫でてくれる。

嬉しくて、

幸せで、

でも、冷たくて。

涙を拭ってコウ君を見た。

やっぱり、笑ってるんだね。

なんで、笑えるの？

私は、無理だよ。

「私はっ、私は、もう、嫌だっ」

奥歯を噛み締める。

私に出来ることがなんて一つもなくて。

魔法だって、私には無くなってしまった。

毎日が怖くて、寂しくて、苦しい。

「コウ君と、一緒にいたい」

「ずっとそばにいてほしい」

「魔法も、もういららないから」

「一緒に、いいよ」

「一緒に笑って」

「一緒に泣いて」

「一緒に生きて」

「私は、君が、好きなの」

「だから、寂しいときは隣にいて」

「もう、一人にしないで」

「一生、私の隣にいて」

「だって」

「私が」

「コウ君を」

「愛してるから」

「だから」

私を、助けて。

声が、風に乗った。

私は、なんてみつともないんだろう。

泣きながら、

笑って、

こんな事を口にしてる。

なんて様だ。

この様が私で、

私のヒーローは、

笑って、

頷いた。

やっぱり。

私は、

今この瞬間、

彼に救われたようだ。

20. Jealousy

私は、■■■だったんだと、思う。

天井に手を伸ばしてみても気付く。

届くはずのないその行為を今まで何度繰り返しただろうか。

届けば何かが変わると思った訳じゃない。それは望みだったのだろうか。

いつか、届くから。

絶対、届かせるから。

だから、

何かが、

世界が、

変わってよ。

※

目蓋を持ち上げてやっと、私は自分が眠っていたことに気が付いた。

こんなにもすつきりとした目覚めはいつぶりだったか。

「夢、見なかったな」

外はまだ暗い。

時計に目を向けていつも起きるよりより数時間も前だったことを確認する。

どうしようかと、考えた時に最初に浮かんだのは彼の顔だった。

「声、低くなつてた」
背も伸びていた。

誰よりも知っていると思っていたけど、想像していた姿とはどこをとつても違つていて。

初めてかもしれない、彼に対して新鮮、なんて思うのは。

「新鮮、新鮮か」

昨日、彼の口から聞かされた言葉には私の知るもとなど一つもなく、なくて、

「あ、ああ、あれ？」

私は、誰を知っていた、の？

彼は、コウ君で、

彼は、七峰紅助で。

彼は、

カ、れは、

「こ、紅、コウ君っ？」

そ、ういえば、

そうい、えば、

彼は何度も、何度も口にした名前が、
あつたような、よう、な、あ。

「テイ、アナ」

私は知らない、の、に、知ってるの？

わた、しは知、ら、な、いの、に。

「な、なに、何だろう」

おかしい、

口は、笑うのに、

涙が、流れる。

おか、しい、

この、気持ち、気、持ち、い。

初めての、気持ち、ち、だ。

痛く、て、

苦し、くて、

怖、くて、

辛い。

怒りのような。

違う、ような。

憎しみのような。

近い、ような。

「新鮮、だな」

こ、んな、気持ち、は。

あ、ああ、あ、あああ。

なんて言うの、かな。

「ああ」

羨ましい。

妬ましい

これは、

嫉妬だ。

※

「おはようっ、コウ君！」

「ん、おはよう」

朝食をとるため向かった食堂、そこに彼はいた。すかさず彼の隣に腰を下ろし笑顔を向けた。

小さい頃にも何度か考えた疑問ではあるが、彼が隣にいただけでなんで笑顔になってしまうのだろうか？

我ながら成長してないな、なんて自嘲する。

「なにかいいことでもあった?」

「え?」

ほんと、投げかけられた言葉に首を傾げる。

「いや、にこにこしてるからさ」

「あー……にやはは」

思わず頬を掻く、自分でも分かっているがいざ他人に指摘されてみるとなんだか恥ずかしい気分になる。

「えつと、そのね……夢見がよかった、かな。その程度だよ」

「夢か。俺も今日は夢を見た」

「コウ君も?」

「ああ、昔の事」

ズキリと、その言葉に胸が痛んだ。

今まで悩まされてきた夢を思い出したからだ。

こればかりは彼を攻めるわけにはいかない。

あれは私の弱さだったのだろう。それにあの夢や過去があったからこそ今がこんなにも幸せなんだろうとも思う。

だから、今は、

「どんな、どんな夢だったの?」

少しでも笑おう。

「なのはがいて………あー」

「コウ君?」

「んー、悪い。忘れちゃった」

繕うようよコウ君が笑った。

どんな夢を見たのだろう。

どんな、私を見てくれていたのだろう。

なんだか、

顔が緩む。

「ねえ、コウ君」

「うん?」

「また、会えてよかった」

「……………うん」

二人で、二人で笑えてる。

これでいいんだ。

たぶんこれが幸せで、

だから、

……………。

でも、

なんでだろう。

胸の奥、

ずっと感じてる。

これはまるで、

身体が引き裂かれるような。

心と体が分かれてしまうようだ。

21. わたしも、あなたも

最近の私は調子がいい。

あの紅助さんの偽物が現れた一件以来私の調子は上り傾向にあった。

オークション会場の警備やロストログアの回収等、数回の任務はあつたけどこれといったアクシデントもなく終えている。

慢心なのかもしれないが今更円盤タイプのガジェットには負ける気はしない。飛行タイプには空戦適性が低い私一人では怪しいがスバルとならば一緒ならば。

球状タイプはデータが少ないので微妙だがちびっ子達の話から高火力のキヤロ、触手をかいくぐれるだけのスピードをもつスバルかエリオさえいれば………ん？ となると私の必要性は？

……ん、訓練もいい感じだ。

最近はなのはさんも厳しくなってきたけれどその分だけ力が付いてきている実感もある。

そう言えば気になっている事が一つ。

なのはさんの視線だ。

まあ、私の気のせいの可能性もあるわけだが………彼女は私を見るときだけ目つきが悪くなるような気がする。

憎い、と言う感じではない。

……嫉妬？

これでも訓練校ではいい成績をとっているからそういった視線には慣れているつもりだ。

とは言ったものの、私がなのはさんに嫉妬されているものとは何なのだろう？

情けない話ではあるが、私がなのはさんに勝っている所など一つと

して無い。と言うか勝つ想像すら出来ない。

彼女は管理局の顔とも言ってもいいエースオブエースに対して私は「努力が得意です」がキャッチコピーな平凡魔導師だ。

どちらかと言えば私が嫉妬していい位のはずなのだけれど。

まあ、私にはエースなんて立ち位置に興味は無いのだが。

私は、まあ、兄の夢を叶え紅助さんの隣に立ちたいだけ。

………なんて言うのは嘘。

本当は紅助さんに色々してほしいし色々したい。

恋する乙女ですから。なんて。

と、そう言えばもう一つ気になる事がある。

紅助さんとなのはさんの関係。

恋人同士では無いらしい。

フェイトさんの話ではあるが。

話を聞いた時のフェイトさんは格好いいフェイトさん状態ではなくぼやんとしたフェイトさんだったので信憑性が若干薄め。本人に聞いてみれば済んでしまう話ではあるが、そうもいかないのが乙女だったりするわけで。

もし紅助さんの口から恋人だと聞いてしまった場合、

泣く。

ただでさえ彼の前では涙腺が緩くなってしまいうえに泣き虫だなんて思われているのだ。出来るだけ私のイメージ改善のため避けていきたい。

なのはさんに聞いた場合では、

まず聞くことが出来ない。

目が怖いし、近付き難いし……

恋人じゃないって言うのが当たってれば一番なんだけれど……
なるようにならないのが人生だったりして。

……さて、そろそろ現実から目をそらすのは止めよう。

現在、私が立っている場所は六課の訓練所。

隣にいるスバルと共になのはさんと向き合っている。

訓練が一段落し次の段階に行く前に各隊長との模擬戦を行い自分の実力をしろう、と言うのが今回の簡単な経緯。

つまり、

私&スバルVSなのはさん。

というわけだ。

自信がないわくではない。

しかし、

「やっぱり、睨まれてる……」

なのはさんの視線が怖い。

何故私ばかり見つめられているのだろうか……

何事も無ければいいのだけれど。

※

「そろそろ始めようか」

丁度、心の準備が整った頃、なのはさんから声がかかった。

「はいっー!」

「はい……」

相変わらず元気のいいスバルの声に掻き消されつつ返事をする。

なのはさんはそんな様子の私達を見て笑……わない。私だけ睨まれた。

「それじゃあ」

なのはさんが手を振り上げる。納得のいかない所はあるが何とか気を引き締める。

「スタート！」

《P h o n i x W i n g》

振り下ろされ、私とスバルが飛び出した。

同時、

私が飛び込もうとしたビルがなのはさんの魔法で真っ二つに割れた。

「ずっ、るい!!」

文句を言いながら落ちてくる瓦礫を避けビル群の中へ隠れる。

今回の訓練所の環境設定はビル街、隠れられる箇所は多々ある。

こちらの作戦はいつも通りスバルが相手を引きつけつつ私は状況管理と援護、ついでに隙を見て攻めるといった所。

ビルの隙間を駆けつけつつ幻影系の魔法を使うのも忘れない。

マーカ―を付けた場所に私の姿が浮かび上がる程度であるがサーチャーを騙す程度には使えるはず。

こちらのサーチャーを確認するとスバルがウイングロードを駆使して駆け回っている。

つかず離れずなのはさんを牽制し魔力弾に捕まらないようビルの影を使って動き回っている。

「こっちも負けてられないっ」

そう意気込んで更に一步踏み出した、瞬間。

仕掛けていた幻影が全て墜とされた。

「なっ!？」

思わず後ろを振り向いたと同時に、私の背中を追うサーチャーを発見する。

サーチャーの後方には追従するように数個の魔力弾が飛んでいる。恐らく私との接触と同時に幻影を墜とすようコントロールしたのだろう。

幻影を墜とした理由は、

こちらのサーチャーが映す。

なのはさんの口角が持ち上がるのを。

私を脅かす為か。

「性格、悪いっ!!」

吐き捨てるように言って飛来する魔力弾にクロスミラーージュを向ける。

迎撃に放った魔力弾、それが相手側の魔力弾に避けられるのを見て舌を打つ。

ただの追尾型じゃ無い。一発一発をなのはさん自身がコントロールしている。

スバルが同様の魔力弾に追われている事を頭の端で捉えて更に舌を打った。

あの人はいったい何発の魔力弾を操れるのかつ。
ステップを踏み魔力弾を避ける。

幸い急な制動は出来ないようで避けた魔力弾は円を描くような軌道で再度私に向かつてきた。

「相手が避けるならー!」

再度二発の魔力弾を射出、一発は一拍遅らせて。

一発目の魔力弾がぶつかる瞬間、案の定先ほどと同じ様に避けられる。

が、同時に避けた軌道に二発目の魔力弾が炸裂した。

甲高い音をもって破裂する両者の魔力弾。

回避先の算出、基本の基本といったところか。

やはり数がある分だけ動きは緩慢だ。一発ずつ対処すれば。
「だいじょう」

ぶ、と眩こうとしたその時、背後からの魔力反応。
高速で接近する魔力弾。

だからどれだけ操ることができんのよ!?

そう、文句を口にするより速く、その魔力弾が背中に炸裂した。
サーチャーでなのはさんの口角が更に持ち上がるのを確認して、

「ふふっ」

思わず、笑ってしまった。

魔力弾にぶつかった私の体がぶれる。

そして皮が剥がれるように形を変え、辺り一帯にオレンジの魔力弾をバラまいた。

その光景を少し離れたビルの影で確認し内心ガッツポーズ。

魔力弾との攻防の中で幻影と入れ替わったかいがあった。

私の使う幻影の魔法は何も『見せる』だけではない。

その気になれば『見せない』ことだって出来る。

だから一度目の魔力弾を回避したステップで私は姿を消し変わりに魔力弾が詰まった幻影を置いてきたわけだ。

この幻影は中に詰まった魔力弾をコントロールする事で打ち出せるのでわりと便利だったりする。

まあ、今の私では一体作るので精一杯だが。

とりあえず今のうちとスバルとなのはさんが目視できる位置に移動する。

どうやら接近戦も出来るなのはさんにスバルはまだ牽制で止まっています、
てはいるが

「状況を崩すとしたら、私か」

とは言ったものの、出来ることといったら隙をつくくらいか。

クロスミラーージュに魔力を貯めつつその機を待つ。

スバルが何時までもつか、それを考える。

使い潰す訳ではないが私のポジションでのアイツの扱いを悪く言うなら『駒』なのだ。

アイツをどうあつかい、勝利まで持つて行くか、私はそれを考えなければいけない。ただ、冷静に。

しかし、勝利の前に最小限の犠牲で、とは付くのだが。

ゆっくりと魔力の動きを悟られないように魔力を溜めると同時に頭を回転させる。

と、この時点で私は考えておくべきだったのは、

『邪魔』

『スバルが何時までもつか』ではなく『なのはさんの我慢がいつまでもつか』だったのだろうか。

『邪魔、邪魔邪魔邪魔邪魔ッ』

サーチャーにのつてなのはさんの声が耳に響く。

その声は苛立ったもので彼女のデバイスに注がれていく魔力を感じ取り思わず目を見開いた。

「スバルっ、離れて!!」

叫ぶと同時、溜めていた魔力を解放する。

《Divine Buster》

が、遅かった。

放たれる光がビル群を薙払っていく。

私の放った魔法を飲み込むようにかき消してなのはさんの砲撃は

スバルのウイングロードを滅茶苦茶に破壊していった。

瓦礫達と共に埋もれていきスバルを視界にとらえるながら、砲撃から逃れていた私のサーチャーはしっかりと映し出していた。

彼女の涙と、言葉を。

『……………邪魔、しないで』

この声音は聞き覚えがある。

私が、兄さんを失った時の。

『私とコウ君の、邪魔、しないでよ』

あつ。

欠片が、揃った。

私への視線とか、態度とか、彼女の涙とか、

まったく、あの人は。

吐き出しそうになる溜め息を飲み込む。

(スバル、大丈夫?)

(な、何とか大丈夫かな)

念話を飛ばし状況を確認し、

「見つけた」

声を聞いた。

(こっちが大丈夫じゃないっ!!)

《CalamityEnd》

手刀一閃。

半月状の魔力刃が飛来し私のいたビルを切り裂く。
とっさにビルから飛び出し魔力で構成したアンカーで隣のビルに
飛び移った。

うるさい心臓の音を無視、なのはさんを見て、
思わず、息をのんだ。

相変わらずなのはさんは私を鋭い目で睨んでいて、

「みんな、私の邪魔して」

相変わらず怖くて、

「私達を、遠ざけて」

だけど、何故か、

「返して」

その顔が、

「ねえ、ティアナ」

あの、祈るようなフェイトさんと被って見えた。

「返してよ」

それはやっぱり、

「私のコウ君を、返してよ」

彼女も、あの人を。

私と同じ。

納得して、苦笑する。

「本当に、紅助さんは」

まるで子供のように顔をくしゃくしゃにして泣くなのはさんを見る。

(スバル)

(ちよつと待って)

「デイバイン、バスターツ!!」

叫び声と共に青い閃光が瓦礫の山を貫いた。

ぽっかりと空いた穴から飛び出してくるスバル。

こちらにも変わらず元気だ。

笑顔を見せる彼女に近づく。

「なに、ティア」

「今回は、私がもらっていい」

「うん？」

「今のなのはさんは私じゃないと駄目なの」

いや、違うか。

「私がそうしたいから、私にちようだい」

「……ふうん」

スバルは目を細めるとなのはさんを見た。

「紅助さん、だね」

よくわかってるようで。

「いいよ、ティアに任せる」

「ありがとう」

「いやあ、恋する乙女には勝てないよ」

「う、うっさい!」

「あははっ、それで私は？」

「まったく……私を、なのはさんの前までつれてって」

「了解!!」

姿勢を低く、スバルはクラウチングスタートで構える。

「それじゃあ、始めようか！」

飛び出す。ウイングロードを伴って空へと駆け上がった。

すかさず迎撃の魔力弾が飛来、それを弾き飛ばしスバルは笑う。

「軽い！ 集中出来てませんよ、なのはさん！」

「うる、さいつ。スバルには、関係無いのに！」

「私はティアの親友ですから関係ありますよ！」

笑みをこぼしながら空を駆け回るスバルにつられ頬が緩んだ。

私は兄妹に恵まれたと思っていたけど、友人にも恵まれていたよう
だ。

「よしっ」

緩む頬を引き締めスバルが残していったウイングロードを登る。

当然、魔力弾が飛んでくるが先行しているスバルがそれを弾く。

「行って、ティア！」

「わかった！」

迫り来る魔力弾、魔力刃、砲撃。

弾き、逸らし、避ける。

正直に言うのが怖い、馬鹿みたいに怖い。

でも私の前にスバルがいてくれるから、

笑顔だって浮かべられる。

「ああ」

もう少し、

「あああ」

もう少し、

「ああああ」

もう、少し、

「あああああ」

もう、少しで、

「あああああああああああ
!!!!!!」

届く、はずなのに。

なのはさんが膨大な魔力が籠もる腕を振るつた。

まるで津波のような魔力の壁が視界一杯に広がる。

恐怖が、体を縛られる。

落ち着け、落ち、着け！

あれは見たところ前面に魔力の衝撃波を放つタイプの魔法。

この距離と私達の速さでは回避は無理。

防ぐしかない。しかしあの威力の魔法に私が防御魔法を張ったと
ころで焼け石に水。

防ぐ事は、出来ない。

どうする。

どうする。

どうすれば、

心臓がうるさい。

一秒が長く感じる。

頭が馬鹿みたいに回転する。

防ぐ方法なんて、

「ティア!!」

ない？

「みんなみんなみんな、消えっろおおおおおお!!!」

《Calamity Wall》

私の目の前に飛び出したのはスバルだった。

なのはさんの放った衝撃波によって全てが吹き飛ばされる。

歯を食いしばるスバルが見えた。

私を、守るため、

私の、盾になって、

「テイ、アツ」

スバルがなのはさんを指す。

そこには一直線にウイングロードが構成されていて、

「あとは、任せた……から」

胸が熱くなった。

駆ける。

すぐ目の前にはなのはさんがいてレイジングハートをこちらに向けている。

「ティア、ナアアアアッ!!」

咆哮。

同時、砲撃魔法が視界を覆う。

「こっのおおおお!!」

返すように吼えてクロスミラージュに構成した魔力刃を振るう。

重、い。

想像以上の威力で砲撃魔法は私を押し返そうとする。

だけど、

歯を食いしばる。

魔力を振り絞る。

スバルがそうしたように。

私は、止まらない。

止まらない。

「スバルにつ、背中押されたんだからあああああッ!!」

一閃。

砲撃を斬り割り一歩前にでる。

「っ、止ま、れえっ!」

レイジングハートを捨て、振り下ろされる手刀の一閃。

「なっ!?!」

それが、私の幻影を切り裂いた。

「二度目、ですよっ!」

更に一步。

同時に右腕を振り上げ魔力刃をなのはさんに向けた。

「まだ片手が残ってるっ!!」

追撃の手刀が私の右腕を切り裂き痺れるような痛みが右腕に走り抜けクロスミラージユが手からこぼれる。

だけど、

「私も、ですよ」

勝利を、確信した。

両腕を振り切ったなのはさんに魔力が溜まりきった左手のクロスミラージユを突きつける。

時が止まったような感覚だった。

今までの出来事が嘘のように静まり返った空間がそこにあった。

私はなのはさんを見つめて。

なのはさんは涙を零した。

「なのはさん」

私の言葉はやけに響いて、

「私は、紅助さんを愛しています」

少し、恥ずかしかった。

「なのはさんも、ですよね」

なのはさんの瞳が見開かれる。

可笑しな顔に少しだけ笑みがこぼれた。

「私も、みんなも、同じなんです。誰かを好きになったり、愛したり」

だから、

「焦らなくてもいいんですよ」

涙の一滴が落ちる。

私は笑った。

「少し、頭を冷やしましょうか？」

《PhantomBlazer》

つくづく思う。

私は損な性格のようだ。

22. I think you.

私の好きはどこから来ているのだろう。

疑問に思う。

いつもいつも、私は彼が好きだった。

まるで身の内に棲む獣が吼えるように、

好きだ、

好きだ、

好きだ、

たとえ周りのもの総てを喰いちぎりズタズタにしても止まらな
いそれは、

私の何なんだろうか。

また、唸るように私の身体に染み付いたようなその獣が言葉をは吐
く。

思い出せ。

何を。

拾い上げろ。

何で。

目を開けろ。

どうやって。

ぐるぐると何かが回っている。

鍋の中で煮詰められるようにそれは泡を噴き次第に溢れ出す。

あの頃、総てが止まってしまえばよかったのに。

重いんだよ。

辛いんだよ。

いつそ巻き戻って、

止まってしまえ。

一生、

永遠に、

私を幸せにしろよ。

でも、

それで、本当にいいの？

※

浮かび上がるのか沈んでいくのか。

何もない、何も、何も。

だから私は思い浮かべる。

笑えていたころ。

楽しかったころ。

幸せだったころ。

せめて思えるように、

ああ、あの頃はよかった、なんて。

でも、また突き当たる。
なんで笑えていたんだろう。
なんで楽しかったんだろう。
なんで、幸せだったんだろう。
なんで？

思い出そう。
探し出そう。

どこかにあるはずだ。
私の、

私だけの、

幸せの理由。

※

足跡を見ていた。

いったい誰の足跡だろう。

どこへ向かったのだろう。

「どこかへ行ったんだろ」

隣に立つコウ君が面倒臭そうに言う。

別に付き合えとは言っていないのに。

「道に迷わないかな？」

「気にするところなの、それ」

「だって、私はよく迷うから」

「それは、高町さんだろ？」

「でも……」

何が不安だったのか。

まるで見えない手で胸を押さえつけられるように重く、不安が積も

る。

この足跡はしっかりと次へ繋がっているのか。後ろを見ると、あるのは私とコウ君の足跡。

私はここまで来たけれど次はあるのだろうか。

それはどこへ向かうのだろうか。

「例えば」

コウ君が呟く。

つられるように彼の顔を覗き込んだ。

深い、深い黒の瞳。いったい何を見ているのだろう。

「例えば、この足跡がどこかで道に迷ったとする」

耳に届く声はしっかりと、だけどどこか儂げで自然と私は目を閉じていた。

その声が私の耳まで届くように。

「迷って、でも、それでも足跡は続くんだ」

「だって、そこが終わりじゃ無いんだから」

「絶対どこかへ繋がっているから」

「だから、続くんだ」

その言葉はまとまりがなく私の欲しかったような答えではなくて、でも、それでも、どこか、暖かい。

「止まれ、ないんだ」

「え?」

「この足跡も、私もコウ君も、止まれないの?ずっと、続くの?」

それは辛くないのかな。

「辛いときは辛いよ。でも、決まってるんだ」

「なに、が?」

「止まる時、止まってしまう時って」

「止まる時は、あるの?」

「うん。でも簡単には止まれない、かな。周りは動き続けていて、その周りの一部から見た自分も周りの一部で、流れには逆らえない」

「じゃあ、じゃあ何時、止まれるの?」

思わず出た問いにコウ君は笑う。

何故笑うのか、そう首を傾げる私に対してコウ君は一頻り笑い続けると小さく呟く。

わからない、と。

「俺に言えるのはたった四つくらい。もっといっぱいあるんだろうなあ」

考え込むような言葉は本当に私に向けたものだったのだろうか？
もしかしたら、もしか、したら……

「続けるのを、続くのを諦めてしまった時」

コウ君、コウ君は、

「どうしようもない終わりが来てしまった時」

私の隣に、

「止まるべき場所を気付いてしまった時」

本当は、

「大切な何かを見つげられた時」

いないんじゃないか。

なんて。

「俺は大切なものを見つけたい。もう終わりたくなんで、ない」

「え？」

コウ君が何かを言ったような気がした。

絞り出すように、でもその言葉は私の耳には届かず、迷子に、なつてしまった。

あつ、

また、離れて。

私が、逃がした。

この時、

この時だ。

この世界で、終わりは、止まるべき場所は確かにある。
コウ君に四つも教わった。

諦めた時。

どうしようもない時。

気付いてしまった時。

大切なものを見つけた時。

諦めるのは、嫌だ。

後悔なんてしたくないから、私の道を間違えなんて言いたくない。
間違つてなんかないって、胸を張つてやりたい。

どうしようもない、なんて言い訳も使わない。

歩くだけ歩いてその先が壁だったら、その壁を登ってやる。

それでも壁が続くなら名前だけでも刻んでやろう。

終わりに気付いたら、目を閉じて耳を塞ごう。

たとえ一歩も前に進めない時がきたら前のめりに倒れてやる。

そしたら身体一個分は私の勝ちだ。

だから、

だから、私にとっての大切なものが、

大切の終着点が、

コウ君で、あつてほしい。

そう、気付いてしまったんだ。

※

「結局、何で好きだったんだろう」

医務室で目を覚ましてまず口にしていたのがそれだった。

窓を見ると既に日は落ち外は闇に包まれていた。

一度だけ当たりを見渡してシヤマル先生がいないのを確認してこつそりと医務室を出る。

体中に重りがぶら下がっているように動く事に辛さはあつたが今の場でただ寝そべっているよりはましだった。

が、結局ついた場所は近くに あつた海が見える場所。

残念な事に雲のせいで月や星は隠れたただの黒の中浮かぶように私は腰を下ろした。

頭が軽い。

最近感じていた焦り等が洗い流されたように何も感じていない。

まあ、でも一つ。あるとしたら悔しき、だろうか。

私が気を失う前、ティアナとの事はよく頭に残っていた。

大人気ない、なんて思われるだろうけどティアナに負けたことが悔しくて悔しくて。

あの時、自分が正常な思考をしていなかったことは今更ながら自覚している。

何であんな風になったのか、わかっている。

醜い嫉妬だ。

それでも、負けたくなかった。

あの時、あの瞬間のティアナは私にとって壁だった。

乗り越えなければいけない壁だった。

結果的にこうなってしまったけど。

「足跡、止まっちゃった」

コウ君との別れでも、あのコウ君モドキに敗北したときにもなかった気持ち。

怒りでなく、悲しみでもなくて、

悔しい。

煮えたぎるような、燃え上がるようなこの気持ち。

でも、今の私にはその気持ちの向け所がわからない。

ティアナに向けるものでもないしコウ君っていうのもプライドが許さない。

なんとというか、

「迷子、だなあ」

その呟きに、

「何が、迷子なんですか？」

答える声があった。

「あっ」

「隣、失礼します」

私の隣に腰をおろした声の主、ティアナ。こんなに悔しく思っているのに不思議と嫌な気分ではなかった。

「紅助さんが探してましたよ」

「探して、くれてるんだ」

「あれ、嬉しくないんですか？」

「嬉しいと言えば嬉しいけど、今は駄目なんだ」

多分今あったら泣いてしまう、どうしようもない、って諦めてしま
う。

「思い出した事があるんだ」

だから、今はティアナとお話をしよう。

一つの区切り、とでも思つて。

「思い出した、ですか？」

「うん、コウ君を初めて好きだつて思つた時」

「えっ!？」

隣で驚いているティアナを見て笑みがこぼれる。

なんだ、飄々とした印象があつたがこんな表情も出来るのか。

「その時までには別になんとも無かつたのに、突然好きなんだつてわかつちやうんだもん。可笑しいよね」

「へ、へえ」

「コウ君なんてどこがいいのか、なんて思つたんだけどね。良いところなんて、タイミングいいっていうのかな、それくらいで」

「あ、わかる気がします。いてほしい時に隣にいる」

「うん。寂しい時とか、何でか隣にいてくれるんだよね。だから、かな。羨ましいんだ」

うん、羨ましいんだ。

私も彼が寂しい時、隣にいてあげたい。

「私は、本当は人の気持ちちつてよくわからないんだ。だから人が出来ないことで文句言つてる事とかもよくわからないし何で、とか思つちやう」

「さらつと、酷いですね」

「本当のことだもん」

眉をひくつかせるティアナに苦笑を返す。

今まで直せなかつた事だ、しかたないとすら思つている。

「だから、口にして言つてほしい。そう思うんだけど」

「ああ、紅助さんつて意地っ張りな所ありますよね。子供っぽいといふか」

「ふふ、うん。言つてはくれないんだ、やっぱり」

少しそれが悲しくて、彼が遠く感じる。

もし、彼が一言でも弱音を吐いてくれるなら。

「もし、ね」

「はい？」

「コウ君が、私に助けてって言うてくれるなら」

「言うて、くれるなら？」

「私は止まれるの」

きよとんと、ティアナが不思議そうな顔をする。

まあ、私だけがわかる言葉だ。コウ君も覚えているかどうか。

「私は止まれて」

それで、

「愛してるって、言える気がする」

そう、今なら思うんだ。

素直な気持ちを口にして身体に張り付いていた何かが剥がれていくのを感じた。

ずっと重みに感じていた何か。

でも、ティアナのように私と同じ思いを持っている人がいると知って。

私は安心をした。

一人じゃない。

だから、もう辛くないよ。

噛み締める言葉にティアナは笑う。

「なんだか、肩すかしを食らった感じですよ」

「えっ、と？」

「ちよつと心配してたんです。かなり切羽詰まった様子だったんですよ」

「あ、あれはっ……」

今更になってあんな醜態を見せた羞恥が襲って来る。

そんな風に顔を赤らめる私を一瞥してティアナは腰を上げた。

「もう、大丈夫そうですね」

「……うん」

「後から文句を言われてもこまりますから、ね」

「うん？」

「私が紅助さんを勝ち取った時にですよ」

「なっ!？」

「負ける気はないですけど、張り合いが無いのもなんですから」

「………そう、だね。私も負けたくはない」

「じゃあ、勝負です」

「うん、勝負だね」

二人して笑いあう。

おかしいな感覚だ。負けたくはないのに嫌な気持ちに沸いてこない。それじゃあと背を向けたティアナに言葉がこぼれた。

「私、ティアナに出会えてよかった」

「え？」

聞こえはしたが聞き取れなかったのかこちらに顔を見せる彼女に笑みを向け私も立ち上がる。

なんだか晴れやかな気分だ。

壁が崩れていく。

視界が晴れて多くのものを許容できるような感覚。

なんでもない、と告げてまた歩きだすティアナの後に続く。

とりあえずは、何から始めようか。

そうだ、まずは謝ろう。

ティアナに、スバルに、コウ君に、迷惑をかけた色んな人に。

沢山いるのだから、大変なんだろう。

でも、それだけ私の周りには人がいて、それだけの足跡があるのだから。

私も、続かないと。

足元を見ると、見えないはずのティアナの足跡が見えたような気が

した。

それはとても真っ直ぐで、どこまでも続いている。

私の周りはまだ流れている。

ああ、まだ止まるには早いみたい。

そうだ、

足跡は止まらないようだ。

23. I fall in love from
now

あれから数日後かたった。

私はまだ彼と話せていない。

※

休日を与えられた。

いや、与えられてしまったと言った方が正しい。

切欠はあの訓練、なのだろう。

「ガス抜きくらい上手にしてや」

なんてはやてちゃんに嫌みまで言われつつティアナ達と共に休日
をもらってしまったわけだ。

情けないし恥ずかしい。

しかもおまけとばかりにその日にコウ君の休みも入れておくとの
ことだ。

ようは一緒に出かけてこいと。

ありがたい、のだろうけど……だろうけど。

そんなわけで私は今、六課の宿舎前でコウ君を待っている。

あれ以来ちゃんと話せていないコウ君と出かけるというわけなん
だけど正直の所怖くてしようがない。

誘うこと自体はメールなんかでぱつとやってしまったけど面と
向かってしつかり話すとなると……

何を言ってしまうか、わからない。

それなのにいきなりデートだなんて……

……デート、デート、か。

何か、ごめんね、ティアナ。

そんな事をブツブツと頭の中で繰り返していると声をかけてくる人物が一人。

「あ、悪い。待たせた、みたいだな」

勿論、コウ君だ。

とんできた声にびくりと体を跳ねさせたら私を不思議そうな目で見たコウ君に慌てて笑顔を返す。

「ま、待ってなんかないよ！ 大丈夫だから！」

漫画かなにかか、なんて頭の中で突っ込みを入れつつコウ君の様子をうかがう。

普通と言えば普通。

それもそうか、後ろめたい気持ちがあるのは私の方でコウ君にはコレといってどうと言うことはないのかもしれない。

そりゃあ勝手に嫉妬してティアナに八つ当たりしたわけだけだし……

考えてみればみるほど駄目な自分が掘り起こされる。

悶々と考えに耽り出す私に対してコウ君は困ったような苦笑を浮かべると頬を掻く。

「えっと、遅れておいてなんだけど……行こうか？」

「あっ」

また困らせた。

思わずそんな事を考え歩きだそうとするコウ君に手を伸ばす。

「うん？」

振り向いたコウ君に向けられた手が宙をさまよう。

「あ、えっと、あの……」

しどろもどろになりながら吐き出した言葉は、

「手を繋ぎ、たい……あの、繋いで、くれませんか、か？」

恥ずかしい、尻すぼみに消えていく。

何を言っているんだ、なんて思い伸ばした手を下げようとするそ

れを止めるように腕を惹かれた。

「ほら、行こう？」

その言葉に、繋がれた手に、気が付くと頬が緩んでいたのは私がやはりコウ君の事を想っているからか。

引かれる手に足が、胸が軽くなつたのに単純だなんて一人ごちながら歩を進める。

遅れてきたのはこれで許すでしょう。

※

コレと言って行き先を決めていなかった結果、とりあえず喫茶店に向かう事になったわけだけど……

「なんでエリオとキャロが……」

せっかく新人のみんなとは時間をずらして出かけたのになんて思いつつ小さい二人の影に目を向ける。

幸いこちらは気付かれていないようになにか話で盛り上がっている様子の二人を見つつコウ君が呟く。

「小さいカップルと言うより兄妹だな、あれは」

「そうだね」

微笑ましさを覚えつつコウ君の言葉に相槌を打つが私が実際に思っていたのはまた別だ。

昔の、まだ幼かった頃の私とコウ君の事を考えていた。

私達もあんな様子だったのだろうか？

そうだとすると嬉しいような、悲しいような。

良くも悪くも私たちは変わってしまった。

それを後悔しているわけではないけれど。

ふとコウ君に目を向けてみるとエリオ達を見つめながら薄く笑みを浮かべている。

そんな彼を見て何故か私は安心していた。

何に、と言えば私にもよくわからないのだけれど。

「なんかさ」

エリオ達をぼんやりと眺めていたコウ君がぼつりと呟く。

「こうやって眺める視界の端から端は平和なんだよな」

カフエテラスの様子を一望しこちらに笑いかける。

「でも見えない所ではまた先生みたいな奴が何か企んでて赤い彼奴みたいなのを憎んでんだよな」

その言葉に負の感情は感じられない。

笑顔、明るい声、彼が何を考えているのか私にはわからない。

「もうさ、なんていうかさ、ほっておいてくれたらこつちも忘れられるんだけどな」

「コウ君は……何もおもってないの？」

「おもってない？」

「先生が憎いとか、ないの？」

ぼそぼそと呟く。

コウ君が口角を持ち上げた。

「憎いよ、殺したいほど」

ドクリ、胸の奥の何かが震えた。

コウ君は笑顔で、笑顔で笑顔で笑顔で、

まるで当たり前のように、生まれてからそうだったように、そう吐き出した。

「たぶん、運が良ければ俺が先生を殺して、運が悪ければ先生が俺を殺すんだろ」

言葉がでない。

何となしに紅茶を傾けるコウ君はどこまでも日常で、

「……違う。ああ、何だ。違う違う、そういう、殺す殺さないじゃなくて」

一度、コウ君の動きが止まる。

まるで何かを振り払うように頭を数度振り乱し掌で目を覆った。

「始めたから、終わるんだよ。うん」

誰に向けた言葉か、何を差した言葉か。

何故、そんな言葉に私の中の何かが震えているんだ？

「たぶん、これって最低な事だ。だから、先に謝る。ごめん、なさい」

一瞬、手の隙間から黒い瞳が覗く。

暗く鈍い黒。私はそれを、怖いと、そう感じて、

「今、お前と出会わなければ良かったなんて、思った」

絶望した。

※

一度だけ。

一度だけ考えた事がある。

私は本当にコウ君の事が好きなのか。

そんな事を。

例えば、幼い頃の私は彼を両親の代わりとしていなかったか。

していた、のだろう。

コウ君は私になかったかものを、欲しかったものを誰よりも早く埋めてくれた人だ。

何の見返りも求めず、ただ側にいてくれた。

確かに私にとってコウ君という存在は両親に近い。

だからもつと側にいたかったのだろうし、貰った分だけのものを返したいと思っただろう。

だけど、それだけじゃないはずだ。

それだけの理由で私はコウ君を求めているわけじゃないはずだ。

でも、

でも……

私は何故コウ君が好きなの？

それは、

出会ったからだ。

※

ゆつくりと落ちていく。

まるで底なしの沼に突き落とされたような絶望感。

だけど、そんな自分をただぼんやりと眺めている自分がどこかにいた。

たった一度の言葉でこんなにも傷ついている。

私はこんなにもコウ君を強く想っていたんだ、なんて風に思っている自分がいる。

表側が黒く塗りつぶされていく一方、裏側は細く鋭く、白、私が私になっていく。

なんだろうこの感覚は、ティアナとお話した時に、コウ君への想いを初めて自覚した時に近い。

うん。

「やっぱり、私はコウ君が好きだ」

今、恋に落ちてる。

口にした言葉が表と裏を入れ替えた。

視界が広がっていく。自然と頬が緩んだ。

「私にとってはね、コウ君は特別なんだ。コウ君の周りには心地が良くて、私が私でいれた」

それは君が私を特別と言ってくれたから。

君が私を誰かにしてくれたから。

「そばにいただけで満たされる、っていうのかな。別にコウ君が私を好きでいてくれなくてもいいのかもしれない」

勿論、私は傷つくのだけれど。

それでも側にいないことに比べれば。

「確かに、私とコウ君が出会わなかったら違う幸せがあつて辛い思いもしなかったかもしれない」

私だつて先生は憎い。身も心も焼かれてしまうくらい。

これはどうしようもできない気持ちだつてこともわかっている。

「それでもね、私はコウ君と出会つてよかったつて思うの」

今の私は、幸せで満たされているから。

辛いこともいっぱいあるけどそれ以上のものがあるから。

「だから、これは私の我が儘」

辛い思いをさせてごめんね。

私のせいだつてわかつてる。

先生と出会つたのも、もう一人の君が生まれたのも。

それでも、うん。

それでも君には、

「私と出会つてほしい」

それが私の恋だから。

※

言い切つた私に彼は呟くように言う。

「やっぱり、なのはを好きでよかった」

こぼれるような笑顔が彼の手の隙間から見えた。

反射的に頬が熱をもつ。それを追い出すように何か口にしようとする。

「だから」

落ちる水滴のように、

「助けてほしい」

彼がつぶやいた。

一瞬の思考停止、彼が何を言ったの理解するより早く言葉は溶けるように宙に消えた。

そして間を置かずコウ君が突然立ち上がった。

「なにか、来る？」

畳み掛けるように状況を理解できない私に対してコウ君の行動は素早く、私はその後についていく。

連れられて来たのは路地裏で、私は出会った。

一人の少女に。

そして後に思うことになる。

これは、運命の出会いのようだ。

24. 少女

今より未来を紡ぎ遙か昔より来た少女。

少女の名はヴィヴィオ。

※

頭の中に自分とは違う自分がある。

どこかそんな風を感じる事は幾度となくあった。

身体を、心を燃やすような怒りを宿した自分。

身の不幸を顔を伏せて嘆く自分。

ただ前だけを、あったはずの未来に手を伸ばす自分。

全て投げ出して楽になりたいという自分。

それでも、一人の女の子が好きで幼い頃に繋いだ手を忘れられない自分。

どこからが確かな自分でどこまでが自分の迷いなのか。

ただそれらが混じり合い、潰し合い、零れ落ちた気持ちは【後悔】、そんな物だった。

もし出会わなければこうはならなかっただろう。

なのはは物語の通りの道を行き、俺も今とは違う道を進んでいただろう。

そうだった方がお互い幸せだったんじゃない、なんて。

腕が痛む。

思考が揺れる。

俺は何をしたいのか？

俺は何をするべきなのか？

何故ここにいて、何をしているのか？

腕が痛む。

思考が揺れる。

しかし彼女に声をかけたのは、

始めたのは、俺だから。

だから、俺が終わらせないと。

腕が痛む。

思考が揺れる。

俺が俺じゃなくなるような。

何かが頭の中に流れ込む。

腕が痛む。

腕が痛む。

腕が痛む。

腕が痛む。

腕が痛む。

「だから、これは私の我が儘」

俺は、

「それでも君は」

なのは？

「私と出会ってほしい」

ああ、お前は、そういう奴だったな。

だから、だから俺は、こう思うんだ。

「やっぱり、なのはを好きでよかった」

そして、そんな強い君だから。

「助けてほしい」

俺は泣きたくなるんだ。

※

声が聞こえた。

誰かが呼んでいる。

何かが来る。

この声は、

俺？

※

その少女を見つけた瞬間、風が吹いた。

頭の中の霧が晴れるような、まるで生まれ変わるような感覚を俺は感じていた。

金の髪、紅と翠の瞳。

俺はこの少女を知っている。

ヴィヴィオ。

【最後のゆりかごの聖王】

そのクローン。

もう、そこなのか。

物語の終わりが、見え始めた。

ヴィヴィオをなのはに任せ、その体に繋がっていた鎖を見る。

その鎖の先、括り付けられた箱にはレリックが一つ。

確認次第六課のメンバーに連絡を渡す。

最も速く現れたのはエリオとキャロの二人。

そして、ガジェットの群れだった。

「なっ!?!」

タイミングが悪い、そう吐き捨てエリオ達に指示を出すのはを確認する。

彼女はガジェットの群れの対処をするようにエリオ達はヴィヴィオが現れた下水道の捜査。

俺はと言えばヴィヴィオを収容したヘリでの待機。

都合がいい、そう思った。

ヴィヴィオの事が気掛かりだったからだ。

俺を呼んだ声はなんだったのか、

何故その先にヴィヴィオがいたのか、

何故ヴィヴィオを見た俺は今まで感じていた靄のような物を感じなくなったのか、

疑問はつきない。

ヴィヴィオといればすべてがわかるという訳ではないだろう。

しかし、何故か俺はこの少女の側にいなければいけないと思っ
てい
る。

この気持ちはいったいどこから来るものなのか。

それも、疑問の一つなのだが。

※

はやての魔法によって幻影ごと落とされていくガジェットを見ていたとき、それは現れた。

強大な魔力反応。

同時にそれは魔力を弾けさせ砲撃魔力を吐き出した。

「ハッチ開けて！今すぐ！」

反射的に叫ぶと同時に、バリアジャケットに身を包む。

ハッチが開ききるより先に、僅かに出来た隙間から文句をもらいつ
つ
飛び出す。

砲撃がこちらに向かってくるのはわかっていた。

問題は防げるかどうか。

ちらりと背後の様子を確かめる。

未だにヴィヴィオの意識はない。

離れた場所にはこちらへ向かうなのはの姿、どうやら彼女がたどり
着くより先に砲撃は俺とぶつかるだろう。

俺がやるしかない。

ヴィヴィオは俺が守らないといけない。

……？

なんでそんな事を、

浮かんだ疑問は構成した障壁が砲撃とぶつかり合うと同時に四散する。

ヘリのハッチが開いているから衝撃さえ後ろに通せない。身体に力を入れ、なのは達のように多いとは言えないが、ありつたけの魔力を注ぐ。

それでも、砲撃は俺の身体を後ろへと下がらせる。

まずい、思わず弱音が零れる。

それが悪かったのかその言葉が戸惑いを生んだ。

障壁に罅が走る。

「っ、あ」

抑える力が弱まり体がさらに後ろへずれる。

どうすればいい、意味の無いとわかる問いが頭をよぎる。

弱音は更なる弱音を呼ぶ。

また、腕が痛み始めた。

どうすればいい、問いに答えは出ない。

どうすればいい、繰り返す問い。

どうすればいい、

問に答えたのは背中へ向けられた視線だった。

思わず視線がが後ろを向いた。

紅と翠、二つの瞳が俺を見ていた。

「あ」

ただそれだけの事で頭の中にあつた弱音が全て吹き飛んだ。

まもらないと、

ただそれだけが繰り返される。

まもらないと、

なぜこんなにもそんな想いが湧き出るのか。

わからない、わからないけど。

誰かが、何かが叫ぶ、まもらないと、と。

歯を食いしばる、目を見開く、体中の魔力を振り絞る。

出来ることはこれくらいだが、それでも俺はあの少女を守りたい。

そう、想いが固まった瞬間、

色鮮やかな魔力光が俺を包み込んでいた。

カイゼル・ファルベと呼ばれる、虹色の魔力光が。

俺の体や張っていた障壁、さらには敵の砲撃すらその光は包み込んでいく。

するとひび割れた障壁は一瞬で修復され砲撃魔法を押さえ込んでいく。

消えていく砲撃の光を呆然と見つめるしかなかった俺はゆっくりと後ろに目を向ける。

何が起こったのかなんてわからない。

混乱しか残らない俺の視線の先。

ハッチが開ききつて風が吹き抜けるへりの中、

紅と翠の瞳が、ヴィヴィオが俺を見つめていた。

「助け、られたのか……?」

その眩きは風によって消えた。

また、腕が痛み始める。

どうやら、

何かが始まったようだ。

25. 子供

ぼんやりと、少女を眺めていた。

その少女は目の前の花壇に植えられたら花々を不思議そうに見つめている。

時には匂いを嗅ぐため鼻を近づけたり、または感触を確かめるよう恐る恐るといった様子で触れてみたり。

どこか微笑ましく、どこか不思議なその様子をただ見つめながら、俺は思考を続けていた。

目の前の少女、ヴィヴィオと思われる彼女を保護してから既に多くの時間が過ぎていく。

その後、ガジェットとその他敵勢力が逃走し少女は鎖に繋がっていたレリックとの関連性、少女自身の身元確認などの為、一度聖王教会に預ける事になった。

それを追うようにして六課隊長陣が聖王教会へと呼び出されたのだが。

俺はそれに便乗するように聖王教会へと足を運んだ。

勿論目的は保護した少女だ。

出会った時点で気に掛かる事が幾つかあった。

俺を呼んだ声。少女がいた場所へ導いた、と言うべきなのだろう、その声の正体。

何故それは俺に届いたのか、そしてあの声を聞いた時、俺はその声を俺自身の声と認識していた。

だがしかし、今になって考えてみるとあの声は目の前の少女のものだったとも思えるし別の誰かの声だったとも思える。

記憶の劣化でもなく、確かにそう感じる。

これは何なのか。

わからない。

わからない。

次。

少女との接触後の俺の精神的変化、とさえばいいのか。
俺は少女を目にするあの瞬間まで、正直に話すとおかしくなっ
た。

狂っていた、とまではいかないがどこか破綻した物を俺は内包して
いたような、そんな感じがする。

自分が自分なのか、誰が誰なのか、思考の中に思考が溶けていくよ
うな、そんな繰り返しをいつからから続けていた。

それが今はまるで白紙に戻したようにどこか清々しさすら感じて
いる。

この変化は何によるものなのか。

少女、ヴィヴィオしか、ないのだろう。

俺と彼女の中に何らかの繋がりがある、のだろうか？

そう言えばもう一つ、

先日から感じていた腕の痛みが無くなっている。

一瞬、頭の中に浮かんだは先生、スカリエッティの顔だった。

※

「だあれ？」

気が付くと、先程まで花に夢中だった少女が目の前まで近づいてき
ていた。

考え込んでいたこちらを不思議そうに、子供らしく大きく丸い目が
見つめている。

そんな少女に思わず頬がゆるんだ。

「紅助、七峰紅助」

「こー？」

「俺の名前。まあ、好きに呼ぶといい」

「こー！」

何が嬉しかったのか、そう俺の名前らしき物を口にするところちらに
向かって走り出した。

とてとてとどこか覚束ない足取りで近づき両手を大きく広げ、まるで何かを捕まえるように俺を抱きしめる。

いや、抱きしめると言うよりもこちらの事を確かめている、とでも言うべきか。

大きく広げた両手はペタペタとこちらの身体を叩き、すぴすぴと鳴らす鼻はこちらの匂いを嗅いでいるのだろう。

どちらしろ、邪魔だな。

幼女に身体を弄られて喜ぶような趣味は残念ながら持ち合わせていないし匂いを嗅がれるのは普通に不快だ。

仕方がない、と当たりを見渡し丁度良さそうな物を見つけるとまだペタペタしているこいつを抱き上げてその場に向かった。

たどりついたのは白い花が咲き誇る白詰草、ぽい何かの花畑。

そこにゆつくりと下ろしてやると俺はその花に手を伸ばした。

少しの時間の後、俺の手の中で出来上がったそれを少女の頭に被せてやる。

花の冠。

小さい頃、なのはとフェイト、二人に覚えさせられた遊びだったか。当時は二人のために作らされていたが、今もこんな小さな子の為に作っているなんて。

結局、やっていることが変わんないのな。

自嘲気味に苦笑を浮かべる。

そんな俺に対し少女は不思議そうに自身の頭に掛かった冠に手のばしている。

と、そう言えば。

「名前……」

「うっ？」

名前を聞いてなかった。

こちらとしてはこの子をヴィヴィオだと認識していて確かにそうだと思っているのだが。

ふむ。

「お前の名前」

「なまえ？」

「ヴィヴィオっていうだろ？」

悪戯心に頬を緩めた俺に少女は目と口を大きく開けて驚いた。

「なんで？なんでヴィヴィオの名前知ってるの？」

なんでなんでと繰り返ししきりに首を傾げている少女、改めてヴィヴィオを見てその可笑しな様子に思わず笑みが零れた。

「なんで？ねえ、なんで？」

「さあ、どうしてだろうな」

はぐらかす俺にヴィヴィオを一度頬を膨らませて怒りを表すが少しして、はっと何かに気が付いたようにそれを萎ませた。

「ん？どうした」

「あ……うう」

何に気が付いたのか？

それを口に出さないヴィヴィオはこちらを見たり地面に目を向けたり、顔の上下を繰り返す。

彼女の心を言葉にすれば恐らくこうなるのだろう。

間違いかもしれない、でもあっているかもしれない。

どこか恥ずかしげに顔を右往左往させるヴィヴィオに可愛さを感じていると、どうやら決心が付いたのか恐る恐る、口を開いた。

「こー、こー」

「うん？」

こちらの名前を呼んでいるのかどうなのか、わかりにくいのはご愛嬌。

小さく揺れながら、それでもこちらを見る瞳を見つめ返す。

「こーね。もしかしたら……もしかしたら」

勿体ぶるように、念を押すヴィヴィオをぎゅっと目を瞑りそれをした。

「こー、は……ヴィヴィオの、パパ？」

結局、小さく呟かれるようにヴィヴィオの口から吐き出されたそれは確かめたいと言うより、どこかそうだったらいいな、なんていう気持ちで込められているようで。

不覚にも、顔が熱くなった。

卑怯だ。そう思う。

親が子供を可愛く思う気持ちを多少なり理解しつつ俺はヴィヴィオの頭を撫でる。

確か、臆気な記憶だがヴィヴィオは両親、母親だったかを探しているのだったか。

その理由は学習のため、だっただろうか？

さて、どう答えるか。

少しだけ考える。

「……………どうなんだろうね」

結局、はぐらかす事にした。

そして、

「でも」

ヴィヴィオの後方を指差す。

「ヴィヴィオのママなら」

その先、

「あんなのだろうな」

こちらを見つけたのはが手を振っていた。

……………

……………

結果的に言えば、全て彼女に投げつけた事になる、のかな？

少し、悪い事をしてしまったようだ。

26. Call me a mother.

手を振った先に何故か困った表情のコウ君とまた何故か顔をしかめる少女がいる。

なんだか微妙そうな表情でこちらを見る少女はコウ君と共に発見保護した少女だ。

それはいいのだけれど、何故そんな表情を？
と二人に近づいたところ。

「……ママじゃない」

なんて言葉を投げかけられた。

「う、うん？」

いや、まあ、この歳でこんな子供をもった覚えは無いけど。

………いや、私が無意識の内にコウ君と!?

いやいや、無いよ。無い無い。

そんなの忘れるはずがない。

そんな幸せな事……っ!

「こー、ママじゃないよ。やっぱりこーがパパで」

「パ、パパ!」

聞き捨てならない言葉だ。

パパ、コウ君がパパ。

な、なんて良い響き。じゃなくて!

「コ、コウ君……どう言うこと!?! 誰どの子なの!?!」

「は、はあ?」

「産んでない、産んでないよ私!」

もしまやティアナ!?

いや、年齢的に若すぎる。

フェイトちゃんやはやてちゃんの可能性もあり得る。

まさか、離れているうちに新しい女性と?

「コウ君は、コウ君が、コウ君に、私は、わ、わた、私、私に、助けて、つて、うぐ、うぎ、い。」

ぐにやりと視界が歪む、そう感じた時、クスクスと笑う声を聞いた。

「あはは、面白いね、この人。ヴィヴィオのママじゃないのに」

「俺もパパじゃないけどな」

「こ、コウくんっ!!」

「お前も泣かされるなよ」

ふっ、ふぐ、コウ君は、コウ君はあ！

※

気が付くと私は正座をさせられてはコウ君の話を聞かされていた。自分をヴィヴィオ言った少女はコウ君の膝の上。

……………羨ましい。

「つうわけでこの子、ヴィヴィオは俺をパパと呼びたいとか言っているだけで実子でもなければ産んでもない」

「へえ、つまり真の妻はこの高町なのはって事だね」

「いやいやいや」

何故そうなる、と若干頬を赤く染めて照れるコウ君。

何だかんだいって照れ屋な所もかわって無い。

ティアナに悪いけどこういうのは私だけの利点だなあ。

しかし彼の膝の上の少女は納得がいていないようで……

「パパ、パパ。絶対ヴィヴィオのパパの方がいいよ」

「……………」

「パパ？」

既にこーと言う馴れ馴れしい呼び名すら呼ばなくなったヴィヴィオにコウ君は面倒臭そうにため息を吐いた。

「あー、パパって誰かなあ？どこの誰にいつてるんだ？」

「パ、パパ」

「なあ、なのは、パパって誰？」

「え？あつ、ああ！誰だろうね！ここには私とコウ君とこの子しかい

ないし、ねえ？」

「う、うーっ」

突然、知らん振りをし始めたコウ君。

意図はわかるし協力もするけど、なんだか本当に子供を躡っているような感じだ。

しかしどうやらヴィヴィオはこちらの言いたい事に気付いている様子。

子供にしては賢いようだけど。

「こ、こー」

「どうしたヴィヴィオ？」

「こーは嫌なの？ヴィヴィオのパパ」

「さあ、どうだろう。でも、俺じゃあまだヴィヴィオのパパには相応しくないかな」

「ふさ、わ？」

「わかんないか。まあ、大きくなってからわかればいいさ」

そう言つてヴィヴィオの頭を撫でるコウ君。

こう言うところを見せられると本当の親子ようなんだけだな。

「さ、そろそろ戻ろう。それでこの子、ヴィヴィオの今後は？」

「えっと、とりあえず六課で預かる事に」

「レリックとかの関係か？」

「まあ、ね」

それに両親も探してあげなければならない。

この子が、いったい誰なのかレリックとの関係は何なのか、気になる事は沢山ある。

でも、子供は親といるべきだ。家族といるべきだ。

私みたいになっちゃだめだ。

「そうだ！」

「うん？」

声を上げた私に不思議そうな二人の視線が向けられる。

それに対し私はにっと笑いヴィヴィオを見た。

「君はヴィヴィオ、そういう名前だよね？」

「う、うん。ヴィヴィオはヴィヴィオ」

「私はなのは、高町なのは。よろしくね」

「なのは？」

「うん、それでヴィヴィオにいい提案があるんだけど」

「なあに？」

「私の事をママだと思ってくれたら、コウ君の事を一日決まった数だけパパと呼んでもいい権利をあげる！」

「はあっ!？」

驚きの声をあげたのはコウ君。

コウ君には悪いけど私はいいと思うんだ。

例え偽物でも、両親が側にいるのは。

「どうかな、ヴィヴィオ？」

「……………なのはママ！」

ぱあ、とヴィヴィオの顔に笑みが広がる。

逆にコウ君はひきつっているけど。その辺りは気にしない。

「それじゃあ、行こっかパパとママと一緒に」

「うん、いこう！パパ！」

「お前達は……………まったく」

ごめんね。最近の私、我が儘なんだ。だからすっかりついてきてね。

私のために頑張って、パパ？

くすり、と笑う。

改めて思うけど、

私って面倒な女のようにだ。

魔法なんていない。

そんな事を言っただけで自分の中で区切りを付けたのはいいのだけれど、周りは私の我が儘を押し付ける形になっていいのかな。なんて気持ちにはあつた。

リンデイさんには何時でも管理局に戻れるようにと尽力してくれていたようだったし、私が出した答えを彼女に口にするのを躊躇われた。

自分の考えが間違いだとか甘い考えだとかとは思いたくない。

今の私が、今までコウ君と過ごしてきた私が出した私にとって一番の答え。

だから、私は今の気持ちを変えるつもりは無い。

まあ、だからといって申し訳ないと思わない訳でもなくて……

ビクビクとしながらコウ君に付いてきてもらい、二人でその話をしに向かったのだが。

なんとかなった。なっちゃった。

結果を言えばそう。

リンデイさんは私の言葉に怒るでも悲しむでもなく喜んでいた。

笑って私達の言葉に、管理局に戻るつもりは無いことを了承してくれた。

自分の気持ちに認められたら事の嬉しさ、形として魔法との繋がりを切ったことの空虚感。

上手く言葉にはできない、ただの喜びでもなく、悲しみでもなく、不思議な気持ち。

あれから数日、魔導師を止めた私はまだコウ君の家で生活をしていく。

生活している、といっても何をするでもなく学校にいたり、友人と遊んだり、普通に普通の生活。

別に文句はないしこれが当たり前だとわかっているのだけれど、度々独りになると暇になると言うか手持ち無沙汰と言うか……寂しくなる。

今もそんな暇を持て余しているわけであって、お菓子をかじりながら胸元に下がったレイジングハートとお話をしていた。

魔導師を辞めた今、レイジングハートも本来のデバイスとして使われる事はなくなったけど、それでもレイジングハートは私のもとにある。

本当はレイジングハートも魔導師に使われた方が幸せだろうと私の前の持ち主、ユーノ君に返そうと思ったのだけどレイジングハートが言ったんだ。

私の側にいたい、って。

嬉しかったな。うん、嬉しかった。

だから今のレイジングハートは魔法を使う私の相棒ではなく、話し相手になってくれる私の親友。

あまり人前で話しが出来ない事が少し可哀想だけど。

そう、レイジングハートとお話をしているところらの顔を覗き込んでくる影。

「ほう、ふん？」

こくりと、口の中のお菓子を飲み込む。

こちらを覗きこんできた影、コウ君が隣に腰をおろす。

「ただいま」

「んんっ、おかえり」

隣に座ったのはいいいけど少し離れている。

またコウ君は恥ずかしいのか、なんてため息を吐いて距離を詰める。

暖かい。コウ君もそうなのかな、顔が赤いのは？

さて、今日は何をしようかな。

視線を巡らせた先にあったのは先程から食べていたクッキー。

「……………」

思い付いちやった。

思わず頬が緩む。それが不思議だったのかコウ君がこちらを見た。ちようどいとクツキーを一枚とり、口にくわえる。

「ほうふんもふあへる？」

コウ君も食べる？

そう、彼に口を突き出した。

「…………お前は」

返されたのは呆れたような瞳。

背筋が震えた。

コウ君、ああ、コウ君。

ごめんね、ごめんね。困るよね。

コウ君、恥ずかしがり屋だから、こう言うことが好きじゃないって私知ってるよ。

我が儘をいってごめんね。でもね、知ってるよ。コウ君がちやんと我が儘を聞いてくれること。

ほら、

コウ君の顔が近づく。

軽く開かれた口がクツキーをくわえる。

まるでキスをしてるみたいで。

「あ、はっ」

私、だから聞いてくれるんだよね？

ぶるりと震える体を抱きしめる。

ごめんね、こんな私でごめんね。

でも、もっとコウ君を困らせたい。

もっと、もっと私が、君の特別だって。

私だけが君の特別だって、教えて、刻んで、身体も、心も。変わりに、私の全てをあげるから。

君の全てを受け入れるから。
大丈夫。

私ね、コウ君にならなにされても大丈夫だよ？
だってね。

君にされることなら。

見つめられることも、

声を聴くことも、

肌を触れることも、

痛いことだって、

ぜーんぶ、気持ちいいんだよ？

※

興奮、しすぎたようだ。

気が付くと私はコウ君の膝の上で眠っていた。

何時眠ったのか覚えてないところを見ると、余程興奮してしまっ
いたのだろう。

目を開くと頭上にいるコウ君がくしやりと笑う。

「おはよう」

「お、はよう」

起きあがるが少し気怠い。コウ君の肩を借りよう。

軽く体重をかけた彼の肩から感じる淡い暖かさに安心する。

この暖かさに包まれたら私は溶けてしまうんじゃないだろうか？
でも、それなら溶けてみたいかも。

溶けて彼の一部になって……

「……………こひっ」

「うんっ」

思わず笑い声が漏れた。

訝しむ彼に手を振りなんでもないと伝える。

「そう言えば、明日」

思い出したように彼がぼそりとこぼす。

「明日、何かあるの?」

「ん、いや。何もないんだ」

「何も、ない?」

それがどうしたの? と首を傾げる私に彼は笑う。

「予定がなかったら一緒に出掛けないか?」

「……私と?」

「勿論」

「じゃ、じゃあ、デートってこと?」

「なのはがそれでいいなら」

自分で言うのが気恥ずかしいのか、遠回しな彼らしい返事に嬉しくなる。

「うん。私、コウ君とデートしたいな!」

声を張り上げた私にコウ君が微笑ましそうに笑う。

なんだか子供扱いをされているようでむず痒くグリグリと体を彼に押し付けた。

「コウ君って時々お父さんみたい」

「はあ?」

なにを?とコウ君の瞳には疑問の光。

私はそれを眺めるようにまた彼の膝に寝転ぶ。

「見るものが、見えてるものが違うのかな? コウ君の目がね、暖かいんだ」

ポツポツとこぼす言葉はコウ君にはちゃんと伝わらない。

不思議そうに、私の言葉に耳を傾けるコウ君。

「コウ君は昔からそう。気が付いたら今みたいに上から私をのぞき込んでる」

嫌って訳じゃない。今じゃそれも思い出だし。そう、思い出。

昔々の小さい思い出。

小学生になったばかりの頃、私はコウ君と同じクラスにはなれなく

て落ち込んでいた。

帰り道、少ないコウ君と共にいる時間もその事ばかり考えて無駄な時間を過ごしていた。

何で、どうして、どうしようもない事が受け入れられなくてただただ疑問を口にしていた。

そんな私にコウ君は頭を撫でるところこちらを見つめる。

「寂しい？」

微笑む彼。その優しげな瞳に何故か泣きそうになって、でも彼の前で泣くのは嫌だから必死になって我慢して、小さく小さく頷いた。

寂しい、ずっと一緒にいたい。

そんな風な気持ちを込めて。

それがどれだけ彼に届いたかはわからない。

空を見上げて少しの間、考えに耽った彼はそうだ、と声をあげる。

「次の休日は高町さんのためだけの日にするよ」

そんな馬鹿みたいな答え。

でも、その時の私は凄くワクワクした。

コウ君が私の為だけに一日中一緒にいてくれる。

当時の私は友達が彼しかいなかったから本当に彼だけが私と外の繋がりがかったような気がする。

だからその日まで色んな準備をして、張り切っていた私もコウ君の事を馬鹿に出来なかったかな？

そして数日後、前日によく寝付けなかった私は眠たげにコウ君を出迎え、彼が用意した朝食を食べて、結局二度寝。

彼に見守られながらゆっくりと意識を沈めていくのが暖かくて幸せで。

目覚めてまだ彼が近くにいるのが嬉しくてはしゃいだ。

それから遊んだり、昼食をとったり、またお昼寝をしたり。全部彼と一緒に。

楽しくて、本当に楽しくて。ずっと続けばいいのに。

そう思ってしまうくらい幸せで。

その日の最後、コウ君の家に泊まる事になって子供には大きい、二

人で丁度のベッドに並んで寝転がる。
目を閉じるのがもったいなかった。

明日目を覚ませば今日のことは全部夢になってしまいかも、なんて不安で。

泣きそうになる私を彼が撫でる。

「寂しい？」

繋がれた手が暖かかった。

私を写す彼の瞳が暖かかった。

私は涙を流して首を横に振る。

寂しくなんてない、君がいるから。

でも涙は止まらなくて。

その日は彼の手を抱いて眠った。

次の日から私はあまり寂しさを感じる事はなくなった。

周りより自分が彼の特別であると気が付いたからだろうか。

近くにいなくても彼が側にいる事を知ったんだと思う。

それを確かめる為に月に一、二回くらい同じような事をするようになったのだけれど。

彼が私を見る目、それはたぶん宝物を見る目なんだ。

だから私はそれをお父さんと同じと感じたのだろう。

私はコウ君を不思議な雰囲気の子と捉えていたけど、彼は私より大人何じゃないだろうか。

何故か不思議とそう思う。

彼は私と、私達とは違う生き方をしているんじゃないか。そんなふうに。

違うことは悪くない、逆に嬉しささえある。

小さい頃に遊び回る子達を見て何度も思ってきた。

『私はこの子達とは違う』

だから違う者同士が惹かれあうなんて運命的だ。

私と彼は会うべくして会った。そういう考えは嫌いじゃない。

それに、私が私でよかつたって誇れる、数少ないものだから。でもね。

一つだけ、私はコウ君に言いたい。

私は君の涙を見たことがない。

どんな時も、君は笑っているから。

もしかしたら、独りで泣いているのかな？

じゃあ、コウ君がもし独りじゃどうしようもないくらい寂しくなつた時。

どんな大きくて大変な事でも、

コウ君だけの事情でも、

コウ君がそんなに困っているなら。

私も一緒に困ってあげる。

君が何度も私にしてくれたように。

だって、君は私の、

宝物だから。

世界にはあるべき形がある。

少し前の自分の考え方。

自分自身の世界の捉え方は人それぞれ、主観からくるものなのだと思う。

誰を中心に捉えるか、何を歯車に使うか。そういう世界の組立方があって人は大人になるにつれ少しずつ世界を作っていくのだろう。

だから人の数だけの主観、つまり世界があつてそのひしめき合いの中、共通認識の集合体または神の視点と言ふべきものが個人の主観の外である本来の世界。

そしてその神の視点、共通認識の集合体は各々の歯車の塊である。しかし歯車だけでは世界は回らない筈だ。

芯、つまり中心が神の視点と呼ぶべきそれにも存在するはずだ。その中心によって回る世界こそ、世界のあるべき形なのだと思う。いた。

そして、私はその中心が七峰紅助、彼だと信じていた。だから私は彼のそばで世界の歯車になりたくてただ努力をしているつもりだった。

本当は何かをしていれば彼に近付いていると思えたからかもしれない。

が、結局はこの有り様だ。

彼は腕を無くし私は道を変えた。

以前の私が言うとしたら。

彼の腕は私が残した結果で罪で、私が彼に拘る理由になる。だろうか。

結局、彼に縋るための一要素にしかならなかっただろう。

おそらく彼の腕を直すため、なんてそれらしい目標を掲げて見つかるまでの行動意欲にするのではないだろうか？

考え方を变えるため、進む道を変えたのは良かった事なのかもしれない。

以前の私は彼のためと言う理由を私が生きるため求めてきた。いつの間にか、手段と目的が逆になっていた。

だから、私はやめたの。

私は彼の腕を治すために何も出来ない。

私は今まで貰ったものを彼に返すことは出来ない。

私に出来るのは彼からもらうこと。

彼に甘える事しか私には出来ない。

だから、甘える、沢山。

多くのものを彼から貰う。

それが私の生き方で、私の恋のやり方。

いっぱい甘えて、貰って、彼の事が好きだよって伝えるだけだ。

もう、誰が世界の中心でも構わない。

私の世界は、彼と私の二人で回る。

それで充分。周りに人がいればもつと満足。

だから、後悔はしてない。するつもりもない。

私が幸せだから。

他は知らない。

※

「なんかさ」

くびくびと、マグカップを傾けながらフェイトちゃんがつぶやいた。

暇だから、なんて珍しい理由で私の家、もといコウ君の家に現れた彼女だったが。

「コースケに甘えすぎじゃないかな、なのは」

コウ君の膝に寝転がる私にそう言ってきた。

「甘えすぎ、かなあ?」

彼の顔を見上げると、ふいつと顔をそらされる。

否定はしないらしい。

まあ、確かに。

さつきから私の口にお菓子を運んでくるのは彼の左手だし右手はずっと頭を撫でてくれている。

いやあ、幸せだなあ。

「私ってほら、コウ君のこと好きだから」

だから何だ、フェイトちゃんの目がそういつてる。

確かに好きだから何でも許されるってわけじゃないだろうけど、コウ君の場合何だかんだ言いつつ嬉しそうだし。

所謂 Win-Win な関係が成り立ってるから何も問題ないんじゃないだろうか。

そう、懇切丁寧に説明してあげるとフェイトちゃんはため息を一つ。

「恋に溺れるって、こう言うことなのかな……」

「あはは、恋のためなら溺れ死んでもいいかもね」

私の言葉にコウ君はあまりいい顔をしない。

彼は大っぴらにこう言うことをいうのは好きじゃないらしい。

でも私はもつと惚気たりしないなあ、なんて。

これも私の我が儘だから、我慢してほしいな。

「私とコウ君はさ、本当に小さい頃に出会っただけど」

にやはは、と笑いながら口を開くと、またかと言いたげな視線が投げられるが気にしない。

「最近、もしコウ君と出会わなかったら、なんて考える事があるんだ」

「出会わなかったら?」

「私は凄い魔導師になってたかもね」

「はっ」

驚いた表情を見せたのはフェイトちゃんではなくコウ君。

フェイトちゃんとは何度か杖を交えたから、感覚的にわかるのだろう。

「自信はあつたんだ。もつともつと高く飛べる自信は」

それこそ誰にも負けなくらい凄い魔導師だ。

夢を語るには少し時間は早い、この世界がA世界だとして、出会わなかった世界をB世界とすると、B世界上では夢でも何でもなく現のことなのだろう。

「まあ、正確に言えばなれた、だろうけど」

結論を言うと今の私は地に墜ちたツバメだ。

なる気も無ければ資格も資質も失った。

今じゃ恋に生きるただの少女だ。人生何があるかわかったものじゃない。

「コウ君はこう言うことを私が言うのと傷ついたかもしれないけど、私はもう未練なんてないから」

それに私は二足草鞋で生きられるほど器用な人間じゃない。

コウ君と出会いながら魔導師を続けていてもいつかダメになっていただろう。

だから恋だけに生きるというのは私にあつた生き方だ。

魔法も使えないままだしより良く選べる道はこちらのみ。

都合のいいと言えば都合のいい。

私らしい人生かな。

「フェイトちゃんはさ、恋より大きいものである？」

「あるよ」

即答、さすがフェイトちゃん。

ただ周りからは生き急いでいるように見えてるらしいよ？

「私は友情。恋より友達を選ぶよ」

「つまり親友である私達ってことだね。にやはは、幸せ」

本当に幸せ。

こぼした笑みにフェイトちゃんも微笑む。

綺麗。私はフェイトちゃんの事を綺麗でかっこよくては尊敬できるとは思っているけど羨ましいとは思わない。

世界の捉え方が違うのか、見ている世界が違うのか。

コウ君はどうなのだろう。

私より大切なものがあるだろうか？

私を捨てても欲しいものがあるだろうか？

まあ、あったとしても、

ずっとそこにいさせるつもりは無いけどね。

27. まけたくない

たぶんこの気持ちは悔しいとかそういうものじゃない。

羨ましい、私はあの三人が羨ましかったんだ。

※

目線の先に三人の影。

私はそれが家族のように見えた。

二人の男女とその間に挟まれた小さな子供。

私にはなかったものだ。

私は両親の顔を覚えていない。

実の兄からは私が幼かった頃に事故で亡くなったと聞いたが正直物心がついた頃には二人での生活だったのであまりピンとこないというのが大きかった。

だからこそ憧れというものがある。私の両親がどんな人なのかは知らない。

でも、いつかそんなふうになれたらなんていう風には思っていた。

もちろん、私の好きな人が相手で。

それをまさか、違う女性と見せられるなんて。

しかも、私はその好きな人を含めて、羨ましい、妬ましい、なんて思っている。

黒い、嫌な感情だ。

元々、自分がなのはさんにどうこう言えたような人間ではないことを理解していた。

あの時はただ夢中で、フェイトさんが彼女のために諦めたことを知っていたから、なのにあんな姿のなのはさんを見て勝手に怒ってしまったというかなんといううか。

冷静なフリをした激情家、たぶん私はそんなもので感情に飲まれやすい。

だから、この黒い気持ちが私の中に広がっていくのを少しずつ感じていた。

紅助さんにだけは向けられない。

そう、分かっているけど。まるで私の体の中で煮立つようにその気持ちが膨れ上がる。

私には持ってないものが多い。

私のコンプレックス。

それは母だったり、父だったり。

兄だったり。

だからこそ紅助さんは私にとってどれだけ大きな存在なのか、わかっているもりだ。

でも、嫌な気持ちを我慢できない。

私は紅助さんが好き。これは絶対。

でもこの気持ちは違う。

好きとか嫌いとかじゃなくて、もつと深く暗くて。

「私も」

あんな風に、気がつくとなんかそれを呟いていた。

隣にいたスバルが不思議そうにこちらを見る。

「なんでもないから」

なんでもなくない、そんな事は言えない。

この気持ちは恥だ、醜い気持ちだ。

スバルにも教えたくない。それは私のプライドからくるものなんだろう。

こういう自分が嫌い。

変なプライドばかり強くて、他人に頼ることが苦手。

追い詰められると凝り固まった考え方しかできない、木偶。

それが私の深いところにある変えることのできないひとかけら。

こんなのだから、私は。

届かない。

※

泣きたい。

ふとそんな気持ちが浮かび上がる。

張り詰めた紐がほどけるような、突然の事だけど昔から何度だって付き合っていることだ。

そしてそんなことが起きるたびに私の目の前には、好きな人がいる。

「どうかした？」

私の気持ちが漏れたのか。そう紅助さんが問う。

彼の胸には満面の笑みを浮かべる子供、ヴィヴィオの姿。

なにより羨ましいのはこの子だ。私の持っていたはずのもの、それに気づかされたのはヴィヴィオがいたから。

だから、私はこんな子供の前でこんな事を言ってしまったのだらう。

「なんで私には、両親がいないんですか？」

口にして、何を言ってるんだと自問する。

言っただうにかなる事でもない。紅助さんも少し困ったように顔をしかめた。

胸に痛みが走る、困らせたいわけじゃないのに、すぐに取り消そう、そう口を動かそうとした時、

「わたしも、パパとママがいないよ」

そんな声が私を遮った。

視線がヴィヴィオを捉える。

小さな少女は笑顔で、その左右で色の異なる瞳を私に向けていた。「でもね、こーがパパになってくれたの」

そうだよね？とヴィヴィオが頭上の紅助さんを見上げる。

紅助さんもそんな少女に表情を崩して頭を一撫でする。

「認めた覚えはないけどな」

「ヴィヴィオがみとめたから、いーの」

なんで、疑問が浮かぶ。

なんで目の前の二人はそんなに、

まるで本当の親子みたいじゃないか。

あつてまだ間もないのに、なんで、なんで？

浮かび続ける疑問に私はヴィヴィオを見つめると彼女はにと子供らしく口で三日月を描くと言葉を続けた。

「新しいパパでもつくれるんだよ。それに、ヴィヴィオがみとめたから、本物のパパなんだ」

子供らしい、純粋な答え。

馬鹿らしいくらい簡単に思わず笑ってしまいそう。

新しくても自分が認めていれば本物、か。

だったら、紅助さんのお母さんを母と呼んでもいいのだろうか？
認めてもらえるのだろうか？

それに紅助さんだって、私を家族として。

「ティアナはさ。俺たちじゃ不満、かな？」

「え？」

不安そうな、そんな珍しい表情の紅助さん。

少しでも揺れている瞳にはしっかりと、私が写りこんでいた。

「確かに俺たちは血が繋がってるわけじゃないし過ぎた時間も結局少ない。それに俺はティードさんほどしっかりとってないから」

「そ、そんなっ」

「でも、俺はティアナの事を家族だと思ってる。こういうのは卑怯だけどさ、俺はずっと自分がティアナの兄だと思ってたから、すこし寂しい」

「っ！」

卑怯、本当に卑怯。そんなことを言われたら。

紅助さんの顔を見ていることができず顔を隠すように俯く。唇の痛みで自分が唇を噛んでいることを知らせていた。

「なんで、今まで言ってくれ、なかったんですか……っ」

泣きそうになりながら訴える。

そんな自分が情けなくて、小さくて。

「私だって、ずっと、不安で、寂しくて……ずっと独りだと、思って」
紅助さんが悪いんじゃない。ただ私が一人相撲をしてただけ。だけど。

受け止めて欲しい。そう思わずにはいられない。

「ずっと、私が紅助さんに引き取られたのを、同情とか、義務なんじゃないかって……思っていました」

だから不安で、私は本当に必要とされているのか。

なんで残ったのは私だったのか。一人では答えの出ない問を続けてきた。

そんな私の殻を破るように紅助さんはゆつくりと語りかけてくる。

「確かに、ティアナを引き取ったのはティードさんから任されたって
いう義務感もある。でも、家族になるってそんな簡単じゃないんだ」
紅助さんの手が伸び俯く私の頭を撫でた。

それはあの家族になった時から変わらない。暖かくて優しくて。

「俺は、ティアナと家族になりたいからそうしたんだ。俺が望んで
ティアナを家族にしたんだ」

その言葉で我慢の限界だった。

ぽたりと床に涙がこぼれる。目の前に小さな子供がいることも忘れて私は涙を流す。

恥ずかしい。泣き虫と言われても仕方ない。

でも、紅助さんの前でならこんな恥ずかしく泣くのも、好きかもしれない。

だってやっぱり私は紅助さんが好きで、この気持ちは確かなものだから。

私の家族になってくれてありがとう。

私を家族にしてくれてありがとう。

貴方を好きになって良かった。

私、正直なところなのはさんに勝てる自信がない。

だって彼女は私から見ても魅力的で、私もなのはさんのことが好きだから。

今ならフェイトさんの気持ちだってわかる。

でも、やっぱり、

負けたくない。

紅助さんの隣にいたい。

そばで支えてあげたい。

近くで笑っていたい。

好きだから、彼が好きだから。

この気持ちに嘘をつきたくない。

だから、負けたくない。

コウ君の初恋は隣の家に住んでいたお姉さんだったらしい。

私の場合はコウ君で、今も変わってはいない。

別に嫉妬をしている訳じゃない。

今の彼が私を好いていてくれるならそれでいいと思っているから。

ともかく、そのお姉さんの話だ。

コウ君の話によるとお姉さんは面倒見のいい人でよくお世話になったそうだ。

好きになったのもそれが理由が大きかったとか。

優しくかった、惚れる理由としては最もポピュラー何じゃないだろうか？

事実私もそうだったのだし。

優しさって言うのはかける側にとって軽くとも受ける側では重い時だつてある。

それに軽くても優しさは積もる。

だから私がコウ君からの優しさで恋をしたようにコウ君にもそういうのがあつたのだろう。

コウ君は子供っぽい好き嫌いって簡単な気持ちだったと言っていたが。

それに、その気持ちはお姉さんに向けて既に告白されたものらしい。

勿論それは断られている。

理由は簡単で、「子供だから」っていうわかりやすいもの。

でも自分達の場合は？

私やコウ君がまだ小さくて周りからは子供だと認識されるのはわかっている。

だから私の気持ちも、大人たちから見れば飯事のように思われているのだろう。

しかし自分の中ではとてもその気持ちは大きなものなのだ。

この気持ちがいっつまでも色褪せないとは限らないし忘れてしまうことも今後あるかもしれない。

。 だけど私は認めてほしい、誰でも構わない

今、感じている気持ちが正しいものだ。

そう言ってくれれば私はもつと彼を好きになれる気がするから。

ちなみに、紫さん、コウ君のお母さんの話によれば隣の家に住んでいたお姉さんだが、コウ君が産まれる前に事故で亡くなっているらしい。

※

夢を見ている。

突然に開けた視界に何故かそう思った。

星空に浮かぶ小島、そんな場所に私はいた。

「や、元気？」

ふと気が付くと目の前にコウ君の形をした何かがちちらに手を振るっていた。

「貴方、は？」

コウ君によく似たそれに私は問う。

すると目の前の人物はにこりと笑い、

「僕は僕、七峰紅助」

そう言い切った。

我が夢ながら適当だ。

喋り方はかすりもしていないし見せる表情だってコウ君のものには程遠い。

そして何よりその身体だ。

身長は凄く高いし体つきもしっかりとしていて顔だって表情のわりに大人びている。

まるでコウ君が歳をとったかのような姿をしているのだ。

しかしそうまとめると本当にコウ君に程遠い。
面影こそあるものの、これじゃあ別人と大差ない。

「全然コウ君じゃないの」

ぼそり、こぼす言葉を耳にしたのかコウ君もどきが顔をしかめる。
「そんな酷いこと言うなよ。これでも君の要望には答えたんだから」

私の要望？

そんなの言った覚えはない、が。

これが夢だとすると確かにこれが私の無意識の現れとなるのだからか？

「そう、僕は君が望んだ七峰紅助だよ」

「はあ？」

思わず間の抜けた声を返す。

そんな私に目の前の彼は変わらず笑いながら言う。

「僕がこんなに幼いのは君がそう望んだからなんだよ？」

「私が幼くって？」

「うん。君はもつと僕に頼りたい、そう思っているでしょ？」

……………まあ、そうだ。

私が甘えてるぶんくらいは頼られるのもいいかなあ、なんて思ったことはある。

でもコウ君はなんだかんだ言っつけてしっかりしているからもつとコウ君が子供っぽかったらと……………はっ！

「じゃ、じゃあ何でそんなに歳とってるの？」

「人を年寄りみたいにいわないでよ」

もう、と頬を膨らみますのだが外見年齢的に少し厳しい。

アンバランスすぎて何かもう、怖い。

「アンバランス、そう思ったでしょ？」

「うっ……………」

「やっぱりね。つまりそう言うことなんだよね」

「……………どういう？」

「君は現実の僕にもアンバランスを感じていたんでしょ？」

わかってるから、そう私の夢のくせに当たり前前の事得意げに言う

彼。

アンバランスに思っていたのもあるけど。

コウ君は周りの子と違って落ち着いているし雰囲気的には歳が近い子より兄の方がにているくらいだ。

だから感じてはいたんだらうけど、

「食べ合わせが悪いって規模じゃないよ」

「君の望みだから僕に責はないからね」

憎たらしいコウ君だな、こいつ。

しかしなんで私はこんな夢を見ているのだろうか？

こんなハッキリと夢を自覚しているのは初めて。まるで起きているのと変わりにくくらいだ。

「それでなんで君は私の前に？」

「え？」

「こうやって貴方が私とお話するのは何か意味があるんじゃないのかな」

「うん？」

「いや、たがら」

「あ、あー。もしかして君って自分の事を特別とか思っちゃう系の子？」

「え、えっ？」

「まあ、まだ若いからわかるよ。自分が漫画の主人公みたいに運命を持った人物だと思ってるんだよね？だから今のこの状況を一種のイベントだと思ってるわけだ。ゲーム世代って怖いなあ、なんでもかんでもイベントとかフラグとかだと考えてるんじゃない？」

「ちよ、ちよつとまっ」

「でもさ。普通に、一般的に考えてみようよ。夢、これって夢だよ」

「う、うん。夢っていうのはわかるよ？」

「と言うわけはさ、これも君の脳内で行われているわけだ。それってつまり妄想でしょ」

「いや、そんな事ないんじゃないかな」

「いいや、あるね。僕は君の妄想の産物、つまりぼくのかんがえたパー

フェクト七峰紅助なのはカスタムなわけだよ。本人が言うんだ間違いない」

「でもさそれだと、妄想だとしたら今の私って妄想に耽るただの可哀想な子になっちゃうんじゃない」

「うん。君は可哀想な子だ」

「真顔で言わないで!」

「とにかくさ、この夢にはこれといった目的はないんだ。まあ、強いて言うなら本来の夢と同じで記憶の整理かな」

つ、つまりなんだ。

私はこんな夢にも馬鹿にされちゃうような可笑しな人間だったのか。

もしくは馬鹿にされたくて夢までみてしまうような変態なのか。

「君が馬鹿でも変態でもいいじゃん」

「そういうこと言わないでよ!」

「まあまあ、とりあえずさ何か話さない?」

「……なんで?」

「そう警戒しないでよ。ただ暇だからって思っただけだよ。僕が思ってるんだ、君もそう思ってるんでしょ?」

「……別に」

「素直じゃないなあ。現実の僕にはあんなに素直なのに」

「それは、コウ君だから」

「僕もコウ君だよ?」

「違うよ、何もかも」

このコウ君は本当のコウ君とは正反対だ。

私の夢、妄想とはいえ出来損ないとか言いようがない。

話す度にコウ君はもつととかコウ君ならばとか、違いが、目の前の彼の綻びが目に入る。

「だったらさ、君って実際の僕の何が好きなの?」

「それって貴方は私の妄想だから言わなくてもわかるんじゃないの?」

「まあね。でも声に出すからいいんじゃない。反芻だよ反芻」

「貴方がそれでいいって言うんなら私もそう思ってるんだらうけど」「じゃあもう一度聞くとよ。僕の何が好きなの?」

悪戯っぽく笑う彼。

一応言っておくが好きなのは君じゃない。

しかしコウ君の何が好きなのか、か。

簡単に言ってしまうれば彼の全てが好きだ。頭の先から足の指先まで、優しいところや恥ずかしがり屋なところも。

月並みだけれど本当に好きなんだ、食べちゃいたいくらい。

「君が変態なのはいいけど、もう少し絞れないの?」

「か、勝手に考えてる事をよまないでよ!」

「はいはい、ごめんごめん、んで?」

「……………私、貴方は嫌い」

「そりやどうも」

なんだかコウ君に申し訳なくなってきた。

目の前のコレがコウ君とよく似た姿をしてるだけでコウ君に対しての侮辱のような気がする。

とりあえず何かあげてよ、と続ける彼を睨みつけ仕方ないと口を開く。

「強いて言うなら、側にいてくれる事」

「ふうん」

「そう言う全部わかってる、みたいな反応好きじゃない」

「実際に全部わかってるんだけどね、君のことは」

「それでも、だよ」

「はあ、じゃあ次は気をつけるよ。それで側にいてくれる事、本当にそれだけ?」

わかっている、と今言ったくせに一々聞き返すのが胡散臭い。

「本当はもつとあるよ。ただそれが一番っただけ」

「理由は?」

「…………そばに誰かがいるってのはそれだけで幸せなんだよ」

そう、小さい、本当に小さい頃から感じていた幸せだ。

私にとって孤独とは私の知る中で最も不幸な事だ。

それは初めて知った不幸だからであり最も私の深くにあるトラウマと言ってもいい事柄だ。

だからこそそこから救い出してくれたコウ君という存在は私にとつて大きな存在であるし救い出してくれたその後も、コウ君は誰よりも私のそばにいてくれた。

そうだから私は彼を好きになった。

「例えば漫画とかで兄妹が恋に落ちる気持ち、私にはわかるよ?」

兄妹って本来は幼い頃には一番近くにいるものでしょ? だから好きになる事もあると私は思っている。

「でもそれって結局報われない恋だよね」

「そうだね。兄妹では一緒にはなれないよ。でも恋をするしなはさ、結果を求めるものじゃないから」

「後に引いたとしても?」

「後に引くとかは個人の問題だよ。それにそんな事は普通の恋愛にだってあるからね」

「まあ、そうか。君にとつて恋をする前の僕は兄妹だったの?」

「にやはは、それはないよ」

それだけは、決してない。

「最初は邪魔者だったかなあ」

「あはは、邪魔者か」

「うん、人付き合いが苦手だった私にとつての世界って結局家族だけだったから。そこに割り込んできたのがコウ君で」

「信用ならないやつだったわけだ」

「まあね。それにその時の兄妹ってあまりいい感じじゃなかったし」

「ああ、そう言えば向こうから離れていったからね」

そう。別に兄のせい姉のせいと彼等に非を押し付けるわけではない。別に兄のせい姉のせいと彼等に非を押し付けるわけではない。

私が何も出来なかったのが、家族の力になれるだけのものが無かったからだとわかっている。

しかし、だからといって負の感情を抑えられるというほど私は大人じゃない。

だから私にとってコウ君は兄妹になりえない。

私にとつての兄妹という認識が歪んでいるからというのもあるだろう。

「もしかして、君にとって僕は家族より大きいの？」

「かもね」

小さく笑う私に彼は初めて実際のコウ君によく似た苦笑を浮かべた。

「でも家族だつて大切だよ。コウ君とは想いの方向が違うだけ」

「うん、知ってるよ」

「今は誰よりもコウ君だけどね」

「それも知ってる」

また共に笑う。

君は嫌いだけど、こんな空気は嫌いじゃないよ。

君は私を知っていていい、そう思う程度には。

※

目を覚ますと見慣れたコウ君の顔が目に入った。

ナツメ球で淡く照らされた彼の姿を私は何度か瞬きを挟み確かめる。

「……本物？」

初めに口に出たのはそんな言葉。

よく夢は目が覚めると忘れてしまっている、そんなことはあるけど今回に限っては何もかも、そっくりそのまま覚えていた。

そしてそんな言葉を向けられたコウ君は不思議そうに首を傾げる。「偽物で無いことは確かだけど」

少し困ったように小さく笑うコウ君は私の頭を軽く撫でる。

確かに表情、背格好、どれも見ていた夢の彼とは違い実際の彼のものだ。

「夢でも見た？」

「……うん」

少量の間を置き領く。

「どんな夢だったか聞きたい?」

「勿論」

頷いてみせるコウ君に満足し私は口を開く。

「コウ君みたいな誰かが出てくる夢」

「つまり俺の偽物?」

「かな。その人と二人でコウ君の事を話してたの」

「え、ん?」

なんでその二人で自分の事を、と思っているのだろう。

不思議な表情を浮かべるコウ君が可笑しくて笑みがこぼれる。

「私がコウ君のどんなところが好きなのかって」

彼の頬が赤く染まる。

まだ慣れないんだ、こういうの?

「あとね、ずっと思ってたけど言わなかったこと」

「何か、あるんだ?」

「うん」

夢の彼とは簡単にしか話さなかったけど、ずっと気にはなっていた事。

「コウ君ってアンバランスだよね?」

「アンバランス?」

「心と身体、て言えばいいのかな」

コウ君の表情は変わらない。

「コウ君って歳のわりに落ち着いてるよね」

コウ君の表情は変わらない。

「私達との差を感じるくらい」

コウ君の表情は変わらない。

「コウ君って」

コウ君が、

「本当は私より年上なんでしょ?」

困ったように苦笑した。

「そうだよ」

どこか面倒そうに頭を掻いて彼は続ける。

「つて俺が答えたらなのはどうするの?」

彼の様子に焦りなどの負の感情はない。

だから私はとろけるように笑う。

「コウ君の秘密を聞けるんだよ?」

確かめるように彼の頬に指を這わせる。

その感覚に満足して私は囁く。

「もっと好きに、なっちゃうかも」

やっぱり彼は困ったように苦笑する。

こんな私でごめんね。

やっぱり私は、君が望むようには出来そうにない。
うん。

私には、君を笑顔に出来ないや。

28. Mine

私にとってヴィヴィオという存在は正直にいうと、コウ君に近づくための道具か何かとしか認識していなかった。

その事については私自身、人として良い事ではないとわかっている。

しかし愛想のない子供に好意を向けられるほど自分は人間出来ていないし何よりあの子の姿が気に食わなかった。

ヴィヴィオの過去に何があつたかは私は知らない。

彼女の身体が人造魔導師であることは聞いていた。そして彼女に繋がれていたレリック。

ヴィヴィオが今後、私達六課の進む道と交わる可能性が少なからずあることは理解している。

ヴィヴィオが何らかの為に造られそれがレリックと関係している。

ヴィヴィオ自体に危険はなくとも彼女について回る危険が確かに存在する。

そんな事はわかっている。

わかっているからこそ、どうでもいい。

私があの子の事を気に食わないと感じている理由。

それはあの子が過去の私と同じだからだ。

人造魔導師として、本来両親というものが存在しないあの子が頼れる者として選んだのがコウ君だった。

そんなの、まるで私じゃないか。

ヴィヴィオのその気持ち胸の中の空虚感からくるものなのかは確かではない。

でも確かにあの子は私がそうだったように周りには誰もいない。

小さい自分じゃなにも出来なくて、のばされた手にしがみつくことしかあの子には無かったのだろう。

どれもこれも私と同じだ。

私はコウ君の後ろについて回るヴィヴィオと幼かった自身を重ねてしまう。

だから私はヴィヴィオを好きになれない。
そんな私は駄目な人間だ。わかつている。

最初はヴィヴィオを利用してコウ君と離れていた距離を元に戻そうとした。

だけどあの子を見て、過去の私を見て、コウ君が心配になった。

あの子は私だ。

私はまたコウ君を壊してしまうかもしれない。

それだけは駄目だ。

またあれを繰り返すのだけは嫌だ。

せつかく再会したのにもう別れたくない。

自分勝手な我が儘だけど私は二度とコウ君を忘れたくない、忘れようとしたくない。

だから私はヴィヴィオが怖くて、嫌いだ。

なのに、

※

珍しく、私とヴィヴィオの周りには誰もいない。

つまりコウ君も。

だからかお互いがあまり良い顔をしておらず静かな時間だけが流れていた。

なんでこんな事になったのか、それは私が少しの間、ヴィヴィオから離れることになったからだ。

公開意見陳述会、一、二年の間隔で行われる地上本部の運用を議論するその会議。

数日後に行われるそれに私や六課のメンバーは警備の為に前日からここを離れることになっている。

もとより外部協力者であるコウ君は参加せず私達が離れる六課本部の警備となるわけだが、私がヴィヴィオから数日程離れる事を知った彼は「そろそろちゃんと仲良くなしないと忘れられるぞ」なんて

言つて私をヴィヴィオと二人で部屋に押し込めた。

たかが数日、と私はぼやいたがちつちやい子にとつての数日がどうとかで説教までされてだ。

そのせいが一応仲良くなるため、ヴィヴィオが気に入りそうな人形まで買つてきて準備なんかをしていたのだが。

何をするでなく、何を話すでもなくただ時間が流れていく。

もう、憂鬱で仕方ない。

私は別にこの子と仲良くなる必要は無いと思つていた、どうせ引き取る人物が現れるまでの関係だとも。

しかしここでヴィヴィオと二人になる直前、コウ君が言った。

「ヴィヴィオは俺が引き取る、つもり」

少し尻下がりの言葉、だけど確かにコウ君の言葉だった。

私は彼がヴィヴィオに向けている気持ちを知っているわけではない。い。

聖王協会へ向かつた日だつてそうだ。

彼はヴィヴィオ、あの子が気になるからと言つて私たちに同行してきた。

何故、彼はヴィヴィオを気にしているのか。

ただ保護をしただけの子供になぜそこまで？

疑問は尽きない。だから私も少しくらい仲をよくしておこうなんて思つたわけだけど。

………どうしたものか。

相手のヴィヴィオはと言うと、気に食わない顔をしているくせに何故か私の懐に収まり絵本を広げている。

ヴィヴィオも私の事を好いていないようだがなんでこう近づいてくるのだろうか？

「ねえヴィヴィオ」

「うん」

ふと声をかけるとヴィヴィオがこちらを見上げる。

相変わらずあまりいい表情ではないが。

「ヴィヴィオは私の事、好き？」

「きらい」

「……………正直な子供だ。」

子供だから正直なのか？

しかし嬉しくはない正直さだ。

「じゃ、じゃあなんで私にくっついてくるの？」

「……………このにおいがするから」

「あつ、そ、そう、なんだ……………」

不服と言った表情で告げられたらそれ。

少し、恥ずかしい。

思わずすすすんと自分の匂いを確認するがコウ君の匂いがついているのかなんてわからない。

「ヴィヴィオは、さ。なんでコウ君がパパなの？」

恐る恐る口にした言葉にヴィヴィオはポカンと口を開けて当たり前のように言う。

「こーがパパだから」

「え、つと？」

「こーはパパだから、ヴィヴィオはえらんだ」

「……………？」

首を傾げる私に対してヴィヴィオはムツと顔を強ばらせる。

「こーはヴィヴィオのにおいがするし、ヴィヴィオはこーのにおいがするのー！」

う、ん？

子供なりの感覚なのだろうか？

匂いと言うのはよくわからないがそれがヴィヴィオの好き嫌いに関係あるとすれば。

「私もコウ君の匂いがするのに」

ぼそりとこぼした言葉にヴィヴィオはこちらをキツと睨む。

「ヴィヴィオのこと、きらいだから」

「嫌い？」

「だから、ヴィヴィオもきらい」

……………なるほど。

簡単なことだった。確かに私はヴィヴィオの事を好いていない。確かに私だつて私の事を嫌いな人を好きにはなれない。

……
コウ君に言われて、ヴィヴィオに好かれようと考えていたけれど

私がヴィヴィオを好きになる、か。

「私は、ね。今からずつと昔にコウ君と出会ったの」

「こー、と？」

「そう。ちょうど私がヴィヴィオくらいの時だったかな」

その時は私だつてヴィヴィオのようにコウ君の事を特別な人だと思っていたし特別だから頼つても大丈夫だつて思っていた。

「でもね、コウ君も普通の人だった」

特別ななんかじゃなく、ただ周りより少し大人びていただけの男子。

私はそれを勘違いして、たくさん頼つて、たくさん助けられて、

「コウ君を潰した、私が」

小さい子に、何を言っているのだろう。

でもヴィヴィオは真剣にコウ君や私を見ている。

だからだろう、私も真剣に、ヴィヴィオと付き合おうと思ったのは。

「ヴィヴィオはその私に似てる、だから」

コウ君を壊さないで。

願うように言ったその言葉をヴィヴィオがしっかりと聞いていたかはわからない。

ヴィヴィオは手に持った絵本を開く。

よく見ればその古びた絵本には見覚えがある。

小さい頃コウ君の家で見つけた唯一の子供用の絵本。

開くと絵が飛び出すように出来ている立体絵本だ。

題名は『白雪姫』

「ヴィヴィオはこれ」

そう言つて指を指したのは毒林檎を食べ眠ってしまった白雪姫。

「こーはこれ」

次に指されたのは白雪姫を目覚めさせた王子様。

「だからヴィヴィオはコーが好き」

助けてくれた、ということだろうか。

確かに、信じられる人が誰もいない暗い世界は眠っているようなものか。

「でも」

言葉が続けるヴィヴィオはニツとこちらに得意げな笑顔を見せる。

「コーもヴィヴィオが好きだからコーがねむっちゃったら、ヴィヴィオがおーじさまになれるよ」

どうだと胸をはるヴィヴィオ。

好きと想われるから王子様にだってなれちやうのか。

羨ましい。

私にもそれくらいの自信があれば、なんて。

でも、

「それなら、コウ君は大丈夫かな」

ヴィヴィオは私とは違うようだ。

相手を好いていて相手に好かれていると胸をはれる自信と強さをもっている。

私には無かったものだ。

「ヴィヴィオ。私はね、コウ君が全て。だからヴィヴィオがコウ君の重荷にならないか心配だった」

それにヴィヴィオは私とよく似ていたから、だからきつと同じになると思っていた。

「でも、やっぱり私は馬鹿だなあ」

いつだって間違えるのは私だ。

コウ君の腕も、コウ君と別れた時だって。

その度に誰かに助けられ、誰かに救われて。

「ヴィヴィオは強いね。私よりずっと」

今はこの小さい子を見習おう。

小さいのに、力強い勇気を持つこの子を。

「私も自分を信じてみる。私が信じるコウ君のことも」
きつと彼なら大丈夫。

彼だけじゃ、一人じゃ無理なら今度は私が助けよう。
大丈夫、私だって小さい頃の私じゃない。

「ありがとう、ヴィヴィオ。大切な事を教えてくれて」
ゆっくりとヴィヴィオの頭を撫でるとヴィヴィオは少しむず痒そ
うに表情を緩めた。

「ヴィヴィオと話せてよかった」
笑顔をこぼした私をヴィヴィオが不思議そうな顔で覗きこんでく
る。

「今の私ならヴィヴィオを好きになれそう。そうだ」
懐にしまっていた紙袋を取り出す。

「プレゼントだよ、どうぞ」

「ヴィヴィオ、に？」
「うん」

紙袋を受け取ったヴィヴィオはその中を覗き込みそして目を輝か
せた。

「ウサギ！」

取り出したのはウサギの人形だ。

元々この子にわたす為に持ってきたものだちようどいいだろう。
ヴィヴィオは人形を抱きしめて笑う。

子供らしいその姿につられこちらまで笑顔がこぼれる。

やっぱり、もつと単純に考えればよかった。

ヴィヴィオには、私が見るヴィヴィオにコウ君は関係ない。

もつと単純に、今私はこの子を可愛いと思っただけで好いている。

結局人から人への想いなんてそんな簡単なものだ。

見方を変えればこんなに簡単に人を受け入れられる。

「ねえ、ヴィヴィオ」

「うっ」

私が渡した人形とコウ君が渡した絵本を抱きしめるヴィヴィオの
姿にどこか愛しさすら覚える。

やっぱり、この子なら私と彼を繋いでくれる気がする。

でも、それ以前に私は、

「ヴィヴィオの事、好きになっちゃった。一番はコウ君だけどね」
笑う私にヴィヴィオも表情を崩した。

「ヴィヴィオも好きになれるかも、ママのこと。パパの次だけど」

だぶん、この時確かに私はヴィヴィオと繋がっていた。

そしてその先にいるコウ君とも。

だからきつとこの先は大丈夫。

私はコウ君を助けられる。

そう思う事にした。

だってそのほうが、

未来は明るいようだから。

29. 理由

「でき、その時になのはが——、あ？」

気がつくのと、俺はその場にいた。

そこがどこなのか、どうやってこの場まで来たのか、なんて事は覚えていない。

どこか見覚えのある城の一角、緑生茂る木の下、そこにできた日陰に俺は腰を下ろして笑っていた。

なぜ笑っていたのだろうか？

確か、昔の事を、思い出話を聞かせていて……………

誰に、聞かせていたんだっけ？

ヴィヴィオ？

違う、ヴィヴィオじゃない。

じゃあ、いったい誰に？

そう隣に顔を向けると、彼女はいた。

微笑みをこちらに向ける金の髪を持つ少女。

その笑顔はどこか太陽を思わせる。

誰、だっけ？

見覚えは、ある。

どこかであった。どこかで見た。

その顔、その瞳、その雰囲気。覚えている、覚えている、はずだ。

なのに彼女の名前が出てこない。いつ出会ったのか、どこで出会ったのか、そんなことが浮かび上がらない。

そして何故俺は彼女と話をしていたのか。

穴だらけの記憶の中、俺は彼女を見つめる。

「えっと、ごめん。君って……………誰だっけ？」

失礼な事を口に行っているなあ、なんて頬を搔きながら思う。
しかし目の前の少女はただ微笑むだけ。こちらに負の思いはない
ようだった。

そしてゆっくりと口を開き。

「――」

その声は、発せられなかった。いや、聞こえなかった。

彼女は確かに何かを口に行っている。しかしその声は俺の耳を震わ
すことはなく、ただ空気に溶けていく。

どういう、ことだ？

知っているような場所、知っているような人物。そして聞くこと
できない声。不思議にも程がある。

「また夢を見てるのか……………ん？」

何故俺はそんなことを口にしたのか。

それにまた、とは以前に同じようなことがあったのだろうか。

覚えていない、覚えていないんだよなあ。

「まあ、いいか」

そこで考えるのをやめたのは、これが本当に夢だったからか。

どこかぼやけるような思考だったからか。まあ、それもどちらでも
いい。

「何を話していたんだっか……………ああ、そうだ。父さんが死んだ頃か」

思い出す、この身体がまだ小さかった頃、まだなのはが魔法を知ら
なかった八歳の夏。

父さんが死んだ時期は一度目の人生と変わりない。

夏の暑い日、病気を患っていた父は俺が看取ることなく息を引き
取った。

悲しい、とは思っても涙は出なかった。以前の人生で十分味わった
悲しみだったからだろうか。

それに目に見えて気落ちしていた母をどうにかしたい、そう思うこ
とで目をそらしていたのか。

そしてなにより、俺の代わりと言うように涙を流していたなのは見ただからか。

確かに小さい頃は働いていた母の代わりに俺の面倒をよく見てくれたのは父だった。

何度も俺の家に顔を見せていたなのもそうだったのだろう。

突然のように泣き出したなのは顔を見たときは不思議な感覚があった。

なんでこいつが泣いてるんだ、という疑問。

なんでこいつと違って俺は泣けないんだ、なんていう悔しさ。

そして、父のために泣いてくれたという、嬉しさ。

「俺さ、その頃はもう頭ん中じゃ二十代後半なんだぜ？」

子供みたいで馬鹿だろ、なんて自重する俺に隣の少女がクスリと笑う。

「その頃からもう俺はあいつのこと、好きだったんだらうな」

ロリコンもいいところだ。

といっても俺が今三十代後半って気分ではないんだよな。

実際に二十から上の歳がどうだったか、なんて知らないし体に合わせると同じ年代の人物としか深く関わっていないのもある。

それと向上心が無いのも関係があるだろうか？

「親父臭いとか言われるのも、いやだしさ」

それに、そろそろこの身体も追いついてくる頃だからいいのかもしれない。

……ロリコンである事は変わらないような気がするけど。

まあ、そんなことはどうでもいいことだ。

「俺もさ、生まれはちよつと周りとは違ったけど。幸せな日々を過ごしてはいたんだよ」

あんたもそうだろう？

そう、問うた俺に彼女は頷き前方を指さした。

それにつられ、目を向ける。

その光景は、いつから始まっていたのか。

隣にいる少女と一人の少年が互いに握った剣を打ち合わせている姿。

「随分、物騒な青春、だな……」

乾いた笑みを浮かべながらそう口にするると彼女は納得がいかないように頬を膨らませてじゃあ次はこつちと言うようにまた別の場所を指差す。

そこには先程と同じ少年と共に茶会を開いている姿。

「まあ、普通こういうのが青春だよな」

思わずそう口にしてしまったのが悪かったのか、彼女はまだムツとした表情でこちらを見つめている。

「あ、あー、俺にもあったよ。魔法をぶつけ合ったり、してました。ごめんって」

わるかったです、そう両手を合わせて謝ると頬を萎ませて満足したように笑う。

そんな姿に思わずため息が漏れたのはどうやら運良くバレなかったようだ。

と、そんな会話を続けているうちに辺りの様子が変化を始めていた。

俺たちを中心とするようにゆっくりと風景が消えていく。

どうやら終わりの時間らしい。

城が消え、

木々が消え、

庭が消る。

なにもかもが無くなったその場で俺は隣の少女を見る。

笑う彼女は、それでもどこか悲しげで、真っ直ぐに俺を見ながら何かを口にした。

「――」

それでもその声は俺に届かない。

そして、少女が消える。

最後に彼女は何を言ったのか、何を伝えたかったのか。わからない。

それでも、俺は――、

ふと何か言葉を頭の中でつぶやいていたのは自分でも気がつかなかった。

※

目が、覚めた。

夢を見ていたような気がする。覚えてはいないのだけれど。

顔の上に乗っかっていたヴィヴィオをどけてベッドから降りる。

まずは顔でも洗おう。

顔を洗い、すっきりしてみると更に夢の事は忘れていた。

本当に自分は夢を見たのだろうか？ それすらもはつきりとしな
いほどに。

まあいいや、そう珈琲を啜ると更に消える。難儀な頭だ。

数分が立ち、ヴィヴィオが目を覚ます頃には夢を見たことなんて頭
の隅にも残っていないかった。

「うう、ー」

そうこうしているとヴィヴィオが目を覚まし、こちらに手を伸ば
す。

抱き上げろ、と言いたいのだろう。

その通りに抱き上げてやると安心したように頬を緩ませて体重を
こちらにあずけてくる。

今更になって思うがどうやら俺はヴィヴィオの事を嫌いじゃない
らしい。

どちらかといえば好ましく思っていると云っている。

素直で思った事をすぐに口にするから、何を考えているのか、どう接すればいいのか、なんて考えなくてもいいし。

なんというか、相手をしていて楽なのだ。

だからか、少しくらいはかまってやつてもいいんじゃないかな、なんて思い始めている今日この頃。

が、その今日は公開意見陳述会の二日前。

つまりヴィヴィオが攫われるまでもう二日しかない。

ここまで来て、俺は自分が何をすべきなのかわからない。

ヴィヴィオを守るべきなのか？

守るべきだ。

一番最初に浮かんだのがそれ。

守る。守りたい。守らなければいけない。

当然な気持ち、なんだろう。

なのはやフェイトなら真面目にそう言うんだと思う。

あの二人は子供に自分を重ねているようなところがあるから。

だから自分のようにはなって欲しくない、そう思っているところはあるのだろう。

しかし俺は？

そう疑問を浮かべてみると、可笑しい程に自分のことがわからなくなる。

もちろん、目の前に子供がいて助けなければ、という状況になれば

俺はそれを助けるだろう。

それほど自分は腐ってはいないつもりだ。

しかし何故ヴィヴィオにはこれほど強く思うのだろう。

そんな理由なんてないはずだ。

頭の中にヴィヴィオのことが古ぼけた記憶として残っていたから。本当にそれだけか？

ヴィヴィオとはまだ出会ってそれほど月日が経っていない。

ヴィヴィオからは懐かれています。本当の父親のように扱われてはいるがこちらから見るとそれ程大きなものではないのは確かだ。

俺にとってヴィヴィオは保護した子供、懐かれた子供、聖王のクローン、ゆりかごの鍵。

俺はヴィヴィオが生まれるずっと前からヴィヴィオを知っていた。だからこの子を物語のピースとして見る自分がある。

そして俺はヴィヴィオと確かに出会い、なのは達のように確かにここにいる事を知った。

だからこの子を一人の人間として見る自分がある。

その二つの自分が矛盾しながらヴィヴィオを捉えている。

でもその俺の視点から溢れ出た気持ち、この子を守りたい。

そんな気持ちだ。

何故？

この子が物語のピースだからこそ俺はこの子にとって必要のない、不純物だとわかってる。

この子が確かにここに存在するのだからこの先もこの子にとって続く道がある事を知っている。

じゃあ、なんで俺はこの子を守りたいんだ？

俺はヴィヴィオにとって本来必要な人物ではなく、俺がおらずとも彼女には未来がある。

でも俺は彼女を守りたい。

なんなんだ、この気持ちは。

考えれば考えるほど頭の中が掻き回されるようにまとまらなくなる。

まるで噛み合わない歯車が軋みをあげるように。

まるで深い霧が何かを隠すように。

俺は確かに俺なのか？

俺はここにいいのか？

俺は、ここに必要なのか？

「……………」

「……」

「ん、どうしたヴィヴィオ？」

……………まあ、いいや。

ヴィヴィオの声に頭の中の疑問を振りはらう。

今は、そんなことなんてどうでもいい。

今は、答えがでないのなら。

いつか、そのいつかが来るまでは。

※

「コウ君、どうかしたの？ 顔色、少し悪いよ？」

六課の食堂でヴィヴィオとともに昼食をとっていると前方からそんな声が飛んできた。

どうしてもピーマンを残そうとするヴィヴィオから目を離し声のする方向を向くとどこか心配そうに眉を下げたのはがこちらの顔を覗き込んでいた。

「顔色、悪いの？」

失礼か、と思いながら聞き返す。

自分としては別に体調面に異常は感じていない。

ならば何故、自問も含めた言葉になのはは昼食が乗ったトレイを置きこちらの前の席に腰を下ろした。

「少し青白い。体調は、大丈夫？」

「特に問題はない、けど……」

考えられるとしたら、今朝からの悩み事くらいか。

考えないように、とはしたがまるで耳元でブツブツと呟かれるようにその思いは消えることはない。

我ながら面倒くさい性格をしているとは思う。

不安を一度抱えようと中々降ろすことができないのだ。

昔からそうだ。だからできるだけ不安の種は拾わないようにして
いたし見てみないふりを続けてきた。

だから今回も、大丈夫、そう騙し騙し行くつもりなのだが。

「大丈夫、じやなさそうだね」

手に持ったフォークでヴィヴィオが睨み合っていたピーマンを突
き刺しそれを口に放り込んだのはがそんな言葉をくちにした。

パアッと笑顔を見せるヴィヴィオに対し珍しく他人を甘やかす彼
女に対しどこか驚きにも似た感情を向けた俺はその彼女が強くこち
らを見つめている事に気がついた。

まるで探るように、丸い瞳が俺を移していた。

「わかった。何か悩んでるでしょ？」

「はあ？」

そんな間の抜けた声を漏らす。

なんだ、こいつ。まるで頭の中まで見られたような感覚に思わず身
体を逸らし彼女から距離をとる。

「別にコウ君の考えてる事がわかるわけじゃないよ」

なにも言葉にしていないのにそう返されたのがその言葉の信用性
を損なっている。

「経験談だよ。私も同じような顔をした事がある」

なんだよ、それ。

どこか自分の知る彼女とは違う。まるで年上のように落ち着いた
雰囲気を出すのはに面を食らう。

彼女は前までこんな風、だっただろうか。

その答えを出すより早く、彼女は俺に詰め寄るように身を乗り出し
顔と顔がぶつかる程の距離で言葉を続けた。

「ねえ、教えて。何を悩んでるのか。私に教えて」

強引。力強さすら感じられるそれに俺は困惑するしかない。

彼女に何があった？ 考えて見ても昨日ヴィヴィオと二人きりに

してみたくらいで。

目を泳がせる俺に畳み掛けるようになるのはは次々と言葉を投げかける。

「私、知りたいの。コウ君の事。ちゃんと知らないと、ちゃんと聞かないと、私は馬鹿だからコウ君の事をわかれな」

彼女が何を言っているのか、俺にはよくわからない。けどそれはどこか暖かく、胸が痛む。

「出来る事はしておきたいの。君を安心して信頼出来るように」

俺、を？

なに、信頼？

お前が、俺を？

「そんなの——ッ」

叫び、言葉が途切れる。

その先、俺は何と口にするつもりだったのだろう。

飛び退くようになのはから離れる。気がつくとも周囲の視線がこちらに集まっていた。

それらから逃げるよう顔を俯かせ床を睨む。

わかりたくない。

わかりたくない。

俺は、わかりたくない。

だって、俺はお前の事を。

お前だけには、聞きたくはない。
お前だけには、知られたくない。

だって、否定されたくない。

お前だけには、お前だけには、言わないでほしい。
だから、お前だけには聞けない。

俺が、お前にとって必要なの？

なんて。

だって、俺はお前の事を、信用なんてしていないのだから。

決定的な、何かが頭の中に生まれてしまった。
形にしてはいけない何かを形にしてしまった。
逃げた先の視界にひろがる白い床。

胸が締め付けられる。

ごめんなさい、自責のそれか。

お願いだから来ないで、怯えのそれか。

現れたのは、

「どうしたの、ヒー？」

金の髪を揺らしながら、二種類の色を持つ瞳が俺を見つめていた。

「ヴィヴィオ？」

これが俺の声？

なんて首を傾げてしまいそうなほど縮こまった声が漏れる。

逃げようとした先に道を塞ぐように、俺と床の間に潜り込むように
ヴィヴィオが。

「……？」

俺を、見て。

やめて。

思わず顔を逸らした先には、

心配そうにこちらを見る、なのはがいて。

なんだよ、

なんだよ、こいつら。

「お前は——」

そこからは、自然に口が動いていた。

「なんで俺がここににいるか、知ってる？」

俺の言葉に一瞬だけ目を丸くしたなのははすぐに口を開き、

「私がここににいるから？」

そんなことを言葉にした。

「なんだそりゃ」

次に目を丸くしたのは俺だった。

「意味わかんねえ」

「え、え、なんで？」

「本気でそう思ってたんの？」

漏れるのは掠れた笑い声。

なんなんだ。本当になんなんだよ、こいつは。

「え、だって、コウ君って私のこと好きなんだよね？」

「うっせえ、自意識過剰娘っ」

「ええー!？」

笑い顔を見られないように、なんて風に顔を隠す。

馬鹿らしい。本当にこいつ、こんなやつだったのだろうか。

気が付けば掠れた笑い声が息を吹き返すように、音量を上げていき最後には腹を抱えて笑っていた。

「そ、そんなに笑わなくてもいいでしょっ!!」

「だっ、だっつてっ、だっつてき、だっつてっ!」

「まったく言葉になってないから!!」

先程より集まった視線はもう気にならなかった。気にしてなんていられなかった。

それこそ馬鹿みたいに笑って、なんでこんなに自分が笑っているのかもわからなくなるくらい笑って。

忘れたことにした。

本当の疑問。

だからか、俺が同じようにもう一つのことを忘れてしまったのは。

本来の物語の終わり。

もうすぐそこまで来ている事を。

俺がそれを忘れていたから、

もしくは逃げていたから、

だから、

全てが壊れてしまったようだ。

「なんだか、寝不足みたいだね？」

フェイトちゃんと話していたとき、そんな言葉を投げられた。

「まあ、うん」

自覚はある。最近、夢見が悪いというかなんというか。

眠るたびに夢を見てあのコウ君もどきと会話することになる。

そのたびに何か眠った感じにならず最近寝不足で。

「なにかあったの？」

そう心配そうにこちらを見るフェイトちゃんに軽く笑みを返す。

「夢をみるの」

別に話しても良いか、そう胸の中で呟く。

恥ずかしいことでもないだろう。ただ変な夢ってだけ。

「こう、夢にコウ君じゃないコウ君が出てきて。お話をするんだよ」

何を言ってるんだか。

口にしておいて自分でもそう思った。

が、

「ああ、そうなんだ」

そんな事か、と言う風にフェイトちゃんは頷いて見せた。

「そういうのってあるよね。なんていうか相手の事を考えすぎて自分の中で産まれちゃうの」

「え、ええー」

あるあると頷く彼女に私は驚く、と言うかなんと言うか。

自分から言っておいてなんだが……

なに言ってるの、フェイトちゃん？

産まれちゃうとか、無いよ。絶対無い。

もしあったとしても私ならもつとまともなコウ君を産むよ。

……………コウ君を産む、か。

なんだか、えっ……………いや、こんなことを考えている場合じゃ

ない。

と、ともかく私はあんな出来損ないが私の妄想だか何だかで産んでしまったなんて認めたくない。

「なのははどんなコースケを見たの？」

そうにこりと笑顔を向けるのは良いけど、なんだか私があのコウ君もどきを産んだ前提で話が進んでいるのが尺だ。

「なんていうか、生意気、すごく生意気、かなあ」

「ふふっ」

「な、何かおかしいこといったかなあ？」

「ううん、生意気なコースケって言うのが可笑しくて」

確かに、話を聞くだけならば可笑しいものだ。

だけど実際に見るとただイラツとするだけで。

上手くは言えないけれど、気持ちが悪い。

「変な顔してる」

「うう」

むにむにと頬をつつかれむず痒さに目を瞑る。

もしかして私、遊ばれてるのか？やけに余裕そうなフェイトちゃん
の顔。

「フェイトちゃんはさ、当たり前そうに言うけど。フェイトちゃんも
あるの、こういうの？」

「うん？」

「こう、誰かの夢を見たりするの」

その間にフェイトちゃんの目が一瞬だけ見開かれた。

それを見て少しだけ驚いた。ああ、あるんだ、と。

「そうだね。わたしにもあったよ、なのはと同じような事」

ほら、やっぱり。

「まあ、私の場合は殆ど思ってた相手の変わりは無かったけど」
「むっ」

また私の言ったコウ君を思い浮かべたのか、くすくすとちいさな笑
い声が響く。

「わ、私のは違うの！　そういうのじゃなくてっ」

思わず言い返した言葉、それに対し違うよ、と首が横に振られる。

「なのははコースケに満足してるんだなって」

「満足？」

「うん、なのははもう持つてるんじゃないかなって。欲しいコースケが」

「欲しいコウ君が？ でも」

「なのはには、もっと大事な所にコースケがあるんじゃない？ だから必要ないとか」

夢の中まで、だったとか。

確かにコウ君はさ、手を伸ばせば届く距離に、何時だって傍にいてくれる。

だとしてもあれは無い。もっとまともな夢を見たって良いんじゃないだろうか。

それに、私は、

「別に私はコウ君に満足しているわけじゃないんだよ」

「え？」

「私が夢に見るコウ君は生意気で子供っぽくて、全然私の知っているコウ君じゃないよ」

でも、ね。

「嫌いじゃないんだ」

あのコウ君もどきを見るとイラツとするし勿論、好きじゃない。

だけど、嫌いじゃない。嫌いにはなれない。

だから気持ち悪い。

「……今から私が言うことはコウ君に教えなくてね」

恥ずかしいし、なんだか申し訳ないから。

静かに頷いたフェイトちゃんを見て小さく息を吐く。

別にそこまで意気込まなければならぬことじゃない。

ただ私は、

「私は、コウ君に困って欲しいんだ」

「困つ、て?」

不思議そうな表情を、私に向けるフェイトちゃん。

そりゃあ、可笑しいよね。好きな人に困って欲しいなんて。

「夢の中のコウ君が言ってた。子供っぽいのは私がコウ君に頼られた
いからって」

そうだよ。

だから私はコウ君を困らせたい。

「コウ君が頼るのは私であってほしいんだ」

私がそうであるように。コウ君もそうであって欲しい。

コウ君が伸ばした手を握るのもコウ君が流す涙を掬うのもその涙
の理由を変えてあげるのも私でありたい。

彼がそうしてくれたように。

「私はね、コウ君になりたいの」

……………恥ずか、しい。

何を言ってるんだ、本当に何を。

それにこんな事を言ってる事がコウ君に甘えているって言
うのがすくえない。

だって私にはどうすればコウ君が困ってくれるかなんてわからな
い。

だから甘えてる、いっぱい甘えて私はコウ君の足枷になっている。

私がやりたいのはこういうことじゃないってわかってるけれど私
が知っているのはこんなことだけだし。

なによりそれでも幸せを感じてしまっている。そんな事が一番恥
ずかしい。

真っ赤になりそうな顔を隠そうとすると、声がこちらに投げられ
た。

「ごめん」

「え?」

突然頭を下げたフェイトちゃんに驚き顔に溜まった熱が四散した。

「ごめんね、なんだか。偉そうな事をいつちやったなって」
「そ、そんな」

「なのはの言葉を聞いて、やっぱりなのはは私と違うんだって思った」
顔を上げた彼女の顔は笑顔でどこかすつきりとしている様。

「なのははなのはの形があるんだね。それにそれはコースケの形をしたコースケを求めていたわけじゃないんだ」

困らせたいかあ、そう小さく呟く彼女は何故か嬉しそうで。
やっぱり私は恥ずかしくなる。

「わ、私はただ、まだコウ君の隣までたどり着いてないって思うだけで」

「なのはが欲しいのはコースケじゃなくて自分なんだね」

「そんなんじゃない、よ」

本当に、そんなじゃないんだ。

ただ私は好きな人に恩返しをしたいだけ。

ただそれだけなんだけど、なあ。

※

「って言う話をしました」

「それって僕に話す意味あるの?」

いつもの夢の中、空に浮かぶ小島で私は子供っぽい大人なコウ君と話をしている。

この夢を見るのはこれで何回目だったか。

いつもくだらない事や意味の無い言い合いを繰り返して過ごすだけ。

それに慣れつつある自分になにか思うものもあるけれど、よく考えてみたら気軽に話をするのにこれほど良い相手はいないだろう。

まあ、だから私はフェイトちゃんとの会話なんかを話題に持ち出したのだけけど。

「もう何度目になるかわからないけど、一応言っておくよ。僕は君の事なら何でも知っている。だって僕も君の一部だからだ。だからその話は僕だって聞いていたんだ。別に話す意味なんて無いよね?」
「そういうのじゃなくて。ただ私が口にして嘔み碎いておきたかったっていうか……」

「もう、だったら壁にでも話してようよ。それならきつと向こうの僕が心配してくれるだろう?」

「そ、そういうのでもないの!!」

まったくなんなんだ、これの生意気さだけはこれっぽっちも納得できない。

これが私から産まれただとか私の一部だとかっていうのはまだ我慢できるがそれがコウ君っぽい姿をしているのは駄目だ。

なんだか申し訳無いだとか悲しいだとか、そんな夢が壊れるような気分で胸がいつぱいになる。

「だいたい私の一部っていうのならもつと私のためになる事を発言してくれたっていいじゃない」

「君って足のつま先から髪の毛の毛先まで自分を愛してるって思ってるの? もし思ってるならとんだナルシストだよね」

「それっ、せめてそういうのをやめてよ!」

はあ、とため息を吐くそれに思わず詰め寄る。

が、向こうの容姿が大人なためにまるでじゃれ付く様に見える、それがまた腹立たしい。

「つまり僕はね、君の事を好きではないんだよ」

「わ、私のくせに?」

「そう、君なのに」

やっぱり生意気、そう口にしようとした時。

目の前で指が一本上げられ、視界を裂かれた。

「だ、けど」

にやり、三日月のように頬を引き裂く口。

コウ君が絶対にしないような笑い方。

「僕は僕が大々々好きだ！」

「はあ？」

突然の告白に間の抜けた声が漏れる。

いや、だって、今さっき私の事をナルシストとか言ってくれたくせに。

「テストロッサとの話はさ、簡単に言ってしまうえばこういうことなんだろうね」

「え、何で今、フェイトちゃんの話？」

ぽかんと口を開ける私をソイツは軽く笑う。

「君はさ、自己愛が足りない。君のそういう所が僕は嫌いなんだ」

「自己愛……？」

「極端に言えば、君はもつとナルシストになるべきだ。君は言ったよね、テストロッサが言うような自分ではないと」

「言った、けど」

うん。フェイトちゃんはまるで私の事を凄い人物のように言う。

でも私はそうじゃないって、

「でもね、テストロッサにとって君はそうなんだ。凄い、強い、そういう人物なんだ」

「ち、違うよ、私はっ」

否定する私に対し彼はそれこそ違う、とこちらをみつめる。

「凄いとか、強いとかって言うのは自分が決めるものじゃない。周りの人たちが決めるもの。そしてそのテストロッサにとって君はそういう人間なんだ」

「でも、それは」

「またそうやって。例えば僕は君だ。でも僕と君の意見は違ってる、それはなんでだろう」

「わからない。なんで、違うの？」

少し前から私を否定ばかりして、なんで？

私の一部なのに、私の夢なのに。

「答えは簡単、それは人間だから」

「人間だから?」

「そう、人間って言うのは頭のいい生物だよ。頭で考えて生きてる。そんな頭でつかちな生き物だから、好きな自分と嫌いな自分なんてわけちゃうんだろ?」

「つまり、私と君?」

「そう、僕は僕が、つまりは君が大好きな僕。君は君が嫌いな根暗君」
「そこまで嫌いじゃない?。それに、それがどうだっていうの?」

「ああ。ただね、人間って自分の中にも分かり合えないものを持つてるって知って欲しかっただけ」

「分かり合えないもの?」

「そりゃあ、こいつのことはまったくわからない。」

「何が言いたいのか。何でこんな話をしているのか。」

「私のくせに、わたしのくせに? ああ、確かに私は私が好きではないかも、なんて。」

「だから、自分の中でさえ分かり合えないのに他人と分かり合うなんて難しいことなんじゃないかな?」

「そう、だよ。だからフェイトちゃんも」

「僕が思うに、人間は芸術。いや、芸術は人間だ」

「なに、いきなり。」

「個性があり、偏りがあり、輝き、そして陰りがある。でも、それは万人が理解するものじゃない。好きな絵があるように好きな人がいて、心地良い曲があるように心地のいい人だっている」

「とてもすばらしいことだ。」

「なんて突然歌うようにいつて見せる。」

「その反対に嫌いな絵や何でそれが凄いかわからない物だってあるだろう。君とテストロッサの関係はそれだ」

「えつと……?」

「簡単にわかり合えないけど、テストロッサにとって君や僕は凄く強いんだ。そう思わせるだけのものは確かに持っているんだ」

「そう、なの……?」

「うん。まあ、君である僕が認めるところで馬鹿らしい話ではあるけ

ど。君の事が好きなテストタロツサのために胸くらいは張ろうって思えれば良いね」

「……………」

「僕と君が違うようにテストタロツサは自分に無いものを僕達の中に見たんだろう。君が向こうの、本当の僕にそれを見たように」

「あつ……………」

「だから、君は胸を張るべきなんだ。テストタロツサや僕のためにね」

「……………うん」

頷いてみて胸がすつとするのを感じた。

傍から見たらただの一人相撲なんだろうけど。

「なんだかわかった気がする。コウ君もね、私が褒めるといつも否定してるもん」

「だね、似てるんじゃない?」

「だといいんだけどな」

外から見た私、か。

嬉しくて、少しだけ恥ずかしい。

でも、やっぱり私とコウ君は隣同士じゃないと思うんだ。

私はコウ君の全てを知っておきたい、なんて思ってしまうし逆に私の全てを知って欲しいとも思う。

それは私がまだコウ君のことを知らなくて、私にも言えないことがあるんだって事。

やっぱり、愛したいし愛されたいもの。

だから、彼に貰ったものはちゃんと返してあげたいんだ。